佐久考古通信

No. 41
1987. 9. 1
佐久考古学会

目　次

昭和62年度佐久考古学会総会報告……堤　隆……1
ある須恵器の蓋をめぐって……田中正二郎……2
石器群の構造と編年に関する覚え書き……角張淳一……3
蓼科山北麓の押型文土器の諸段階……福島邦男……4
甲斐型坏について　―昭和61年度例会研究発表より―……井出正義……5
佐久地方における弥生中期後半の土器　―昭和61年度例会研究発表より―……小山岳夫……6
畿内系暗文を有する土師器坏について……堤　隆……9
事務局より……10

昭和62年度佐久考古学会総会報告

堤　隆

昭和62年度佐久考古学会総会が、昭和62年5月30日・午後1時より、佐久市役所8階大会議室において開催された。

黒岩副会長による開会のことばに続き、由井会長による挨拶がなされた。堤による日程説明の後、議長に佐々木宗昭氏が選出され、議事に入った。

第1号議案は、昭和61年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件であるが、井出・小山・井上・由井明会員の報告の後、会員諸氏の承認を受け、通過。

第2号議案の、昭和62年度佐久考古学会事業計画・会計予算承認の件も、井上・小山両会員の報告の後、会員諸氏の承認を受け通過した。

二つの議案がスムーズに通過し、議長が退任、白倉副会長による閉会のことばで総会が締められた。

引き続き、佐久考古学会の主催で佐久市教育委員会の共催による記念講演会が行われた。講師には坪井清足先生が迎えられ、「佐久の古代牧について」という演題で講演がなされた。この記念講演会は、その対象を考古学会員のみに限定せず、一般にも公開したため、会場は多くの拝聴者で埋めつくされた。

講演に先立って、由井会長によって講師の紹介がなされ、講演にうつった。

さて、延喜式をみると古代信濃には16の御牧が存在していたことがわかる。うち3つの牧はここ佐久地方に存在していた。望月牧・塩野牧・長倉牧がそれである。わけても「望月の駒」は全国にも誉れ高き良馬であり、年間20頭が中央に献上されたことが知られている。

坪井先生は、まずそのような牧のアウトラインを説明された後、考古学のうえで具体的に牧遺構としてとらえられたものがきわめて少ないとも付け加えられた。

そのような中で、先生は現在佐久平北部において行われている鋳師屋遺跡群の調査に非常に注目された。この遺跡群は多数の馬骨の検出とあいまって、「牧」における一つの機能を担っていた集落ではないかと考えられたのである。

拝聴者の中には、鋳師屋遺跡群の調査に従事しているものも多く、その魅力的な仮説がおおいに共感を呼んでお話が終わった。最後に木内佐久市社会教育課長により謝辞が述べられ講演会が閉じられた。

坪井清足先生の講演風景

ある須恵器の蓋をめぐって

田中正二郎

昨年小諸市の鋳物師屋遺跡の調査をお手伝いさせていただいた際、担当者の花岡さんから直径18cmを越える大きな須恵器の蓋をみせられ、いつごろのものかと尋ねられた。はたと困ったが内面にカエリがわずかに残っていること、色調がかなり白っぽいことから「７世紀末の美濃須衛じゃないですか」などとワカゲの至りで答えてしまった。すると花岡さんは「ふーん。８世紀には入らない？」と聞き返されるのでいよいよ弱り、「調べてみます」と引き下がった。帰宅後あわてて類例をさがしてみると小諸市の報告書に１例載っていて、しかも８世紀の土器として編年されているではないか！　不勉強だった私がいけないのだが花岡さんも人が悪い。それにしても松本地方で発掘していた私には初めて見る蓋である。この蓋の特徴は痕跡程度に残ったカエリと大きなリング状のつまみである。少々気になったので調べてみた。

類例をさがしたところ、佐久地方では次の５例がみつかった。

・曽根城　Ｈ－７号住（くぼむつまみ）　径18.3　灰色
・曽根城　Ｈ－９号住　径16.9　青灰色
・若　宮　Ｈ－７号住　径不明　灰色
・前　田　Ｈ－44号住　径16.2　灰白色
　〃　Ｈ－107号住　径16.1　灰白色

このうち曽根城Ｈ－７号住のものは小さなリング状というか、中央がくぼむつまみであり、残りはすべて鋳物師屋遺跡のものと同様のつまみであった。リング状、あるいはくぼむつまみをもつ大型蓋は他に数例みられたが、カエリが不明なため除いた。径16～18cmと大型であり、灰～灰白色の白っぽいものが多い。つまみは高台状のものから皿状のものまでバラエティーがあるらしい。

さてこれらの特徴をもとに年代と産地を調べてみたい。

陶色編年では蓋のカエリが時期決定の重要なメルクマールとされており、蓋にカエリがある時期はIII型式とされ、７世紀前半から後半の年代が与えられている。カエリが痕跡程度になるものはIII型式３段階に見られるがすべて宝珠つまみであり、リング状あるいは中央がくぼむものは存在しない。リング状つまみに限れば次のIV型式１段階に発生するが形態がかなり異なっている。

美濃須衛窯群の製品は一般に白くちみつな胎土をもつという。問題の蓋もおおむね白っぽいものが多く関連を予想させるが美濃須衛の製品でカエリのある蓋はすべて宝珠つまみをもち、時期も第III期…７世紀後半に限定される。リング状つまみは第IV期第１小期に至って碗の蓋として出現するが形態が全く異なっている。

猿投山西南麓窯址群の製品では岩崎17号窯式にみられるが陶色や美濃須衛と同様につまみの形が異なっている。

以上３ヶ所の大古窯址群には類似のものはみあたらない。すると地方の小規模の窯で焼かれたものと考えねばならない。

ところで大形でカエリをもち灰～灰白色を呈する蓋については酒井清治氏が考察を加えており、この種の蓋は関東地方にみられ、８世紀第II四半期まで残るという。またリング状のつまみも関東各地に存在しており地域色の１つと言えるという。

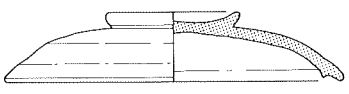
関東地方の須恵器窯に関する資料を殆ど持ちあわせていないので問題の蓋が酒井氏の言うように関東の蓋で焼かれたものであるかは何とも言えないが「奈良・平安時代土器の諸問題」に収録されたＭ－１、Ｙ－６両窯の蓋はカエリこそ消失しているものの法量、つまみの形など問題の蓋とほぼ同様である。Ｙ－６窯は南比企窯址群最古とされ８世紀前半に編年されるが、Ｙ－６窯式直前の形式としてカエリのある蓋が生産されていた可能性は充分考えられる。また群馬県内にも金山窯のように６世紀前半から綿々と続く大窯址群が存在しておりこの地域も見逃せない。

では佐久地方でみられるこの種の蓋はすべて関東からの搬入品なのだろうか。佐久の奈良・平安期の土器が南関東的であることは周知の事実だがその大部分はやはり在地生産されたものと考えたい。佐久地方最古の石附窯は７世紀後半とされており８世紀の窯は発見されていないが９世紀には御牧ヶ原に多数の窯が築かれているため、８世紀の窯とその製品の存在も充分に予測される。

さて、だらだらと書いて来たがそろそろまとめたいと思う。問題の蓋の時期はやはり花岡さんの言うとおり８世紀前半と考えたい。その理由は、７世紀の小型で宝珠つまみをもつカエリ蓋から８世紀のリング状あるいは高台状つまみのカエリのない蓋へ、須恵器がモデルの佐波理碗の変化を追って変遷する過渡期の要素を示していると考えるためである。

産地については何とも言えないが、関東地方らしい。地元で焼かれた可能性もある。

以上、問題の蓋について自分なりに述べましたが、元より浅学無知であるので御訂正を頂ければ幸いです。



第１図　小諸市鋳物師屋遺跡須恵器蓋（１：４）

石器群の構造と編年に関する覚え書き

角張淳一

旧石器時代の編年作業をすすめる一つの方法として、石器群の構造分析から始める方法がある。これは、一括遺物と認識された石器群の製作技術を分析し、それを構造的に把握することで編年の基準とするものである。石器群には、それぞれ個有の石器製作システムがあり、そのシステムはそれが存在する基礎となる構造を持つ。石器製作のシステムとは、石器製作の工程を捨象することで把握可能であるが、システムそれ自体は非常に個別的具体的になりやすい。例えば、「砂川型刃器技法」であるとか、「磯山技法」「殿山技法」等々である。構造的に把握することは、システムをさらに止揚し、時期的地理的に石器群の在り方に総合的解釈を導き出す方法である。ここではその構造的把握についてメモ的にまとめてみたい。

「石刃技法」は学史当初から芹沢長介先生によって紹介されており、石刃技法を研究することで、一つの石器製作技法に対する研究方法が決まったと言ってよいと思われる。そこで「石刃技法」の構造的分析について書こう。東京都小平市鈴木遺跡では、立川ローム層VI層中に典型的と思われる石刃技法を有する石器群が発見されている。その剥片生産の技術は、規格的な縦長の剥片を一つの石核から量産することに集約できる。その方法は、①打面と作業面を固定化し②それらを維持するために打面と作業面のなす角度の調整（打面更新）を行い、③打点の位置と打角の安定及び打撃のパワーの均質な伝導を意図するパンチの導入＝パンチの個定痕＝打面調整行うものである。さらに作業面の均質な消費の展開を計るため、打面を180°の双方向に設定している。これにより生産される剥片のプロポーションは、打面を上にしてみた際、縦：横＝２：１の一定のものとなる。この方法で剥片を生産してゆくと、おそらく上述の石刃のプロポーションを持つ剥片が一つの石核から大量に生産される。そして、これが実際に石を割る行動になると様々な工程が出現し、パターンを形成し、それがシステムとなる。しかし、石刃を生産する構造は同じである。さらに、この鈴木遺跡の例は、石刃が素材となって製作される石器は、一定のプロポーションを持ったナイフ形石器に限定されるという分析結果をもたらした。即ち、「一定プロポーションの剥片の生産と、その剥片から製作される石器は形の決まった特定器種である」という事実である。このことは、「特定器種の製作は予め剥片生産の段階で決定されている」という、剥片生産と器種製作に関する非常に固定的関係を見い出させる。この関係を石器製作に関する「剛構造」と呼ぼう。

一方、武蔵野台地では、立川ロームX_b層、X_a層、IX層、IV下層とかなり普遍的に「剛構造」とは別の構造を持つ石器群が存在する。例えば、東京都府中市武蔵台遺跡X_b層の石器群は、剥片生産に関して目的剥片の規格化という意図は全くない。さらに製作される石器も、多くの剥片の様々な形状の中から選択して整形加工やエッヂ加工をしている。これは、最初から剥片の生産と石器の製作が、直接に結びついている状況ではありえない。つまり、剥片の生産は、それ自体で完結しており、石器の製作も生産された剥片の集合を素材とするのみで両者に固定的な関係は見い出せない。当然器種製作という川下からの要請は剥片生産に直接関与するものではないから、打面更新や打面調整はなく、又存在しても物理的に同じであるが意味は全く異なるものとなる。そして、この構造を、石器製作の自由な関係として「柔構造」と呼ぼう。

南関東の立川ローム層中の石器群は、時期により「剛構造」と「柔構造」が入れ替わり立ち替わり出現している。さらに時期により剛構造石器群の中に柔構造的石器が存在したり、又その逆もしばしば見受けられる。これらの解釈については項を譲るとしよう。しかし、石器群が仮に自己完結的であり、その完結性をかたくなに守り通そうとする態度を伝統と呼ぶならば、この構造分析をすすめることにより、時期別に異なる伝統をもつ石器群の消長を汎日本的に追求するとしたら、旧石器時代の人類のたどった道が解明されると同時に、新たな解釈のもとに汎日本的編年論が展開される可能性を持つと思う。さらには、各氷期を渡った人類の軌跡が追えるのではないかとも思う。

編年論とは、単に出土した遺物を具体的、個別的に並べるものではない。そこには、考古学の最も重要なテーマが潜むものと思われる。それを考えながら、一つのテーマを追いかけて行こうと思っています。

1986．6．15　脱稿

参考文献

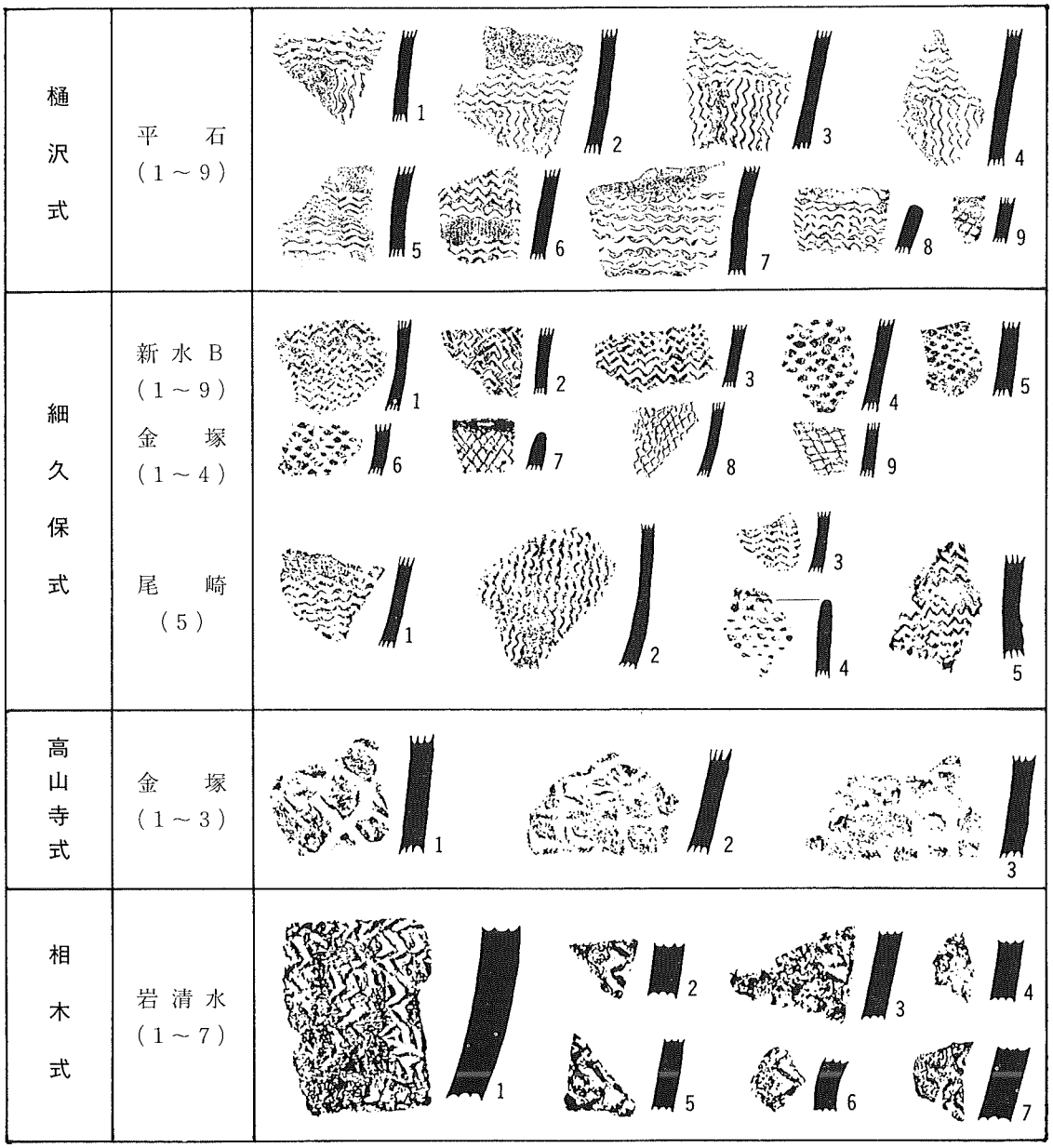
「東京考古４」『武蔵野台地におけるVI層～IX層の石器群の一考察』…藤波啓容・角張淳一、1986
「東京考古５」『石刃技法に関する覚書』…藤波啓容・角張淳一、1987
「鈴木遺跡Ⅰ」小平市鈴木遺跡調査会、1978
「武蔵台遺跡Ⅰ」都立府中病院内遺跡調査団、1986

蓼科山北麓の押型文土器の諸段階

福島邦男

押型文土器研究の現状は、「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」（岡谷市教委1987）に詳しくまとめられている。本書によれば、出土層位、文様構成による細分化、さらに撚糸文土器群、沈線文系土器群などの関係を中心に置き、系統的な型式編年を再検討することが内容の論点となっており、今や一型式内の新・古の細分化にまで研究が進みつつある現状を浮き彫りにしている。

さて、小地域に限ってみれば、千曲川水系は、中南信地方に較べ調査例が少なく、従って地域相互の研究が立ち遅れているのが現状である。しかし、最近、蓼科山北麓地域より、一定の方向性を把握できうる押型文土器が相次いで出土し、貴重な資料と所見を提示できるまでに



第1図　蓼科山北麓の押型文土器

至っている。本稿では、蓼科山北麓地域（望月町）の各型式資料の断片を紹介し、今後の研究の目安とするものである。

樋沢式土器　樋沢式土器は、この地域では初めて平石遺跡で出土した。本遺跡は、昭和62年５月より調査を開始し、８月末日までの予定で現在も継続中であるので詳細を記述することはできないが、山形文200点以上、格子目文１点、撚糸文少量、沈線文20点（貝殻腹縁文４点）が出土している。縄文中期末の破壊された住居址床面下の薄い包含層より出土しているため、層位的な調査は不可能である。山形文は口縁部が横位帯状、胴部は直交する縦位帯状ないし縦位密接施文されている資料が多く、また口唇にも施文されているものもある。

細久保式土器　代表的な遺跡に、遺構を多数検出した新水Ａ遺跡、新水Ｂ遺跡がある。特にＢ遺跡では、山形文18点、楕円文58点、格子目文10点、貝殻腹縁文を含む沈線文系土器1000点以上、撚糸文20点、その他早期の土器100点以上が出土しており、沈線文系土器群に押型文が伴うという様相を呈している。押型文土器は、小片であるが横位、異方向の密接施文である。尚、石器は200点以上出土しており、沈線文型土器群をめぐる県下最大の遺跡として今後の正式報告書で分析を行うことにしている。

この他に、金塚遺跡（望月町教委1982）、尾崎遺跡（同1981）、岩清水遺跡（同1986）でも良好な資料を出土しており、金塚遺跡では、撚糸文と沈線文系土器が伴っている。

高山寺式土器　千曲川水系全般にわたって出土例は少なく、菅平のフロンティア牧場遺跡と宮沢畑遺跡で１片ずつしかなく、次いで望月町金塚遺跡で３片、後沖遺跡で１片である。金塚・後沖とも粗大菱形文であるが、胎土、焼成ともかなりの差がみられる。金塚例では、細久保式とともに出土していることに注意がひかれる。

相木式土器　岩清水遺跡（望月町教委1986）で山形文が８点出土している。相木式は、山形文と列点文、爪形状の沈線文などが併用されている土器を指すため、小片での判断は難しいが、山形文はかなり粗大で方向性のない無文部をもち、厚手が特徴である。

以上単的に出土地及び出土遺物の紹介のみを行ったが、この他にも表採資料で確認されている資料も幾つかあり、機会をみて本地域の縄文文化成立期の様相を記述しようと思っている。

尚、本図は、出土した資料のほんの一部を単純に段階ごとに分類したものであり、資料紹介の目安としたい。

――昭和61年度例会研究発表より――

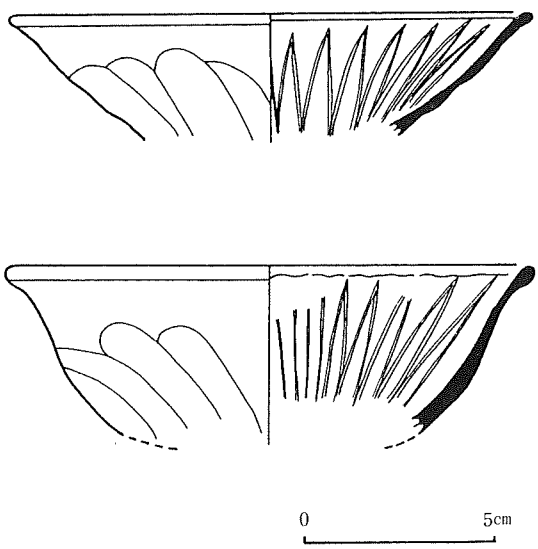
甲斐型坏について

井出正義

昭和59年９月南佐久郡小海町雨堤遺跡の発掘調査で平安時住居址から毛抜形鉄器などと共に甲斐型坏（墨書を含む）が出土した。佐久地方では初見である。雨堤遺跡は千曲川右岸小海原の標高1100mの台地上にある。

甲斐型坏は赤褐色薄手で器面緻密で光沢のある美しい土器で、器体部外面下半に横位ないし斜位のヘラケズリがなされ、器体部内面に放射状暗文を持つことが基本要素とされる。終期に近づくと口唇部が玉縁をなすようになる。甲斐型坏の器面の肌には赤色の粒子を含み、これが墨流しのような美しい文様をつくる。

甲斐型坏は同型のものが８世紀代半ばの東駿河地域の富士市東平遺跡、三新田遺跡等で出土していて、甲斐型坏は駿東地域で発生し、９世紀代に甲斐地域で爆発的に生産され、駿東に逆輸入された可能性も考えられるという。９世紀第３四半期には山梨県内一円に供給され、隣接する相模地方でも出土がみられる。９世紀第４四半期には同一形態のもので占められるようになり、専業集団の一元体制がいきわたり、流通機構の整備もなされたも



第１図　雨堤遺跡出土甲斐型坏

のと考えられている。

甲斐型坏の分布範囲は前記の東駿河地域のほか、相模地方、鶴見川流域、多摩川流域と神奈川県全域にみられる。長野県内での分布は暗文坏は諏訪湖周辺の茅野、諏訪、岡谷と塩尻、松本、上伊那郡箕輪町にみられる。玉縁坏は茅野、原村、富士見町の八ヶ岳西麓に多く分布する。9世紀から10世紀前半にあたる暗文坏は八ヶ岳西麓をこえて、諏訪湖周辺から松本、塩尻、上伊那に分布し、10世紀後半の玉縁坏が、それより手前の富士見、原村、茅野等の八ヶ岳西麓に分布域を移すという現象がみられるのは研究課題として残されているが、甲斐型坏の長野県内への分布は、古代東山道から分岐して諏訪を通って甲斐国に至る道筋が、甲斐国にとって重要な交通路であったことを示すものと考えられる。

小海町雨堤遺跡から出土した甲斐型坏は第1図のように、暗文をもつと共に、口唇部玉縁がみられ10世紀前半に比定される。雨堤遺跡出土の甲斐型坏には墨書がみられるが、これは各地に供給されてからその所有者によって書かれたものとみられている。甲斐型坏と同じ住居址から出土した毛抜型鉄器は、同形のものが山梨県北巨摩郡大泉村西井出の寺所遺跡第13号住居址から出土していて、これは柏前御牧の貢馬を貢上した御牧の役人たちによって平安京からもたらされたものと考えられるから、東山道経由によって甲州巨摩郡に入り、その一つが甲斐型坏と共に野辺山原をこえて、千曲川流域の小海町雨堤遺跡にもたらされたものと考えられ、古代に於ける甲斐と佐久との経済的、文化的交流の道筋を示す重要な資料である。

参考文献

神奈川考古第14号　シンポジウム、奈良・平安時代土器の諸問題
—相模国と周辺地域の様相—　第11版　1983　神奈川考古同人会

山梨の考古学　　山梨日日新聞社

甲斐路　　No.59　山梨郷土研究会

八ヶ岳西麓の古代甲信国境　末木　健

雨堤遺跡　　小海町教育委員会

——昭和61年度例会研究発表より——

佐久地方における弥生中期後半の土器

小山岳夫

I　昭和6年（1931）中野市栗林遺跡より出土した弥生土器は、昭和11年（1936）藤森栄一氏によって信濃の古式弥生土器に位置づけられ、栗林式土器と型式設定された。その後、桐原健（1963、1967、1968）、笹沢浩（1971、1976、1977）両氏によって検討が加えられ、近年までは笹沢氏が呈示した編年案、栗林Ⅰ式→栗林II式→百瀬式という流れが大方に認められ、定着した感さえあった。ところが昨年来、山下誠一（1986）、設楽博巳（1986）両氏に代表されるように、千曲川水系における百瀬式の定立に疑問を呈示する声も数多く聞かれるようになり、北信は北信、中信は中信で、それぞれの地域毎に中期後半の弥生土器編年を洗い直す必要性が生じ始めている。該期の研究が資料不足もあって白紙の状態であった千曲川水系最上流域、東信の佐久地方もその例外でなく、特に94軒の大集落が調査された北西久保遺跡の良好な資料を中心として、佐久地方の中期後半弥生土器の時間的な流れを把握し、県内他地域との比較研究をすべき時期にきていると言える。尚、将来的にはこれら小地域毎の編年をつき合わせて、編年を整理し、中・東・北信に広く分布する良く似た顔をもつ、栗林系土器（仮称）の地域を越えた大様式が確立されることが望ましい。

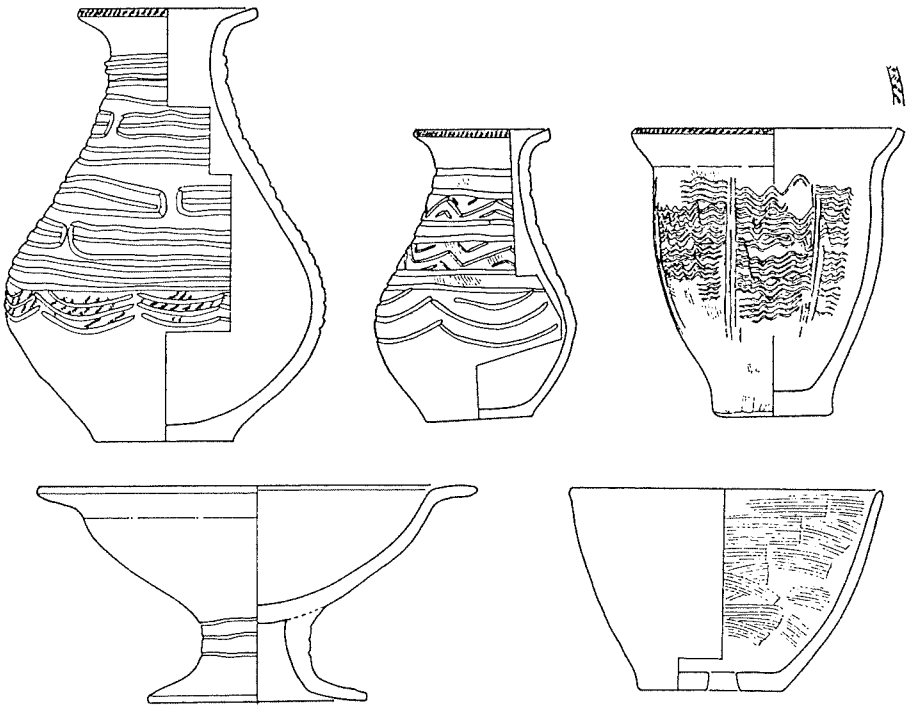
II　まず、中期後半の編年観を整理しておきたい。笹沢氏が中期末、栗林II式に後続するとした百瀬式については、筆者は山下、設楽氏と同様、栗林II式に併行する部分あると考えるため、除外し、栗林Ⅰ式→栗林II式に佐久地方で併行する土器をあてて考察することにしたい。

III　栗林Ⅰ式に併行する資料

資料に若干の混乱がみられるが、深堀遺跡住居址出土資料中の篦描工字文を主体文様とした頸～胴部まで文様が施される壺を中心とした一括資料があげられる他は、佐久地方において栗林Ⅰ式に併行する資料の発見例は少ない。現状では栗林Ⅰ式の資料は比較的善光寺平に集中する傾向がみられ、佐久地方に限らず、中信、また、群馬県や埼玉県比企、入間、児玉等の地方での発見例は皆無と言って良い程少ない。このことは、栗林式土器の発生が北信地方にあり、時間の推移に伴って徐々に東信、中信、更には群馬、埼玉県へと分布圏を拡大していったと考えることもできるのである。

IV　栗林II式に併行する資料

栗林II式に併行する資料は北西ノ久保、清水田、西裏・竹田峯遺跡などにみられ、遺構検出数がⅠ式に比べて飛躍的に増加し、集落が大規模化したことが伺える。筆者は大量に検出された北西ノ久保遺跡出土資料を分析した結果、従来、栗林II式と総称、一括されてきた土器群にも時間的な流れがあり、新旧に2細別できる可能性があることを呈示するに至った。以下に壺・甕を中心として、



第１図　深堀遺跡の栗林Ｉ式と考えられる資料

その要旨を示すことにする。

・新旧二細別の基準

北西ノ久保遺跡の栗林II式に併行する資料の新旧二細別を行うにあたっては次のような基準をもって行った。

・太頸壺の多用化傾向

後期・吉田式になると栗林式土器の基準的な壺＝細頸壺が消滅し、頸部の太い壺のみとなる。このため、中期の終末段階になると、後期弥生土器へつながる文様の省略化された太頸の壺が盛行・多用化する可能性が強く、一括資料中におけるこれの存在は新要素と認定できると思われる。

・受口口縁を有する壺・甕の外稜の消失化

受口口縁を有する壺・甕の外稜の消失化傾向は次期の吉田式土器へ継承される要素と考えられる。

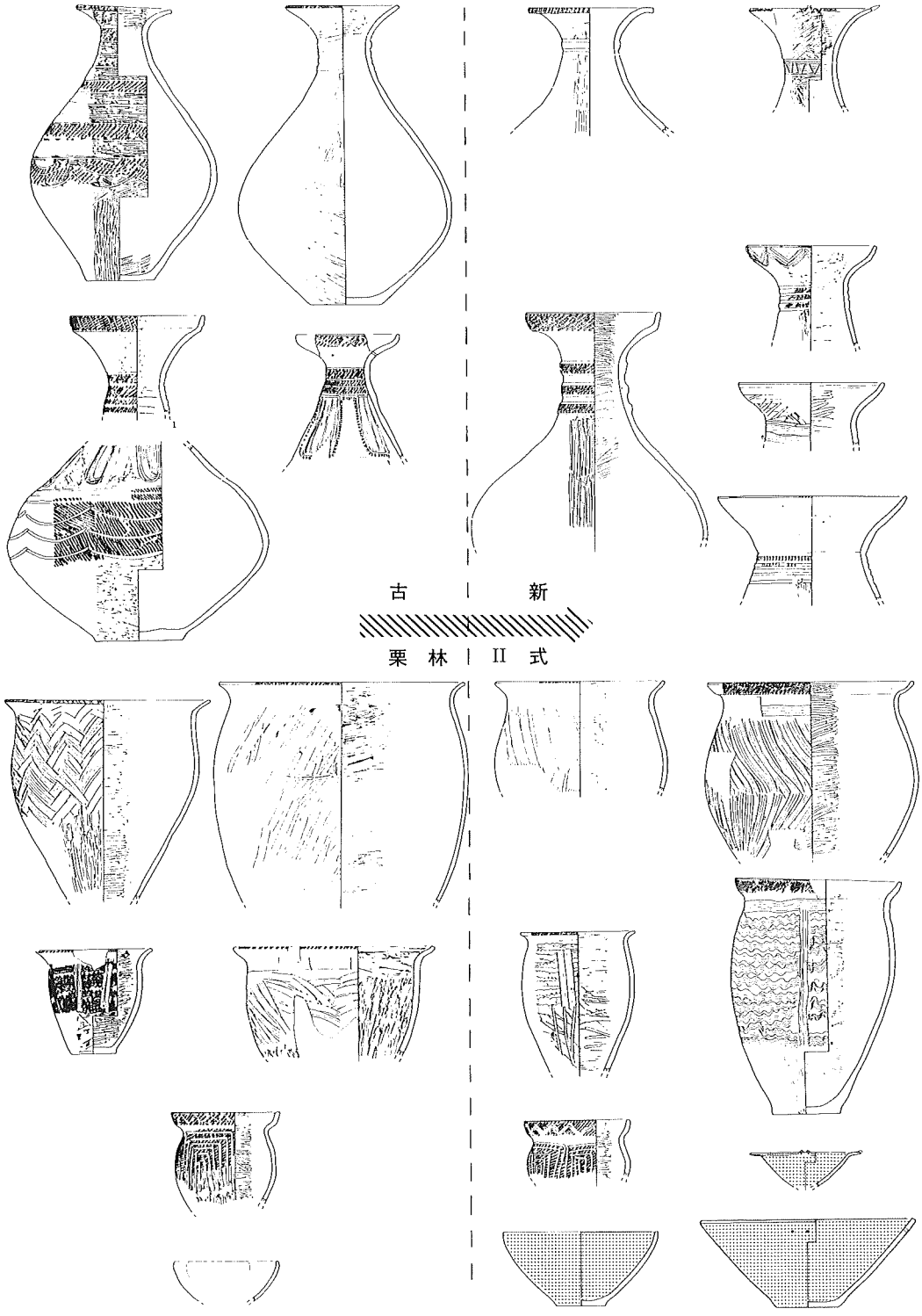
・壺の頸部への櫛描文（簾状文、横走平行線文）の施文

吉田式の壺の頸部文様は細い工具による篦描文とともに櫛描文が大きな位置を占めるようになる。栗林式の壺の頸部文様は太い篦描文を廻らせることを基本としており、櫛描文を廻らせることは少ない。従って、頸部に櫛描文（特に簾状文）をもつ壺は後期へ傾斜する新要素と考えられる。

以上、後期へ傾斜する三つの新要素の一つを一括資料中にもつものを、栗林II式の新段階に据え、逆にこれらのみられないものを古段階に設定して分析を加えた結果、次のような傾向が把握された。

壺について

北西ノ久保遺跡出土資料における壺は文様が頸部にのみ施される単純口縁細頸壺が圧倒的に主体を占めている。この壺は変化に乏しく、古段階と新段階のものを対比しても明確な変化は認められない。この他に文様が頸～胴部まで隈なく施される古要素をもつ単純口縁細頸壺、頸～胴部のうち胴部上位の文様帯を欠く壺なども古・新両段階に少量残存するが、これらも前者と同様に古・新段階で明確な変化を指摘することは難しい。つまり、栗林II式を単純口縁細頸壺のみから新旧に細別することは極めて困難と言うことができるのである。壺から新旧に細別する要素は単純口縁細頸壺よりもはるかに量の少ない受口口縁細頸の変化、太頸壺の消長にみることができる。垂下文をもち加飾されることを基本とする受口口縁細頸壺は古段階において多く、新段階では減少し、垂下文にも波状化したものがあらわれる。また、受口部の外稜が消失化したもの、垂下文が消滅したものがあらわれることも新段階の特徴として指摘できよう。太頸壺は栗林Ｉ式から伝統的に継承されてきた要素であるが、栗林II式の新段階において特に多用化の傾向がみられるようになる。新段階における太頸壺は文様が簡略化が著しく、頸部にのみ集中し、後期の壺へ直接つながりをもつ櫛描文が施文されるものもみられるようになる。



第2図　北西ノ久保遺跡栗林II式土器の流れ

甕について

壺は明確な変化を抽出するのが困難であったのに対し、甕は古段階から新段階へ比較的明確な流れを追うことができる。大略的に言えば、単純口縁甕から受口口縁甕への量的な推移である。これは縦羽状の櫛描文をもつ甕(以下「縦羽状甕」と呼ぶ。)、横羽状の櫛描文をもつ甕(以下「横羽状甕」と呼ぶ。)、波状文をもつ甕(以下「波状甕」と呼ぶ。)いずれにも同様なことが言える。縦羽状甕は古段階においては単純口縁が主体を占めるが、新段階では減少し、受口口縁が増加する。横羽状甕も古段階では単純口縁が盛行するが、新段階では激減し、受口口縁が多くなる。また、波状甕は単純口縁で小形のものは古・新両段階を通じて存在するが、受口口縁で大形化したものは新段階において主体を占める。以上のように栗林II式の甕の古段階から新段階への変化は単純口縁から受口口縁へと総括できる。この他に新段階では胴部が球胴化した甕も多くなる傾向が指摘できるのではないかと考えている。

他の器種、台付甕(「コ」の字重ね文をもつもの)、鉢、高坏、甑については古・新で明確な変化を指摘することが資料不足のため難しいが、新段階において赤色塗彩の傾向がより盛行するように思われる。いずれにせよこれらの器種は中期後半段階では、あまり多用されるものではなかったのではあるまいか。

以上、栗林II式の古段階から新段階への推移を壺・甕を中心として述べてきたが、これらの消長・変化の傾向は古段階における最も安定した中期後半の弥生土器の様相(器種・器形の構成要素が新段階に比べ少ない)から新段階の中期後半の弥生土器の解体の始まる様相(伝統的な要素と、次期の後期へ連なる新しい要素が混在し、器種・器形の構成要素が古段階よりも多くなり、バラエティーに富む。)を具現しているように思えるのである。

最後に北西ノ久保出土資料を中心として栗林II式を古・新に二細別した結果をふまえて、他遺跡出土資料の位置づけを行っておきたい。清水田遺跡出土資料は外稜のとれた受口甕の存在から栗林II式の新段階、西裏、竹田峯遺跡住居址出土資料も受口甕の存在からやはり新段階と考えられる。但し、西裏18号住居址出土資料は縄文の消失化傾向がより鮮明であるため、新段階よりも更に後続する資料となり得る可能性もある。(例えば松本市県町遺跡例のような段階。)この問題については当地方で今少し良好な資料が増加するのを待って検討したいと思う。

V　本稿は昨年10・11月に行われた佐久考古学会例会および三県シンポジウムの発表要旨に修正を加え、最も新しい見解を示した近刊予定の報告書のダイジェスト版である。紙面の都合上、十分な説明を行えなかった。詳細については報告書を参照して頂きたい。

畿内系暗文を有する土師器坏について

堤　　隆

近年、佐久平北部で行われている鋳師屋遺跡群の調査において、きわめて特徴的な土師器坏が数多く検出されている。

その土師器坏には、内面体部に放射状暗文が、見込部にはラセン暗文が施され、外面体部から底部にかけてはヘラケズリがなされている。盤状の器形を呈し、胎土は橙色で特徴的な赤褐色の粒子を含んでいるものである(第1図)。

この坏は、一見すれば、前頁において井出氏が紹介した「甲斐型坏」にも類似するが、見込部にラセン暗文が施されることで大きく異なっている。

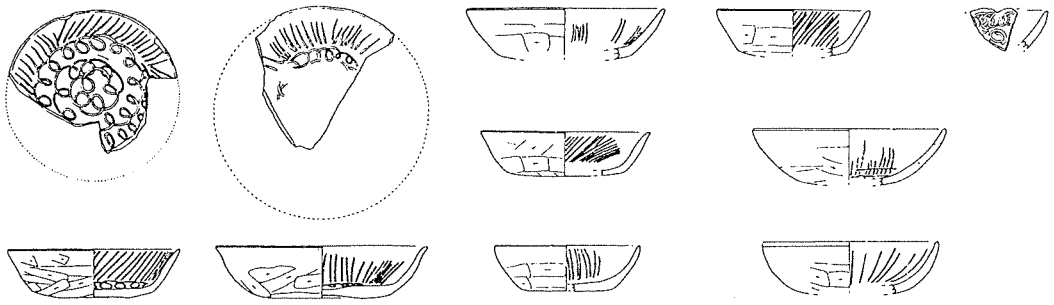
ところで、放射状暗文+ラセン暗文は、飛鳥・平城地域のいわゆる「宮廷の土器」に特徴的に施されている。時間的には、7～8世紀にかけての土器である。

この種の坏は、昭和60年度に発掘調査が実施された前田遺跡においては、19個体が確認されている(御代田町教育委員会　1987)。また、前田遺跡に隣接する十二遺跡からも幾つか検出をみている。これらの坏は、8世紀前半の所産と考えられる。

ここで問題となるのは、この種の坏が、畿内そのものの土器か、あるいは、その模倣であるかということであろう。

かつて筆者は、このことを検討するために、前田遺跡の土器と飛鳥・檜前遺跡の土器を実際に比較したみたことがある。結果、以下に述べる点から、この種の土器が畿内の土器そのものではないことが明らかになった。その理由としては、①畿内のそれでは、本坏のように底部と体部の境に稜を持つ例が知られていない。②この種の暗文は畿内のものと比べ全体に太く、稚拙な感を受ける。③土器の胎土も精選されず畿内のものとは異なっている。④その法量も畿内の土器とは一致しない。⑤本坏の外面に施されているヘラケズリは畿内のものには認められない。ということがあげられる。

また、奈良教育大学の三辻利一教授の胎土分析によれば、この種の坏の胎土は、畿内の粘土の化学的特性よりむしろ在地の粘土の化学的特性に近いことが明らかにな



第１図　前田遺跡　畿内系暗文を有する土器（１：４）

った。これによってこの種の坏が在地産である可能性も出てきたのである。

さて、このような「宮廷の土器」の模倣形態が生み出される背景とはどこにあったのであろうか。

想像を逞しくすれば、かつては畿内にあった官人が地方に派遣されることなどにより、このような土器が製作されることとなりえたのであろうか。

なお、佐久市の若宮遺跡からも、体部に二段階放射状暗文・見込み部にラセン暗文の施された坏が一点検出されている（小山　1985）。こちらは、暗文のシャープさ・胎土・法量の点から、畿内産の土器と考えられそうである。この土器は飛鳥IIもしくは飛鳥IIIの坏ＡＩ（西1986）に対比できそうである。

いずれにしてもこの種の土器は、今後特に注意されるべきものといえよう。

事務局より

- ５月17日、会員の角張淳一氏が、伊藤憲子さんと、国学院大学加藤有次先生ご夫妻のご媒酌によりご結婚されました。末長きお幸せをお祈り致します。
- この総会において、次の四人の方が私たちの新しい仲間として加わりました。よろしくお願いします。

篠原貞雄	小海町東馬流3004-5	☎ 0267-(92)-2562
小平恵一	佐久市香坂2602	☎ 0267-(68)-3818
高地正雄	小諸市御影新田谷地原2458-5	☎ 0267-(22)-5364
木内和枝	佐久市伴野1502-2	☎ 0267-(62)-3070

- 新しく郵便振替口座が開設されました。会費の納入等にご利用下さい。
  口座名　佐久考古学会　　長野　７－2842
- 来る10月、研修旅行が実施されます。ふるってご参加下さい。
  行き先　奈良方面　（飛鳥・斑鳩地方、奈良国立文化財研究所・橿原考古学研究所等）
  日にち　昭和62年10月13(火)　14(水)　15(木)　日　二泊三日

▷編集後記◁

大変遅くなりましたが、佐久考古通信41号をお届けいたします。ご覧のように本号からは活字の大きさをおとし、掲載文字をより多くすることで紙面の充実を図りました。また、今回の掲載文はいずれも力作ぞろいで、内容的にも充実が図れたかとおもいます。

短い夏がすぎ、季節はもう秋、スポーツの秋・食欲の秋・恋人が欲しい秋・・・・いや、いや、そんなことはいっていられません。秋の夜長、佐久市志の原稿をどんどん書かなければ・・・・みなさんもどしどし佐久考古通信に原稿をおよせ下さい。　　（堤）

佐久考古通信 No. 41

発行所　佐久考古学会（転局）
南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
☎（0267）92－3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤
羽毛田

佐久考古通信

No.42・43合併号
1987. 12. 1
佐久考古学会

目　　次

柄鏡形敷石住居址が検出された平石遺跡　――調査速報――……福島邦男……1
中秋の大和・飛鳥路をたずねて　――昭和62年度研修旅行記――……佐々木宗昭……2
井戸尻の収穫祭に参加して……佐々木春蔵……3
縄文時代の柄鏡形敷石住居址について　――寄稿――……本橋恵美子……4
長峯の綾　――エッセイ――……羽毛田伸博……6
弥生土器編年の確立にむけて（その1）――佐久地方の吉田式土器の認識――……小山岳夫……9
弥生時代の墓制　――昭和61年度例会研究発表より――……高村博文……11
弥生時代の金属器　――昭和61年度例会研究発表より――……臼田武正……12
瀧峯古墳群について　――昭和61年度例会研究発表より――……三石宗一……13
小金平の備蓄銭　――佐久市大字伴野小金平出土古銭調査中間報告――……森泉かよ子……15
埋文と学会に寄せて……浅沼馨……16
表採に思う、矢出川の細石刃文化……大井今朝太・堤隆……17
200字短信　――身近な話題――……各会員……19
新刊紹介……事務局……20
事務局より……事務局……20

―― 調査速報 ――

柄鏡形敷石住居址が検出された平石遺跡

福島　邦男

平石遺跡は、望月町大字協和字平石に位置している。ここは、蓼科山を源とする八丁地川の左岸の河岸段丘に当り、標高773m～783mを測る。八丁地川の上流から本遺跡のやや下流の両岸には、熱の珪化作用を受けて節理状に発達した安山岩（鉄平石）の裾野が続き、多量の埋蔵量を有する岩塊が存在している。

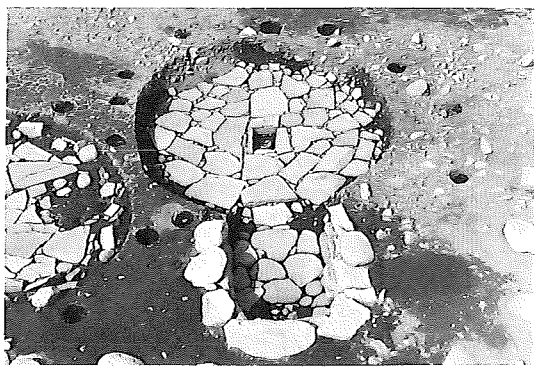
遺跡は、段丘に沿って東西に長く、総面積は約3万㎡を有しているが、そのうちの40%に民家が立ち並んでいる。今回調査した箇所は、東西方向に北側の水田部分を実施し、全体の30%に当る約1万㎡である。

調査の結果、当初散布遺物から推定していた以上に、各時期の遺構や極めて多量の遺物が出土した。

縄文早期では、樋沢式押型文土器（山形文が99%以上）がまとまって出土すると共に、貝殻腹縁文土器や併行沈線文土器などの沈線文系土器群、撚糸文、縄文、無文土器など300点以上が出土している。但し、用地外との接点部で出土したため少範囲しか調査できず、また縄文中期住居址との複合関係を成しており、包含層も僅かであったため層位的な調査は不可能であった。

縄文前期では、僅かに花積下層式の丸底土器や関山式土器の大型破片が出土している。

縄文中期では、後半期の住居址が22棟検出されたが、耕作等の破壊などを考慮すれば50棟以上の住居址が調査区だけでも存在していた可能性がある。検出された住居のうち4棟が柄鏡形敷石住居址で、いずれも中期末に比定されるものである。尚、その他の住居址の中に敷石が一部残るが、大部分が剝ぎ取られてしまった形跡のあるものがあり、これらも含めればさらに敷石住居址の棟数も増える可能性をはらんでいる。遺物は、中葉から末葉までの間、土器・石器とも多量に出土し



平石遺跡　柄鏡形敷石住居址

ており、特に末葉は極めて多い。これらの中には、石棒土偶やミニチュア土器などの特殊遺物もあり、また打製石斧の量が目立って多いのが特徴である。

縄文後期では、柄鏡形敷石住居址が2棟検出され、その他、石棺墓と考えられる遺構、環状配石遺構、目的不明の集石や配石がみつかっている。遺物は、前半期に集中し、石棒や石剣なども出土している。

縄文時代以降の遺物は、7・8世紀の坏、臼玉、剣形模造品、9・10世紀の坏・甕がみられ、さらに中世から近世の古銭や陶磁器が出土している。

本調査の成果の中で目立つものとして、柄鏡形敷石住居址の検出がある。中期末の4棟のうちの第2号住居址は、主体部が円形の竪穴で、内部には炉址を中心に正方形に敷石され埋甕が伴っていた。張出部はほぼ平地式で河原石で囲み内部は鉄平石が敷かれていた。後期の第15号住居址は堀之内Ⅰ式期のもので、楕円形状の浅い竪穴で縁石が伴い、張出部はやはり竪穴状に掘り込み2段の石組みで縁を囲み、内部は鉄平石を敷いてあった。第16号住居址は堀之内Ⅱ式期で、正円形の深い竪穴で全面余す所なく敷石されていた。張出部は、平面がほぼ長方形状を成し、主体部との接点部を除く三方に、5～6段の横積みの石組みが丁寧に行われていた。この石組みは、全国で初めての発見であり、柄鏡形敷石住居址研究の上では、今後指標になるものと考えられる。ここでは仮に、「平石型」とでも呼んでおくことにしたい。

これらの敷石住居址は、敷石部分だけみても、構造的にかなりバラエティーがある。敷石全体の形状の違い、敷石しない部分を残す、主体部と張出部の接点を意味する框石を横に倒して置くなど意図的に行っている部分がさまざまにみられる。これらの構造は、住居址内における機能というよりは、むしろ信仰に基づく意図的な表現であると思われるが、住居址そのものが特殊なものであるが故の結果ではないと考えた方がよさそうである。それは、敷石住居址ではごく一般にみられる構造であるし、出土遺物をみても特殊なものは出土していないことをみても明らかである。

最後に、平石遺跡では、北端より東西80m、南北30mの泥炭層の存在が確認された。沼というより水をたたえた池であった可能性が強いとのことであるが、縄文期における集落構造をさぐる上では重要な要素であると共に、古代～近世においても、各期の遺物がこの中から出土していることをみれば、全時代を通じ、この地域の生活の上では不可欠な存在として位置づけなければならないものである。ちなみにここは「大谷地」（オオヤチ）という部落であり、この池＝湿地が語源となっており、原始から現在まで永遠と結びつきを示しているがごとくである。

（本学会員
望月町教育委員会）

—— 昭和62年度研修旅行記 ——

中秋の大和・飛鳥路をたずねて

佐々木宗昭

恒例の佐久考古学会の研修旅行が、去る10月12日～14日の日程で行われました。例年ですと一泊の旅行が、今年は大和、飛鳥路の研修が組まれたため、二泊三日の旅となりました。

12日　AM6：00　佐久市役所を出発したバスは、野辺山駅で由井会長ほか26名が揃い、長坂インターより大和へと向かう。小雨の中、しばらくすると諏訪湖が眼下に広がる。古代信濃国の国造りが、最初に行われたと伝わる聖なる地にふさわしい景観が、しばし車窓から目を離さない。やがてバスは伊那谷を過ぎ、信濃国と美濃の国境に連なる神坂峠へと差しかかる。奈良時代

「ちはやぶる　神の御坂に幣まつり
斎ふいのちは母父がため」
（『万葉集』巻二十）

と詠まれたこの峠路には、各所に幣を奉り、峠神に祈った祭祀遺跡が発見されることで名高い峠である。

研修旅行の素敵な面々

さて、佐久を出発してから約五時間少々で、中央高速と東名高速の分岐点である小牧インターにさしかかる。此の地点は、会員仲間の一説によると、東名高速の「㊙の地点」と称される有名（誘迷）地点であり要注意‥？

無事ここを通過した車は、大垣インターより、「輪中地帯」を経て東名阪自動車道に移り、一路大和の国へ

と近づく。やがて、急勾配の峠を下り天理市に入る。此の地に隣接する地が、箸墓古墳を代表とする巨大古墳が群なる桜井市である。途中、石上神宮を参拝する。此の社は「七支刀」が奉安される神社であり、物部氏の氏神社として知られる社でもある。そして、ここから10分ほど行くと、崇神、景行天皇陵を始め、箸墓古墳が見え始め大和路に来た実感がわいてくる。

PM 4 時過ぎ、神体山として名高い「三輪山」を後に、バスは宿泊先である飛鳥の里へと向かう。PM 5 時過ぎ飛鳥三山の一つ、畝傍山のふもと橿原観光ホテルに着き、無事、第一日が終了する。

13日　快晴のもと、いよいよ「飛ぶ鳥の」“あすか”を巡る研修である。AM 8 ：30　ホテルを出発し、先ず高松塚古墳を見学する。以下、見学箇所を記してみると、

亀石～橘寺～川原寺跡～石舞台～板蓋宮跡～飛鳥寺～国立飛鳥資料館～橿原神宮～橿原考古研究所資料館～笛吹古墳群発掘現場～新沢千塚資料館

の順であった。この様に前半は飛鳥路を散策するコース、後半は、主に資料館見学のコースであった。前半散策した「飛鳥路」は、今から1300年前、つまり587年物部氏が蘇我氏により滅ぼされてから、ほぼ一世紀にわたって都が置かれ、「律令国家」による統一国家が初めて成立した政治的中心地であったことは言うまでもない。

又、川原寺跡なども印象深いものがあった。当寺跡はかつて官寺として建立された荘厳な寺院であり、大和の四大寺（大宮、薬師、飛鳥、川原）の一つに数えられた寺である。佐久にもこうした官寺に準ずる定額寺である「妙楽寺」が建立されていたと言われるが、その所在地が定かでないのは悔やまれる。しかし、いずれ此の佐久の大地に鎮まる大寺院が、佐久の世の人々の目に脚光を浴びる日が来ることを夢に見、明日の発掘に期待を抱き続けたい。

こうして、絶好の秋晴れのもと、飛鳥の里を散策できたことはラッキーであった。又、その夜、檀考研の石野先生以下 6 名の方々と、佐久のスライドを通し、親しくお話できたことも印象深い一日であった。

14日　研修旅行の最後の目的地、薬師寺、東大寺を見学し、PM 1 ：00大和盆地を後にした。峠の中腹より眼下に見渡せる大和盆地からは、数ケ所より煙りが立ち昇り、うららかな勝景である。

大和には群山(むらやま)あれど　とりよろふ　天香久山　登り立ち　国見をすれば　国原は　煙立ち立つ
海原は　鷗立ち立つ　うまし国ぞ　蜻蛉島(あきつしま)
大和の国は　　舒明天皇（『万葉集』巻二）

きっとこのような情景であったであろうなどと思いつつ遠くなる奈良盆地を後に、一路信濃国へと向った。

車中は三日間の疲れも出て、さぞ静かな帰路かと思いしや、特に車中の後方、女性軍はいたって陽気である。どうやら昨夜、深夜まで続いたというマクラ投げの話に夢中であるらしい。“心の古里奈良”に来た旅は、女性軍にとっては、うら若き女学生の心にタイムスリップさせたのであろう。それにしても日頃、発掘で鍛えた足腰をいかんなく発揮し、マクラに興じた実年、熟女たちのパワーは迫力満点であったに違いない。その後カラオケに移り、旅の最後をおしむかのように、えんえんと諏訪湖サービスエリアまで続いたのであった。こうして天候にも恵まれた大和への旅は、無事有意義なうちにPM 9 ：30佐久へ到着した。

最後に此の三日間、くまなく説明を頂いた井出先生、そして、幹事とし、孤憤奮闘された林さんの両氏に心より御礼を述べ記行文を閉じたい。

（本学会員）

井戸尻の収穫祭に参加して

佐々木春蔵

十月十一日（日）井戸尻考古館の収穫祭に参加した。藤森栄一の縄文農耕を継承するこの収穫祭には一度参加したいと思っていたので、誘いがあったとき早速参加することを承諾した。

当日は高原の紅葉も彩づきはじめた自然の美しい季節であった。朝七時半に佐久町公民館を出発し、九時頃には井戸尻考古館に到着した。考古館の出土品をみたあと、女性の四、五人は食事の準備にまわり、男性は畑に出かけ穀物の収穫をした。

収穫した穀物はアワ、キビ、ヒエなどであった。縄文人に紛した三石さんが祭事をおこない、収穫した穀物を持ち帰った。

食事が出来て、会食したのは一時半頃であった。ズミのお酒、キビでつくった酒などいただき、エゴマでよごしたキビやアワのおはぎ、山菜の汁などいただき、スライドをみて、帰途についたのは午後四時頃であった。

（本学会員）

縄文時代の柄鏡形住居址について

本橋恵美子

1、研究目的

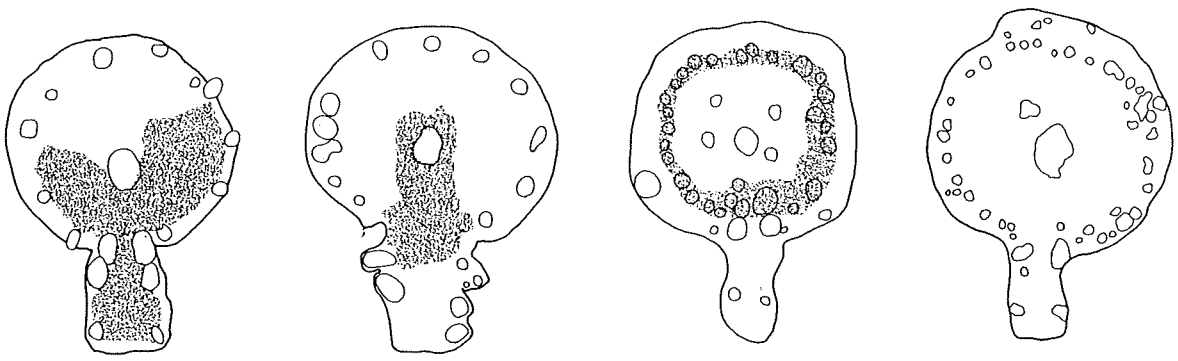
最近、開発および再開発ブームによる発掘調査の増加にともない、縄文時代の柄鏡形住居址の事例がかなり増えてきた。従来、柄鏡形住居址は、類例が少なかったことと敷石あるいは柄部を有するという点で独特な形状をもつため、祭祀的な遺構とみるきらいがあり、遺構の個別研究を行うことなしにその特殊性を強調した論考が目立った。そこで、増えてきた資料を基に改めて個々の遺構分析から再びその性格を論じる必要が生じてきた。

本稿では、柄鏡形住居址の概念を規程するとともに、問題点を抽出し、今後の研究動向を展望することにする。

2、分析の視点

「柄鏡形住居址」という名称は、1967年に桜井清彦氏が神奈川県横浜市洋光台猿田遺跡で発見された柄鏡形の遺構につけたことに始まる。これ以前は、専ら敷石住居に関する議論が行われていた。そもそも敷石住居址の研究は古く、1940年の後藤守一氏の論稿が初めである。後藤氏は敷石住居址を「家の床として、地面に相当大形にして、かつ面の平坦に並べた構設の遺阯と思推せられるもの」と規程している「後藤守一1940)。筆者は、後藤氏の言を受けて次のように敷石住居を規程する。敷石住居とは、石が平らな面を上向きにして水平に敷かれたもので、石が敷かれた部分は面的な拡がりをもつものであり、この石の間隙には小礫が埋めこまれているのが通例である。一方、柄鏡形住居址とは、近世の柄鏡形を呈する形態で壁・壁柱穴・炉をもつ遺構であり、住居中心部分と柄部の間に対応する柱穴あるいはピットをもつものである。柄鏡形住居址の炉は住居中心部よりやや柄部側にある。壁穴式でない柄鏡形住居址は、敷石が柄鏡形を呈するもので、この場合は敷石の外側に石の短辺を立てた縁石が巡るものをいう。炉はやはり住居中心部よりやや柄部に近い位置にある。このような住居址を総じて「柄鏡形住居址」と呼称する。柄鏡形住居址は、敷石および配石の状態から、A類．住居空間部のほとんどの部分に敷石が存在するもの、B類．住居空間部のうち住居中心部の柄部側の空間部分あるいは炉址の周辺から柄部にかけての空間部分など特定の場所に敷石が存在するもの、C類．壁柱穴に沿って小礫が巡るもの、D類．これら敷石や配石をもたないものへというものに分類される。

たとえば、A類は堀之内Ⅰ期の長野県山ノ内町伊勢宮遺跡や小諸市久保田遺跡があげられる。B類は中部山地地域には、現在までのところはみられず、多摩丘陵および武蔵野台地の東京都多摩市和田・百草遺跡や町田市なすな原遺跡第129号、小金井市はけうえ遺跡第6号にみられる。これらはいずれも堀之内Ⅰ期の住居址であり、B類は堀之内期に目立ってみられる。C類は群馬県前橋市荒砥二之堰遺跡で、加曽利E4期から堀之内Ⅱ期まで存在する。これらの住居址は、いずれも柱穴に沿って小礫が覆土とともに巡っており、小礫は床面から浮いた状態である。柄鏡形住居址のこのよ



柄鏡形住居址　類別模式図

うな配石を著者は、「環状小礫配石」と称し、柄鏡形住居址についてのみに限定して考え、金井安子氏の「周礫遺構」というような柄鏡形住居址以外にもみられる遺構とは区別して考えたい(金井安子　1984)。D類は加曽利E4期の千葉県松戸市坂之台遺跡があげられる。

このA類からD類の分類は、住居使用時点に敷石・配石が既に存在したということが前提としてある。このことを証明するには枚挙に暇がないが、簡潔にその根拠をあげると、まずA類では加曽利E4期の群馬県月夜野町梨ノ木平遺跡では、その平面形や断面図から竪穴を掘った後に炉・敷石・縁石の順に構築していることがわかり、更に堀之内I期東京都八王子市深沢遺跡では、住居中心部分で敷石のない空間部分の上面と敷石面が水平であることから、敷石は住居使用時点に既に存在したものと考えられる。B類に関しても和田・百草遺跡やなすな原遺跡の事例のように、炉辺部から柄部にかけて掘り込んだ後、敷石を施すという造り方をしており、床面は敷石のない空間部分と敷石面はほぼ水平を保っている。このことからB類も住居使用時点に存在したものであろう。次はC類である。C類は、金井氏らにより住居廃絶時に意図的におこなわれた祭祀行為の産物であるという見解があり、筆者の住居施設という見解と真っ向から対立するものである。この議論を解決するには、C類の環状小礫配石を含めた住居覆土断面図を記録化し発表されることが必要である。しかし、現在まで公けになっている資料では、その配石の状態が明確に記録されている報告はなく、せいぜい荒砥二之堰遺跡のいくつかの住居址についてその部分が報告されている程度である。荒砥二之堰遺跡の柄鏡形住居址は、住居断面図から床に土を含んだ小礫が土手状に柱穴に沿って巡っており、住居使用時点に存在していたものと判断される。報文でも住居施設として理解しているようである。(石坂茂　1985)。

柄鏡形住居址をA類・B類・C類という視点からみるならば、その分布は大きく（イ）山地地域や丘陵上の河川上流域・（ロ）大河川の支流および大河川中流域・（ハ）大河川下流域および東京湾岸に分けられ、A類は（イ）・B類は（イ）の特に丘陵地域と（ロ）・C類は（ハ）に拡がるという傾向がみられる。このように自然地形を反映しているとも言えることの傍証として、梨ノ木平遺跡や長野県軽井沢町茂沢南石堂遺跡・御代田町宮平遺跡では近隣に板状石の産地があり、これが敷石材として多用されているだけでなく、敷石住居址の事例そのものも多いということがあげられる。

3、まとめと展望

柄鏡形住居址は縄文時代中期終末の加曽利E4期に多摩丘陵で出現し、急速に多摩丘陵および武蔵野台地全体に拡がり、大宮台地やその周辺、利根川上流域から中部山地地域、丹波山麓や相模野台地、多摩丘陵寄りの中部山地地域、武蔵野台地寄りの東京湾岸にまで達する。後期称名寺期になると下総台地東京湾岸、更に福島県にまで拡がり、堀之内期では大宮台地やその周辺の丘陵だけでなく、荒川支流域の低地にも柄鏡形住居址が目立ってくる。しかしながら、柄鏡形住居址は堀之内期になると、加曽利E4期では分布の中心であった多摩丘陵に再び柄部をもたない円形プランの竪穴住居が出現し、その分布が拡大する傍ら分化・多様化の兆があり、加曽利BI期をもって消滅するのである。このような柄鏡形住居址の在り方をみるならば、柄鏡形住居址は縄文時代の住居変遷のなかに位置づけられる一住居形態であるといえよう。

柄鏡形住居址が出現する時期的背景には、縄文時代中期終末から後期にかけての中部地方・関東地方において、遺跡の減少化があり、また中期から後期の住居の構造的変化があり、いわばその移行期とも言える時期に柄鏡形住居が存在したことは重要な点である。従来、柄鏡形住居址は、敷石住居址という観点からと柄鏡形という形態に着目した研究があるが、その多くは両者を混同して論じているため、かなり混乱した状況にある。また、柄鏡形住居址の研究は、最も根本的な問題、敷石および配石の住居同時性について何ら検討されることがなく、主にその性格追及に拘泥しているきらいがある。柄鏡形住居址が、縄文時代中期終末から後期前半という限られた時期に、しかも関東・中部地方の限られた地域に偏在するということの問題は未だ残されたままである。今後、縄文時代の住居址の流れのなかで、柄鏡形住居を位置づけ、個別に微視的研究を重ねることによって、この問題を解決できるような糸口がみつかるかもしれない。本稿では、筆者の柄鏡形住居址研究のアウトラインのみを記した。詳しくは、別稿を参照されたい。

参考文献

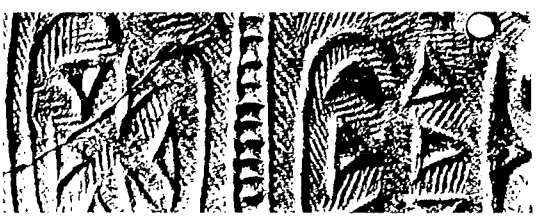
石坂茂　『荒砥二之堰遺跡』　「成果と問題点」　1985

金井安子　「縄文時代の周礫を有する住居について」　青山考古通信第4号　1984

後藤守一　『日本考古学講座』　「上古時代の住居」　1940

桜井清彦　「縄文時代の集落跡――横浜市洋光台猿田遺跡」　月刊考古学ジャーナルNo.7　1967

（国学院大学大学院博士課程在学）



長峯の綾

羽毛田伸博

長峯古墳群の立地は、荒船火山の造山運動によって形成された、幾筋かの山麓のうちの志賀川と滑津川に挟まれた、南斜面上の平坦地に向けて、馬蹄形に開かれた、凹状の所に位置する。気候は冬期において、北風を遮ることと、太陽のエネルギーを南斜面上いっぱいに浴びることから、酷寒の佐久地方においては、比較的暖かい場所である。そんなことから、私達は三月下旬に本遺跡の調査を始めた。

周囲はまだ紫茶褐色の世界であったが、アカマツの葉樹木の下のイチヤク草、日溜りに咲く、オオイヌノフグリに確かな足取りで春の近づいて来るのが感じられた。クヌギの木には、住民のいないトックリバチの巣が、荒れ果て、揺れていた。

四月に入ると、春を先取りして、氷河期の生き残りのルリタテハが、露出している古墳の天井石の上で、太陽の光を体いっぱいに浴びて羽根を休めていた。フキノトウ、ツクシ、オオイタドリ（スイバ）と春の舞台を待つ役者の様に、騒めきと緊張の感じられる世界に変わっていった。山麓周辺部では黄金色のダンコウバイ(ジィシャ)、銀緑色のヤマネコヤナギが咲き、カラマツ、クヌギなどの茂げる雑木林では、一雨ごとに、吸い取り紙に吸われる、インクの様な広がりをもって、紫茶褐色の世界から若緑の世界へと変わっていった。この騒めきだした世界に、遅れまいと、シノダケの茂った藪からウグイスの声が聞こえ、ケーン・ケーンと甲高い鳴き声を残して、キジが飛び立っていった。その跡は、地膚が凹状になっており、砂浴びでもしていたのであろう。

四月も下旬になると、クヌギの芽を食べに、早朝、数十羽のマヒワの群れが、雨音の様な騒めきを残して、朝食をすませている。モンシロチョウ・モンキチョウが、セイヨウタンポポの花に飛んできては、飛びさっていく。ヨモギの新芽（モチグサ）が白い綿毛を体中に覆い、銀緑色に輝いている。春型のやや小ぶりのキアゲハが恋人を探しながら、ゆっくりと飛んでいる。長峯古墳群の南側、現代版条里制の田んぼの上には、南の国の使者ツバメ達が、ぽつぽつと現れ、雑木林の周縁部、日当りのよい所には、太田道灌の花、ヤマブキが陽気な顔で咲いていた。第６号古墳東側の小さな沢には、淡青色のサワガニの雄がアンバランスの鋏を天に向けて、横に這っていく。地下では、泥を食べるミミズが、発掘のため自分の体を２つに切られ、また潰され、青色の血を流し、俺も生き物だと、最後の力を降りしぼり叫んで、のたうちまわっている。調査の為、掘られた溝には、ニホンアカガエルが小野道風の助力も虚しく、力尽きて、よたよたしている。墳丘の上には、太い株になって、死者の霊を吸い、黒い粘りのある樹液をだす、ヤマウルシが鮮血色の新芽を出し、調査を中止させようと、湿疹と痒さをもって対抗している。畑や村落には、コウメやブンゴウメが咲き、農民の収穫を占う、コブシが山にたくさんの白い花をつけ清楚に咲いている。日当りのよい土手にはノビルが芽をだし、地膚の出ている崩れかかった南斜面ではヤマウドが芽をだし、体は棘で、芽は油紙で防御し、白い綿毛に包まれているタラノキ（タラノメ）が、酒の肴になるのを待っている。

五月に入ると、村落には甍を波に、鯉達が泳いでいる。時たま、南の方から強い波が竜巻きをもって押し寄せ、私達に目潰しをくらわす。また陽光の浴びる静かな日には、墳丘の下で、シマヘビ、ヤマカカシ、ヒナタヘビが昼寝をしており、ジムグリが草の積んである下で会話をしている。誰が植えたか、シダレザクラが満開に咲き、第１号古墳を照らし出していた。下の平垣地でも農作業の音が聞こえだし、田の畦には、家に植えると、火事になると言い伝えられている、クサボケ（ジナシ）が朱色の花をつけている。山々は若葉色に変わり、所々にヤマザクラが灰桜色に咲き、カッコウの鳴き声が聞こえてくる。養蚕の盛んなころ、山を開墾してオウシュウクワを植えた跡の残る本遺跡の、又、誰が植えたか知らないが、剪定もされず伸びほうだいになっているモモの花を肴に「目に青葉、山時鳥、初鰹」と酒宴をテントの中で煙にむせながらひらいた。あくる朝、酒気を帯び、不協和音のする頭で、本遺跡に行き、腰をおろし、朝日の浴びる山道を見ていると、ホタルカズラが小さな星の形で、瑠璃色に咲いていた。

五月も中旬に入ると、土の中で４齢を迎え、成虫になる日の間近いハルゼミの幼虫、ヒダリマキマイマイの貝殻が腐植土の中で見うけられた。作業の終わる頃、日の長さが感じられ、一服煙草を吸うと紫煙が漂い、どこからともなく、低い声でヒキガエルの鳴き声が聞こえた。五月晴れの暖かい日には、アカマツの木から一斉に、ミーン・ムズゼー・ミーン・ムズゼーとハルゼミが合唱を始め、なにかのはずみで、また静寂がもどる。こんな繰り返しを、陽光の中で行っていた。又、南斜面のやや水はけのよい所には、ヤマシャクヤクの艶のある暗赤色の芽が、二三株ずつ、散在していた。

五月下旬に入ると平垣部の田んぼでは、一面に空を映しだし、やがて青田に変わっていく。林の周縁では、葉を焦げ茶の毛で覆った、ウグイスカズラの小さな薄紅色の花が下を向いて咲いており、樹木に食い込み、からまりつく、五葉掌状のアケビ、三葉掌状のミツバアケビが雌雄異花の淡紫色と黒紫色の小さな花をつけていた。ヤマフジが石巻きに巻きつき、甘い香り漂わせ、房状に垂れさがり咲いていた。その密に誘われて、クマバチが、空中に静止する様に羽音をたてて飛行していた。恐ろしそうな名であるが、けして人を襲うことのない、空元気なハチである。

六月に入ると、梅雨期に入る。東シナ海でできた湿った大気を、東海、関東に落とし、荒船山塊に当たり、時々、内山峠から靄を運んでくる。そうして、どんよりと曇った時、周囲の環境により保護色に変える、アマガエルが鳴き始める。そんな時、「平尾冠、浅間帯」は雨が止むと、言い伝えがある。本遺跡の周辺、日当りのよい第1号古墳周囲谷地では、生長の早いヨシアシが人間の背丈程に伸び、やや乾いた所では、葉も茎もサンドペーパーの様にザラザラとした、帰化植物であるクワモドキも、ヨシに負けじと、天に向かって伸びている。今年は例年に比べ、空梅雨であり、直射日光を太陽から最短距離で受ける日が多く、私達も段々と黒ずんできた。

六月も中旬になると、春型のキアゲハの産卵した幼虫が、ヤマゼリ、シシウドの葉を食べ五齢を迎え、浅緑を地に黒色の中に朱の点を持った、ストライプ模様で、触わると、いやな臭いと共に、鮮やかな黄色い触角をだす。条件反射とはいえ、精巧な機械を見ているようで、自然の造形の妙なることが改めて感じられる。

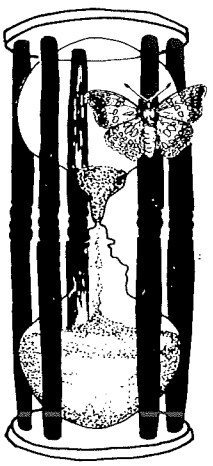
六月も下旬に入ると、昆虫の活動が活発になり、ニイニイゼミがチィー・チィー・チィー・チィー……と鳴き始め、クヌギも甘ずっぱい樹液の臭いを発散させ始める。日陽りのよい道端には、帰化植物のハルジオン(鉄道草)、シロツメクサ、ムラサキツメクサが咲き、少年の頃、飼兎の餌によく採った、クサフジが赤紫色の花を上に向けて咲いていた。その傍では、ベニシジミ、ミツバチが飛んでいた。朝早く発掘現場に行くと、塒から、四羽三羽、六羽五羽と朝食を食べに、濁りのこもった声でガアー・ガアーと鳴いてハシボソカラスが内山峠の方に向かって飛んでいった。昼寝の時、山道から天を仰ぎ見れば、四月の頃より段々と青色が緑色に浸食され、山道は深緑のトンネルに変わり、木漏れ日まで緑色に変わっていた。

7月に入ると、日射が焼け焦がさんばかりの力をもって、地上に降りそそいでくる。山の上には、真白い巨大な生き物が、地上の水分を吸って成長していき、午後になると稲妻と遠吠えを伴って、地上に襲いかかってくる。俗に当地方では「浅間雷なり音ばかり、荒船雷なり気をつけろ、蓼科雷なり婿の土産より早い。」というが、荒船母艦から飛び立った爆撃機はなかなかしたたかなものである。又、昔の人達は、稲妻の光が稲の穂になると考えたそうだが、自然現象に対して、このくらい親近感をもって、美しい言葉で呼びたいものである。露出している古墳石室の、雨の当たらない乾いた所には、擂鉢状の穴を掘り、その中央に尻から潜って、じっとアリの落ちるのを待っているウスバカゲロウの幼虫（アリジゴク）がいた。アリが落ちるとアリの踠きと、アリジゴクの体を砂に当く振動で、砂くずれをおこし、それにまきこまれアリジゴクに捕食されてしまう。人間の一生もこんな様なものであろうか。……？。また、赤松林の日当りのよい、土の露出している所には、クロオオアリが急ぎ足で食べものを探していた。幼い頃、このクロオオアリの尻（けつ）を嘗めると、すっぱく、舌をピリッとさせ、自分の体がしゃんとなった記憶がある。きっと蟻酸にはそんな成分が含まれているのであろう。クロヤマアリが赤松の木に、カラマツの木に、道にと一条の列をなして、せっせっと仕事をしていた。腐ったかぶつを崩すと、アリ社会にパニックが起こり、しばらく見ていると、アリ社会の大移動が始まり、アリ達が巨大なものの支配により、一糸乱れず、新天地の建国を始める。きっと人間の国の誕生もこんな様なものであろう。しかし、なにか夏の暑さと相俟ってか、憂鬱な思いにかられる。日射しの強い晴れた日には、より昆虫達の活動が活発になり、クヌギの酒場にカクテルを飲みに、多くの昆虫達が集まってくる。ハチ類では、顎の非常に発達した、悪役の面構えの黄色と黒色の虎模様のオオスズメバチ、オオスズメバチよりやや小ぶりのモン

Night "KUNUGI" BAR

スズメバチ、全体に黄色味の強い、キイロスズメバチ。これらスズメバチの仲間どうしでも、他の種が来ると追い払う。その間隙をくぐって、小型で黒味のかかったクロスズメバチ（ジバチ）が肉のオードブルを食べにやってくる。ハエ類では、キンバエ、ニクバエ、ショジョウバエがやってき、スズメバチに蹴散らされる。チョウ類では、ルリタテハ、ヒオドシチョウ、エルタテハ、コムラサキ、オオムラサキ、スミナガシ、クロヒカゲチョウがやってくる。コムラサキの雄は光線によって鱗粉が紫色に輝き、第５・７号古墳の周りを飛んでいた。近くに食草のヤナギが群生しているため、雌を待っているのであろうか。75円切手にも印刷されている、国蝶のオオムラサキは、クヌギの木の高い所に座を占め、鱗粉が紺瑠璃色に輝く雄は、なわばり意識が強く、侵入してきた昆虫類を不機嫌の時は激しい羽音を立てて追飛する。雌は腹が大人の小指程にふっくらと肥り、雄よりも一回り大きく、黒ずんだ色で７月中旬頃クヌギの酒場に姿を見せ始める。スミナガシも飛行が速く、なわばり領域内に侵入する昆虫類を矢のように追飛し、再び元の木に戻る。俺は蠟色のマントに裾に「Ｖ」字マークを横列に並べ、猩々緋の口吻を有するこの蝶を、蝶界のドラキュラの様に思えてならない。タテハチョウ科のヒヨドミチョウ・コムラサキ・オオムラサキは、鎌倉時代の戦記絵巻に出てくる大鎧の色彩に似ている。この他、ハネカクシ科のシラオビシデムシモドキ、コガネムシ科のアオカナブン、ムラサキツヤハナムグリ、カブトムシがやってくる。アオカナブンは翠玉色の金属光沢を持ち、数匹集まり、羽音をブーン・ブーン・ブルル・ブーと羽音を響かせて、クヌギの酒場を飛び交っていた。暗赤紫色の光沢を持った、ムラサキツヤハナムグリは酒場の濁んだ女の様に、せっせとカクテルを飲んでいた。少年の頃、弁慶と言って、滅多に捕れなかったカブトムシが、クヌギの木のベッドに休んでいた。雌のヘップリカブトは黄金色に輝く、趣味の悪い毛皮を着こみ、まだクヌギの酒場でくだをまいていた。吻の長いオオゾウムシは長いストローで、じっとカクテルを飲んでいた。又、少年の頃、夏になると夢中になって集めた、クワガタムシがここでは何種類も捕れた。雄を義経と呼び、体の表面に黄金の毛が生え、大顎がよく発達し、頭上に耳の様な突起があるミヤマクワガタ（ミミッカブト）。雄を頼朝と呼び、体毛がなく、赤銅色で特に大きいものをニセメン、小型で大顎が直線的なものをノコギリクワガタと呼んでいた。いずれも幼虫時の成長によって個体差の生じるノコギリクワガタ。小型で大顎に２つの突起があり、漆黒色のコクワガタ。雌雄の区別が大顎では、はっきりしなく、背にスジの入る２㎝前後の極小型のスジクワガタ、これらのクワガタ類の雌は雄よりも皆小型で、大顎が小さく、控え目である。なにかクワガタムシを思う時、戦国時代の当世具足姿を連想させ、男の良き時代の代表昆虫に思えてくる。夜になると、第６号古墳近くの小さな沢の上を、単独で弱い光を放って舞っていったヘイジボタル。星空のネオンの下でカブトムシ、クワガタムシがクヌギの酒場で、ザワ・ザワ、ガサ・ガサと日の昇るまで酒宴を繰りひろげる。翌朝、クヌギの酒場の下には、胴体、頭、腹を切られて、大顎と、触角が動いている、カブトムシ、クワガタムシの死骸が散らばっていた。どうしてだろうか……。草花では雑木林の周縁、日当りのよい土手に、幼い頃、ホタルを入れ、ホタルの提灯といって遊んだヤマホタルブクロの花が下を向いて咲いていた。

７月中旬になると、原野にはノアザミ、ヤブカンゾウ、北アメリカからの帰化植物のオオマツヨイグサ、ヒメジオンが咲いており、半日陰の所には、幼い頃、花を摘んで、しぼり、紺色の水を作って遊んだツユクサが、朝露を葉に受け、水玉をつくり、反射している姿を見ると、清涼剤を飲んだような気分になる。道端にはキイチゴの実が小さな核果を球形に集め、橙黄色に熟しており、桑の実と同じように、幼い頃、山に遊びに行った帰りには、よく採って空腹を補った、山の甘ずっぱいおやつ。又、赤色化のまだ始まらないアカネの仲間のミヤマアカネ(オチャガラトンボ)、ナツアカネ（タダトンボ)、ノミメトンボ（クルマトンボ)、ヒメアカネ等が現れる。複眼を翠玉色に輝かせ、体色は黒地に黄紋のはいる、日本最大のトンボ、オニヤンマが羽音をたてて、回施飛行を行っている。オニヤンマを見ていると、飛行するために、全てのむだを省いたスマートさ、古来から後退しない勝軍虫として武士



に好まれたこと、それ以前、古事記にトンボの飛びかう島と記載されていること、銅鐸にもトンボの図案が出ており、今日でも益虫として、慣れ親しんでいるトンボを、幼い時、俺はどのくらい遊び相手として殺したことか……。

7月下旬に入ると、秋の七草が、ちらほら咲き始める。クズが草木を覆い、甘い香を放ち、赤紫色の花をつけ、ワレモコウが暗赤色の独得の花をつけ、カワラナデシコが頼りのない桃色の花をつけ、ススキ(カヤ・オバナ)の茎がスク・スクと天に向かって伸び、横穂(つるぼみ)色の穂が、やがて銀白色になる日を待っている。ヤマハギの小さな赤紫色の花がポツポツと咲き始める。雑木林の半日陰の所ではオオバキボシの花が咲き、日当りの良い所には、「山でうまいはオケラにトトキ」と言い伝えられた、ツリガネニンジンの花が小さな薄青紫色で輪になり、一段目、二段目、三段目と咲いていた。寒暖計が急上昇する頃になると、アブラゼミがジィー・ジィー・ジィー・ジィーと鳴き、ミンミンゼミがミーンー・ミン・ミーンー・ミンと繰り返し鳴き続け、暑さを増々かきたてるようだ。

こんな7月下旬、長峯古墳群調査は終わった。これら上述してきたとおり、本遺跡周辺は自然の環境の恵まれた地であり、八月・九月……と一年を通じ、四季折々の営みの繰り広げられる所であろう。近年増々、都市計画、土地改良、住宅団地造成、関越自動車道路などの事業が時代の要求によって、工業化日本の名のもと、クローズアップされ、それにともない、開発事業が盛んに繰り広げられる反面、私達の先人の残した文化遺産だけでなく、自然環境も破壊されていく中で、もう一度、人間も自然界に生きる一生物であることを再認識し、地球上に間借りしている、利口な動物としてでなく、賢い動物になりたいものである。

――――――――――土に埋もれた木鐸――――――――――

参考文献

川副昭人・若林守男　「原色日本蝶類図鑑」保育社
小林桂助　「原色日本鳥類図鑑」保育社
日本甲虫学編　「原色日本昆虫図鑑」(上) 保育社
竹内吉蔵　「原色日本昆虫図鑑」(下) 保育社
北村四郎他　「原色日本植物図鑑」(上・中・下) 保育社
北村四郎他　「原色日本植物図鑑・木本編」Ⅰ・Ⅱ保育社
岡本省吾　「原色日本樹木図鑑」保育社
奥原弘人・田中豊雄
「長野県野草図鑑（上・下）信濃毎日新聞社
信州昆虫学会・行田哲夫・堀勝彦
「長野県昆虫図鑑」(上・下) 信濃毎日新聞社
奥原弘人・田中豊雄
「長野県樹木図鑑」信濃毎日新聞社
信州魚貝類研究会・行田哲夫
「長野県魚貝図鑑」信濃毎日新聞社
信州鳥類生態研究グループ・行田哲夫
「長野県鳥類図鑑」信濃毎日新聞社

(本学会員)

弥生土器編年の確立にむけて　(その1)

――佐久地方の吉田式土器の認識――

小山岳夫

ここ、10年来、佐久地方における発掘調査は過激の度を益々加えている。開発の渦に巻き込まれ、消えていった遺跡も数知れない。弥生時代の住居跡だけとってもその数は480余軒にのぼる。これら、失われていった遺跡に対するせめてもの代償は、より正確で且つ迅速な記録報告を積み重ね、正しい歴史認識を行うこと、さらにこれらを現代の教訓として活用することにあると思う。今まで佐久地方で調査に携わってきた私達はこの代償にどれだけの責任が果たせたのか…甚だ自信が持てない。今までの怠慢に対する反省の意味を込めて研究を基礎からやり直さねばならない。そこで、私は汎日本的視野でみても一際、異彩を放つ弥生時代の解明を前提とした、土器編年から手をつけることにした。中期後半については、昨年来からの一連の研究によって一応の目安がついているため、今回からは後期の吉田式土器について考えることにしたい。尚、ここでは紙面の都合上、研究史をふまえた吉田式土器の概念規定についてのみ述べる事にする。

吉田式土器の研究小史

昭和45年（1970）長野市吉田高校グラウンド遺跡出土土器を発表した笹沢浩氏は、これらの土器群を吉田式と型式設定した。設定時における吉田式は「中期弥生式土器を一部で止揚し、ある面ではその伝統を継承しながらも、新しい後期弥生土器――箱清水式へと展開を始めている土器群」として善光寺平における箱清水Ⅰ式に先行する後期初頭として時間的位置付けがなされた。また、地域的な広がりについては検討課題とされた。翌昭和46年（1971）桐原健氏は同じ資料に対して、壺が栗林Ⅱ式、百瀬式、恒川Ⅰ式に類似するとして中期後半の土器として位置付けた。これに対して昭和52年（1977）笹沢氏は石器を持たないこと、箱清水式的要素が強い事を掲げ、再度吉田式が後期の土器であることを強調した。その後、発掘調査の増加に伴い、飯山・中野・佐久など千曲川水系の全域にわたっ

て吉田式の要素をもつ土器が分布することが、明らかとなり、昭和61年（1986）これをまとめた笹沢氏は吉田式の中にも型式上のバラエティーがあることを予測された。さらに飯山市田草川尻遺跡１・２号住居跡、佐久市周防畑Ｂ遺跡周溝墓出土土器などを、「吉田式から箱清水土器への過渡的内容をもつものであり、吉田式に後続する一型式として存在する可能性がある。」として吉田式にも相当な時間幅があることを示唆した。

吉田式土器の概念規定

以上、桐原氏から反論のない研究史上からみて、また、中期後半栗林式土器組成中にはみられない鋸歯文をもつ壺、口縁部が長く伸びるカメの存在、栗林式土器の基本であった細頸壺の消失など栗林式土器からの基本的な変容がみられることから吉田式は後期弥生土器として位置付けるのが妥当であろう。また、吉田式は当初は後期初頭の点的な型式として位置付けられたが、近年の趨勢では地域的広がりの大きい後期前半という大きな時間幅をもった型式として理解するのが適当と考える。

佐久地方における吉田式土器の流れ（予報）

佐久地方で吉田式と報告されている資料を出土した遺跡には、佐久市西一里塚遺跡(臼田　1980)、一本柳遺跡（臼田　1980)、周防畑Ｂ遺跡（林　1980)、上の台遺跡（林　1982)、西裏・竹田峯遺跡（高村他1980)、琵琶坂遺跡（林　1986)、北西の久保遺跡（小山　1987)、野馬窪遺跡、樋村遺跡、軽井沢町県遺跡(渡辺・森嶋他　1979)、臼田町井上遺跡（三石延・林1975)、佐久町宮の本遺跡（林　1979）などがある。以下にこれらの資料の簡単な分析を加えて、佐久地方における吉田式の流れ（古・中・新相の三段階を仮定する）を予測してみよう。尚、周防畑Ｂ遺跡周溝墓出土資料については、吉田式、箱清水式のいずれに含めるか、あるいは両型式の間隙を埋める一型式として独立させるかで意見の分かれるところである（後期弥生土器の変遷過程がつかめれば大した問題でないと思うが…）が、壺の頸部文様に矢羽状のヘラ描文が多用されること（箱清水式では基本的にヘラ描文は使用されない。)、甕の形態がバラエティーに富むこと（箱清水式では弓状に外反する甕にほぼ統一されると思う。)、などの諸要素から、ここでは吉田式の範ちゅうに含めることにする。また、軽井沢町県遺跡出土資料については北西の久保報告でも述べたように弥生終末～古墳初頭の土器と考えられ、吉田式からは除外する。

まず、古相には樋村遺跡の資料が該当すると考えられる。未報告・未実測資料のため、詳細を明らかにできないが、松本市百瀬竪穴など中期後半でも終末に近い段階にみられる太頸で口縁部が内弯して大きく開く壺や、受口口縁の甕、また、より中期的な口縁部が短く未発達な甕（口縁部は無文）など中期的な土器要素を強く残す反面中期特有の細頸壺が消滅し、中期ではみられないヘラ描鋸歯文や、櫛描文を壺に多用する傾向が顕著となり、口縁部も長く発達した甕や大型の高坏も増加する段階である。図化されているものでは標式資料の長野市吉田高校グラウンド遺跡出土土器が好例である。

中相は西一里塚、一本柳、西裏・竹田峯、北西の久保、野馬窪遺跡出土資料が該当する。壺は古相よりも赤色塗彩の傾向が顕在化し、形態は無花果形の胴部に大きく朝顔状に開く口縁部をもつものにほぼ定型化される。頸部文様はＴ字文Ｂ、櫛描波状文・簾状文、箆描鋸歯文などバラエティーに富み、Ｔ字文Ｃも出現する。甕は口縁部が長く発達して弓状に外反するものと、口縁部が直立気味で胴部が大きくふくらむものの２形態にほぼ限られ、受口口縁の甕は消滅する。また、高坏は古相より大型のものが多用され、主体となる。以上、中相は中期的色彩がほぼ払拭された段階と理解される。

新相は周防畑Ｂ遺跡出土資料が該当する。壺は無花果形の胴部をもつものとともに、胴下半で稜をもち、くびれる形態が出現し、増加する。箱清水式特有の壺形態の発生とも言えよう。赤色塗彩は中相よりも更に発達し、定着した感が強い。頸部文様は櫛描文よりも矢羽状の箆描文が多用されるのも新相の特徴と言えよう。甕・高坏は中相と大きな変化がないが、口縁部が直立し、胴部が大きくふくらむ古い要素をもつ形態が中相よりも多いことが気にかかる。今後の検討課題と言える。以上、新相は壺の頸部文様・甕の形態のバラエティーなどは吉田式の諸要素に当てはまるものの、壺の形態からみて箱清水式への傾斜が著しい段階と理解される。また、単一出土のため明確さを欠くが、宮の本遺跡出土資料もこの段階に該当するかもしれない。

以上、吉田式に三段階の流れがあることを予想した。今回は具体的な資料呈示をせず、また、個々の資料も分析不足で誤りや、わかりずらい点も多いと思うが、今後私の場合は基本的にはここで述べたような認識に立って佐久地方の吉田式土器の詳細な器種・器形の消長・変化を追及していく所存である。次号では箱清水式について述べたいと思う。

引用参考文献

笹沢　浩　1970　「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』22—11

桐原　健　1971　「北信濃の後期弥生土器」『一志茂樹博士喜寿記念論集』

笹沢　浩　1977　「弥生土器—中部・中部高地３」『考古学ジャーナル』134

笹沢　浩　1986　「箱清水式土器の文化圏と小地域」

『歴史手帖』14』—2
臼田武正　1980　「佐久地方の後期弥生土器について」『信濃』32—4
林　幸彦　1982　「周防畑B遺跡」『長野県史』考古資料編・主要遺跡（東北信）
林　幸彦　1982　『上の台遺跡』佐久市教育委員会
高村博文他　1986　『西裏・竹田峯遺跡』佐久埋蔵文化財調査センター
林　幸彦　1986　『琵琶坂遺跡』佐久市教育委員会
小山岳夫　1987　『北西の久保遺跡』佐久埋蔵文化財調査センター
渡辺重義・森嶋　稔他　1979　「北佐久郡軽井沢町県遺跡の調査」『長野県考古学会誌』34
三石延雄・林　幸彦　19　『井上遺跡』臼田町教育委員会
林　幸彦　1979　『宮の本』　佐久町教育委員会

（本学会員
佐久埋蔵文化財調査センター）

—— 昭和61年度例会研究発表より ——

弥生時代の墓制

高村博文

弥生時代の埋葬は、その施設や形態によっていくつかに分類することができる。墳墓の形態から、甕棺墓、土壙墓、箱式石棺墓、支石墓、配石墓、木棺墓、方形周溝墓などが知られており、それらの埋葬形式と分布について『日本の考古学III—弥生時代—』を参考に要約してみたい。

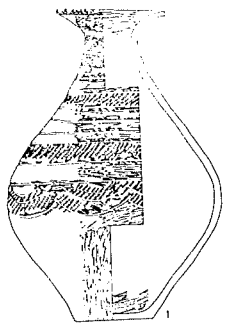
甕棺墓は死者をほうむる棺として、甕・壺・鉢を利用したもので、まれに高坏を蓋として利用している。普通甕を利用したものが多く、この名でよばれている。出現時期は縄文時代前期から発見され各時期に見られるが、合口式のものは晩期に出現する。弥生時代の甕棺は北九州を中心として弥生文化の波及した地域全域に発見されている。

箱式石棺墓は、四枚以上の石材で四周をかこみ、蓋でおおったもので、なかに直接遺骸をほうむった。その分布は福岡県を中心に山口・長崎・熊本・佐賀に見られ、副葬品の発見される例も少なくない。

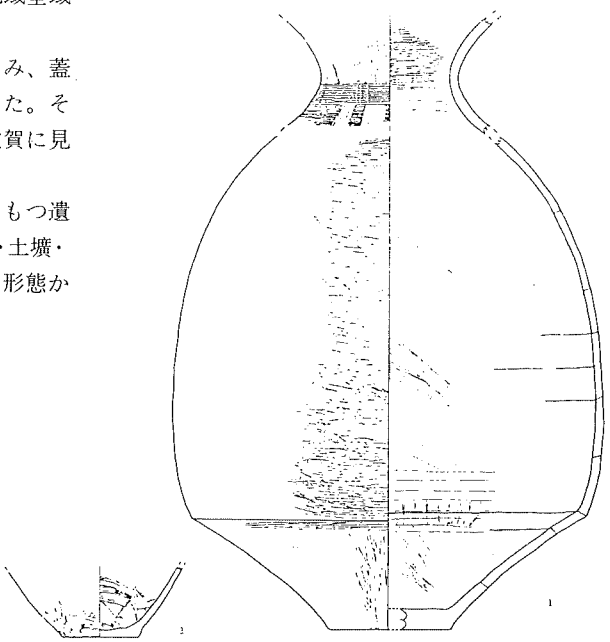
支石墓は、上石と数個の石塊よりなる支石をもつ遺構を上部施設とし、内部主体は甕棺・箱式石棺・土壙・石囲みをもつものである。支石墓は上部施設の形態から南朝鮮支石墓との関連が問題とされ、その影響のもとに成立した墓制である。

木棺墓には、組合せ式箱形木棺、刳抜き式木棺、転用木棺などがあり、おもに西日本に多く検出されている。しかし、最近の調査により、長野市篠ノ井塩崎遺跡群伊勢宮遺跡からは土壙墓及び木棺墓が30基発見されており、木棺内には人骨が残り、あおむけで足をまげたり、立て膝の状態で納められたようである。

方形周溝墓は、弥生時代に発生した墓制で、近畿地方から各地に伝わったもので、溝に囲まれた内側に墓



北西の久保遺跡第115号住居址壺棺



第2図竹田崖遺跡第2号特殊遺構壺棺

穴を作り遺体を納めてある。佐久地方においても検出例は増加している。後期前半と思われるものに四隅に陸橋部を有する方形周溝墓が北西の久保遺跡より１基、後期中葉頃として周防畑Ｂ遺跡より２基確認されている。この周防畑Ｂ遺跡２号円形周溝墓の主体部の土壙は山口明氏によると木棺墓の可能性があるとしている。箱清水式期と考えられるものとして後沢遺跡から３期、さらに箱清水式期末期として久保田遺跡において３期発見されている。古墳時代初頭と思われるものに下小平遺跡で４基検出されており、今後も増加するものと思われる。

佐久地方で発見された方形周溝墓以外の墓址としては、土壙墓群として（人骨の出土がないため土坑を土壙墓とすることについての確証はないものの）周防畑Ｂ遺跡、北西の久保遺跡などが知られている。

壺（甕）棺墓としては、周防畑Ｂ遺跡のＤ26号土壙から後期吉田期の赤色塗彩壺と甕のセットのものとＤ27号土壙から同一時期と思われる壺と甕のセットの壺（甕）棺墓が検出されており、この土壙からはガラス小玉が出土している。また、戸坂遺跡の大きな溝内から後期箱清水式期の甕と高坏のセットとなる甕棺墓が発見されている。竹田峯遺跡第２号特殊遺構から箱清水式期と思われる無彩の大型の壺棺（第２図）が検出され、胎児骨と管玉２点、ガラス小玉２点が共伴しており、人骨が伴出した壺（甕）棺は県内でも初めてのことである。北西の久保遺跡南部台地上の調査において、第115号住居址からは屋内埋葬用の墓坑が発見され、その中に壺棺（第１図）が検出されている。他に特殊な例として銅釧の出土で有名な上直路遺跡があり、人骨に共献された土器と、住居址内から出土した土器に時間差がないとすれば、住居址内埋葬の可能性があるものと思われる。

（本学会員
佐久埋蔵文化財調査センター）

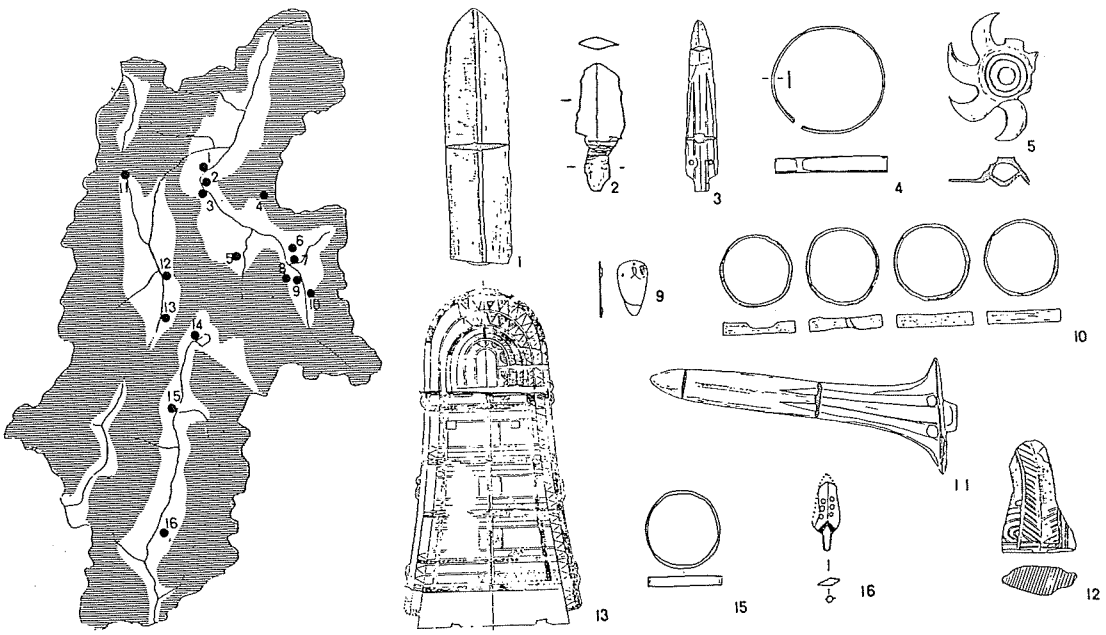
―― 昭和61年度例会研究発表より ――

弥生時代の金属器　（青銅器を中心に）

臼田武正

弥生文化の特質の一つを語るものに金属器がある。日本の場合、鉄器は主に実用性の高い農具・工具・武器などに用いられ、青銅器は祭器や装身具として用いられることが多かった。鉄器については、佐久も含め県内の出土例を十分は握し得なかったため、発表の機会を改めてもちたいが、ここでは、従来から先学によって注目されてきた青銅器を中心にその一面に触れてみたい。

青銅器には輸入品と国産品の二種類あり、前者は、中国系のものに内行花文鏡などの漢式鏡や貨泉、朝鮮系のものに多鈕細文鏡・細形銅剣・銅矛・銅戈・小銅鐸などがある。後者は、弥生文化独自のもので、銅鐸・



県内出土主要金属器（青銅器を中心に）　1・3・5・9～12・15（1：6）　2（1：2）　4（1：4）　13（1：10）　16（1：3）

小形仿製鏡・有鉤銅釧・巴形銅器などである。

県内の出土例をみると、主要なものとしては、1長野市篠ノ井塩崎松節(広形銅剣)、2更埴市下条灰塚(銅鏃)、3戸倉町若宮箭塚（細形銅剣)、4真田町陣の岩（銅釧)、5武石村上ノ平（巴形銅器)、6佐久市上直路（銅釧15点)、7佐久市北西ノ久保（銅釧)、9佐久市社宮司（多鈕細文鏡片)、10臼田町離山（銅釧4点)、11大町地方（広形銅戈)、12松本市宮淵（銅鐸片)、13塩尻市芝宮（銅鐸)、14岡谷市青松海戸（貨泉3点)、15南箕輪村北高根A（銅釧)、16喬木村帰牛原（銅鏃）の9種34点が知られている。8は佐久市後沢出土の板状鉄斧で、鉄器の参考例である。県内出土青銅器のほとんどは祭器や装飾品であり、中国・朝鮮系と国産品が混在し、日本における青銅器の分布の東限の様相を如実に示している。

ところで、佐久市上直路遺跡の銅釧15点（後期の住居址内で火熱を受けた人骨の両腕に装着されたもの）は、分析の結果、鋳造による朝鮮系のものであることが判明している。青銅器の制作技術をみると、弥生時代ではまず鋳造技術が伝来発達し、鍛造技術は古墳時代以降とされている。これに対して鉄器は鍛造が弥生時代に始まり、鋳造は奈良・平安時代に盛んになるようである。

県内の青銅器の出土例を一べつしてみたが、現時点では、その種類や数量、製作技術等から弥生社会の文化的政治的な問題を深めることは、糸口はあるかも知れないが、極めて困難な状況であることを認識した。今後、各遺跡から出土した金属器にどういう性格づけを行ったらよいか、そのための方法論的な視点を探ってみることとしたい。

引用参考文献

八幡一郎「南佐久郡の考古学的調査」1928
大場磐雄・原嘉藤「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」（信濃III・13—4）1961
永峯光一「鏡片の再加工と考えられる白銅板について」（信濃III・18—4）1966
桐原　健「信濃国出土青銅器の性格について」（信濃III・18—4）1966

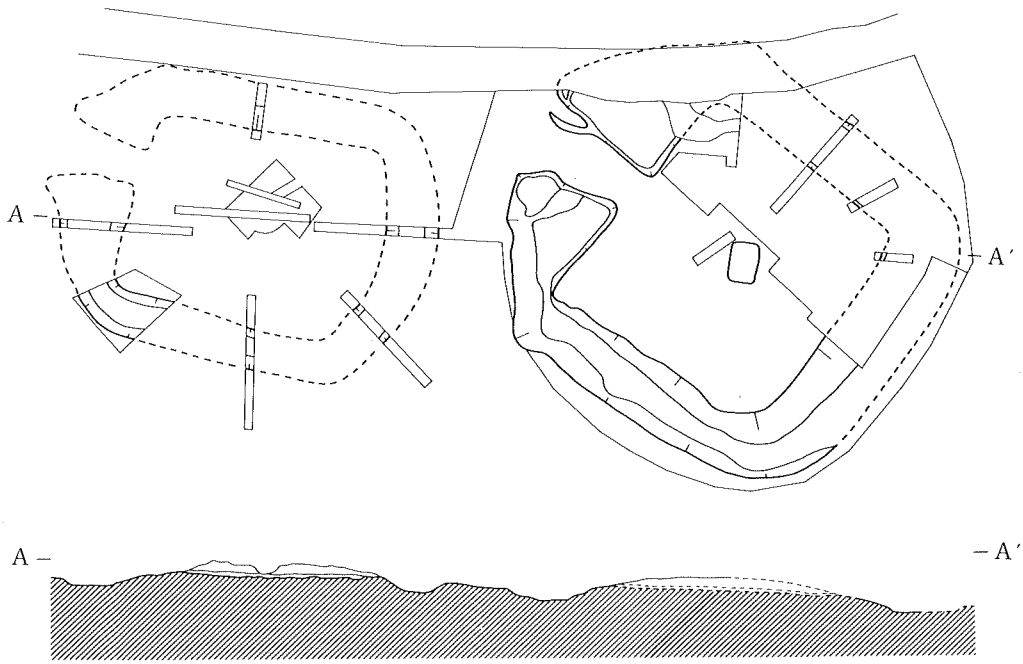
（本学会員
(財)長野県埋蔵文化財センター）

—— 昭和61年度例会研究発表より ——

瀧峯（たきのみね）古墳群について

三石宗一

瀧峯古墳群は、佐久市根岸地籍に所在し、付近の地形は、蓼科山から佐久平に向けて放射状に山麓部が延



第1図　瀧峯1・2号墳墳丘実測図

びており、その一つが平井の集落に突出するような尾根地形となっている。瀧峯1～4号墳は、この尾根が緩やかに傾斜する標高800m内外の平垣部に群在しており、眼下を流れる宮川との比高差は約150mを測る。さらに1～4号墳から北東約300mの尾根の先端部には、瀧峯5号墳が存在しており、標高約764m、1～4号墳との比高差は約36mを測る。現在は雑木林に覆われており、見通しは不十分であるが、本来なら眼下の岸野地区はもちろん、北方に広がる佐久平を一望でき、また遠くは浅間山を望める絶好の場所である。

瀧峯1号墳からは、昭和50年に炭焼き作業の際に鉄剣が出土し、佐久地方において初見の前方後円墳ではないかと注目されたことがある。その後地形測量が行われ、前方後円墳でないことは明らかとなったが、佐久地方最古の古墳の一つであろうと位置付けられた。ここでは、比較的良好な資料を得ることのできた2号墳を紹介しておきたい。

平面形態は前方後方形を呈しており、主丘部西辺部に撥形にのびる前方部状の突出部を有し、周溝は突出部前端のみを残して全周している。

墳丘の規模は、全長18.3m、主丘部の長さ12.6m、幅13m、高さ1.3m、括れ部からの高さ0.6mを測り、突出部は長さ5.7m、括れ部の幅2.5m、前端部の幅4.5mを計測する。墳丘は旧表土を残したまま地山を削り、方形に整えた後、盛り土を行っている。突出部は地山のローム層を削り出して造り、突出部前端の整形は認められない。

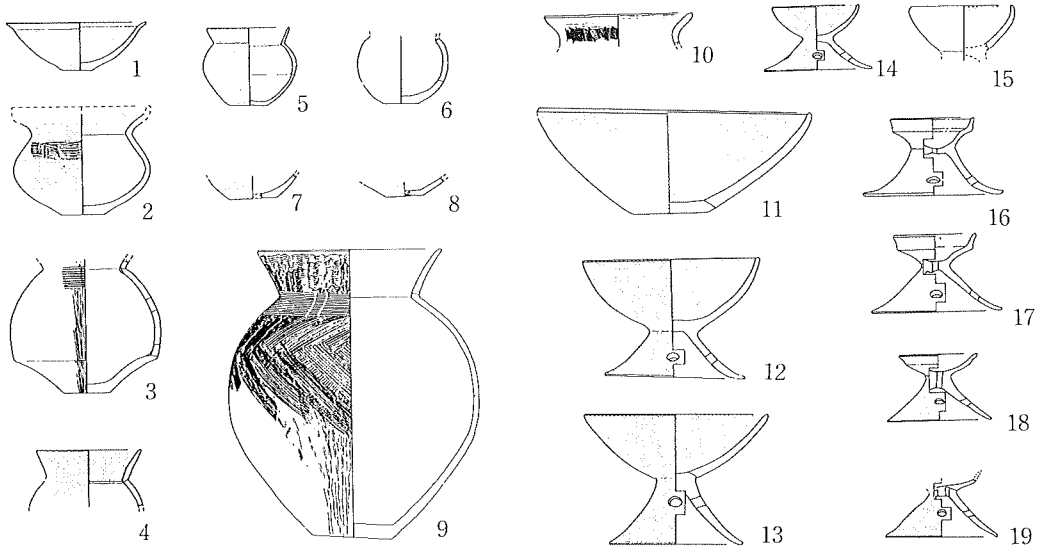
周溝は東側で不明瞭となるものの、突出部前端を除いて全周する。幅は突出部付近で最も広く5.7m、東側で約3mを測り、深さは突出部付近で0.4mと浅く、東

瀧峯2号墳

側で約1mを測る。主丘部の周溝底からの見かけの高さは西側突出部付近で約1m、最も深い東側周溝底から望むと2.2mを計測する。

墓壙は、墳丘中央より北・東へ各々1m寄っている。墓壙の構築は、旧地表面上の盛り土を長方形の土壙状に掘り下げることから開始される。底面はほぼ平坦で、一部旧地表面にまで達している部分がある。次の段階で、地山に含まれる円礫を核にして、地山のロームを土壙の壁面及び底面に貼って墓壙が形成される。墓壙の規模は、南北185cm、東西135cmの長方形を呈すると考えられ、棺は、木棺が想定される。

出土遺物には、壺・小型壺・甕・鉢・高坏・器台・ガラス小玉・人の歯がある。人の歯は墓壙内より出土し、土器のほとんどは周溝内から出土した。図の5・9は南側の周溝より、2・10・　・　は括れ部付近の周溝から、他は東側の周溝内より出土し、ここに最も多くの土器が集中している。これらの土器は、周溝の底面及び底面付近で、逆さにつぶれたり、破片が散乱した状態で出土しており、墳丘上から転落した様相を



第2図　瀧峯1・2号墳出土土器実測図（1：8）

示している。

図示した19個体のうち、1は1号墳より出土したものであり、他は全て2号墳からの出土である。また、19個体のうち、15個体が赤色塗彩されており、鉢・高坏・器台はすべての個体に赤色塗彩が施されている。

これらの土器には二つの様相がみられる。佐久地方在地の弥生時代後期箱清水式期の系譜をひいた土器群と、新たに出現する器種と器形の特徴をもった土器群である。前者は櫛描文・赤色塗彩の多用・壺形土器の胴部下半の稜があげられ、後者は小型精製土器類（小型高坏・小型器台）、壺形土器・小型壺・甕形土器の器形の変化などがあげられる。これらの土器群は、在地の伝統を色濃く残しながらも、外来の影響を受けて新たな次期へと移り変化していく画期の特徴を表しているといえよう。

弥生時代には、方形周溝墓という低い墳丘をもった、区画された墓が存在した。弥生時代の後期から終末期にかけて、伝統的な方形の他に、円形や方形の墳丘に通路を思わせるような突出部をもった前方後円（方）型墳丘墓が出現する。また、方形の墳丘に四隅を突出させた四隅突出型方形墳丘墓も現れる。

弥生時代終末期の墳丘墓は、全長数十mの大規模な墳丘をもつものもみられ、その地域の有力な首長の墓ともいわれている。これらの墳丘墓は、地域ごとに個性的に地域色をもって存在している。

弥生時代の後期は、各地域ごとに異なった土器が使用されていた。ところが、弥生時代の終末になると外来の土器が入って来るようになり、佐久地方でも外来の土器や影響を受けた土器を出土する遺跡が近年の調査によって検出されている。西裏・竹田峯遺跡、下小平遺跡、池畑遺跡、宿上屋敷遺跡などが代表的な遺跡であり、在地の伝統を継続している弥生時代終末の土器群に、非在地系の土器群が流入している。主に東海地方からの影響をうかがうことができる。

このような状況の展開の中で、画一化した内容をもった巨大な墳丘が出現する。墳形は前方後円（方）形を呈し、埋葬施設には長大な割竹形木棺を納める竪穴石室をもつ。若干の相違はあるものの、非常に画一性をもった古墳時代を象徴する前方後円墳が各地で造られるようになる。最古型式の代表例として、奈良県箸墓古墳があげられる。

従来、佐久地方は4～5世紀前半の古墳の空白地帯とされてきた。今回の発見は佐久地方のような前方後円墳、前方後方墳などの定型化した巨大古墳が存在しない地域において弥生からの伝統を継承した在地性の強い首長墓の存在を確認できた点で重要な意義をもつものである。

（本学会員
佐久埋蔵文化財調査センター）

—— 佐久市大字伴野字小金平出土古銭調査中間報告 ——

小金平の備蓄銭

森泉かよ子

佐久市志編さん事業の一つとして、佐久市伴野の小金平地籍から出土した古銭の調査が行われ、昭和62年4月～9月にかけて延べ9日、1日平均10名程の人員をもって、枚数と銭種がわかった段階である。現在、古銭は同平井部落の山浦和雄さんが所蔵しており、その土蔵の庇をお借りして、編さん室の大井隆男先生を筆頭に、原始古代班の面々や協力者を得て行ったわけであるが、古銭の膨大な量に一同驚かされ、日頃見慣れぬ古銭の判読に多くの唸り声が聞かれた。ここでは、調査途中ではあるが、御苦労していただいた方々へ、中間報告として、必ずしも確実な資料といえるわけではないが、お知らせすることにする。（個々について再確認すると多少数値等異なることになるであろうと思う。）

総枚数約14,400枚、銭種は60種あった。銭種は、唐の開元通宝（初鋳年621年）から朝鮮通宝（初鋳年1423年）まであり、唐銭2種、五代十国4種、北宋28種、南宋17種、遼1種、金2種、元2種、明3種、朝鮮1種である。唐の開元通宝、北宋の天聖元宝、皇宋通宝、熙寧元宝、元豊通宝、元祐通宝、紹聖元宝、聖宋元宝、政和通宝、明の永楽通宝、洪武通宝の11種がことに多く、10,169枚あり、全体の70％を占めている。これらは、大量に流入されたといわれているものであり、小金平の備蓄銭の構成もそれに該当しているようである。

ところで、朝鮮通宝を最後にして寛永通宝等を含んでいないことから、小金平の備蓄銭の年代もほぼ明らかにできる。朝鮮通宝の初鋳年が1423年であることから、室町時代末期までに備蓄されたものといえるであろう。しかし、個々の古銭については、模造銭と思われるものがあり、朝鮮通宝から得られる年代より下るが、江戸時代まで下らないと思われる。そして上限については、この蓄銭の容器であった常滑の甕が14世紀代のものであることからいえるものと思う。備蓄銭の埋蔵された年代の多くが、南北朝期から室町時代に多いという点と一致している。

また、500枚以上の判読不明銭は、いずれも当時悪銭

小金平出土備蓄銭一覧表

銭　種	時代(初鋳年)	楷書	行書	草書	篆書	銭　種	時代(初鋳年)	楷書	行書	草書	篆書	銭　種	時代(初鋳年)	楷書	行書	草書	篆書
1 開元通宝	唐　(621)	993				22至和通宝	北宋(1054)	19			20	43嘉定通宝	南宋(1208)	49			
2 乾元重宝	唐　(759)	55				23嘉祐元宝	〃　(1056)	82			63	44大宋元宝	〃　(1225)	1			
3 光天元宝	王建(918)	1				24嘉祐通宝	〃　(1056)	212			116	45紹定通宝	〃　(1228)	12			
4 乾徳元宝	前蜀(920)	2				25治平元宝	〃　(1064)	122			130	46端平元宝	〃　(1234)	1			
5 唐国通宝	南唐(985)				13	26治平通宝	〃　(1064)	21			17	47嘉熙通宝	〃　(1237)	8			
6 開元通宝	南唐(966)				7	27熙寧元宝	〃　(1068)	608			571	48淳祐元宝	〃　(1241)	15			
7 咸雍通宝	遼　(1065)	1				28元豊通宝	〃　(1078)		839		687	49皇宋元宝	〃　(1253)	18			
8 宋通元宝	北宋(960)	33				29元祐通宝	〃　(1086)		555		548	50開慶通宝	〃　(1259)	2			
9 太平通宝	〃　(976)	97				30紹聖元宝	〃　(1094)		231		288	51景定元宝	〃　(1260)	14			
10淳化元宝	〃　(990)	42	36,39			31元符通宝	〃　(1098)	103			66	52咸淳元宝	〃　(1266)	14			
11至道元宝	〃　(995)	55	67	66		32聖宋元宝	〃　(1101)	241			208	53正隆元宝	金　(1158)	25			
12咸平元宝	〃　(998)	224				33大観通宝	〃　(1107)	162				54大定通宝	〃　(1178)	12			
13景徳元宝	〃　(1004)	264				34政和通宝	〃　(1111)	264	205		223	55至正通宝	元　(1351)	1			
14祥符元宝	〃　(1008)	309				35宣和通宝	〃　(1119)	34	34		30	56至大通宝	〃　(1310)	7			
15祥符通宝	〃　(1008)	195				36建炎通宝	南宋(1127)	1			1	57大中通宝	明　(1361)	12			
16天禧通宝	〃　(1017)	278				37紹興元宝	〃　(1131)	1			1	58洪武通宝	〃　(1368)	791			
17天聖元宝	〃　(1023)	308			254	38淳熙元宝	〃　(1174)	70				59永楽通宝	〃　(1408)	1036			
18明道元宝	〃　(1032)	25			33	39紹熙元宝	〃　(1190)	17				60朝鮮通宝	季朝(1423)	3			
19景祐元宝	〃　(1034)	108			66	40慶元通宝	〃　(1195)	23				判読不明					557
20皇宋通宝	〃　(1039)	703			821	41嘉泰通宝	〃　(1201)	16									
21至和元宝	〃　(1054)	67			59	42開禧通宝	〃　(1201)	9									

とされていたものである。小金平の古銭は渡来銭であるが、これらの中には、日本及び中国で私鋳造されたものや、薄っぺらなもの、いびつにゆがんだもの等いわゆる「悪銭」「ビタ銭」を含んでいる。判読された中にもかなりあると思われるので詳しく調べてみれば、どのくらいの割合でビタ銭が流通していたか貴重な資料が得られるものと思う。

小金平地籍は、昭和56年６月に国道142号線用地として発掘調査されており、無数の掘立柱の柱穴が検出されて古銭も数枚出土している。また、鋳物址であろう鉄滓を含む土坑があった。備蓄銭は発掘用地より南に隣接した地点より出土しており、これらの掘立柱等と関連をもっているものと思われる。

詳細は今後の課題という所であるが、14,400枚という数は、大変であるとともに、大きな成果を残すことと思う。最後まで終了することを願い、同時にこれからも皆様のお力添えをお願い致します。

（本学会員）

埋文と学会に寄せて

浅沼　馨

佐久考古学会は権威と自信に溢れる学術団体として斯界でも有数と承ります。

さしずめ医学界ならば基礎医学と臨床医学とを兼ね備えた鉄桶のような姿でもあります。

しかし漸くここまで荊棘の道を歩み、築かれました先輩諸氏に改めて敬虔な誠を捧げたいと存じます。そしてこれらの人々によって育成され、培われた後輩諸氏が今は良き教師となり、また行政機関や社会の得難い人材となり活躍し、現職と共に兼ねて考古学界の中核となり、先達となり、推進力となって学術の道を保障されようとしておられる姿こそ尊い使徒と思います。

かつて文化財保護実態は、佐久地方いずこも貧弱の域を出ず、実情として中央依存を余儀なくされていたと申し上げ度い。これは心ならずも僅かな調査機能しかもたない市町村としては、むしろ当然と、自他共に考えていた次第。従って大学への依頼を主体としますが大学側としましては、その都合もさることながらアカデミックな見地から希少価値への期待感も否定できず、応諾にも時を要し、それに基づく当方の予算措置、又工事原因による日程などタイムリーを欠き、破壊へ繋った悔恨の事実も否定できませんでした。

現在刮目すべき事実は、公共事業、社会資本の充実等、工事原因によるものが山積していますが、略々即応なし得る態勢づくりの中で文化財パトロールと共に調査機関としての機能を考古学会に求め得る存在こそ千金の重みと申せましょう。独自研究調査が公共をリードして意識と意義を高める姿こそ真骨頂と考えます。

理文の遺構のかずかずに、かつての中央と地方との連鎖と反作用を窮知いたしますならば、現在調査スタッフの若手陣に於きましては、中央と地方の独自分野

に学界主張ができ得る姿に快哉を叫ぶ次第です。

これら若きエネルギーが佐久に発し、市町村文化財行政を充実させ、学術の主張と保障に先駆する姿は特筆すべきであり、又これらの人々が婦人層まで動かし調査に参加の機会を得ておられますことが学界や行政の新たなパワーと展開になっておりますことに改めて敬意とご期待を申し上げ、考古学会が佐久全域に亘り行政協力と独自組織の活用とにより、自ら存在性を主張される活躍こそ佐久のルネッサンスでなくて何でありましょう。

（本学会員）

表採に思う、矢出川の細石刃文化

大井今朝太・堤　　隆

I

地方の貧しい一青年であった相沢忠洋さんが、岩宿の崖でまぎれもない一個の旧石器を発見したとき……矢出川で芹沢長介さんが、凍った土塊に自分の温かい体液を注ぎかけ、半透明なマイクロブレイドコアーがその姿をあらわしたとき……彼らの胸に去来する思いとはどのようなものであったのだろう。

春の雪解けの頃、わたしたちが表面採集へといざなわれるのは、赤土の中に確かに息づいていた我々の祖先の生活の証を見いだしたときのめくるめく快感が忘れらないから……なのかもしれない。

ここに紹介する資料は、大井・堤が野辺山を徘徊したおり、矢出川遺跡においてわたしたちに熱い感激を味わわせてくれた石器のいくつかである。

II

1は黒曜石の細石刃石核である。角柱状の石核の正面および片側面において細石刃剥離がなされている。

打面には入念な打面調整がなされているが、その打面調整は正面に残された細石刃剥離痕を切っており、新たな細石刃剥離のためのものであることも窺える。

最大長2.9cm、最大幅1.5cm、最大厚1.3cm、打面は傾斜打面でおおよそ60°前後に傾いている。

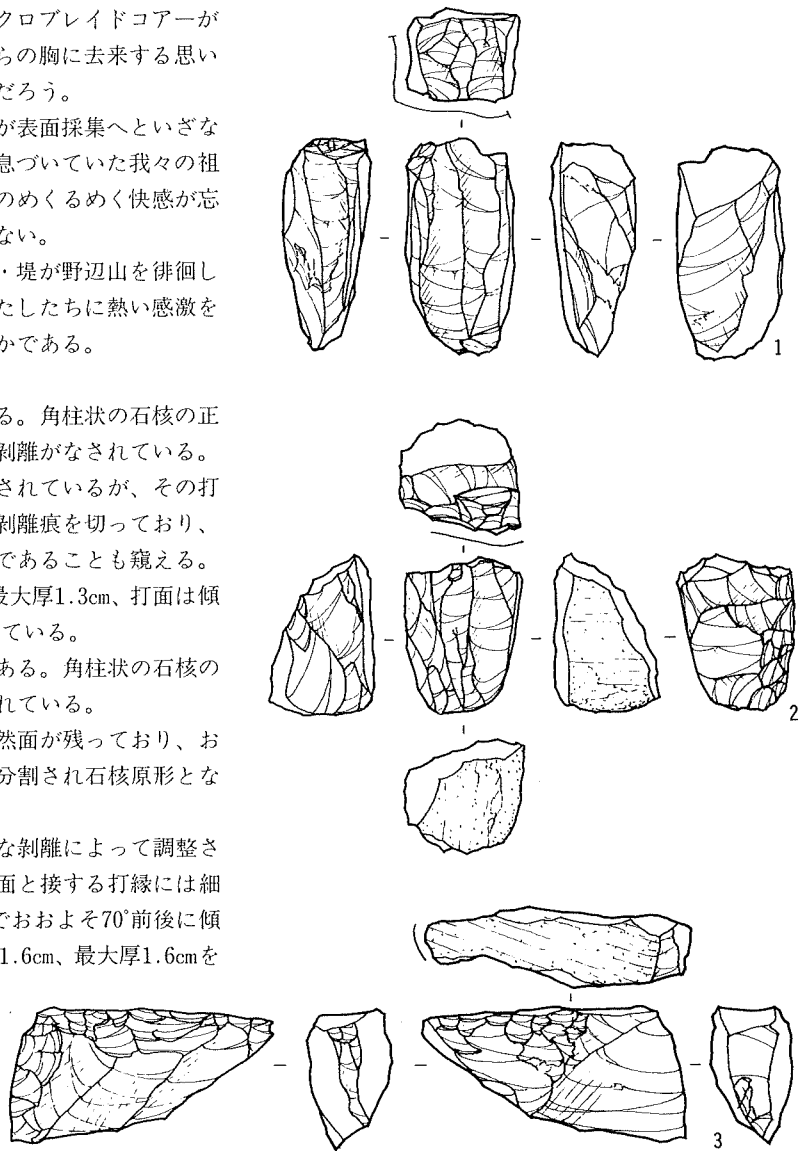
2は、黒曜石の細石刃石核である。角柱状の石核の正面において細石刃剥離がなされている。

石核の側面および底面には自然面が残っており、おそらくはそう大きくない円礫が分割され石核原形となったものとおもわれる。

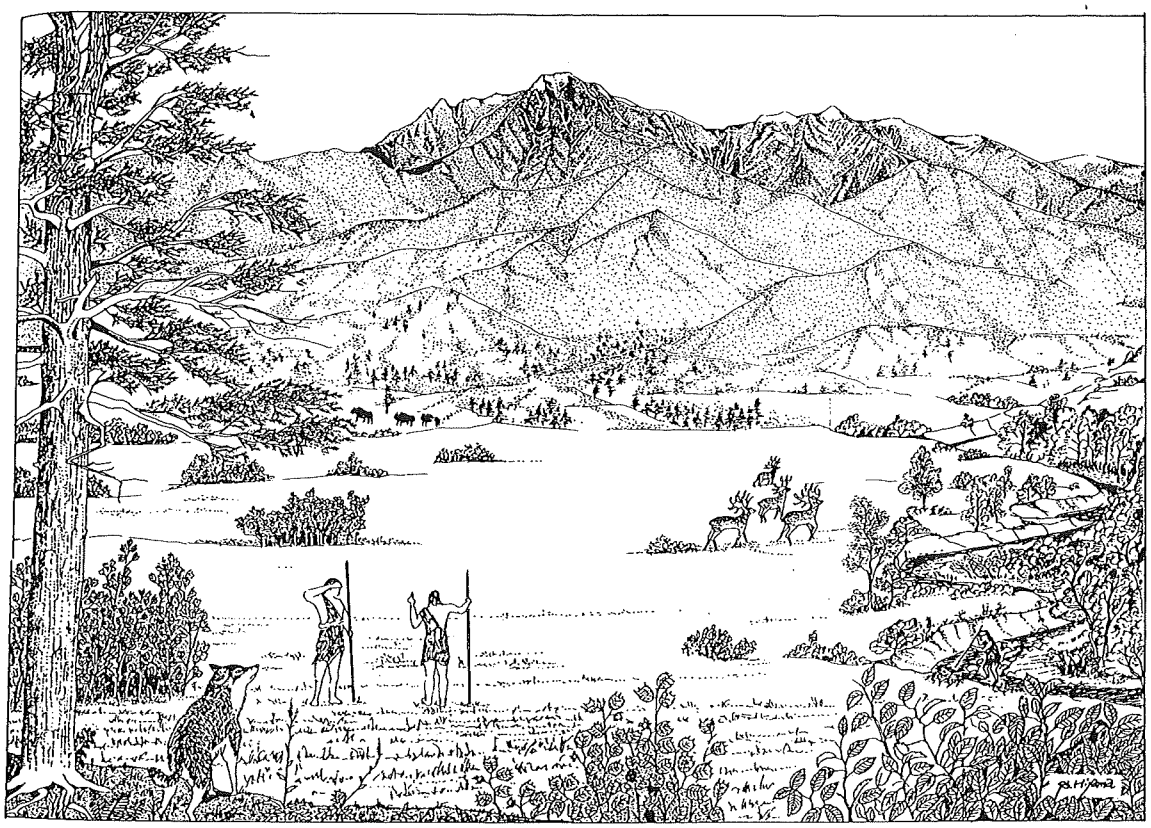
その打面は、側面からの大きな剥離によって調整されており、また細石刃剥離作業面と接する打縁には細部調整が観察される。傾斜打面でおおよそ70°前後に傾いている。最大長2.1cm、最大幅1.6cm、最大厚1.6cmを測る。

3は、黒曜石で、偏平な石核の一端に細長い剥離痕が窺え、一応細石刃石核と考えてみた。ただし、この状態においては、真正な細石刃は剥離されていないものと考えられる。打面は、平坦な自然面打面である。

本石核は、形態的にも、矢出川遺跡一般に認められ



矢出川遺跡の細石刃石核（1：1）



野辺山原　旧石器時代の原風景（晩氷期）（檜山智　1987）

る１・２のような細石刃石核とは異なるものである。最大長1.9cm、最大幅1.2cm、最大厚3.5cmを測る。

III

ここで紹介した１・２の細石刃石核は、矢出川遺跡において最も一般的に認められるものである。また、このような細石刃石核は広く西南日本一帯に分布しており、型式的には「野岳･休場型」（鈴木　1971）の範疇で理解されるものである。

「野岳・休場型」細石刃石核は、例えば湧別技法における両面調整の素材のような一定の石核原形をもたない。また、打面調整・打面再生がなされるのが一般的で、時には打面転移がなされることもあるようである。その打面は、背面側に傾く傾斜打面となっている。

矢出川の細石刃石核の99％以上がこの「野岳・休場型」と理解されるが、残りの僅か１％に満たないなかにそれとは異なる型式のものが見いだせる。

東九州を中心に分布する「船野型」の系譜を引くと考えられる細石刃石核がそれで、本通信No.33号で紹介したものである。（由井・堤　1985）。

IV

さて、この細石刃石核から剝離された細石刃とはどのようなものであったのだろうか。

その細石刃とは、一般に幅広で、両側縁があまり平行に揃わないものであったようである。織笠氏のいわれる細形細石刃と広形細石刃（織笠　1983）のうちの、広形細石刃に含められるものといえる。

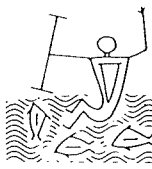
ただし、その細石刃はそのまま用いられたのではなく、いくつか組み合わせられてシャフトに埋め込まれ道具となったものと考えられる。その際、装着に不都合な反りを持つ末端部は切断除去されてしまったものとも考えられる。

もっとも、日本における細石刃のすべてが切断して用いられたとは限るまい。例えば、荒屋型細石刃において想定されるように、完形のままその上部が埋め込まれるということもあったのだろう（綿貫・堤　1987）。

V

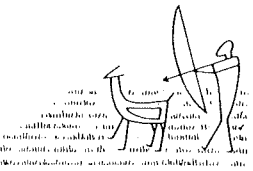
晩氷期（細石刃文化期の頃）における野辺山原の原風景画は、三沢遺跡の報文での檜山智画伯の筆によるものである。ここで考えたような狩猟具をもった細石刃文化人たちが、獲物を求めて野辺山原を駆けめぐっていた姿を想像しておくことにしよう。

（大井　本学会員
堤　　本学会員、御代田町教育委員会）



——身近な話題——

200字短信



高地正雄

佐久平の発掘に参加させていただいて2年になりますが、毎日が古代人との対話であるように感じられます。ガジの先にあたる土器は、自然を恐れ、また自然をこよなく愛した古代人たちの声を私に聞かせてくれます。

現在調査中のこの前田遺跡も、もうすぐ冷たいブルの爪に破壊されてしまう運命にあるかと思うと、やり切れないものがあります。今日の私たちの生活の礎を築いてくれた古代人に感謝し、前田遺跡とお別れします。

井上行雄

思えば、北西の久保遺跡が発見されてから、久しい年月が過ぎさりました。駒沢大学の調査以来、佐久市教育委員会による一次調査、佐久埋蔵文化財調査センターによる二次調査を経て、一部調査報告書の刊行に至ったことは、まことに喜ばしいことです。また、現地では、短大建設も始まったようです。

わしも、五十年引いて「二十ン歳」になりやしたが、まだまだ頑張ってやりてえとおもってやす。

吉沢　靖

川上も野菜出荷の最盛期がようやく過ぎ、どうにかこうにか一服できそうです。また、四月に執筆した三沢遺跡の発掘調査報告書もいよいよ刊行となりました。私が担当したのは縄文の石器についてですが、自分の原稿が活字になり、一冊の本になるということは、大変嬉しいものです。(編集者より・・・吉沢さんには、次号の通信に旧石器の資料紹介をしていただく予定です。みなさん乞うご期待を・・・)

由井茂也

秋も深まり、川上のほうは朝夕がめっきり冷え込んできました。こちらではすでに八月下旬からコタツのお世話になっています。

わたくしごとですが、最近は体調もよく、奈良方面の研修旅行も楽しみにしています。

毎月の例会にもなるべく佐久に下り、勉強させていただきたいと思っています。

本晩は、中秋の明月が、ぽっかりと顔を出しますかどうか・・・・・・。

掛川喜四郎

平石遺跡でマスコミを賑わした敷石住宅が顔をだした時は異様なものを見ている気分でした。それまで掘ったものに比べると深く、立派で美しかったからです。そんな素晴らしい敷石住居址も掘っている時はプランがわからない、石や土器が大量にほおり込んであって移植ゴテの動きが何度となく遮られるなど苦労の連続でした。でも苦労の甲斐あって地主さんの理解で保存することができて本当に良かった。望月町の誇りにしたいと思います。

和久井義雄

考古学会の研修旅行に初めて参加しましたので感想を語りたいと思います。まず、一番印象に残ったのは奈良・明日香村の石舞台古墳でした。佐久では見られない異様な程のスケールの大きさ、迫力には唯々、圧倒されるばかりでした。その他に見学した檀原考古博物館、新沢千塚古墳群なども古代の都「大和」の旅の気分を満喫させるに十分なものでした。来年も私たちの知らないロマンにあふれた旅の企画をお願いします。

白倉盛男

ただ一筋(すじ)に十年

近頃は出版も容易になり専門書の刊行もひっきりなし数えるいとまもない程、学問の専門分化は極度に進み、極める意志さえあれば都鄙の差はない。却って田舎でなければ触れ得ない機会素材も多い事もある。

唯一筋にテーマを絞りあまり間口を広げず自分の研究にかじりつき、寝ても覚めても歩きながらも彼女との話題にもそれにかかわる位にして鞄には常にその本一冊、ポケットにはメモ、枕辺にも一冊のその参考書をと、しつづけて五年たてば身から離れないものとなり、十年続ければその道でその一角(ひとかど)となる。年齢や経験だけでないその道の実力指導者権威は都鄙を問わず、かくして生まれ尊重される。

信州にはかつては多かった先学三沢勝衛、藤森栄一、由井茂也先生方につづく若い学徒の輩出を期待するや切である。田舎のお山大将には決してなるな。

新　刊　紹　介

佐久埋蔵文化財調査センター　昭和62年３月刊

『北西の久保遺跡――南部台地上の調査――』

昭和60年５月より発掘調査が始められた佐久市岩村田の北西の久保遺跡第２次調査の報告書が２年６か月の歳月を経て遂に刊行されました。遺跡の概要は今まで何回も紹介されているので、本書で最も注目される弥生中・後期の土器の分類・編年についてみてみます。

弥生中期後半の土器について　従来、栗林II式として一括総称されてきた土器群にも時間的な流れがあり、古・新の二様相に分けられることが具体的な資料を用いて呈示されている。また、栗林II式→百瀬式とされた従前の編年に対し、百瀬式は栗林II式の新相に併行するとして、千曲川水系（東北信）の型式として定立させることは不適当との見解が示されている。

後期の土器（吉田式）について　20軒の資料をほぼ同一時期と見做して分類し、佐久地方他遺跡出土の吉田式とされる資料と比較検討がなされている。その結果、設定時は後期初頭という時間幅の短い型式とされた吉田式が、現状では後期でも前半にわたる大きな時間幅をもつ型式であるとの認識が示されている。

この他にも弥生の石器、五世紀後半の古墳群など優秀な考察が数多く収められています。なお第１次調査の報告書が未刊であることは残念です。

尚、本書をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。

書名　「北西の久保」―南部台地上の調査―
領布価格　￥5,000円（送料500円）
申込先　〒384-01　長野県佐久市大字原122
佐久埋蔵文化財調査センター
銀行振込　長野相互銀行　佐久支店
普　3906258－015

事務局より

● 10月31日、会員の三石宗一氏と大井和子さんが、本会前事務局長でもある木内捷氏ご夫妻のご媒酌により、めでたくご結婚されました。聞くところによりますと、お二人は？年という長い月日を実らせたのだそうです。

結婚式では、本会由井会長により、宗一さんの和子さんにたいする乗車許可証が発行され、新婚初夜の宗一さんの乗車が許可されました。また、会員はお二人の祝福のために考古学エレジーを斉唱しました（別れの歌詞の部分を除いて）。司会の小山会員が、最後に思わず感涙にむせんでしまったことは、一部で伝説化しています。

● 10月16日午前７時52分、臼田武正会員に待望のお二人目のお子さんが誕生しました。女の子で、名前は、瑛里（えり）ちゃんだそうです。臼田さんの笑顔が浮かんできます。

● 事務局では佐久考古通信の原稿を募集しています。億劫がらずどしどし原稿をお寄せ下さい。また今後通信では、会員相互の身近な話題も積極的に扱ってゆこうと考えています。身近な話題や提言を200字短信としてお寄せ下さい。

▷編集後記◁

通信42・43号合併号をお届けいたします。今回の合併号にあたっては、堤の他、特別編集員として小山が加わり編集にあたりました。本号は、会員諸氏の玉稿により質の高い合併号となったかとおもいます。

また、国学院大学博士課程在学の本橋恵美子さんには、平石遺跡の調査と相俟って、まさにタイムリーな敷石住居の玉稿をいただき感謝いたします。

季節はまさに冬、日本酒がひとしお恋しい時期でもあります。しかし、会員諸氏におかれましては、赤ちょうちんにグッと引き付けられるのを堪え、通信に原稿をご執筆ください。　（堤・小山）

佐久考古通信 No.42・43合併号

発行所　佐久考古学会（転局）
南佐久郡小海町東馬流５０４７
井出正義方
☎（0267）92－3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤
羽毛田・小山

印刷所　ほおずき書籍（株）

佐久考古通信

佐久考古通信　No.44号
1988．1．28
佐久考古学会

目　　次

新年のあいさつ……由井茂也……1
石の故郷へ　――寄稿――……織笠　昭……2
川上村立石採集の有舌尖頭器……吉沢　靖……4
ゴーランドと信濃と古墳……花岡　弘……5
田野口地区の台地と古墳……黒岩忠男……7
長野県佐久地方の土偶……宮下健司……9
弥生土器編年の確立にむけて（その２）――昭和62年度例会研究発表より――……小山岳夫……11
新人類・旧人類の考古学徒……堤　　隆……13
200字短信　――身近な話題――……各会員……14
事務局より……事務局……14

新年のあいさつ

会長　由井茂也

新年おめでとうございます。

年々歳々繰返すことながら、何となく一年を短く感じるようになりました。勿論これは私の年齢から来る感覚によるものですが、改めて時の大切さを感じます。

佐久考古学会もまたひとつ新しい歴史を積み重ねて行くわけですが、目まぐるしい社会環境の変化の中で地域に於ける考古学会会員の活動も多岐多様に渡らざるを得なくなっています。それを端的に感じさせられたのは、毎日の例会と年一回の研修旅行に於てであります。

佐久考古通信の発行と毎月の例会、年一回の研修旅行、これは会の主要な事業であり、年々、量質ともに充実した内容となり、誇り得るものとなっています。

それにもかかわらず、何かひとつ物足りなさを感ずる所があります。地域の活動の場が広まり、深まってきて、地域活動を重視する傾向は結構なのですが、そのために全体のコミュニケーションが省みられなくなると大変です。佐久考古学会発足当時のように、佐久や臼田や川上に佐久考古学会の旗を立て、各地から寄り合っていつも一緒に研究する様なことは遠い昔の郷愁であるのでしょうか。けれどもせめて地域の重要な研究や発見の場合位は会員相互で知らせ会う位のコミュニケーションはあっても悪くないだろうと思います。

そんなことを考えながら新年にあたり、例会・佐久考古通信・研修旅行などを通じ、会員皆さんの御健闘を祈ります。

佐久平上空より浅間山を望む

―― 寄　稿 ――

石の故郷（ふるさと）へ

織笠　昭

昔

山々の連なるところに　神々は住んでいた

天と地の間に　澄みきった世界が広がって

悪戯好きの神様が　飛び跳ねて……

はずみで落ちたひとしずく

しずくにしずくが重なって　　$T=cL^2$

あれから何万年たったことか。月光に照らされた黒い輝きが層理をなし、山をなす。それを、いま人は黒曜石と呼ぶ。

狩猟で暮らしたわれらが先祖も、その輝きに心魅せられ、手にとって見入る。彼らが黒い瞳をもっていたのなら、格別の気持ちをこめ、飽くことなく見つめつづけていただろう。彼の瞳に映える黒い輝きは、傍に佇む彼女の心に優しい灯をともしただろうか。

けれども黒曜石が自ら輝くことはけっしてない。光は光発するところあってこそ、光となる。月の光は太陽の賜物。黒曜石の輝きもまたそのような光の反映。そうして世界のすべては自然の賜物であることに思いが至る。

人が人になるために、そんな自然の産物に、人工という名の人の手が加わった。そのようにしてできたものが石器である。石器をみて、ぼくたちはいま何を想い、何をしようとするのだろうか。

※　　※　　※

いわゆる石器研究者は、しばしば微に入り細を穿った観察をし、分類を続ける。それは何のためなのだろうか。真にわかりやすく、よりよい石器研究をすすめるために、土器研究のあり方と比較し考えてみよう。

土器研究の中心は、やはり土器型式論である。土器型式は時間の目盛を形作るとともに、地域相互の諸関係を解きほぐすための手がかりともなっている。その背景としての人間の動きを論ずる材料でもある。土器型式の分布と「文化」内容の分布にズレの確認されることもある。だが、それは矛盾と言うよりも、より高次の分布論を構築するための前提とすべきものである。

そうした土器型式研究のもつもっとも大きな意義とは何だろうか。それは一定の訓練を経て勉強を続ければ、より多くの人がある一定水準までは十分に研究に参加できるということである。この点は、たとえば縄文時代研究における型式研究の片寄りとして批判されることも少なくないが、実はここにこそ、土器型式研究のもっとも偉大な点が秘められている。

より多くの人がさほどの資金をかけることなく、根気と努力を維持させることによって参加しうる研究は、根強く裾野が広い。より多くの人が参加できるということは、より多くの人々とのコミュニケーションを可能とする。その結果、編年研究にとどまらぬ多彩な発想の機会をもたらすことにもなる。ところが石器研究はこのあたりにひとつの弱点をもっている。

このところ、全国各地で先土器時代や石器文化研究のための研究会活動が盛んである。研究の新たな地平を切り開くものとして、これまでの実績とともに、今後の進展に胸ふくらむ思いである。しかし、石器研究者の数は土器研究者の数に比ぶべくもない。哀しいが、それが実状である。その理由はいくつもある。そのひとつとして、土器型式研究のような、あらゆる階層の人々に対して普遍性をもった研究法をかちえていないことに注意したい。

ここで問題になるのが石器実測図である。石器をみて、おお、これは実測したい！と心のうずく人はまだまだ少数派である。と同時に石器研究には拓本という武器はなじまない。写真もまた土器写真ほどの有効性をもちあわせてはいない。やはり、石器研究の情報伝達は実測図に頼るところが大きい。ここに、石器研究が情報伝達のソフト作りの段階で、土器研究よりも限定された手段によらねばならないという弱点が生じる。

近年、石器図化器なるものが流布している。そうしてできた図を目にすると、それは一言にして「甘い」図である。実測に要する時間も、一寸慣れた人間の実測の方が概ね速い。しかし石器実測の方法をきちんと伝達する機会は案外少ない。「あれは教えられるものではなく、自分で覚えるものだ」という考え方もある。だが、自ら学ぶ意志と教える意志とが合致したとき、その効力は倍加する。

教えながら学び、学びながら教える。そうした相互作用によって生ずる新たな発見も少なくない。まずは石器実測の機会をありとあらゆる場所で展開することが必要である。

では、どのように実測したらよいのか。ひととうりのことは、それこそ概説書等に記してあるので問題は

ない。要はそこからどれほどのことを学び、それをいかに整理し応用するかである。この点で従来の説明は剝離面の切り合い関係や剝離方向、つまり石器観察の三要素で言えば、「素材」と「加工」については、十分に意が払われている。いまひとつの要素である「形」についてはどうだろうか。形と言えば、実測の最初の段階で図化されるので問題はないと考えられがちである。しかし、果たして本当にそうなのだろうか。

実測図のもっとも一般的な姿は、表面、裏面、側面、そして横断面形一ケ所である。もっとも側面図が左右いずれかのみであることも少なくない。そのために、本来表現されるべき調整剝離痕や稜線からなる「形」の不明な場合がある。さらに側面図はあっても、縦断面図のそえられることは稀である。そのために側面観として表現されることのある石器の反りや素材剝片の剝離角が、縁辺部の突出した状態に妨げられて図化されないことになる。

さらに問題なのは横断面形である。横断面はもっとも特徴的なところを図化すると言われることが多い。では、もっとも特徴的なところとはどうやって探すのだろうか。それは、より多くの横断面を図化し比較した後でなければ特定することはできない。もはや観察者や実測者のカンに頼っていられる時代ではない。

下図は南関東出土の国府型ナイフ形石器の一部である（拙稿「殿山技法と国府型ナイフ形石器」考古学雑誌72巻4号、「国府型ナイフ形石器の形態と技術」古代文化39巻10・12号掲載、1987年）。表・裏面と両側面の他に、各教育委員会の御厚意によって横断面数ケ所と縦断面をそえることができた。

前掲論文では、複数の横断面のうち、器体中央部の刃角を計測し、全国の国府型ナイフ形石器と比較した。そうして国府型ナイフ形石器の刃角が地域的相違を示すことと、その背景に剝片剝離過程の相違のあることを論証した。

ところで、1個体の基部から先端部までの刃角は常に一様であるわけではない。個体内での変化をもつことの方がふつうである。そのような眼でみるなら、下図の石器のイメージも従前の図とはかなり違ったものになるだろう。さらに縦断面形は横断面形とともに、石器の装着方法や使用方法を考えるための大きな手がかりを示唆する点で重要である。

石器がまさしく人の手になる道具であり、それが当時の人間生活の中でどのような役割を果たしていたのかということを知るための形態研究には、絶対に、実測図、特に断面形図示法の改善が必要である。しかし、複数の断面形図の付されることは稀である。前掲論文で石器基部から先端部にわたる刃角変化の全国的比較を行いえなかった理由がこれである。石器研究の新たな視点が新たな酒であるのなら、それは新たな皮袋に満たされなければならない。

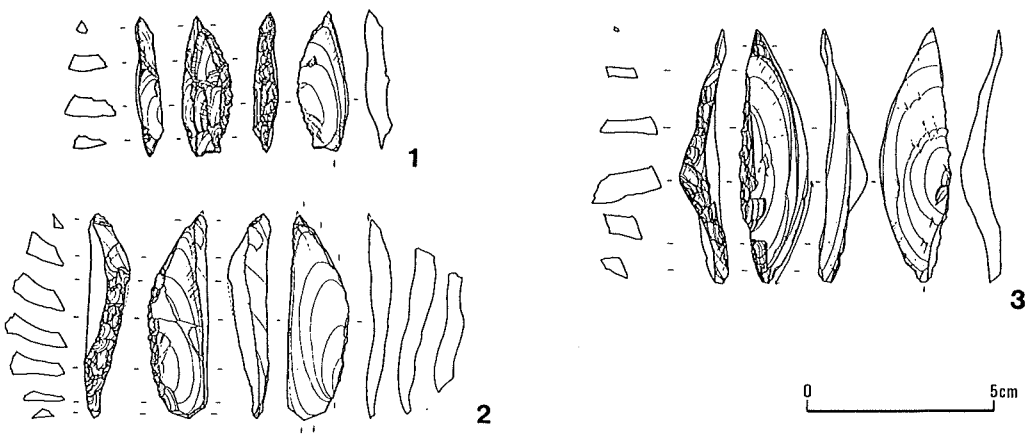
石器実測は、それ自体が数少ない石器研究方法のひとつである。これによって誰もが眼でみてわかることがらを、より多くの手間をかけて抽出し普遍化しなければならない。そこに即効力はないかもしれない。しかし、そうした努力がなければ、立派な報告書や詳細なタイプ・リストを作ったとしても発展性の少ないものになりはしまいか。

いま、一人でも多くの人が石器実測になじむことが必要である。実測図作成に際しては、速くきれいにということよりも、思考と根気と情熱こそが求められる。

※　　※　　※

石の故郷への想いを胸に、まずはそんな地道な作業にとりくむことから始めようではありませんか。石器実測図の水準は、そのまま石器研究の水準を示しているのですから。そして素晴らしい一点の実測図は、数頁の論文よりも雄弁に過去を物語ってくれるはずです。

（東海大学文学部講師）



南関東の国府型ナイフ形石器（1．埼玉県浦和市和田北　2．神奈川県相模原市橋本　3．埼玉県上尾殿山）

川上村立石採集の有舌尖頭器

吉沢　靖

ここに紹介する有舌尖頭器は、南佐久郡川上村樋沢字立石の野菜畑より地主の林宏氏により採集された。

土器出現期（草創期）の立石遺跡（宮下、吉沢1980）は村道をはさんで東側に所在する。本石器採集地も当然立石遺跡の範囲としてとらえられ、より広い範囲に及ぶものと考えられる。地形的には、野辺山原の東端で千曲川への比高約100M、その千曲川に注ぐ小河川沿いに展開していたものと考えられる。

図１の有舌尖頭器は粘板岩製で、基部末端を古く欠損し、尖頭部及び両側縁の一部を新しく欠損しており、現状では、器長6.6cm、最大幅1.5cm、基部長１cm、基部幅0.8cm、最大厚0.5cmで断面はレンズ状を呈す。

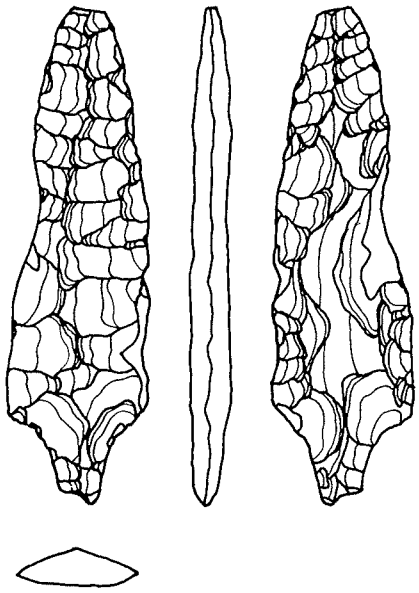
調整加工は、全両面に押圧剝離が施こされ、身部上半には並行剝離痕が認められる。基部（舌部）は明瞭に作り出され、「かえし」が得られ、さらに左側の「かえし」には「アゴ」状の作り出しが不明瞭ながら伺がわれる。

本有舌尖頭器は、押圧剝離によって仕上げられ、器長の割に器幅が細く、そこに細く短い棒状の基部（舌部）がつくもので、「かえし」が発達して所謂「アゴ」状の作り出しが見られる。この様な形状、調整を施される有舌尖頭器は、新潟県小瀬ケ沢洞穴出土の有舌尖頭器を標準とする小瀬ケ沢型有舌尖頭器の範疇としてとらえられよう。

有舌尖頭器は、先土器時代終末期から土器出現期（草創期）前半にかけて、短期間に発達そして消滅した石器として注目されているわけであるが、その変遷について芹沢長介氏の編年（1966）によると本有舌尖頭器の編年的位置は、有舌尖頭器編年の後半段階III期に該当するものと思われる。このIII期には、長野県柳又遺跡出土の有舌尖頭器を標準とする柳又型有舌尖頭器と小瀬ケ沢型有舌尖頭器とが日本列島の東西に対峙して使用された時期であり、本有舌尖頭器は、小瀬ケ沢型の東端に位置するものであろう。

さて立石遺跡Ａ地点には、すでに２点の有舌尖頭器が採集され紹介されているわけであるが、本有舌尖頭器とは若干形態的に違うものと理解される。立石Ａ地点の有舌尖頭器は、小型で格一化されたもので、「かえし」が直線的に開く有舌尖頭器で、神奈川県花見山遺跡出土例を標準とする花見山型有舌尖頭器の範疇として理解され終末期型式の有舌尖頭器である。

立石Ａ地点のものは、他遺跡の例と同様に微隆起線文土器に共伴すると考えられる。



第Ｉ図　立石採集有舌尖頭器（１：１）

ところで、本有舌尖頭器にはどの様な土器が伴うのだろうか、他遺跡例を参考にすると、微隆起線文土器より一段階前の土器と共伴するものと考えられる。

さて千曲川最上流域には多数の先土器時代遺跡が確認されているが、土器出現期については不明確である。

ところが最近、柏垂遺跡の採集遺物に土器出現期に特徴的な石器が含まれると堤隆氏（1984）は指摘し、馬場平遺跡（芹沢、柳沢1982）は細石器文化直後に位置づけられている。馬場平遺跡採集品のなかには、有舌尖頭器、半月形尖頭器などが存在するなど多少検出されつつある。

今後、広義の槍先形尖頭器である有舌尖頭器の消長は、前段階のそのあり方と関係があると考えられ注目されるべき石器といえる。

参考文献

考古学ジャーナルNo.258　ニュー・サイエンス社

古代文化第37巻６号　「長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡採集の細石刃核」　由井一昭・堤隆　1985

報告、野辺山シンポジウム1981　「野辺山原における「土器出現期」遺跡の発見」宮下健司　吉沢靖

「馬場平遺跡」、「柏垂遺跡」　長野県史考古資料編１―２　芹沢長介、柳沢和明　1982

図録　石器の基礎知識III　鈴木道之助　柏書房

川上村遺跡詳細分布調査報告書　川上村教育委員会

（本学会員）

ゴーランドと信濃と古墳

花岡　弘

1

大学院の友人がテキストだといってコピーを渡してくれたのがゴーランドの“The Dolmens and Burial Mounds in Japan”[1]（邦題「日本のドルメンと埋葬墳」）である。

それまで入試に備えチャイルドを読み続けていたこともあり、ひたすら読んだ（後沢遺跡の常駐（はりつけ）がすんでからではあるが……）。その後、試験には合格したものの、就職の話もあり、このテキストで授業を受けることはできなかった。ゴーランドの論文を読んでいるうちに、ゴーランドが信濃に来て、さらに古墳を計測していたことは驚きであった。小稿では、ゴーランドと信濃の古墳について紹介しよう。

2

ここで、ゴーランドの人となりを簡単に紹介しておく。ウィリアム・ゴーランド（William Gowland 1842～1922）は、イギリス人で明治5年（1872）に大阪造幣寮の溶銅鉱担当の技師として来日した。明治元年（1868）から同22年（1889）の間で官・公・私雇合わせて2,299人にわたったという[2]、いわゆるお雇い外人の一人である。その後、16年間の滞在中、主として余暇を古墳研究に費した。発掘をほとんど行わず、現状観察だけで驚くべき古墳研究を完成。「当初反射炉の築造と溶銅の技術を伝えたが、後には局長顧問を兼ね『功績最も挙がれり』と記録されている。」という[3]。

また、一方では登山家としての功績も高い。日本アルプスという名を初めて使ったのが彼だ。「ゴーランドが明治11年（1878）に槍ケ岳に登った時で活字になったのは、明治14年（1881）に発行されたイギリス人の旅行案内記に印刷されたものである。そして、この日本アルプスの名を一般に広めたのはイギリスの宣教師ウェストンで、彼が帰国後にロンドンで発行した著書[4]『日本アルプス登山と探検』による。」とされている。

3

ゴーランドの著書は、昭和56年に翻訳、出版された[5]。原著で不明だった点は、この本により氷解した。

さて、ゴーランドの論文に長野県が登場してくるのは3ケ所である。本文、文中の註、表1に示した古墳の計測表中である。

最初に現われるのが、「ドルメンの構造」[6]の中で4類に区分された石室のうちの第2類と第3類の説明である。

（本文P451）　第2類（筆者註。以下はゴーランドの説明。玄室と羨道のはっきりとした区別があり、羨道の一方の壁が玄室の一方の壁と一直線になっているもの。片袖式。第1図上）のドルメンは、概して簡単な形をした墳丘で覆われている。第3類（筆者註。第2類よりさらに完全な玄室があり、羨道が中軸線に沿って玄室に入っているもの。両袖式。断面は第2類と同じ。第1図下）は

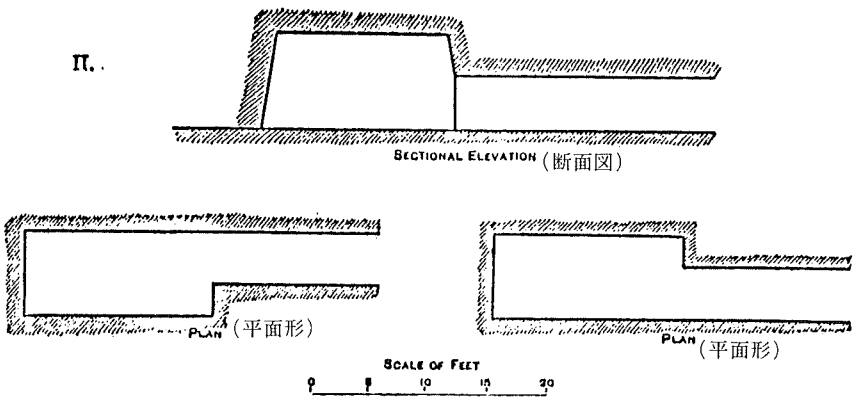


Fig. 2.

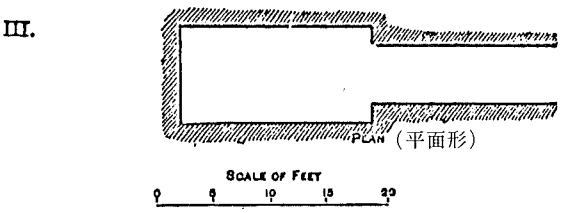


Fig. 3.

第1図　クラス2・3の石室形態（註1の文献より転載）

あらゆる種類の墳丘内にある。最も数多く見られる墳丘は簡単な円錐形である。円形ないしは楕円形の基部から立ち上がり、時には平らな頂部を呈しているものもあるが、しばしば長期間風雨にさらされたため、(封土が) 僅かにドルメンを覆っているだけで、玄室への羨道入口の笠石、天井の一部または全部、場合によっては壁さえ露出しているものもある。墳丘の直径は一様でなく、美濃にある15フィート (筆者註。457cm) くらいの小形ドルメンから、河内その他にある約90～100フィート (27.4～30.5m) ほどの大形のものまである。私が調査したのは全部その地の土で造られていたが、松代 (信濃) のものは例外で、ここでは土を用いず角のある石だけでできた大きい積石塚(ケルン)[7] (高さ23フィート、直径105フィート。筆者註。高さ7.01m、直径32m) があって、中にドルメンがあるといわれている。

これによってゴーランドは松代で積石塚を見たことがわかる。

2ケ所目は、環頭太刀についての記述の註にある。(本文P483) は「挿図24b (第2図。筆者註。ここでは環頭太刀のうち素環刀太刀のこと) は、肥後のドルメン[8]から出土した別の2本のうちの1本だが、2本とも茎の端に環[註3]が鍛造されてあって、元は銀で分厚くメッキしてあった。柄頭から切先までの長さは2フィート8インチ。(筆者註。約81.3cm)

(註3)「全く同種の柄頭のある剣が遠く信濃の上田付近のドルメンから出土した。相似の環頭は古代デンマーク刀にも見られる。Worsaae 「デンマーク美術」P151 第187図

この註にあるように上田市付近から出土したとあるが、古い記録であるため、どこで出土したのか不明である。

3ケ所目は、表1に示した古墳の計測表 (表中の計測値はゴーランドはフィート・インチで表示。訳本も同じ。cmには筆者が換算。[9]) 中である。

表中には、松代町(現、長野市)付近の古墳3基の計測値が掲載されている。いずれも単独の円墳で横穴式石室を有する。また、ゴーランドが計測しているからにはこれ以前にすでに開口していた古墳ということになる。古墳自体に際だった特徴がないため、換算した計測値の比較によることにした。比較には、計測した年代に相当開きがあるが『信濃考古綜覧』によることにし、似た計測値がないかあたってみたが、3基とも該当するものがなかった。ここで壁にあたってしまった。ここでしばらく中断となった。ある日、大室古墳群の報告書を見ていると、その中に「大室古墳は、明治10年前、長野県の要求に従って、大室村誌を編集した際、はじめてその調査が行われた。しかし、ここにいう大室古墳群全体にわたる調査ではなく、その一部の大室谷古墳群についてだけであったが、その数200余と記している。(後略)[10]」

これからすると、大室古墳群の一部はゴーランドの来日よりややしばらくのうちにすでに調査されていたことがわかる。また、先述した積石塚の存在を考え合わせると推測の域を出ないが、ゴーランドの調査した古墳は大室古墳群である可能性が強いのではないだろうか。

4

以上、ゴーランドによる長野県の古墳研究については意外と知られていないため記した。

碓氷峠のアプト式軌道が完成し、信越線が全通したのは氏の帰国後から5年後の明治26年(1893)。ゴーランドがどうやって長野入りしたのかも興味深い。

ゴーランドについて書くようにすすめて頂いたのは宮下健司氏である。ようやく約束が果たせた。

また、出雲風土記の丘資料館からは貴重な文献を送って頂いた。

表1　日本のドルメンの寸法、その他

この表にあるドルメンはNo.111から114を除き、著者であるゴーランドが調査、計測したもので記した地域で最良の状態で保存されたものである。各々の石室・羨道の長さ・幅は、床面の寸法である。備考欄に羨道の位置が記していない場合は中軸線上。(筆者註。第3類(両袖式)のこと)

No.	地域	玄室(cm)			羨道(cm)			全長	入口の方向	墳丘	備考
		長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ				
102	信濃松代付近	442	213～282	244	457	152	218	899	S 30° W	(単)円墳	玄室天井石4個。
103	〃	549	168～127	226	183	97	185	732	S 35° W	〃	羨道は東壁と一線。(筆者註片袖式)玄室天井石4個。
104	〃	427	206～145	206～251	不完全	122	183	—	S 15° W	〃	玄室天井石4個。

筆者註　この表には130の古墳が掲載されているが、ここでは信濃のみとり上げた。cmへの換算は1インチ2.54cmで計算。小数点以下第1位で四捨五入。)

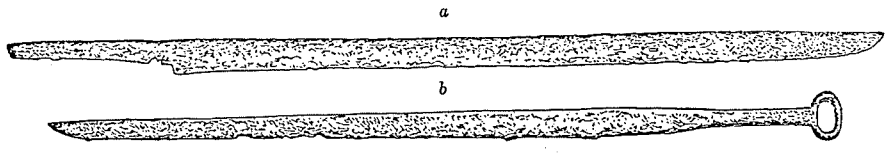


Fig. 24. Iron Swords of the Dolmen Period.

第2図　第24図ドルメン時代の鉄刀 (註1の文献より転載)

筆者の語学力ではシンドかったゴーランドの原著を紹介できたのは、ひとえに上田宏範氏校註の『日本古墳文化論』による。

末文ながら厚く御礼申し上げる。

（本学会員
小諸市教育委員会）

註

(1) W. Gowl and 1897 'The Dolmens and Bunial mounds in Japan' "Archaeologia"

(2) 秋月俊幸他著　札幌市教育委員会文化資料室編　1981　『さっぽろ文庫19　お雇い外国人』　北海道新聞社

(3) 奥村正二　1973　『小判・生糸・和鉄――続江戸時代技術史――』　岩波新書863

(4) 小林寛義・市川健夫　1976　『ふるさと地理誌』　信濃毎日新聞社

(5) W・ゴーランド著　上田宏範校註　稲本忠雄訳　1981　『日本古墳文化論』　創元社

(6) ゴーランドは、横穴式石室を言っている。

(7) 前掲註5の文献の註では、「長野市松代町付近には、大室古墳群、宮崎古墳群、関屋古墳群、桑根井古墳群など積石塚の分布がいちじるしい。ゴーランド教授の調査したものがどれにあたるかは不明。」とされている。

(8) 前掲註5の文献によれば、江田船山古墳（熊本県玉名郡菊水町大字江田字石湯・清原）のこととされる。

(9) 前掲註5の文献では、メートル法に直すと原著で概数を意図している場合、誤解を生じる惧れがあるとし、換算していない。しかし、計測値から古墳を探索する必要からメートル法に換算した。

(10) 米山一政　1970　「1)大室古墳について　2)大室古墳の観察」　長野県・大室古墳群調査会　『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』

参考文献

大塚初重　1977　「大阪府芝山古墳の出土遺物をめぐる諸問題」　松崎寿和先生退官記念事業会編　『考古論集』

斉藤　忠　1974　『日本考古学史』　吉川弘文館

渡辺貞幸　1979～1980　「ガウランド氏と山陰の古墳(上)・(中)・(下)」　『八雲立つ風土記の丘』　No.37・39・40

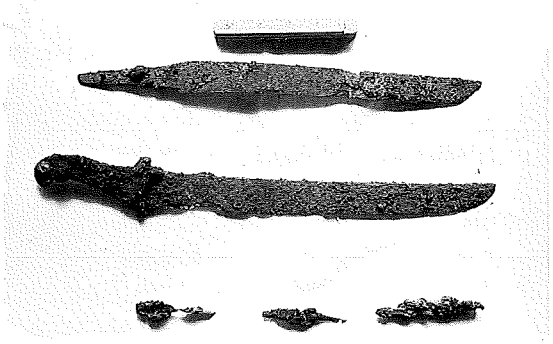
田野口地区の台地と古墳

黒岩忠男

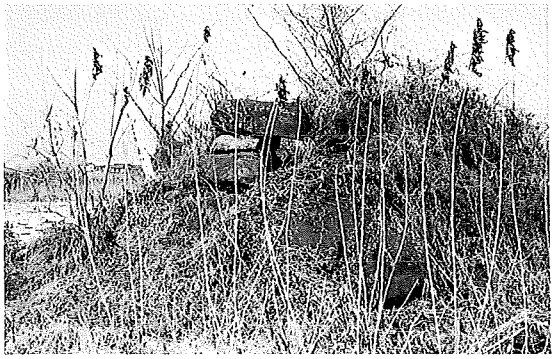
臼田町田野口地区の千曲川右岸台地は、田口峠を分水嶺として雨川が西流し、その川に沿って田野口集落が形成されている。この地域は、千曲川右岸で西方に向かって緩傾斜している沃野で田畑がよく開けている。この平地の畑地一帯に大半破壊されたが、俗称12塚・四十八塚等の古墳群が分布している。又新海三社神社も鎮座し古くから開拓が行われた所でもある。

旧田口村誌、新海神社記などの古記録によると、「佐久郡総社新海大社は諏訪大社の御子にして諏訪系に興波岐ノ命とありて本郷草創の神なり」とあり、新海神社は佐久開拓の神を祀る神社であって、祭神は諏訪明神の御子興波命を主神として、建御名方命、事代主命の三神鎮座の神社である。ゆえに佐久の一宮であり、また佐久三庄三十六郷の総社である。もと新開と記してある。これはヤマトコトバで「ニイサク」と読み開（サク）は開拓であり、佐久という郡名のよってくるところという説もある。古来武神としての崇敬あつく、源頼朝が社殿の修理再興にあたったこと、武田信玄が永録8年上州箕輪城攻めの際、当社に戦勝祈願の願分を奉って出陣したことなどが伝えられている。三社のうち東本社社殿が昭和12年7月国の重要文化財として指定を受けている。社殿の沿革は不詳であるが形式手法からみて江戸時代後補のあとがあるが全体的に当初の形式がよく保存されて室町時代の建造物であるとされ東信地方における貴重な遺構とされている。新海三社神社三重塔がある。塔は塔姿の略で、本来仏教建造物であり不思議であるが、わが国には神仏習合の長い歴史があって、新海神社境内にも神宮寺があり、神宮寺の塔として建立されたのがこの塔である。明治維新の際、神仏分離令の発布により神宮寺は川原宿に移され、この塔だけは神社の宝物庫と言う名目で現位置に残された。昭和12年7月に国の重要文化財として指定を受け初層軸部は後世改造であるが室町時代末期（永正年代）の建造物であるとされている。この塔については嘉祥2年（849年）創建という伝承があるが、わが国に本地垂迹・神仏習合税が広まった時代との関係から言っても伝承年代は古すぎるように思われる。

俗称十二塚は新海神社の周辺地域に分布したと思われるが、現在では神海神社の社地にある宮ノ沢地籍、神海神社本殿裏山に中の御陵（径8.5m・高さ2.1m）・東の御陵・西の御陵の3基が半壊ではあるが長方形の玄室を残して所在する。その他の十二塚と言われた古墳は全て宮代地区の古墳も含め開墾・開発等の為残っていない現状である。



臼田町田野口英用地畑古墳出土蕨手刀・直刀・鉄鏃



臼田町田野口外丸間古墳群第１号墳

蕨手刀（刀全長48cm）・直刀（刀身43.5cm）・三輪等を出土させた英田地畑古墳は新海神社旧神域の西坊と呼ばれていた畑地で十二塚の内の古墳と思われる。尚英田地畑古墳の西約200m地点の畑から直刀１が出土したが、この地も古墳の跡ではないだろうか。

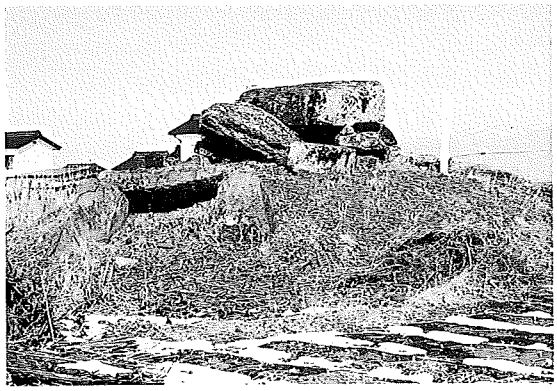
俗称四十八墳と言われた幸神・外九間・中原・割塚等の群集墳は畑地帯に分布し所在する。やはり古くからの開拓により大半以上破壊され煙滅している。現代になっても割塚古墳の一基は大正14年頃、道路改修のため古墳の石を道路敷に利用されその所在位置すら不明である。現在は五庵に１基（径6.70m）・明法寺に１基半壊の状態にて残存する。中原古墳群は新興製作所ができる時、敷地内にあった１基が取り除かれ、現在２基がその残骸を残している。外九間に３基・幸神に４基天井石を露出して所在しているにすぎない。

四十八塚と言われていた地域の古墳の所有者は、ほとんど新海神社になっている。又煙滅した古墳の跡と思われる広さの土地が点在するが、新海神社所有地である。これらは、古い昔ある時代新海神社の社領地であった土地が開墾・開発等により私有地となり、残された古墳のみ新海神社所有地として、あるのだろうか。又宮の沢の中の御陵・東の御陵・西の御陵は、なぜ御陵と呼ばれているのだろうか。他の地方には無い例だと思う。

田野口に分布する古墳群の約３km前後の南に、千曲川流域東岸に於て最南限とされている入沢古墳群が所在し、又北方平賀地区には昭和33年度調査によると43基の古墳・古墳群が所在する。更に平賀地区樋村遺跡では古墳時代の大集落址が検出されている。臼田にも美里在家の地名があり、近くに横穴式円墳の蛇塚古墳も所在する。又田野口を流れる雨川沿岸には、諏訪地方と西上野国を結ぶ重要な通路にあたる古道も所在する。以上の諸事項を考える時、群集墳発生と古代氏族等につき、いろいろな推察もされるが、この点今後の研究に俟ちたい。

（本学会副会長）

臼田町田野口外丸間古墳群２号墳



臼田町田野口幸神古墳群１号墳

長野県佐久地方の土偶

宮下健司

はじめに

土偶は縄文時代に製作された土製の人形(ひとがた)である。縄文早期の撚糸文期に出現して以来、晩期に至るまでつくられ続け、弥生時代になっても容器形土偶として中部・関東地方にはその残影をみることができる。

土偶は土器と同様に可塑性のある粘土を用いてつくられ、しかも中期土器のように粘土をふやして造形できるために、そこに縄文人の心や祈り、あるいは世界観をこめることができる造形物である。

現在、全国には15,000個の土偶が存在するといわれ、そのうちの1000個が長野県で出土し、700個が実測図や写真で紹介されている。佐久地方では筆者の管見にふれた土偶は63個で、県内では北信に次いで土偶の少ない地域である。これは、縄文時代の遺跡が少ないことと、縄文遺跡の大発掘がなされていないことに起因するであろうが、今後に予定されている関越道や北陸新幹線等の大規模開発に伴って、後・晩期を中心とする土偶の発掘例が増加するであろう。

佐久地方の土偶

佐久地方から発見されている土偶の大部分は表採資料で、一遺跡一個という遺跡が多い。その中で、望月町浦谷B遺跡では20個、小諸市氷遺跡で7個、同丸山遺跡で4個の土偶を出土している。

次に時期別に佐久地方における土偶変遷をたどってみたい。

早期の土偶　佐久をはじめ県内でもはっきりしないが、この時期のものに北相木村栃原岩陰遺跡から出土した土版状の土製品がある。一部欠損しており、現存長は2.5・幅2.2cm、厚さ4㎜で、片面に楕円押型文が施文されている(1)。この時期の土偶はすべて小型板状で、身体の表現、顔面の眼・鼻・口・臍や陰部の表現を欠き、しかも土版が盛行するのは後・晩期であることを考えると、栃原例は押型文期の土偶と考えてもよいかも知れない。

前期の土偶　県内では岡谷市の海戸遺跡からバイオリン形と称される板状土偶、下伊那郡松川町妻の神遺跡から板状で頭・胸・脚部を表現した土偶が出土している。これらと関連して、上伊那郡宮田村中越遺跡では板状の石に頭・胸・脚部をつくり出した岩偶が発掘されている。脚部は擦切技法で作出されており、この時期の磨製石斧づくりなどの技術とも一致している。形態は早期末の愛知県入海貝塚や前期初頭の山梨県釈迦堂遺跡出土の土偶と酷似している。全国的にみても稀有な岩偶である。佐久地方には前期の良好な遺跡が少ないこともあってか、今のところ前期の土偶は未発見である。

中期の土偶　中期は県内でも全国的にも土偶が盛んにつくられるが、松本・伊那谷等に比べると佐久地方の土偶は実測されているものが意外と少ない。小諸市東丸山例(2)は前期のバイオリン形の板状土偶の流れをくむ土偶と考えられる。

望月町胡桃沢遺跡の3号住居址から出土した土偶(6)は尻が張り出し、しかも曲線文様によって臀部を強調したこの時期の特徴的な土偶で、県内では松本平に多く認められ、かの地域との交流が知れる土偶である。

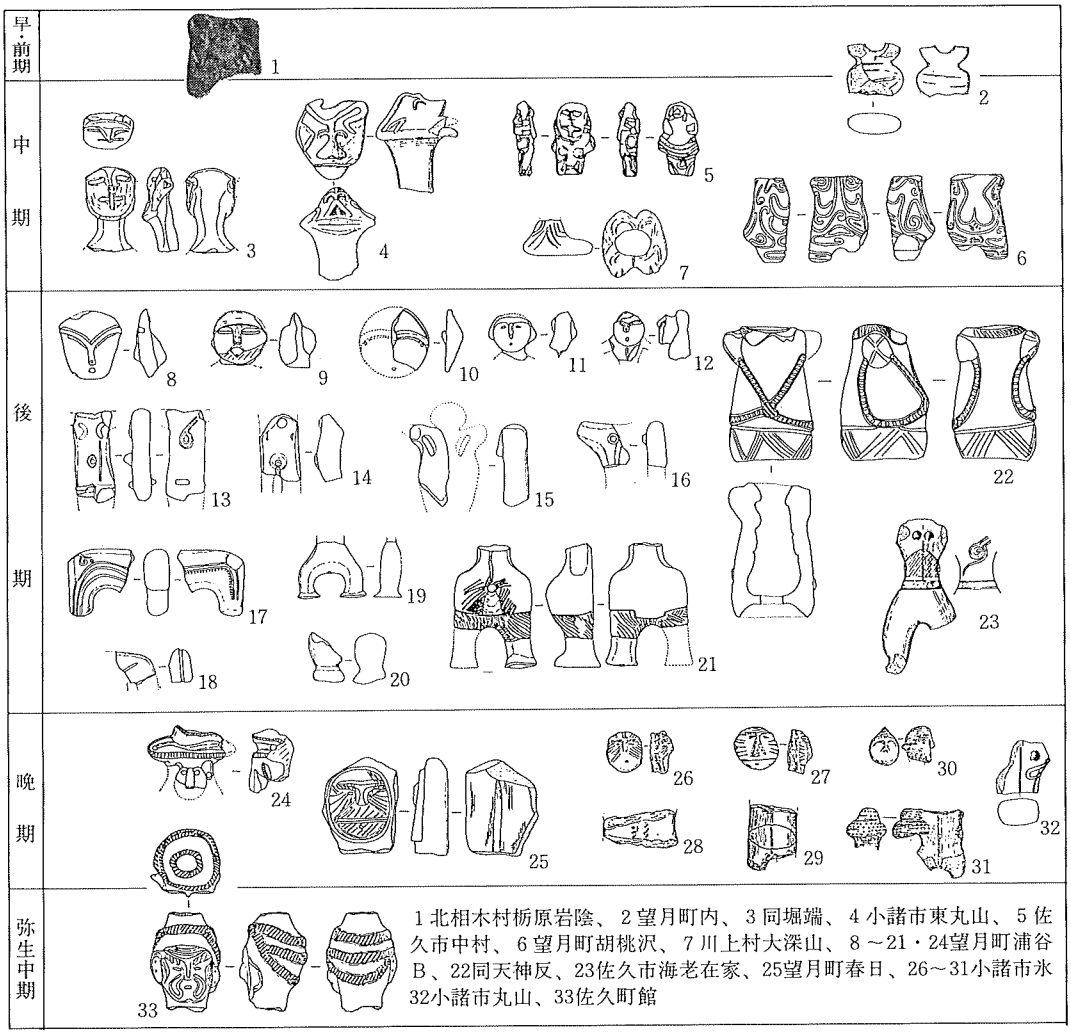
佐久市中村遺跡J10号住居址出土の土偶(5)は小型で、口を十字形に表現して、三ツ口をあらわしている。三ツ口土偶は現在、東京大学総合資料館に所蔵されている望月町堀端出土例(3)にも認められる。三ツ口は土偶のほかに顔面把手にもみられ、縄文時代にも先天性異常の三ツ口があったことを物語ると同時に、それをあえて土偶などに描いた縄文人の意識をかいまみることができる。

小諸市東丸山例(4)は眼を弧形に描いた笑顔の土偶である。類例が少なく、大きい鼻と口から一見すると犬の顔のようにもみえる。

川上村大深山遺跡の足部の土偶(7)は、側面にワラジの紐のような文様が描かれ、縄文人のはきものを表現している可能性がある。

後期の土偶　望月町天神反遺跡例(22)は今のところ県内唯一の中空の筒形土偶である。関東に近接する佐久地方で出土しているところから、安行式などの後期土器の搬入にみられるような交流の跡がしのばれる土偶である。

望月町浦谷B遺跡の8・9・10・12の顔面部は12にみられるように仮面をかたどった土偶である。とくに8は眉や鼻を隆帯で太く盛り上げるつくり方は、東筑摩郡波田町権現台出土の土面(現東京国立博物館所蔵)と表現が類似しており、この土偶の顔つきは、仮面の流行を示すかのように山梨や関東地方にも共通して認められている。また10には顔の側面に穿孔している点も仮面を表現した証拠になろう。13～15は細い胴部に乳房を弧状に描くもので、南安曇郡穂高町離山遺跡にも類例があり、後期の代表的な形態である。17は手を直角に曲げるタイプで、諏訪市十二ノ后遺跡に典型例がある。21はパンツをはいた土偶で、県内では上



長野県佐久地方における土偶の変遷

水内郡牟礼村明専寺遺跡例に次いで二例目である。佐久市海老在家例(23)の背面には加曽利B式土器につけられると同様な文様が施されており、土器と土偶との文様や時間的関係を知る上で格好の資料である。

晩期の土偶　浦谷B遺跡の帽子をかぶったような土偶(24)は、特異な形態からこの背面にも顔がつく面面土偶であろう。晩期を特徴づける土偶には、小諸市石神遺跡から出土した亀ケ岡系の遮光器土偶がある。また、望月町春日(25)や小諸市氷遺跡例（26・27）には入墨を表現した鯨面土偶があり、この胴部は板状を呈している（28･29)。これに対して肩部に刺突文を施した土偶(31)の頭部は三角に尖るもので(30)、これは東北地方の刺突文土偶の流れをくむものである。

弥生中期の土偶　佐久町館遺跡出土例(33)は顔面文様に晩期からの影響を残しているが、頭頂部には縄文で縁どりした口があるところから、容器形土偶というよりは、むしろ土偶形容器と呼んだ方が、その性格がはっきりすると思われる。

おわりに

以上、佐久地方の土偶を概観してみたが、土偶は土器と同様に時代性と地域性があり、しかも縄文人の風俗を知る上では有力な情報を秘めている資料といえる。

今後、未報告の資料を実測図に描いて、縄文人からのメッセージを受けとりたいものである。

（紙面の関係で文献は省略させていただきました。）

（本学会員
長野県史刊行会）

——昭和61年度例会発表より——

弥生土器編年の確立に向けて（その２）

——箱清水式土器研究の歴史と現状における課題——

小山岳夫

1　研究史

1901年、長野市箱清水遺跡において長野高女建築工事の際、出土した土器は渡辺敏氏によって採集され、坪井正五郎・野津左馬之助両氏によって実見・分類〔甲（朱塗）・乙（浮文）種〕された後、蒔田鎗次郎氏によって初めて文献（蒔田　1901）に登場した。

その後、長野市で玉置繁雄(1903)、南佐久で八幡一郎（1934）、北佐久・岩村田で神津猛（1936）などの各氏の紹介によって千曲川水系各地に同様な土器が分布することが確認された。

1936年藤森栄一氏は信濃の弥生土器を大系化し、以上に紹介された土器を岩村田式・箱清水土器と型式設定し、信濃における後期弥生土器と位置付けた。(岩村田・箱清水式の当時における前後関係は箱清水式とした土器群に土師器が混入していたことによるらしい。)1956年桐原健氏は飯山市長峯遺跡出土土器を分析し、壺の口縁部形態、赤彩があまり盛行しないことなどを根拠に中期的要素を残すことを指摘、箱清水式に先行する土器群であるとして尾崎式を設定した。その後、1964年全国的に弥生土器の大系化がなされる中藤森氏は信濃の弥生土器をⅠ～Ⅳ様式に分類、Ⅳ様式を後期とし、尾崎式・箱清水式をあてた。1966年神村透氏は尾崎・岩村田式を箱清水式に吸収させ、型式名を一本化した。以後、尾崎・岩村田式が学史上に登場することは二度となかった。

昭和40年（1960）以降、発掘技術の進歩、資料の増加に伴い、良好な一括資料が得られるようになり、信濃の後期弥生土器の編年研究の再検討が活発化する。

1967年桐原氏は中野市安源寺遺跡の出土資料を安源寺Ⅱ・Ⅲ類に分類し、Ⅱ類を箱清水Ⅰ式（従前の尾崎式)、Ⅲ類を箱清水Ⅱ式に型式設定し、尾崎式を解消した（安源寺Ⅱ類で注意しなければならないのは中期的土器が混入し、資料に混乱がみられることである)。

1969年笹沢浩氏は更埴市生仁遺跡の資料を分析し、一型式内における時間と空間の問題を呈示したが、ここでは保留し、翌1970年生仁及び北長野貨物基地出土資料は安源寺Ⅲ類よりも後出的であることを指摘、箱清水Ⅱ式＝安源寺Ⅲ類への疑問を投げかけた。また、安源寺Ⅲ類と生仁等の資料にみられる壺の口縁部等の若干の形態差が地域差であるかについては結論を持ち越した。1971年桐原氏はこれを受けて編年を再編成し、箱清水Ⅰ式に安源寺Ⅲ類、Ⅱ式に生仁・北長野貨物基地資料をあてた。また、前年笹沢氏が箱清水Ⅰ・Ⅱ式に先行する型式として設定した吉田式については中期の土器という見解を示した。1976年笹沢氏は御屋敷式土器を設定し、箱清水式に後続する後期終末の土器と位置付けた。

1977年笹沢氏は長野県における弥生土器編年大網を発表し、千曲川水系の後期弥生土器は吉田・箱清水・御屋敷（尚、御屋敷式については1983年土師器との見解を示し、弥生土器からは削除している。)の三型式の流れがあることを示し、従前の箱清水Ⅰ・Ⅱ式については地域差とし、解消するとの見解を示した。

こうして、研究史上数名の偉大な研究者によって基本的な大系化がなされ、一応の落ち着きをみせた信濃千曲川水系の箱清水式土器を中心とする後期弥生土器編年も昭和55年（1980）以降、県内全般に及ぶ大規模開発による緊急調査の増大、新資料の続出によって更に小地域毎の詳細な編年研究が行われる新たな局面を向かえている。

1980年臼田武正氏は佐久地方の後期弥生土器を検討し、Ⅰ～Ⅳ類の編年案を呈示した。Ⅰ類は吉田式、Ⅱ類は箱清水Ⅰ式、Ⅲ類は箱清水Ⅰ～Ⅱ式、Ⅳ類は箱清水Ⅱ式とし、吉田式を導入した点は笹沢氏、箱清水式Ⅰ・Ⅱ式を使用した点は桐原氏の意見を取り入れたものと考えられる。同年太田文雄氏は飯山市田草川尻遺跡を中心に北信濃の後期編年を考え、田草川尻Ⅰ式が吉田式により近いとし、また、田草川尻Ⅱ式が箱清水式的とした。翌1981年、長野・群馬・埼玉による三県シンポジウムでは同じ中部高地型櫛描文をもつ箱清水・樽・岩鼻式土器をテーマに行われ、各地域の編年案がつき合わされたが、他県地域の詳細な分類案にくらべ本家の長野県の分析不足が目立った。

1984年青木和明氏は高坏型土器の型式変化に注目し、中期～後期の高坏を畿内地方の高坏の流れに対応させて分類、第１～６段階の流れを仮定した。このうち、第２段階は慎重な態度をとりながらも吉田式(古)、第３段階を吉田式（新）か箱清水式の初現、第４・５段階を箱清水式、第６段階を御屋敷式とした。

また、1986年笹沢氏は箱清水Ⅰ・Ⅱ式を再度否定、箱清水式土器の地域差を善光寺平・飯山・佐久・上田・松本などの具体的資料を掲げ強調した。

同年佐久市では池畑遺跡、瀧の峯２号墳など画期的な発掘調査が相次いだ。この中で当地方の箱清水式土器研究に対して大きな示唆を与えたのは、小型高坏・器台等外来系土器が箱清水式土器に共存する段階に至

っても、従来古い要素とされた櫛描斜走文、および折り返し口縁の甕が佐久地方においては残存するという事実であった（三石　1986）

2　問題点の抽出

以上の研究史をふまえ、問題点を列記し、今後の研究の方向を見極めたい。

①吉田式との関係および箱清水式土器の時間的位置

研究史上箱清水式土器は、桐原・笹沢・臼田・青木各氏のいずれの編年案をみても後期の大部分を占める型式として位置付けられてきた。しかし、先年笹沢氏は新資料の増加に伴い吉田式を相当な時間幅をもつ型式として拡大解釈する考えを示した。これをうけて佐久地方では他地域に比べ吉田式の諸要素が強く継承されると考えた筆者は先号で吉田式的要素をもつ土器を検討、三段階の流れがあることを予測し、当地方では後期の前半を占める型式との見解を示した。従ってここでは佐久地方の箱清水式を壺においては形態が胴下半で外稜を有し、頸部文様がＴ字文Ｃを基本とし、甕は形態上の大異がほとんどなくなり一本化された型式と規定して、後期後半を占める土器型式（表１）と理解するに至った。

②佐久の地域色の明確化―地域編年の確立―

先に述べたように箱清水式土器に地域差があることは笹沢氏が再三指摘している。佐久では従来吉田式の古い要素とされた櫛描斜走文の甕が箱清水あるいは弥生終末～古墳初頭まで継承されることが大きな地域色である（青木1984、三石1986など）。この傾向は他地域にみられず、他地域には現状では全くみられず、佐久地方独特の弥生土器の発展経路があったことが予想される。従って、一歩踏み込んで言えば、佐久では吉田式の要素が他地域にくらべかなり新しい段階までくい込む可能性が強いのである。これらの問題を解決するには佐久地方の弥生土器の変遷過程を明確にしなければならないことは言うまでもない。当地方の土器編年を確立した上で他地域の編年と比較を行えば、佐久地方の地域色はかなり明確なものとなる。

③御屋敷式土器の位置付け

1983年笹沢氏は外来系土器によって箱清水式土器の解体が始まる時期として御屋敷式土器を古墳時代の土器と位置付けた。1986年花岡弘氏も同様な見解を示した。しかしながら箱清水式土器の変遷過程が不明確な現状では、御屋敷式土器の成立事情も今一つ不鮮明で正当な位置付けを行い難く、どこからどこまでを御屋敷式土器と括って良いかも判断しかねる。私はまず、吉田～箱清水式土器の変化を詳細に分析する中で御屋敷式土器の成立そして特色を探り、正当な評価を与えてみたいと思う。

以上、たいへん大きな三テーマを掲げたが、本論では資料調査が不十分な状態であり、そのすべての解明はとてもできない。とりあえず、佐久地方の箱清水式土器の変遷過程の予察を行っておきたい。

3　佐久地方における箱清水式土器の流れ（予報）

先に述べた箱清水式土器の定義に該当する資料は、佐久市上直路・清水田・餅田・戸坂・後沢・舞台場・下小平・池畑・西近津、小諸市五カ城、臼田町勝間原等の諸遺跡でみられる。これらの土器群を概観すると古・中・新三段階の流れが予想できる（表１）が未整理資料が多く分析不足は否めない。

古相　上直路遺跡出土資料が当てられる。壺は胴下半に外稜を有し、口縁部が朝顔状に開く形態で、頸部文様はＴ字文Ｃが施される箱清水式土器固有の器形が主体を占めるが、大形品には胴下半に外稜をもたないもの、また、極（稀であるが矢羽状の篦描文を頸部文様にもつものも残存する。赤色塗色はほとんどの壺に施され、前段階（吉田式新相）よりも更に盛行する。

甕は弓状に外半するものに統一され、前段階にみられた形態のバラエティーはなくなる。文様は櫛描斜走文が圧倒的に主体を占め、波状文は少ない。

高坏は所謂中期型の高坏のみである。

中相　千曲川右岸では清水田Ｙ７・９住、戸坂、餅田、左岸では後沢14住、舞台場Ｙ２・６・８住出土資料などがあり、従来言われてきた箱清水式土器にあたる様相を示す段階である。壺は胴下半に稜を有し、頸部文様から篦描文が完全に消え、Ｔ字文Ｃが主体となる。甕は前段階と同じく口縁部が弓状に外反する形態に統一されるが、千曲川右・左岸で文様に差がみられる。すなわち、右岸では波状文とともに斜走文が多用されるのに対し、左岸では斜走文は全くと言って良い程見られず、波状文のみという点である。この差がどの段階から発生したものであるのか，左岸地域は前段階の資料が不足しているため、今のところ検討できない。（但し、蛇足になるが右岸では天竜川水系的な土器敷炉、埋甕炉、左岸では善光寺平的な地床炉が住居内に主体的に付設されるという差異は注目すべき事実であろう。）

新相　佐久市下小平１～４住、池畑１・２住、清水田Ｙ３住、五カ城１住などがあげられる。外来系土器が共伴する可能性もあり、御屋敷式土器と密接な関係をもち始め、箱清水式土器の解体を示唆する段階と考えられる。壺は球胴化する形態が多く、口縁部は有段化するものが多くみられる。頸部文様はＴ字文Ｃが崩れ、簾状文、直線文などが融合されるものが多くみられる。また、赤色塗彩の傾向は前段階にくらべ衰退し、無彩のものが増える（臼田氏が佐久Ⅲ類とした西近津出土の壺もこの段階に含まれる可能性が強いと思う。）

甕は下ぶくれの著しい形態が増え、文様は一つの個

体に波状文、斜走文の両方が施されるものもあり、混乱がみられる。

高坏は前段階まで中期型に支配されていたのに対し、この段階で後期型でも新しい形態のものが急速に発達し、中期型はほとんどなくなる。また、前段階にくらべ小型の赤彩品が増えるようである。

以上、壺・甕を中心に佐久地方の箱清水式土器の変遷を予測したが、あくまで予察の段階であるため、思考のみが先行し、科学的な分析に欠けており、細部については誤りが多いと思う。また取り扱えなかった資料も多い。高坏については青木氏が指摘するように少なくとも中相まで中期型の古い要素が主体的に残るため、変化が指摘できず、細かくは触れなかった。また、今回差異を指摘するのみに留まった千曲川右岸と左岸の地域差についても今後右・左両岸単位の土器様相変化を詳細に把え、両者をすり合せて併行関係を十分に検討する必要がある（例えば、古相とした右岸の上直路遺跡と中相とした左岸の後沢遺跡の資料は上直路の古い要素の土器を取り除くと壺・甕・高坏の形態にほとんど変化がない訳で、両者が地域差を有しながらも時間的には併行する可能性が強いと思われる）。

このように今日示した流れについては補正・修正すべき点が多々あると思うが、これを敲き台として佐久地方の弥生土器研究を進め、更には古墳発生の諸問題についてもアプローチしていきたいと思う。〈その3〉では具体的資料に検討を加えて、編年図（弥生中期後半～後期終末）の編年表を作成を行う予定である。

尚、研究史を草するにあたっては大部分を宮下健司氏1981「箱清水式土器研究史」『箱清水式土器』を参考にさせていただいたことを文末ながら記させていただきます。

（1987、3、14～1987 12 、12）

第Ⅰ表　各編年案の比較（青木1984より一部改訂）

	桐原　健 1971	笹沢　浩 1977	太田文雄 1980	臼田武正 1980	青木和明 1984	小山岳夫 1987
弥生時代後期	箱清水Ⅰ式	吉田式	田草川尻Ⅰ式	佐久Ⅰ類（吉田）	第2段階（吉田）	吉田式 古相
					第3段階（吉田新か箱清水初）	吉田式 中相
		箱清水式		佐久Ⅱ類（箱清水Ⅰ式）		吉田式 新相
					第4段階（箱清水）	
	箱清水Ⅱ式		田草川尻Ⅱ式	佐久Ⅲ類（箱清水Ⅰ～Ⅱ式）	第5段階（箱清水）	箱清水式 古相
						箱清水式 中相
		御屋敷式（1983削除）		佐久Ⅳ類（箱清水Ⅱ式）	第6段階（御屋敷）	箱清水式 新相

新人類・旧人類の考古学徒

堤　　隆

新人類。この新しい人類進化のカテゴリー？に、いったい私は含められるのであろうか。

若者が、なにか大人たちに不可解な行動をとったりすると、「新人類の考えていることはわからない」とやられてしまうのは確かである。

さて、若者一般のことは別として、考古学徒の気質も一昔前と今とでは大きく変わっているような気がする。

ドテラに下駄・長髪・無精髭、「このあいだ久し振りに風呂に入ったよ」などという。大学にもいかずに現場にいりびたっている。そんなイメージが旧人類の考古学徒にはある。勿論、発掘で貰える金などあてにしていない。

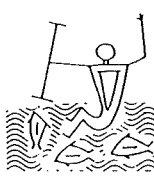
一方この頃は、その格好も比較的こざっぱりとしているし、「考古学は学生のあいだだけ、卒業すれば、かたぎの商売につきます」という。大学の授業にもきちんとでて、留年するようなヘマはしない。発掘は率のいいアルバイトでもあると考えるものもいる。

もっともすべてがすべてこのように割り切った人たちばかりではあるまいが。

なにか後者に対して批判的になってしまう私は、やはり旧人類的なのであろうか。

藤森栄一の「かもしかみち」がバイブルだった。喫茶店の片隅でティッシュペーパーを何時間も丸めて縄文原体を作っていた。壊されゆく遺跡を去るとき歌った考古学エレジー。

やはりあの時代は、もう、「懐かしい」という言葉でしか表現されないのであろうか・・・・・・。



——身近な話題——

200字短信

藤沢平治

今年度佐久市に於いて、長年の課題であった考古物件の指定が成された。これは画期的な事であり、私共考古研究者にとっては実に喜ばしい限りである。史跡としては、後沢遺跡の埋土保存された周溝墓・住居址、出現期の古墳である瀧の峯古墳群、出土遺物として北西久保遺跡出土埴輪群、周坊畑B遺跡周溝墓出土土器群、中道遺跡出土奈良三彩及び和同開称、東一本柳古墳出土遺物、上直路遺跡出土銅釧及び土器群、瀧の峯古墳出土遺物、後沢遺跡焼矢住居址出土遺物が佐久市指定文化財として文化財保護審議委員会に於いて認定された。

倉見　渡

私は今年、望月町大谷地に所在する平石遺跡の発掘調査に参加しました。この発掘では中期から後期の住居址が三十数軒検出され、完形の土器は100個体以上におよぶ。また工房址的な場所より、山形文・貝殻文・格子目文といった縄文早期の押型文が500～600片出土しています。表土が厚くて床面が確認されなかったことが残念である。また遺物量の多さには驚くばかりである。是非皆様、土器を見学に来て下さい。

掛川祐次

掛川です。22才になりました。今のところ仕事が忙しくてなかなか例会にも出席できませんが、新聞・テレビ等で見る考古学のことや、通信で皆さんの文章を読ませて頂いて、自分が発掘に出ていた高校時代を想い出し、なつかしく思っています。

岩村田高校社会班は今どんな活動をしているのでしょうか。それだけが今気掛りです。機会があったら皆さんの方からも是非指導してあげて下さい。

土屋忠芳

野辺山は周知のごとく、考古学にとっても動植物学にとっても宝庫でありました。ここに突然、観光業者らがスキー場や動物園、ゴルフ場など次々と現れ、今、三沢に次いで平沢パイロットの上、国鉄最高地点付近一帯に地ひびきをたててハッパが音をたてています。私は30面のテニスコートのすぐ下で細石器・ナイフなどたくさん見つけて、いつの日かこの上まで調査したいと思っていました。又ここはタルマイスゲの群生地でもありました。どうも日本人は金もうけの鬼となってしまったらしく、先日も私の隣で動物園のベンガルトラが射殺されましたが、ここの動植物また自然の破壊による終焉をつくづく考え感無量でした。また変転の1986年を終わりました。

事務局より

● 第一回長野県旧石器文化研究交流会が開催されます。

1　期　日　　4月9日（土）、4月10日（日）。
2　場　所　　諏訪市　湖泉荘（予定）。
3　費　用　　1万円程度（懇親会費用込み）。
4　受　付　　堤　　隆　☎　0267-68-3696まで。

▷編集後記◁

通信44号をお届けいたします。今号は、羽毛田・堤の他、特別編集員として小山が加わり編集にあたりました。

今回は、東海大学文学部講師の織笠昭氏に石器に関する玉稿を、また長野県史刊行会の宮下健司氏には佐久地方の土偶に関する玉稿をいただき感謝します。

さて、新しい年を迎え、会員の皆様はどのような目標・希望・夢を心に刻んだでしょうか。冬なのか春なのかわからない陽気が続いています。暖かいのは果たして良い事なのでしょうか。身体に充分気をつけて、新しい一年頑張りましょう。事務局に原稿をどしどしお送り下さい。　　（羽毛田・堤・小山）

佐久考古通信　No.44号

発行所　佐久考古学会
南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
☎（0267）92－3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・花岡・堤
羽毛田・小山

印刷所　ほおずき書籍（株）

佐久考古通信

佐久考古通信　No.45号
1988．8．1
佐久考古学会

目　　次

昭和63年佐久考古学総会報告……小山　岳夫……1
——寄稿　昭和63年度総会記念講演要旨——
千曲川流域の縄文から弥生へ……石川日出志……2
男女遺跡の旧石器
——寸田政親氏採集資料について——……伊藤　憲子……4
考古学事始め二碑……白倉　盛男……6
——昭和61年度例会研究発表より——
弥生時代以降の所謂「ベッド状遺構について」　—分布の概要—……篠原　浩江……8
——昭和61年度例会研究発表より——
佐久地方における弥生時代の石器について　—その1—……羽毛田伸博……10
昭和63年度新役員紹介……事　務　局……12
考古学と自然科学のはざま？……堤　　隆……13
200字短信　——身近な話題——……各　会　員……14
事務局より……事　務　局……14

昭和63年度佐久考古学総会報告

事務局総務幹事　小山　岳夫

昭和63年度佐久考古学会総会が、昭和63年5月14日午後1時より小諸市文化センター第一講義室において開催された。

黒岩副会長による開会のことばに続き、由井会長による挨拶がなされた。高村会員による日程説明のあと、議長に倉見渡氏が選出され、議事に入った。

第一号議案、昭和62年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件は、井出・小山・井上会員報告の後、会員諸氏の承認を受け、通過。

第二号議案、役員改選の件は、新役員選出委員に倉見議長が、佐藤・井上・佐々木（宗）会員を指名した。委員による10分間の検討の後、新役員名簿が提出、発表され、会員諸氏の承認を受け通過した。

第三号議案の、昭和63年度佐久考古学会事業計画・会計予算承認の件も、井出・小山両会員報告の後、会員諸氏の承認を受け通過した。

三つの議案がスムーズに通過し、議長が退任、白倉副会長による閉会のことばで総会が締められた。

引き続き、佐久考古学会主催の講演会が行われた。講師には明治大学講師石川日出志先生が迎えられ、「千曲川流域の縄文から弥生へ」という演題で講演がなされた。総会開始時は集まりの悪かった会員諸氏も、講演会開始直前になると続々と駆け付け、拝聴者は三十余名を数えた。

講演に先立って小山によって講師の紹介がなされ、講演にうつった。

まず、汎日本的視野からみた縄文から弥生時代に移り変わる土器組成の各地域毎のあり方を概観された後、長野県千曲川流域における縄文から弥生の土器の特色を浮き彫りにされた。その上で石川先生が該期の千曲川水系の土器の他地域への移動に注目し、周辺地域との交流についても言及された。また、先生は該期における石器にも注目され、遺跡の立地によってその組成に差が認められることから、当時の食料生産に台地形と低地形があることを想定された。

このように石川先生の講演は、当時の文化内容に多岐にわたって鋭く論及されており、資料的制約もあって該期の研究が著しく立ち遅れた佐久地方の研究者にとっては、大いに参考になり、また、今後の課題を与えて頂く恰好の機会となった。最後に由井会長より謝辞が述べられ、講演会が閉じられた。

講演終了後、花屋ホテルにて懇親会がもたれた。

——寄稿・昭和63年度総会記念講演要旨——

千曲川流域の縄文から弥生へ

石川日出志

1　はじめに

現在の考古学界の動向を見ると、食料を主に自然の恵みに求める縄文時代から稲作などこれを主に自らの手で作り出す弥生時代へとどのように移り変わったかが、重要な研究課題となっている。最近でも、東北地方で従来よりもはるかに早く稲作が始まったとの見解が発表されて、盛んに議論されている。東北ほど華々しくはないが、中部・関東地方でもこの問題についての論議が高まってきている。本日はその成果について千曲川流域と長野県域を中心に考えてみたい。

長野県域を考えるとき、まずその特徴的な地形環境に留意しておく必要がある。長野県域はいうまでもなく中部地方の中心部に位置し、日本海沿岸・飛騨・伊勢湾沿岸・太平洋沿岸・関東地方など四周の地域と河川や峠を介して繋がっている。また県内をみると、険しい山塊によって善光寺平・佐久平・松本平・諏訪盆地・木曽谷・伊那谷などに分割され、さらに耕地ということを考えるとき各々の土地条件が一様ではないことに気付く。これらはそれぞれ個性的な地域社会を形成しつつ、相互に交流しながら発展していることの背景をなしている。食料採集から生産へという変化が進行したこの時期を考えるとき重要な点である。

2　土器の組合せの変化

採集から生産へという食料内容の変化は調理具や食器の変化をもたらした。当時の代表的な容器である土器は用途に応じてその形を作り分けられているから、土器の形の組合せの変化のなかに食料内容や調理法の変化を窺い知ることができる。

縄文時代の土器の組合せは、時期・地域ごとに変化があるものの煮炊き用の深鉢を主体とし、西日本の晩期ではこれが80%内外、盛り付けなど用の浅鉢が20%内外となっている。一方、弥生時代にはこれが大きく変化して、貯蔵用の壷と煮炊き用の甕が相半ばし、これに盛り付け用の高坏が加わるという組合せとなる。この変化は朝鮮半島のなどと連動したもので、西日本では稲作開始以後一・二段階を経て急速に成し遂げられたが、東日本ではこの変化が東へいくにしたがって緩慢になることが知られている。

長野県域で弥生時代的な土器がみられ始めるのは晩期末の氷式土器の段階からで、松本市石行・茅野市御社宮司・小諸市氷の各遺跡の資料を見ると、伊勢湾沿岸地域からの直接・間接の影響を受けて大形の壷が出現し、煮炊き用土器も口縁が直立する深鉢から口縁外反の甕に置き換わっている。氷期に続く弥生時代前期には松本市針塚や伊那谷の宮田村苅谷原遺跡では縄文時代以来の浅鉢が消えて、西日本的な壷と甕の組合せになっている。ところが群馬県域の同時期では、壷と甕の組合せが成立しながらも、浅鉢と深鉢はなお明瞭に存続している。両者の中間地域である千曲川流域ではこの時期のまとまった資料がないため不詳だが、氷遺跡などでは浅鉢が少量残っている。群馬県域でも浅鉢がほぼ消滅するのは弥生時代も中期はじめになってからである。つまり、長野県域における縄文／弥生の土器の組合せの変化は伊勢湾沿岸地域に一段階遅れ、群馬県域よりも一段階先んじていたといえよう。

3　千曲川流域の縄文／弥生の土器

次に、千曲川流域の縄文時代晩期から弥生時代中期までの土器の実際をみて、また周辺地域との関わりもみることとしよう。

晩期後半は、佐野Ⅰ式に由来する粗大工字文が特徴的な佐野Ⅱ式土器がみられる。佐野Ⅱ式は長野県域から新潟県域の一部に分布する型式で、この時期には中部・関東各地で地域差が激しい。千曲川流域では丸子町深町遺跡に好例がある。

小諸市氷遺跡を標式とする晩期末の氷式土器は、網目状の浮線文のある浅鉢が東北地方の大洞A式土器の影響下に出現したのに対して、甕は伊勢湾沿岸の五貫森式土器はじめ西日本の刻目突帯文土器の影響を受けて成立した。この土器型式の成立事情からわかるようにこの時期には中部から東北地方南部までよく似た兄弟型式が分布しており、前時期とは対照的で、そこに大きな変化をみることができる。

弥生時代前期から中期初めにかけては美濃・三河・遠江などの方面の条痕文土器の影響が著しい。臼田町月夜平・佐久町上ノ原・佐久市月明沢の各遺跡に好例があり、在地的特徴を持つもののよく彼地の特徴を伝えている。一方、真田町唐沢岩陰の縄文ある土器や丸子町腰越・佐久町館遺跡の土偶形容器の諸特徴は来た関東方面と共通する点が多い。

中期中頃になると伊勢湾沿岸方面の櫛描き文土器の影響であろうか、壷の胴部紋様が狭横帯化・多段化にする傾向が顕著となる。長野市伊勢宮遺跡にまとまっているほかは断片的で、唐沢岩陰・戸倉町八王子遺跡などがある。佐久市町田遺跡の筒形土器2点は底に布の圧痕があり、戦前に八幡一郎先生が弥生時代に布がある証拠として注目された有名な土器で、あるいは中

期前半にまで溯るかもしれない。

縄文晩期氷期からこの段階までは隣接地域との共通点が多い。またこの段階は、長野県域北部の地域色著しい中期後半の栗林式土器成立の基盤が築かれた時期でもあり、大きな時代の変化をみることができる。

4　周辺地域との交流

その地形的な特徴などから周辺地域との交流を示す土器の実例も多い。

長野県域→周辺地域の例：氷式土器の浅鉢は三河・美濃の条痕文土器の樫王式土器に伴う実例が多く、彼地で急減した浅鉢を補完したかにみえる。氷式は信濃川ルートで新潟方面へも移動し、長岡市藤橋遺跡で浅鉢、遠く豊栄市鳥屋遺跡でも小形深鉢の例がある。糸魚川市大塚遺跡では弥生前期の条痕文土器のなかに長野と酷似する例がある。また時代は下がるが、栗林式土器は信濃川沿いに分布を拡大して下流域や柏崎市下谷地遺跡でも北陸系土器に共伴し、さらに最近では石川県内でも確認されている。関東でも栗林系土器が栃木県内にまでみられる。また、飛騨にも散見される。

周辺地域→長野県域の例：前項で一部触れた。

長野県を経由した例：三河・尾張方面からは、前期の水神平式・遠賀川式土器は新潟・群馬方面へ、中期初めの岩滑式はさらに遠く福島方面にまで伝えられている。これらは故地の例と寸分違わぬ搬入品とみられる例から文様の一部に違いのある模倣品とみられ例までもある。また同時期に逆方向の実例もある。いずれも長野県内にも類例があってこの地を経由したことが確実である。また、中期中頃には北陸から関東への流れもある。埼玉県行田市池上・小敷田遺跡では北陸の小松式とよく似た櫛描き文土器が壷・甕とも数個体ずつみられる。これは千曲川ルート経由であろうが、当地域ではこの時期の資料が著しく少ないために類例が見当たらない。今後の発見に大いに期待したいものである。

以上のように、縄文晩期末から弥生中期にかけて長野県域を経由して、広い地域を舞台とした地域間交流が繰広げられたことが分かる。

5　食料生産の低地型と台地型

弥生時代といえば誰しも水稲耕作の開始を考える。しかし、弥生式時代遺跡が発見されたからといって、それが直ちにその地での水稲耕作の実施を証明しているわけではない。食料生産を開始したといっても、その内容は一様ではないだろう。

濃尾平野の弥生時代、特に中期の遺跡を見ると、愛知県朝日遺跡のように水稲耕作に用いる木製農具製作用工具類が多数揃っている遺跡と、犬山市上野遺跡のようにこれが著しくしくなく、石器の多くが土掘り具の打製石斧と石鏃という遺跡とがある。前者は低地部に立地する例が典型的なので台地型と呼んでおく。これは各遺跡の食料生産の内容をある程度反映しているとみられるが、固定的なものではなく台地型から低地型へと発展することがあったように思われる。つまり当時の食料生産は、各集落の土地条件や農耕技術レベルに応じて様々な姿をみせていたのではないだろうか。

こうした石器群内容にみる2者は、長野県の弥生時代遺跡を考えるときに示唆的である。南信と中・北信とでは弥生時代の石器群に違いがみられるということは、すでに戦前から知られていたことである。伊那谷は扇状地性の段丘が発達したその土地条件からわかるように、弥生時代をとおして台地型の存続した地域である。最近、上郷町南条棚田遺跡では弥生中・後期の水田址が発見されたが、この遺跡は飯田地区でも最下段の低地部に位置しており、伊那谷で数少ないまとまった水田造成の可能な地区のようである。

一方、中・北信は河川沿いに自然堤防が発達している。石器群の内容を細かな時期ごとに追跡出来る好例に乏しいが、松本市こぶし畑・長野市伊勢宮遺跡などの例からみると、弥生時代中期中ごろまでは台地型、それ以後は低地型に変化していくのではないかと思われる。戦前から気付かれていた南信と中・北信との石器群の違いとは、実は中期中ごろ以後の石器の違いが反映したのではないだろうか。

つまり、長野県内では弥生時代初めには台地型で示されるほぼ一様な内容であったものが、中期中ごろ以後は各地の土地条件の違いによって、食料生産の内容はずいぶんと違った姿を見せていたのではないだろうか。

6　墓の移り変わり

縄文／弥生移行期には墓制も急激に変化を見せている。長野県域を含めた中部地方では、縄文晩期中頃までは伊那市野口遺跡などのように配石遺構を伴う集合墓地が顕著である。晩期末頃の墓の実際は不詳だが、弥生時代前期・中期初めには松本市針塚・佐久市上ノ原遺跡のように関東・東北南部と同様の再葬墓がみられる。しかし、中期初めにはすでに新しい埋葬法である木棺墓が出現していることが駒ヶ根市大城林遺跡で確認できる。再葬と、一次葬である木棺墓が同じ地域・集落で共存したかどうかは現在までのところ知りえないが、興味ある問題である。最近長野市塩崎遺跡群伊勢宮地点でもこの種の木棺墓が集中的に発見されて話題となったが、これは中期の前半から中ごろにかけての実例であった。この時期は墓制上でも大きな変化のみられることは重要である。（この項は当日十分触れられなかった。）

以上、食生活・地域交流・食料生産・墓などについてみてきた。的確に検証されていない点も少なくないが、これには今後の資料を待つほかない。

——寄稿——

男女倉遺跡の旧石器

——寸田政親氏採集資料について——

伊藤　憲子

1．経緯と概要

男女倉遺跡と言えば周知の通り、一般国道142号線（中山道）のバイパス工事のため49年７月から11月までと、昭和50年５月から７月まで行われた発掘調査が著名である。今回紹介するに至ったこの資料は、その発掘調査以後の昭和52年～昭和54年までの期間に、現在小諸市在住の寸田政親氏により表採されたものである。

氏によれば、採集地点は下の地図にスクリーントーンで示してある部分で、幅２m程の小河川の川べりの丘がパイロットファーム事業によって掘り起こされた際に黒耀石群が露出していたということであり、この地点は見てもわかる様に男女倉遺跡のＡ地点に隣接している。男女倉遺跡群の貴重な資料であると考えられるであろう。

資料総数は1,319点で、そのうち黒耀石でないものは安山岩１点、緑泥変岩２点、チャート２点、赤チャート１点、玄武岩５点の計11点で、残りの1,308点は全て黒耀石である。器種内容も多彩で200点余りは紹介すべきものと見うけられるが、今回はその極々一部しか紹介出来ない事を了解されたい。

2．資　料（全品黒耀石）

遺物番号0033番——縦長剝片を斜めに切断し、右側縁と左側縁に加工が見られる二側縁加工のナイフ形石器。

遺物番号0035番——縦長剝片の右側縁上部に加工の見られる一側縁加工のナイフ形石器で、素材打面は打面調整を有する。

遺物番号0104番——縦長剝片の左側縁上部に加工の見られるナイフ形石器。先端が折れている。

遺物番号0103番——縦長剝片素材で、基部２ケ所に折れがあり、左側縁に加工の見られるナイフ形石器。先端部も欠損している。

遺物番号0034番——自然面を左側面に残し、縦長剝片の両側縁に加工の見られるナイフ形石器。

遺物番号0036番——自然面を右側面に有し、縦長剝片の両側縁に加工の見られるナイフ形石器。

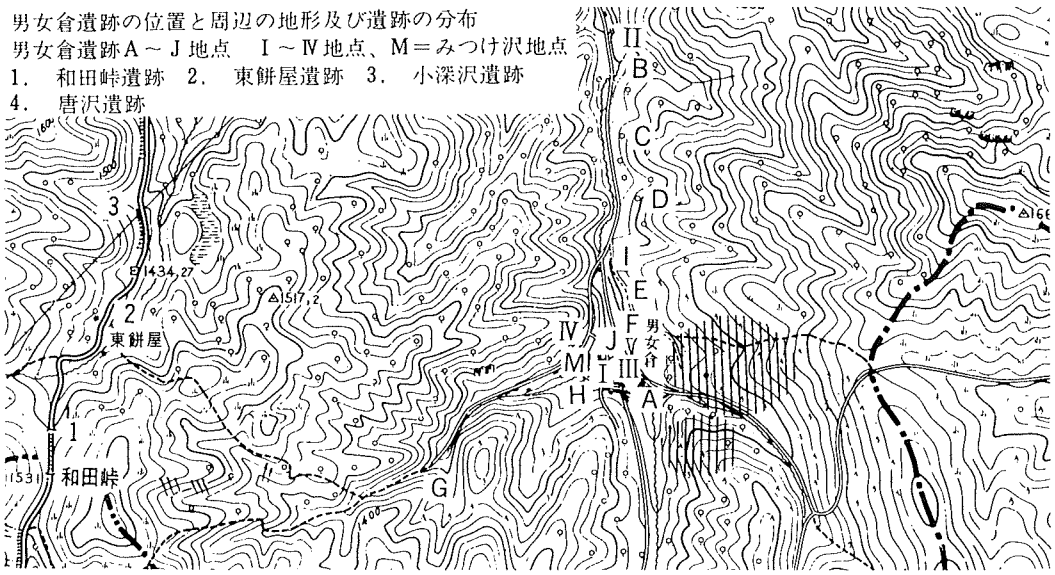
遺物番号0197番——自然面を打面とし、正面より石刃を剝離している角礫素材の石刃石核。

遺物番号0172番——こぶし大の礫の表裏二面に渡り異なった剝片剝離のあり方が見られる。縦長剝片剝離の打面には打面調整が見られる。

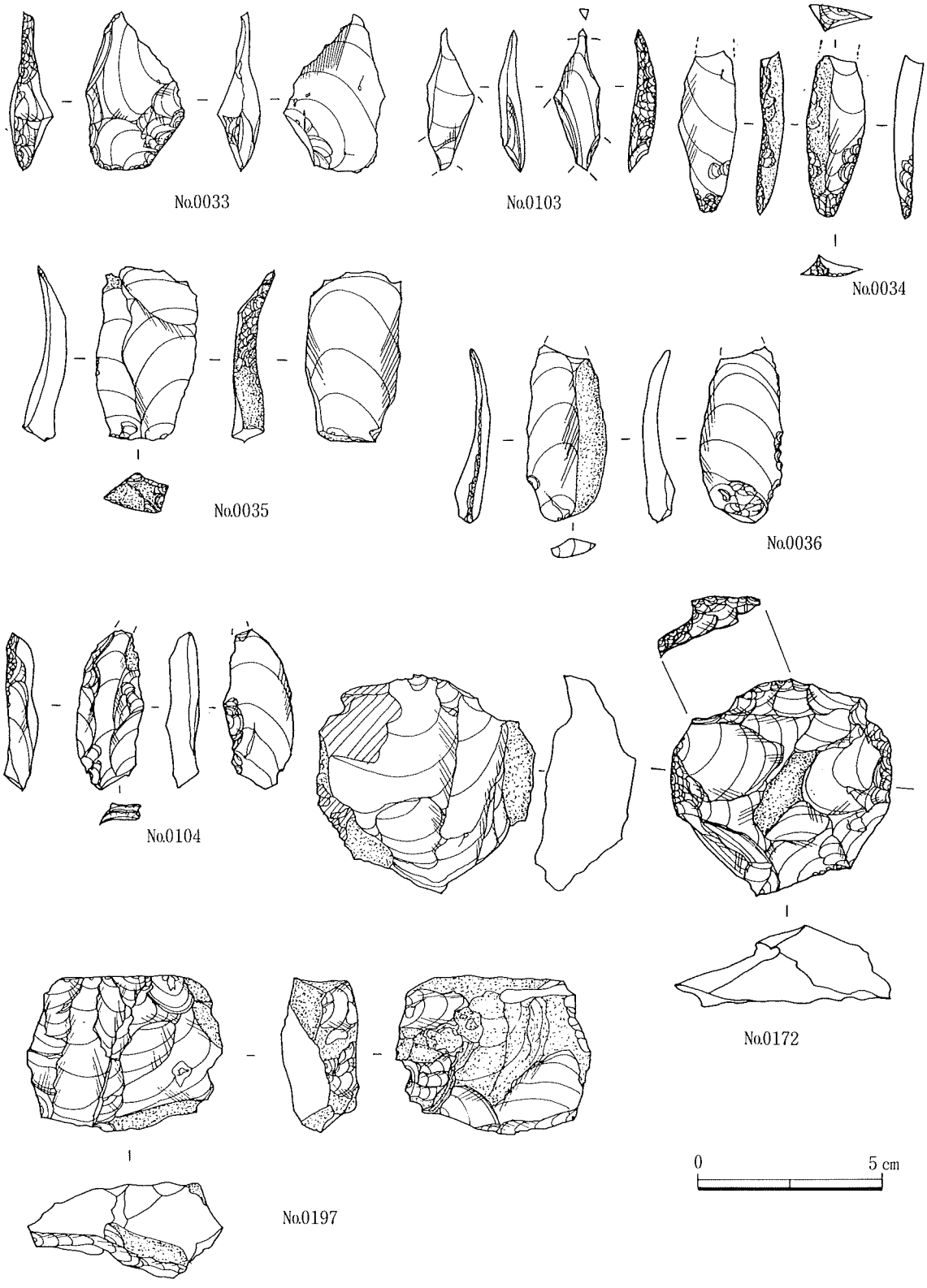
3．おわりに

末筆ではあるが、遺物を借与して下さった寸田政親氏に心から謝意を表したい。（尚、氏に了解を得たので住所をここに載せていただく。〒384　小諸市甲3901-6）並びに堤隆氏の協力にも記して謝意を表したい。

（御代田町文化財資料室）



第１図　男女倉遺跡群と資料採集位置（スクリーントーン）



第２図　ナイフ形石器と石核（３：５）

考古学事始め二碑

白倉　盛男

その一　大森貝塚の碑

アメリカの生物学者Ｅ・Ｓ・Morse（1837—1925）は自分の研究テーマの資料（腕足類—シャミセンガイ・ホオヅキガイなどの貝類）を求めて明治10年６月19日来朝し、横浜から開通したばかりの東京新橋行の鉄道に乗り異国の風景に眼を見はっていた。大森駅を過ぎた沿線の切割り地層断面を車窓から眺めていた彼は点々と白い貝類が埋まっているのに注目し、故国での体験からあの付近には先住民族の貝塚が分布しているのだろうとの確信を得た。

彼の人柄と学識の深さから新しく開校した東京帝国大学校理学部生物科動物部門の御雇初代教師に招請され専門の生物学は勿論のこと、人類学・考古学の基礎を築き、多くの弟子を養成し、偉大な功績をわが国に残した人である。その顕著な一つが大森貝塚の発見と、その科学的究明である。その年の10月学生を率いて大森貝塚の発掘調査を実施して、大貝塚の中からおびただしい多くの貝類化石と縄文時代後期・晩期の土器石器の破片と完形品をも発見した。これがわが国に於ける学術的（生物学・考古学）発掘調査の最初であり先鞭であった。計画的化石発掘・考古学の縄文式土器文化研究の第一歩がここからはじまった。

この成果は1879年東京大学理学部英文紀要第一集Shell mound of Omoriとして公刊されている。

Morseは明治12年帰米したが東京帝大理学部生物学科第一・二回卒業生の佐久木忠治郎・岩川反太郎・石川千代松等数え児が中心となって毎日新聞社の本山彦一翁の協賛によってMorseの学徳賛美のために昭和４年５月26日建立したのが大森貝塚の碑で現在も立派に学史を飾っている。

日本考古学創生記念事始めの碑である。

（古いフィールドノート　昭和25年・４・15日誌より）

その二　石器使用人民棲息ノ趾

坪井正五郎先生は明治17年３月東京本郷弥生町東京帝国大学構内の工事現場で土器を発見し、弥生式土器と命名した。同年10月12日、日本人類学会第一回集会を開催し、明治21年４月には東京理科大学の助手拝命活躍を続け、明治22年には人類学研究のため文部省からイギリス留学を命ぜられて、明治24年10月24日帰国した。

理科大学（後の東京帝大）が人類学科を正式講座としたのが明治26年９月で坪井先生が教授となり、東京人類学会でも指導的立場で活躍を続けていた。その中で長野県の石器時代についても深い関心を示し“信濃の石器時代遺跡”を東京人類学会第19例会で発表している。これは当時同学会会員に本県の阿部恵吉（佐久人）・岩附玄祥・唐沢貞次郎・中野真筋・山崎重四郎・松林清太郎氏等が入会しており調査資料を提供していたのによったものであろうと考えられている。

明治29年８月20日に坪井は南佐久郡中瀬村和田上遺跡（現佐久市瀬戸和田上）を帝国大学の命を受けて自

第１図　大森貝塚の碑（白倉スケッチＳ25．４．15）

第２図　坪井正五郎の碑

ら調査し、引続き更級・埴級郡の調査を拡げ、その結果を同年10月４日には東京人類学会第119回例会において「信濃の石器時代遺跡」と題して発表している。

その時の坪井東京帝大教授の調査記録を後世に残し、研究遺跡の保存を計ろうとしたのが和田上遺跡古墳上に立つ“石器使用人民棲息之趾”（たて約220cmはば約120cm）の大碑で題額本文共に坪井正五郎自身の撰によるものである。文中の青木造氏は瀬戸部落在住の神職、書の堀籠好雄氏は野沢町大伴神社の神職で、ともに当時佐久地方郷土誌の研究家である。

奇しくも佐久に於ける否長野県に於ける考古学事始めの碑である。

本碑の全文を以下に紹介し筆を置きたい。

（本学会副会長）

第３図　石器使用人民棲息之趾の碑文

佐久考古通信原稿募集！

- 佐久考古通信では、会員の皆様からの原稿を募集しております。
- 原稿執筆の際は、あらかじめ編集委員にご相談下さい。限られた紙面のため、原稿の分量をご相談させていただきます。
- 編集の関係上、通信専用の原稿用紙でご執筆ください。専用原稿用紙は、編集委員が差し上げます。

——昭和61年度例会研究発表より——

弥生時代以降の所謂「ベッド状遺構」について

——分布の概要——

篠原　浩江

1　はじめに

弥生時代以降のベッド状遺構については、機能、用途、意義等が先学より論ぜられているが、今日の急速な土地開発に伴う資料増加の中で、資料集成見直しの必要性を感ずる。そこで此処では、河野眞知郎氏の集成（「初期農耕集落の解明―ベッド状遺構の再検討―」『CIRCUF-PACIFIC』Ⅰ 1975）に、見知し得る限りでは増加資料を加え、ベッド状遺構の概要をまとめてみたい。

2　ベッド状遺構検出例と分布

ベッド状遺構を検出する遺跡は、地方史誌、新聞、雑誌、遺跡調査報告書等を情報源とし、その数は132遺跡であり、棟数に関しては不明なものもあり、釈然としないが少なくとも225棟を上回る（第１表）。

これらは南九州から南東北にかけて分布しており、西南諸島及び北海道にその存在は認められない。そして、北九州地方と関東地方に濃い分布が認められ、中部高地にも、やや集中化の傾向にあることが指摘できよう（第１図）。河野氏はかつて、関西ではベッド状遺構はかなり普遍的であると指摘されている（河野1975）。確かに西日本では一時的に５棟以上検出される例は東日本に比して多い。然し概ね１～３棟に集中する傾向に在り、むしろ播磨大中、吉田、沈目、西中ノ沢、堂地東の各遺跡は特異例と観るのが妥当であろう。特に西中ノ沢遺跡では検出された住居址全てにベッド状遺構が敷設されており、注目したい点である。また、土器編年細分化に伴い、それぞれが同時に機能していたのではなく、僅かずつ時期差を持つ例も出て来るであろう。

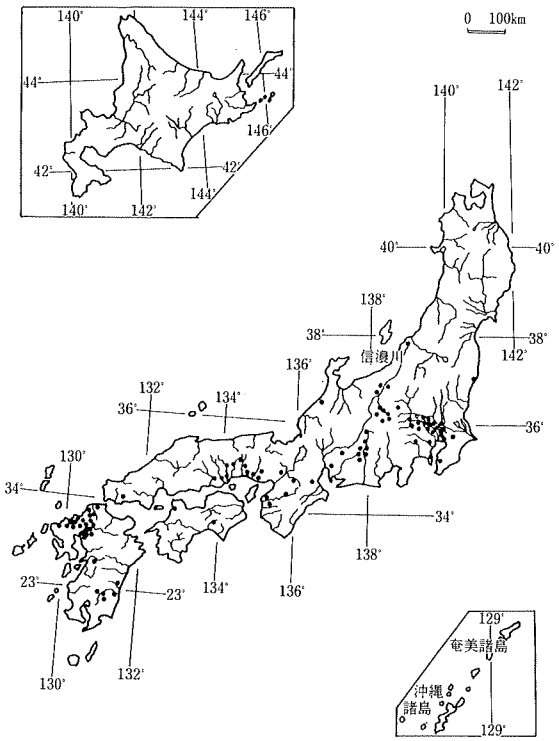
時期的分布は、弥生時代中期を初現とし、弥生時代後期に最盛期を迎え、平安時代に終焉を迎える（第２図）。これらを弥生時代と古墳時代にそれぞれ前・中・後の三期区分し、そこに奈良・平安時代を加えた計七期区分した各地の傾向をみてみたい。

ベッド状遺構初現期である弥生時代中期例は、関東地方、中部地方、近畿地方に認められ、一見して同時多発的に見える。しかし、この中で大阪府高槻市所在の天神山遺跡例はその所産期が畿内第二様式で最も古く、それ以外は現在の処弥生中期も後半に位置付けられるものである。ここで近畿地方の在り方を観ると、弥生時代中期例は他地方に比してやや多くもあり、近畿地方にベッド状遺構初現地を求めることも可能であろう。

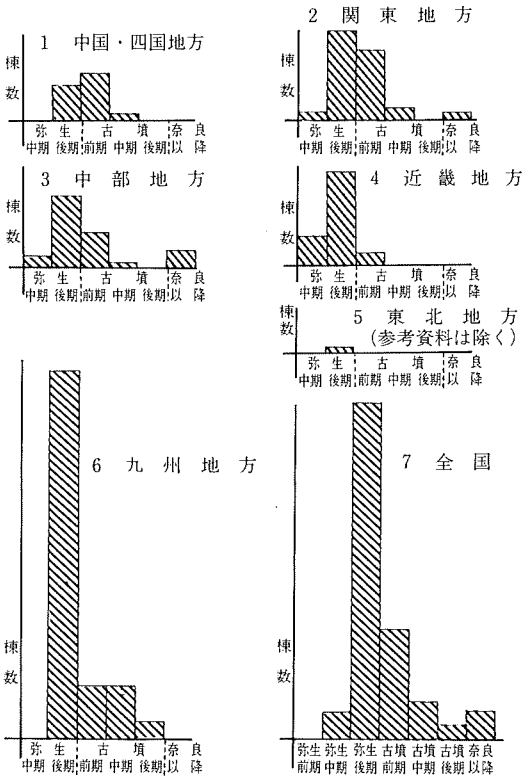
次に最盛期であるが、これにはどうやら二通りの在り方が認められそうである。一つには、弥生時代後期に最盛期を持ち、次期の古墳時代前期との差が大きいものである。この傾向に在るものに中部地方・近畿地方・九州地方が挙げられる。特に九州地方に於いて、その傾向は顕著であり、しかも弥生時代中期例が未だ発見されず、後期に爆発的な現れ方をしたかと思うや

第１表　ベッド状遺構検出遺跡一覧表

県	遺跡名	時期（棟数）
福島	八幡台	弥・後（1）
神奈川	鴨居上ノ台	古・前（1）
	峯遺跡群	弥・後（1）
	手広八反目	弥中(1) 平(2)
	野川南耕地	古・前（1）
	林天神	弥後(1)古前(1)
埼玉	篭田	弥・後（1）
	霞ヶ関	弥・後
	上組	古・前（1）
	雉子山	弥・中（1）
	五領	古・前（1）
	桜山	弥・後（1）
	下手	古・前
	下加南	古・前（2）
	白幡本宿	古・前（1）
	附川	古・前（1）
	屋田	弥・後（1）
	吉野原	弥・後（3）
	楽上	弥・後（1）
	畔吉	古・前（1）
	尾山台	古・前（1）
	北袋	弥・後（3）
千葉	大篠塚	古・中（1）
	諏訪原	古・前（1）
	殿台	弥・後（1）
	宮崎第一	古・前（1）
	小室町	古・中（1）
千葉	岩板大台	弥・後（2）
	我孫子中学校	弥・後（1）
	堂ヶ谷戸	古・前（2）
東京	道灌山	弥・中（1）
	成増一丁目	弥・後（2）
	宇津木	弥・後（1）
新潟	狐崎	古・前（1）
石川	塚崎	古・前（1）
岐阜	大日向	古・中（1）
三重	新畑	古・前（1）
	東日野	古・前
長野	上直路	弥・後（1）
	北西ノ久保	弥・後（2）
	北原	弥・中（1）
	酒屋前	弥・後（1）
	座光寺原	弥・後（1）
	下小平	弥・後（1）
	月夜平	弥・後（3）
	堂垣外	古・前（1）
	平柴平	弥・中（1）
	蛇塚野馬窪	平（1）
	的馬	弥・後（1）
	三輪	古・後（1）
	野火付	平（1）
	宮渕本村	弥・中（1）
	三間沢川左岸	平（1）
	タタラ堂	弥・後（1）
長野	腰巻	古・前（1）
大阪	天神山	弥・中（1）
	東山	弥・後（1）
兵庫	播磨大中	弥・後（2）
	東溝	弥中(1)後(1)
	立岡	弥・中（1）
	名古山	弥・中（1）
和歌山	市脇	弥・中（1）
	北田井	弥後(1)古前(1)
	西庄地区	古・前（1）
	吉田	古・前（6）
岡山	赤野	古・前（1）
	岡原	弥・後
	雄町	古・前（5）
	天神原	弥・後（2）
	鎌倉山	弥・後（1）
	小中	弥・後（1）
	二宮大成	弥・後（1）
広島	大久保	古・前（1）
山口	北迫	弥・後（1）
	吉田	古・前
愛媛	旗立	古・中（1）
高知	ヒヒノキ	古・前（1）
大分	宇土	弥中(1)後(2)古前(1)
熊本	沈目	古・中（6）
	宮山	弥・後（1）
福岡	有田	古前(4)中(2)
福岡	丸谷第一	弥・後（1）
	新田原	弥・後（2）
	裏山	弥・後（1）
	小群	弥・後（4）
	上棚田	古・後（1）
	上鎌子	弥・後（1）
	狐崎	弥・後（3）
	久原瀧ヶ下	古・前（1）
	久保長崎	弥・後（2）
	小原	弥・後（4）
	竹ヶ本	古・前（1）
	茶臼山	弥・後（1）
	西中ノ沢	弥・後（7）
	野口	弥・後（3）
	野黒板	弥・後（1）
	中川屋敷	弥・後（1）
	坊野	弥・後（1）
	道添	弥後(5)古前(2)
	宮の前	弥・後（1）
	向山	弥・後（4）
	湯納	古・前（1）
	門田	弥・後（3）
	弥永原	弥・後（3）
	柳ヶ谷	弥後(3)古前(2)
	八瀧	弥後(1)古前(1)
宮崎	祝吉	弥後(5)古前(1)
	大荻	弥・後（1）
	上示野原	弥・後（1）
	堂地東	弥・後（8）



第1図　ベッド状遺構分布図（弥生中期～平安）



第2図　ベッド状遺構検出数の傾向

古墳時代前期には激減してしまい、興味ある処である。

二つ目の在り方として、最盛期が弥生時代後期から古墳時代前期に渡るもので、中国・四国地方と関東地方が挙げられる。これらは、弥生後期と古墳前期との差が小さなものである。

その後、いずれも終焉に向けて減少の一途をたどるわけであるが、その傾向にしても、最盛期を迎えた二時期後に、プッツリと姿を消してしまうものと、少数乍ら奈良時代以降に継続しているものとがある。前者には中国・四国地方と近畿地方が挙げられ、まるで何かに抑圧でもされたかの様な戸切れ方をしている。後者例には、関東地方、中部地方が挙げられる。九州地方は古墳時代後期を最後に姿を消しては居るが、概ね後者例に包括されよう。

東北地方については、確実なものは福島県いわき市所在の八幡台の一例のみであり、傾向を語るには無理があり、今回は差し控えたい。

3　今後の課題（まとめにかえて）

ベッド状遺構の意義に関しては、和島誠一、金井塚良一両氏による階級性と結びつけより（「住居と集落」『日本の考古学』III　1966）、方形周溝墓の被葬者の住居（沢田大多郎「古墳発生前における社会」『考古学研究』14－1　1967）やシャーマンの住居（河野1975）と結びつけようとする一方、堅穴住居の居住空間変化における普遍的現象として考えるもの（田村晃一『我子系子中学校校庭遺跡』『我孫子古墳群』（1967）があるが、いずれにしても本稿で提示したような分布傾向を始め、出土遺物の傾向や集落内におけるベッド状遺構を二次限的位置の在り方等を考慮しながら、再検討をして行くべきである。

本稿は昭和60年度学士論文の一部を加筆修正したものであるが、当時、出土遺物や集落内傾向を検討した結果、ベッド状遺構を深く問い続けると、形而上学的な方向へと進まざるを得なくなった。今後も更に多角度からの検討を重ねて行くつもりであるが、やはりほぼ同様の方向へと進むであろう予察を抱いている。それだけに、まず形而下にあるものを固める必要性を感じ本稿では、分布傾向について紙面の許すかぎりでまとめてみた。何分にも若輩者故、至らない部分は多いが、先輩方の御指導、御指摘をいただけたら幸いである。

末筆であるが、本稿を草すにあたり、未発表資料を快く御提供下さった、松本市ならびに東部町教育委員会に感謝いたします。また、卒論作成時の資料収集に御尽力頂いた、永井哲雄、赤石光資、田中広明各氏にこの場をお借りして感謝の意を表します。

（佐久埋蔵文化財調査センター）

——昭和61年度例会研究発表より——

佐久地方における弥生時代の石器について

—その1—

羽毛田伸博

1　はじめに

一応弥生時代を地域差はあるが、BC3C～AD3Cととらえ、世界史的な視野に立ってみれば鉄器時代に入っている。又、前時代の青銅器時代は日本においては、縄文晩期まで以前として新石器時代であった。この世界史の流れの中では停滞性の強い日本で、弥生時代になると稲作栽培と共に時代の先進地である中国・朝鮮半島から種々の技術が伝播してきた。ここにおいて、弥生時代は汎世界史的流れの中の青銅器時代を飛び越して、石・青銅器・鉄器の併用される独特の時代が開始した。朝鮮[1]半島においてはBC7C～BC6Cに青銅器時代に入り、BC4C～BC3Cには鉄器時代に入っており、中国[2]においては帝国統一時代（秦・漢）であり、周辺へと中国文化が強い影響力をもって波及している時代である。この現象の中に日本の弥生時代も組み込まれたものと考えられる。縄文時代の約1万年間、日本人の知性と感性は実質的な技術の向上、つまり機能追求に勢力を向けず、造形上のデコレーションを求めたことは、世界の原始美術に共通している造形感覚であり、調和統一、完結とは相反する、反現代感覚である。その代表が縄文土器であったと考えられる。この様なことを考えると、弥生[3]時代は現代日本人の抱えている諸問題の初源が含まれている時期と考えられる。

2　縄文時代と弥生時代の内在する文化の差

文化の差は政治・経済・宗教・環境等の違いが大きく比重を占めるものであり、これを研究するには、多方面の学問を総合しなければならないのであるが、人間の残した僅かな遺構・遺物をもって追求する考古学の、その出土遺物の中の石器に限って追求してみようと思う。その理由として、従来研究上、特に弥生時代においては土器偏重の傾向が強く、土器編年がある程度出来た今、石器は直接的に生産性にかかわる道具であり、土器に比べ加工の困難なことは、逆に変化するときは土器以上に外的要因が強く、政治・経済・宗教環境等が大きく変容した時と考えられるからである。又、抽象的に典型的な弥生石器（磨製石鏃・磨製の太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・抉入片刃石斧・石包丁等）だけで弥生文化を代表する石器とはできないからである。尚、特殊な石器の分布・石材から流通経路・文化圏を知る手掛かりになると思うからである。

3　弥生時代の道具の材料（石・青銅器・鉄器・木製品等）を通した流れ。

このことを考える時、縄文時代の道具の組成を充分に考慮に入れなければいけないと考えられ、これは、大陸からの伝来・縄文からの継承・弥生文化固有の発達等を知る手掛かりと共に縄文時代の内包する技術力を知る手掛かりになるかと思われる。又、弥生時代の狩猟採集から農耕、食用家畜の導入（弥生時代において、飼育技術の欠落は日本独特のものであり、車の未発達にも通じ、古墳時代にまで待たなければならず、これは何に起因するか今後の問題。）に深く関係があると思われ、又、機織りの技術、ガラスの技術、漆の技術等も考慮に入れることは、次期古墳時代に移行するための産業革命の時代とも言えよう。

4　弥生時代の石器に関する考古学的調査の問題点

地域の石器を見た時、ある程度石材[4]が限定される傾向があるので、遺構内の覆土を注意深く観察することであり、石器が存在しなくても、破片・剝片・砕片によってある程度石器の復元が出来るからである。又、実測図において細部における観察（問題意識をもった）が図に表現されず、図が個性的になりやすい点も注意した。

5　佐久地方における弥生時代の石器の出土例

小山[5]岳夫氏が佐久市内の弥生土器の編年試案をまとめており、これに準じ出土石器・出土遺跡をおってみたいと思う。

●縄文晩期の遺跡として小諸[6]市氷[7]柳沢遺跡があり、黒耀石製の打製凹基有茎鏃・安山岩製の短冊形打製石斧が出土している。

●縄文時代末期～弥生時代へと移行する弥生黎明期の遺跡として佐久[8]町海瀬館遺跡があり、又、新諏訪町式に位置づけられる土器が佐久[9]町中の原遺跡より出土しているが、石器についての詳細がなく、今後の報告を待ちたい。

●弥生中期後半〔Ⅰ期（栗林Ⅰ式）〕に位置づけられる遺跡として、佐久[10]市深堀遺跡があり、閃緑岩製の太型蛤刃石斧・中型の偏平片刃石斧・安山岩製の横刃型石器（打製石包丁？）・軽石質の多孔石が出土している。

●弥生中期後半〔Ⅱ期（栗林Ⅱ式古相）〕に位置づけられる遺跡として佐久[11]市北西ノ久保遺跡Ⅰ期の住居址出土の土器が比定され、それらの住居址内より、黒耀石製の凹基無茎鏃・小型の凹基有茎鏃・変形五角形鏃、チャート製の凸基有茎鏃の出土率が石鏃の中で大きい。粘板岩製の小孔を有し、抉り「台形」を呈す磨製石鏃・黒耀石・玄武岩製の石錐、閃緑岩製の太型蛤刃石斧、

チャート製の極小の扁平片刃石斧、粘板岩製の片刃直縁刃半月型の磨製石包丁、粘板岩製の篦状石器、玄武岩製の握斧、砂岩製の手持ち砥石として石包丁様のもの、方柱状のもの、扇状のものが出土、煤・赤色顔料等の付着している安山岩製の台石、その他として、チャート製の緑色ペンダントが出土した

●弥生中期後半〔III期（栗林II式新相)〕に位置づけられる遺跡として北久市北西ノ久保遺跡[12]II期の住居址出土の土器が比定され、それらの住居址内より、黒耀石製の凹基無茎鏃・平基無茎鏃（三角形鏃)、小型の凹基有茎鏃が出土し、なお特質されるものは鏃身約5cmの細身のチャート製有茎石鏃である。粘板岩製の小孔を有す磨製石鏃と未成品、剝片が多く出土していることは当遺跡で製作したことを物語るものである。太型蛤刃石斧の北西久保遺跡I期出土のものとの差異は再利用品の出現である。扁平片刃石斧は石質において閃緑岩・粘板岩・チャート製とあり、形態も中型・小型・極小型とバラエティーに富む、粘板岩製の石包丁は過度の使用により刃部やや内弯し片刃の半月型を呈す磨製石包丁が出土した。打製石斧においては玄武岩製の撥形大型打製石斧（石鍬）が出土、又、玄武岩製の横刃型石器（打製石包丁？）が出土した。尚、太型蛤刃石斧の再利用品と類似した安山岩製の敲石・磨石が出土し、砥石としては手持ち砥石で石包丁様・楕円形・棒状とバラエティーに富み、泥岩製の砥石も出土した。

●弥生中期後半〔IV期（未命名最終末)〕に位置づけられる遺跡として西裏[13]遺跡Y－18住居址出土の土器が比定されている。良好な石器は出土していないが、チャート・黒耀石の剝片・砕片が多く出土していることは、北西ノ久保遺跡I・II期とも類似している。尚、西裏遺跡の弥生中期後半の住居址内より黒耀石製凹基無茎鏃・有茎鏃、粘板岩製の太型蛤刃石斧、玄武岩製の大形打製石斧（石鍬）が出土した。

●弥生後期前半〔V期（吉田式古相)〕に位置づけられる遺跡は今の処、明確には発見されていないが、竹田峯[14]遺跡Y－1住居址出土の土器が比定される可能性があり、磨製石鏃が出土している。磨製石材において、従来の粘板岩に千枚岩が加わることは特筆されよう。また、竹田峯遺跡の弥生中期後半の住居址より、黒曜石製の打製石鏃、粘板岩製の横刃型石器（打製石包丁？)、閃緑岩製の太型蛤刃石斧、砥石として砂岩製造の円礫の手持ち砥石が出土した。尚、Ta 2よりガラス小玉・碧玉の管玉が出土している。

●弥生後期前半〔VI期（吉田式中相)〕に位置づけられる遺跡として北西ノ久保[15]III期の住居址出土の土器と野馬窪[16]遺跡の土器が比定される。北西ノ久保III期の住居址より黒耀石製の凹基無茎鏃・凹基有茎鏃・平基有茎鏃、小型の平基本・凹基有茎鏃とバラエティーに富み、磨製石鏃において、千枚岩製のものが登場してくる。これら石鏃においての形態・材質の変化は何に起因するか今後解明していきたい。磨製石斧においては、閃緑岩製の太型蛤刃石斧、粘板岩製の中型・極小型の扁平片石斧、粘板岩製の局部磨製の横刃型石器（打製石包丁)、及び玄武岩製の横刃型石器（打製石包丁）が出土、その他、砂岩製の石包丁・棒状・四角錐状の手持ち砥石に置き砥石が加えられる。

●弥生後期前半〔VII期（吉田式新相)〕に位置づけられる遺跡として周防畑[17]B遺跡の周溝墓出土の土器が比定され、ガラス小玉の出土をみ、住居址からも同質のガラス小玉が出土している。又、Y－9住居址ピット内より閃緑岩製の太型蛤刃石斧と置き砥石がセットで出土した。なおY－14・16・18住居址から粘板岩・蛇紋岩製の磨製石鏃が出土しているが、遺跡の大きさから比べて、調査方法にもよるが、石器の減少傾向のはっきりする時期と考えられる。

●弥生後期古相〔VIII（箱清水式古相)〕に位置づけられる遺跡として上直路[18]1号住出土の土器を比定しており、銅釧が出土しているが石器の出土はない。

●弥生後期後半〔IX期（箱清水式中相)〕に位置づけている遺跡は後沢[19]遺跡、清水田[20]遺跡Y－2・7・8・10、舞台場遺跡Y 1～12、戸坂遺跡の土器をもって比定しており、後沢遺跡からは鉄斧が出土しているが、報告書が刊行されておらず、石器の詳細は不明である。清水田遺跡Y－2・8・10住居址からは石器の出土なし、尚、弥生後期前半のY－1住居址からは黒耀石製の凹基無茎鏃・粘板岩製の磨製石鏃、閃緑岩製の磨・敲石が出土した。舞台場遺跡住居址より、黒耀石製飛行機鏃・小型の凹基無茎・有茎鏃、安山岩製の凹石が出土した。

●弥生後期後半〔X期（箱清水式新相・御屋敷？)〕に位置づけている遺跡は舞台場[23]遺跡Y－3・清水田[24]遺跡Y－3、池畑[25]遺跡Y－2、下小平[26]遺跡Y－1～5の土器をもって比定しており、池畑Y－2より前[27]時期においては土製の紡錘車が出土しているが、砂岩製（石）の紡錘車が出土。下小平遺跡の住居址無いからは不明鉄製品の出土、また、前時期の黒耀石製の凹基無茎鏃、チャート製の平基無茎・有茎鏃、凹石、安山岩製の置き砥石が出土している。しかしながらこの時期になると極めて石器の出土例が少ない。

●古墳前期前半〔XI期（御屋敷？)〕に位置づけられる池畑[28]1住からチャートの石核が出土していることから、まだ石器の依存があったことを物語るものである。

以上が佐久市を中心とした弥生時代出土石器の概観である。次号では、石器の形態変化・出現・消長、技術

革新等について考察してきたい。　（本学会員）

註

(1)(2)　井上秀雄　1886　『古代朝鮮』

(3)　技術革新による人間の意識変化は富の蓄積、氏族制度、都市国家、領土国家、帝国主義へと変容していき、個人と国家（企業）との調和は現代人にとっても命題である。

(4)　羽毛田伸博　1987　「弥生時代の石器について」『北西ノ久保』

(5)　小山岳夫　1987　『北西ノ久保遺跡』　佐久埋蔵文化財調査センター
1988　「弥生土器編年の確立にむけて（その１・２）」『佐久考古通信No.42・43、No.44』

(6)　永峯光一　「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて」

(7)　花岡　弘　「小諸市氷柳沢採集の氷式土器」

(8)(9)　島田恵子　1987　『後平遺跡』　佐久町教育委員会・長野県臼田建設事務所

(10)　藤沢平治　1983　『深堀遺跡発掘調査概要』　佐久市教育委員会

(11)(12)(15)　小山岳夫　1987　『北西ノ久保遺跡』　佐久市埋蔵文化財センター

(13)(14)　高村博文他　1986　『西裏・竹田峯遺跡』　佐久市埋蔵文化財センター

(16)　佐久市教育委員会　1981年発掘調査

(17)　佐久市教育委員会　1981　『周防畑Ｂ』

(18)　佐久市教育委員会　1985年発掘調査

(19)　佐久市教育委員会　1976・1977年発掘調査

(20)(24)佐久市教育委員会　1980　『清水田』

(21)(23)佐久市教育委員会　1981　『舞台場』

(22)　佐久市教育委員会　1984　『戸坂遺跡概要』

(25)(28)佐久市埋蔵文化財センター　1986　『池畑・西御堂』

(26)　佐久市教育委員会　1981　『下小平遺跡』

(27)　住居址出土の土製紡績車は弥生後期に比定されるＹ―17から２点出土、それ以前の時期の出土例は佐久において今のところない。又下小平遺跡Ｙ―２・３住居址より土製紡績車出土。

昭和63年度新役員紹介

●会　　長　　由井茂也
●副 会 長　　黒岩忠男、白倉盛男
●事務局幹事
　幹事長　　井出正義
　総　務　　◎木内捷　小山岳夫、竹原　学、翠川泰弘
　企　画　　研修旅行担当　◎臼田武正、竹原　学
　懇親会担当　◎羽毛田卓也、小平恵一、羽毛田伸博
　例会担当　◎羽毛田卓也、佐々木宗昭
　遺跡報告担当　◎堤　隆、臼田武正、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原　学、高村博文
　書　記　　◎三石宗一、翠川泰弘、島田恵子
　会　計　　篠原浩江
　通　信　　◎福島邦男、堤　隆、須藤隆司、小林真寿
　研究誌　　◎花岡　弘、林　幸彦、小山岳夫、高村博文
●会計監査　　井上行雄、由井　明
●地区委員　　Ⅰ地区（軽井沢、御代田、小諸）　荻原範仁、田中正治郎
　Ⅱ地区（北御牧、浅科、立科、望月）　掛川喜四郎、倉見　渡
　Ⅲ地区（佐久市）　井上行雄、大井今朝太、佐藤　敏
　Ⅳ地区（臼田、佐久町、八千穂、小海）　三石延雄、佐々木春蔵
　Ⅴ地区（北相木、南相木、川上）　由井　明、土屋忠芳
　Ⅵ地区（佐久地域以外の地区）　森泉かよ子

考古学と自然科学のはざま？

堤　　隆

I

私自身、数学が大の苦手だったせいもあろうか、数学のできる人に尊敬の念が絶えない。ましてや自然科学などというと畏怖の感すらよぎってしまう。

私にとって自然科学者とは絶対なのであり、彼らの回答する１＋１とは２以外のなにものでもないと信じて疑わなかった。むろん、とんちクイズのごとく、１（夫）＋１（妻）＝子供３人などというばかげた答えなどにはなりはしないであろう。

II

ところで、昨年昭和62年の暮れ、長野県考古学会のシンポジウム「信濃国における奈良時代を中心とした編年と土器様相」が開催され、私は佐久地方のパネラーとして壇上にたたされるハメになってしまった。

席上、私は、化学者M教授による佐久地方の奈良時代土器の蛍光X線分析の結果についてふれ、その分析値から推定された産地についても紹介した。

これについて考古学のS先生から、次のようなコメントをいただいた。すなわち「M教授とは私（S先生）も一度あってお話ししたこともありますが、（M教授は）比較的依頼主の要望に応える方だそうであります」と。つまりS先生は、M教授の土器の化学分析がどれほどあてにならないものかを言わんとしたらしい。また、ひがみっぽい私には、私が盲目的に化学分析を信じているともする皮肉ともとれた。

しかし依頼主（考古学）は希望の産地を示し、また化学者は希望の産地がだせるように努力するのであろうか。もしそうだとすると、双方の学問の学問たる所以が根本から崩れているともいえる。

ここにおいて自然科学者の提供する情報への不信感はつのる一方ということにもなりかねない。

III

さて、ここで思い起こされるのは、縄文土器の長期・短期編年論争である。

短期編年を主張した山内清男博士が、がんとしてC14年代を信用せず、大陸より比定した独自な年代観を打ち立てたことは、私がいまさら述べるまでもないであろう。山内は、考古学者としての、みずからの信念を貫いたのだ。

ところで、佐原眞氏が「考古学者からみた自然科学者」のなかで次のように述べている。「文部省科学特定研究「古文化財」の研究集会で北海道大学の大井晴男氏が、北海道の擦文土器の遺跡で採集した同一サンプルを二分して、東京大学と理化学研究所に測定を依頼し、その両測定値を比較したところ、ばらつきが大きく、どうしてくれる、とばかり追及、一同、固唾をのんだところ、木越邦彦氏は、合ってるのだけ使ってください、と答えられた。これにかぎらず炭素14年代に関する疑問点をかかげる考古学者の追及に対する木越氏のお答えに、私はいつも、猛牛の突進をみごとにかわす闘牛士の姿をみる思いである。そして権威ある専門家の言として炭素14年代は、あくまでも炭素14年代としてあつかうべきだと思っている。」と。

IV

さて、御代田町Ｉ遺跡の初期須恵器を分析したM教授からの私信が届いた。その報文において陶邑産とされた４点の初期須恵器のうち、２点が放射化分析によって猿投産であることが判明したのだという。

比較的強いその認定の後の、あまりにあっさりとしたその訂正に、私は少なからず戸惑いを覚えずにはおれなかった。しかし、同時にああこのようなものかとも思った。無論、統計確率的問題もある。が、分析化学者自身、その学問確立への渦中にいるのだと。

V

最後になるが、やはりこれからの時代、考古学は積極的に自然科学の成果を利用すべきであるようにおもう。事実、自然科学によるアプローチがなければわかないことも多いからだ。

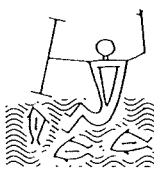
馬場壇遺跡の前期旧石器からナウマンゾウの脂肪酸が検出されたことは記憶に新しい。ここから、当時の石器使用の実際が生き生きとよみがえってきたのだ。

ところで、座々乱木以前の前期旧石器論争においていわゆる珪岩製石器が人口品か人口品でないかが問題となってきた。しかし、ここで脂肪酸分析を利用し、珪岩製石器から動物性の脂肪酸が検出されれば、その石器が使用されたものであり、人口品であることが自然科学の側から間接的に証明されたことになる。だが、事実はそう簡単にはいかないのだ。Ｉ教授によれば脂肪酸分析の信頼度は５割程度であるという。

やはり、考古学者は、その本来の方法論たる石器形態の観察によってこそ人口度をはかるべきなのだ。

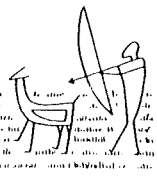
考古学者は、自然科学の成果を自然科学の成果として見る目をもたなければならないことを忘れてはならないであろう。また、一方で、考古学者は考古学者としての確固たる認識がさらに要求されるであろう。

（本学会員
御代田町教育委員会）



——身近な話題——

200字短信



小林真寿

佐久平に来て３ケ月が過ぎ、環境にもようやく馴れてきました。現在「金井城」の現場に毎日かよっていますが、土鍋と石臼には近頃食傷気味になり、長年親しんだ文様のある土器に対する愛情が日々つのる一方です。取りあえずは体調をくずさなぬよう気をつけ、体力の増進をはかり、何とか１日も長く生きのびるべく努力を重ねていきたいと思う今日この頃です。今後共によろしくお願いいたします。

翠川泰弘

今年４月より佐久市に来まして、早３ケ月が過ぎました。現在「金井城跡」で発掘をしています。佐久は弥生の宝庫でありますので、当然、弥生の遺跡を掘れるものと思っておりましたが、どういう理由か中世の城郭発掘をすることになってしまいました。遺跡のえり好みをしてはいけませんが、やはり縄文の遺跡が掘りたい様な……。否、贅沢を言ってはいけません。でも、できれば縄文時代前期初頭の遺跡を掘りたい。否贅沢を言ってはいけません。

竹原　学

私は大学卒業後２年間、松本市で発掘調査に参加しておりましたが、今回機会があって４月より佐久埋文調査センターの調査に加わっております。

松本では最近若い研究者を中心に交流が活発になりつつあります。これを機会に、佐久と松本の研究交流も活発になればと思います。よろしくお願いします。

事務局より

● 訃報

本学会会員で、元佐久市教育長の細萱勇美氏が、本昭和63年４月26日ご逝去されました。

本学会賛助会員で、元小海町文化財調査委員の堀川公行氏が、本昭和63年２月15日ご逝去されました。享年72歳でした。

両氏の学会に対するご寄与に感謝いたしますとともに、謹しんでおくやみ申し上げます。

● 新入会員紹介（新しい仲間が加わりました。よろしくお願いします。）

須藤隆司	〒385	佐久市大字猿久保244-1	寿荘３号	☎0267（68）0766
小林真寿	〒348-01	佐久市大字中込3249-1	信濃ハイツ５号	
翠川泰弘	〒348-01	佐久市大字瀬戸377-68	まきば荘５号	
竹原　学	〒348-01	佐久市大字中込3249-1	信濃ハイツ１号	☎0267（68）6090
助川朋広	〒385	佐久市大字猿久保912-1	第２関口荘６号	

● 会費未納の会員は、大至急同封の振込み用紙にて会費を振込み下さい。

▶ 編集後記 ◀

短い夏が過ぎようとし、日焼けの肌も落ちついてきました。おまたせしましたが、佐久考古通信45号をお届けいたします。今回の編集は、小山・須藤・堤がおこないました。

今号では、総会においてご講演いただいた明治大学講師石川日出志にご寄稿いただきました。感謝申し上げます。このほか、各氏からの玉稿により特色のある号になったかとおもいます。

近頃、藤ノ木古墳をはじめ考古学上のビックニュースも目立ちます。しかしむしろ、より普遍的な民衆の生活史への関心がつのるのです。　　（堤　　隆）

佐久考古通信　No.45号

発行所　佐久考古学会
〒384-11南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
☎（0267）92−3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・堤・須藤
小林・小山

印刷所　ほおずき書籍（株）

佐久考古通信

佐久考古通信　No.46号
1988. 12. 1
佐久考古学会

目　　次

——長野県考古学会——　第一回旧石器研究部会の報告……堤　　隆……1
——昭和63年度研修旅行記——　埼玉・東京紀行……竹原　　学……2
南佐久地方の歴史と考古学的調査……井出　正義……3
——寄稿——　東部町城の前遺跡Y－3号住居址の土器……尾見　智志……5
昭和63年度佐久考古学会会員名簿……事　務　局……10
懐かしいアルバムより……事　務　局……11
200字短信　——身近な話題——……各　会　員……12
事務局より……事　務　局……12

——長野県考古学会——

第一回　旧石器研究部会の報告

県考古学会旧石器研究部会　堤　　隆

(1)

昭和63年11月23日（水）長野県考古学会旧石器研究部会の第一回が、長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所において開催され、出席者は17名を数えた。

まず、佐久調査事務所からは、丸山敞一郎（調査部長）・近藤尚義・小林秀行（調査研究員）氏にご出席いただき、ご案内をお願いした。県内では、森嶋稔（部会長）・由井茂也・吉沢靖・須藤隆司・堤隆・渡辺重義（佐久）・森山公一・中村由克・小林行保（長水）・大竹憲昭（松本）氏、県外からは、瀬川裕市郎・高尾好之・笹原芳郎（沼津）・栗島義明（埼玉）・小口達志（東京）氏の参加があった。

(2)

まず、初回ということで、今後の部会活動の進め方が話し合われ、有益な意見がだされた。その結果以下の方針で今後の部会活動がもたれることとなった。

1　部会は、当面、2ケ月に一度程度開催する。

2　県内の旧石器の基礎資料化に向けて、県内各地において部会をもち、旧資料の再整理とあわせて新資料の検討をおこなうなど、息の長い活動を続ける。その過程で再実測・計測等の作業もおこなう。その際、各地の旧石器の包含層等にも注意する。

3　故児玉司農武氏や由井茂也氏など県下各地の研究者が永年にわたって採集された貴重な資料等も資料化を進めさせていただく。

4　2・3をふまえ、県内の旧石器を集成し、図録等の刊行をおこなう。

5　当面は、来年に予定されている秋季大会のシンポジウムに向け、信州を中心とした『尖頭器文化』の解明をテーマに研究活動を進めてゆく。

6　次回は茅野市渋川遺跡の石器群についての討論を昭和64年1月22日（日）にもつ予定とする。

(3)

続いて、堤が川上村三沢遺跡についての発表をおこなった。次に、近藤尚義氏による佐久市下茂内遺跡の調査についてスライドをまじえた発表があり、あわせて同遺跡の縄文時代草創期の木葉形尖頭器等を実見させていただいた。引き続いて一同現地へと向かい、下茂内遺跡を見学させていただき、解散となった。

(4)

長野県考古学会では、旧石器研究部会のほか、縄文後晩期・弥生・古墳・須恵器・中世の各部会が発足した。学会員諸氏の多くの参加をここで呼び掛けたい。

なお、末筆となったが今回の旧石器研究部会の開催にあたってご配意いただいた長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所、同事務所丸山敞一郎氏・近藤尚義氏に厚く御礼を申し上げる次第である。

第1回旧石器研究部会参加者（下茂内遺跡にて）

——昭和63年度研修旅行記——

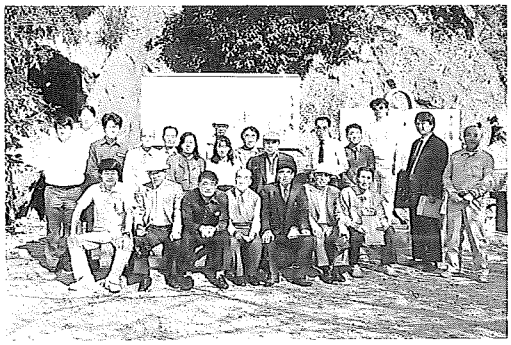
埼玉・東京紀行

事務局幹事　研修旅行担当　竹原　学

去る10月22・23日、恒例の佐久考古学会研修旅行が行われた。今回の見学地は埼玉・東京方面で、主に博物館をめぐる旅であった。私は今回初参加であり、楽しみにしていたのだが、幹事という大役を背ってしまい地獄？の２日間となってしまった。

さて当日は秋晴れの旅行日和となり、会長以下総勢24名を乗せたバスは定刻通り出発、最初の目的地埼玉県立歴史資料館へと向かった。初日の行程は埼玉歴史資料館—吉見百穴—坂戸市広面遺跡—埼玉県立博物館—浅草泊である。バスがコスモス街道に入ったあたりから、周辺の地質・地形などの話を白倉先生が始める。下仁田町に入ると井出先生にバトンタッチ、沿線の考古学事情を聞く。私はこの間、朝もやに包まれた荒船山や、下仁田のねぎとこんにゃくの看板をぼんやりながめながら、頭の中は幹事が無事務まるかでいっぱいであった。そのために、好きなビールも１缶にとどめ、後ろから回ってくるウィスキーも控え目にしていた。今にしてみれば、あの時気楽にもっと飲めばよかったと思う。そんな訳でせっかくの先生方の話もさっぱり頭に入ってこない。

埼玉県立歴史資料館は畠山重忠の居所と伝えられる菅谷館跡の史跡公園内にあった。館内では学芸員の酒井清治氏の丁寧な説明を受ける。このあたりの弥生土器はいかにも関東的な縄文を施すものと、箱清水的な櫛描文で飾られる二者があり、文化の接点を感じさせる。菅谷館跡は良く整備されており、堀と土塁が見事に残っている。畠山重忠の居館といっても実際残っているのは戦国期の城郭である。縄張図を見ると自然の要害を利用した台地城であり、地形の利用法や郭の配置等、現在私が調査に加わっている金井城跡と似ている。土塁・堀は金井城よりはるかに規模が大きい。反面要害という点では菅谷館跡の方が劣っているように思われる。



研修旅行の面々（埼玉県吉見百穴前にて）

昼食の後吉見百穴を見学する。本で見た通り、凝灰岩の岩肌に無数の横穴が開口している。そのうちの１基に入ってみたが、玄室内には棺が造り付けられている。同じ様な構造のものはかつて大阪の高井田横穴群で見たことがある。吉見百穴は観光名所化しているようで、有料の園内に土産品店や飲食店がある。横穴の壁面いたる所に落書が刻まれている。最近の奈良や飛鳥でもそうだが、この様な文化財の活用のし方はいかがなものであろうか。

この後広面遺跡では埋文事業団の村田氏に案内をして頂き、県立博物館でも出迎えをうけた。しかし何分過密スケジュールのため危惧していた時間の遅れが出てしまい、十分な見学が出来なかったほか先方に御迷惑をかけてしまった。

この遅れは後々まで尾を引き、首都高速の渋滞というダメ押しもあって旅館へは１時間半も遅く着くこととなった。おかげで浅草界隈を歩く時間もなく、宴も長くはとれなかったが、それでも私も含め何人かは夜の東京の町へと出かけていった。

翌日は８時起床、朝食に並んだ皆の顔には疲れが見える。前日の効きすぎた薬のせいか、はたまた夜遊びのためか……。

２日目の日程は東京国立博物館と多摩市の都立埋文センターの見学である。東博では折りしも「日本の考古学」展を行っており、全国から集めた各時代の名品・珍品や世を騒がせた遺物等、予定の２時間では見きれない程である。展示は資料の羅列で「日本の考古学」というタイトルとは合わないが、全国をかけ巡らないと見ることが出来ないものばかり一堂に集まり、研究者には必見の展示である。

都立埋文センターは多摩ニュータウンのただ中にあり、モダンな建物が印象的である。展示室は小じんまりしているが、清潔感溢れる素材や色を使っている。

我らおのぼりさん一行は埋文センターを最後に２日間の日程を終了、少し早目の帰路についた。帰りの車中では皆前日やりすぎたためか妙に静かである。私はホッと胸をなでおろし、少し休もうかと思ったが、来年の事を考えたらたまらなくなってしまった。

この２日間はなかなか楽しい旅だったが、幹事の役は本当に大変でした。最後に一言、研修か研酒か、旅行目的をはっきりさせた方が良いと思います。

（佐久埋蔵文化財調査センター）

南佐久地方の歴史と考古学的調査

井出　正義

南佐久地方は千曲川の上流域に位置し、現在の行政区画は臼田町、佐久町、八千穂村、小海町、南相木村、北相木村、南牧村、川上村の３町５ケ村でその面積は850.38㎢で、佐久市、小諸市、北佐久郡の残りの佐久全域を合わせたよりも広く、小県郡と上田市を合わせた上小地方全域にほぼ匹敵する広大な面積をもつ。その地形は関東山系と八ケ岳山系が東西にそびえ、その間を南北に貫流する千曲川にそって狭長な谷平野が点在し、現在の主要な集落が国道141号線ぞいに連なっている。標高は南にいくに従って高くなり、佐久平の南辺に位置する臼田町は標高700m、千曲川上流の川上村梓山部落は1,320mに達し、その標高差は600mを超える。南方山梨県との境を画す野辺山高原は標高1,350m太平洋と日本海流域の分水嶺となっている。野辺山原を中心として、東西の山麓は広い高原状台地をなし先土器、縄文時代の密度の濃い遺跡の分布地で、現在は高原野菜の全国的な産地となっている。この地勢は南にいくほど気候の寒冷さを増し、特に稲作にとって不利な条件となっている。従って先土器、縄文時代に豊富であった遺跡数は弥生時代、古墳時代になると激減する。南佐久地方の古墳分布は田口、入沢地区に集中し、佐久町では川東の臼田町境の曽原に一基、川西の高野町北沢に一基を残すのみで、佐久西小学校付近に数基あったといわれる古墳群はいまはその痕跡をみることもできない。ここを限界として八千穂村以南には古墳の存在は確認されず、古墳時代の遺跡も未確認である。江戸時代のはじめ寛永６年（1629）の小海村検地帳では水田は相木川ぞいに中田１反５畝余、下田１反９畝余、下々田３反５畝余、稗田１町１反余があっただけであり北相木村は畑のみで水田はない。南佐久郡の南部標高1,000mを超える村に稲作が行われるようになったのは江戸時代後半である。中世にさかのぼれば建武２年（1335）大徳寺文書には八千穂村畑の村名は「畑物村」、小海町本間の年貢高は「本畠二百五十貫文」と記され、この地方が畑作にたよっていることを示している。古代佐久郡には八郷があったことが和名抄に記されている。１郷は50戸から成り、戸長は家族を統率して戸籍をつくって官に申請して６才以上の男女に対して班田をうけ、それを耕作して租、庸、調、雑徭を負担した。郷長は郡司の司配のもとに戸長を統制してその貢納や生産を督促した。戸は郷の単位として法制的に編成されたもので、そのなかには幾組かの家族があり、夫婦単位の家族が一つ家に住んで生活している。これを房戸といい、発掘調査によって検出される竪穴住居の一つ一つはこの房戸の住居である。これに対して法制的な戸を郷戸といい、その戸長が郷戸主であり、50戸を単位とした１郷の支配者が郷長である。佐久市南部を含む旧南佐久郡に成立していた郷は青沼、刑部の二郷で、青沼郷は平賀、田口、青沼など川東に属し、刑部郷は野沢、桜井、岸野、前山、大沢、臼田など川西に存在したものと推定されるがその根拠は薄弱で、その地域を確定することは困難である。しかし当時50戸を単位とする法制的な郷の範囲が、比較的低平で稲作の可能な地域を含んでいただろうということは推定できる。佐久郡八郷に関する諸説のうち大日本地名辞書は小海、海の口、海尻など松原湖を中心とした湖辺の里を青沼郷と名づけただろうといい、日本地理志料は小海、相木、海ノ口、川上にわたる範囲を小沼郷であろうとしている。しかしここは山間峡谷の地で一郷を成立させる条件には乏しいというのが一般的なみかたである。これに対し地元の村誌等の記述をみると南相木村誌では「古墳時代から奈良時代へかけて南相木村には人の住んだ証拠がまだ見つかっていない。」「南相木村では約八百年ほど前の平安時代の末期に田屋の辺と、地形から見て日向にはじめて人が住んで畑がつくられた。」「恐らく田屋に一軒か或は日向にいま一軒位の家があったものであろう。」と書かれている。北相木村誌は「北相木村では約八百年ほど前の平安時代の末期に坂上の西垣内の辺にはじめて人が住んで畑がつくられた」「西垣内というからにはこれに対する東垣内とか南垣内とかよぶ垣内がまだあったと推定されるので、今一軒位の家があって開拓に当っていたものであろう。」とある。南佐久郡誌の「南佐久郡南部山村の開発」の項では小海町宮上の「西がえと」本村の「御所替戸」南相木村田屋の「堂がいと」北相木村坂上宮の平の「西がいと、権現がいと、あしがいと」、川上村居倉の「後がいと」御所平の「大海道」をあげ、垣内は１軒の所が多く２軒あった所もあるという。また平安時代末11世紀～12世紀にかけ畑作の普及を示す資料が多いこと等を説明し、「以上の事から南佐久南部山村の開発を考えると、小海町の近辺の開発が早く平安時代の中期10世紀で、その他の山村の村はおそらく平安時代後期の12世紀ころに開発がはじまったものと思われる（下略）」と結んでいる。

南佐久地方では昭和53年佐久町ではじめて埋蔵文化財の詳細分布調査を実施したが、上区で北沢川ぞいに

蓼科山麓に向かって影部落から道順窪、源左衛門、雲場奥など予想もしなかった奥地まで多数の平安時代遺跡の分布しているのに驚いて、ここは何か特別の条件をもつ地域であろうかとの疑問をもったが、調査の進むにつれ今まで予想もしなかった奥地の至るところに平安時代の確実な遺跡を数多く発見し、上区のそれが決して特別のものではないことがわかった。北相木村でも相木川ぞいの村の中心部だけでなく、一の菅、卯津木久保入山久保から木次原等の山麓台地にまで平安時代遺跡が分布している。川上村では野辺山原一帯から信州峠下の兵部、赤土平、横尾と標高1,300mを超える高地にまで及んでいる。臼田町十二新田地区では片貝川の上流ぞいに蓼科山麓の大岩穴洞窟まで平安時代の15遺跡が連続的に分布しているが、ほとんどすべてが縄文時代遺跡と複合している。

小海町では昭和59年に小海原の雨堤遺跡、61年に親沢の弥左衛門屋敷遺跡の2ヶ所で平安時代住居址の発掘調査を行った。雨堤遺跡は標高1,100m、千曲川と相木川の間の台地上にある。弥左衛門屋敷遺跡は茂来山麓親沢部落北方、標高1,070mの舌状台地の先端にある。住居の大きさは東西4～4.2m、南北4.9～4.5mでほぼ等しく、東壁中央部に石組粘土カマド、土師、須恵、灰釉陶器、墨書土器と鉄器をもち、両者ともまったく同程度の生活状況を示す住居址である。それはまた佐久平の中央部でみられる住居址とも異なることはない。雨堤遺跡からは放射状暗文をもつ赤色薄手の美しい甲斐型坏が出土し、坏形と皿形の2種があり墨書も2点みられる。この住居址が甲斐と佐久との交通路にかかわっていることを示すものと思われる。またその出土鉄器は毛抜形の完形品である。毛抜は平安朝の貴婦人が眉毛を抜き、黛を用いて眉を描くとき用いた化粧道具としての毛抜である。この珍品の類品が野辺山原を越えた甲州の現大泉村西井出の寺所遺跡から出土している。ここでは竪穴住居址32軒、掘立柱建物3軒が確認され、灰釉、緑釉陶器、墨書土器が出土している。なおこの周辺には同村城下、東原、長坂町柳坪、須玉町大豆生田遺跡などの灰釉、緑釉陶器等を出土する遺跡がある。この北巨麻郡逸見地方には八ケ岳の南麓に柏前牧、須玉川の東岸茅ケ岳の南麓に穂坂牧等の大きな御牧があって、その貢馬数は穂坂牧30匹、柏前牧15匹という大きなもので、これを統括する牧監は毎年多くの牧官や牧子を従えて京都に上って朝廷の駒牽の行事にのぞんでこれを貢上した。彼等は諏訪を通って東山道を経て京都に上った。京都の文化や美濃の焼物が彼等によって逸見地方に伝えられ、その或物は野辺山原を越えて佐久地方にも伝えられたものと思われる。北巨麻郡にはなお釜無川右岸の武川筋には真衣牧があり穂坂牧柏前牧と合わせて貢馬数合計60匹という大きな古代牧場地帯である。甲斐源氏武田氏もこの牧馬地帯を根拠地として強大な勢力を養ったのである。このような甲斐逸見地方の影響がはやくから佐久に及んでいたことは当然で、雨堤遺跡の甲斐型坏や毛抜型鉄器はそれを象徴するものと考えられる。信州峠下の川上村横尾遺跡の灰釉陶器を伴う床板張り住居址などとも考え合わせ、南佐久南部の住民が手工業や交易にたずさわった事も考えられる。川西の台地でも溝の原遺跡で墨書土器が出土し、八千穂村勝見沢遺跡からは八稜鏡（村指定）が出土している。

南佐久地方の谷の出口で、佐久平の南辺部を形成する臼田町は文化財の宝庫ともいえるが、最近の考古学的調査では臼田の蛇塚古墳出土の蕨手刀と、入沢五霊西古墳出土の銙帯具が注目される。蕨手刀は比較的短い彎刀で把頭が蕨手状をしている。8世紀に主に東国で使われた刀で、全国で180余確認されているうち西国はわずか5刀、東北125、北海道29刀と東北地方に集中していて蝦夷征討に関係があるといわれる。臼田町では田口新海神社付近の英田地畑古墳からも41年の発掘調査で出土している。入沢五霊西12号古墳から発見された青銅製銙帯具は4個で、鉸具（とめ金）1、巡方（四角形の飾金具）1、丸鞆（弧形の飾金具）2である。銙帯は律令官人が位階に応じて帯びることが法制化されていて、衣服令に金銀製の銙帯（銙をつけた革帯）は5位以上が用い、6位以下の官人は銅製の銙（黒漆を塗る）を用いた。銙はその大きさが用いる官人の位によって異なるともいわれ、入沢出土の銙帯は七位の官人に該当するものと推量される。七位相当官は国司の第3位の掾で守、介に次ぐ地方高官である。このような高官が入沢の小古墳に被葬者となることは考えられないが、諸条件を考慮しても郷長クラスの有力者を考えることは必ずしも不可能でないように思われる。臼田町のほか佐久で銙帯具の発見は佐久市前田遺跡の1号住居址から銅銙巡方1だけで、蕨手刀は小諸市加増の源太谷地古墳で1刀出土している。銙帯の使用が法制化されていたのは8世紀である。（「日本紀略」）

9～10世紀班田制がいきづまり、郷戸が分解して、房戸の独立制が強まり、新しい開墾地を求めて山麓台地に小集落を形成していった。律令制の崩壊から荘園制への移行という歴史的過程における、古代郷村の解体と新しい地域集落の形成が、佐久の山間部に非常な勢いで展開した姿を最近の南佐久地方の考古学的調査が明確にとらえはじめている。その性格を明かにすることによってさらに中世村落形成の条件をさぐり、今日につながる佐久地方の歴史研究を進めるのには、今後の考古学的調査に期待するものがいっそう大である。

（本学会事務局幹事長）

——寄　稿——

東部町城の前遺跡Ｙ－３号住居址の土器

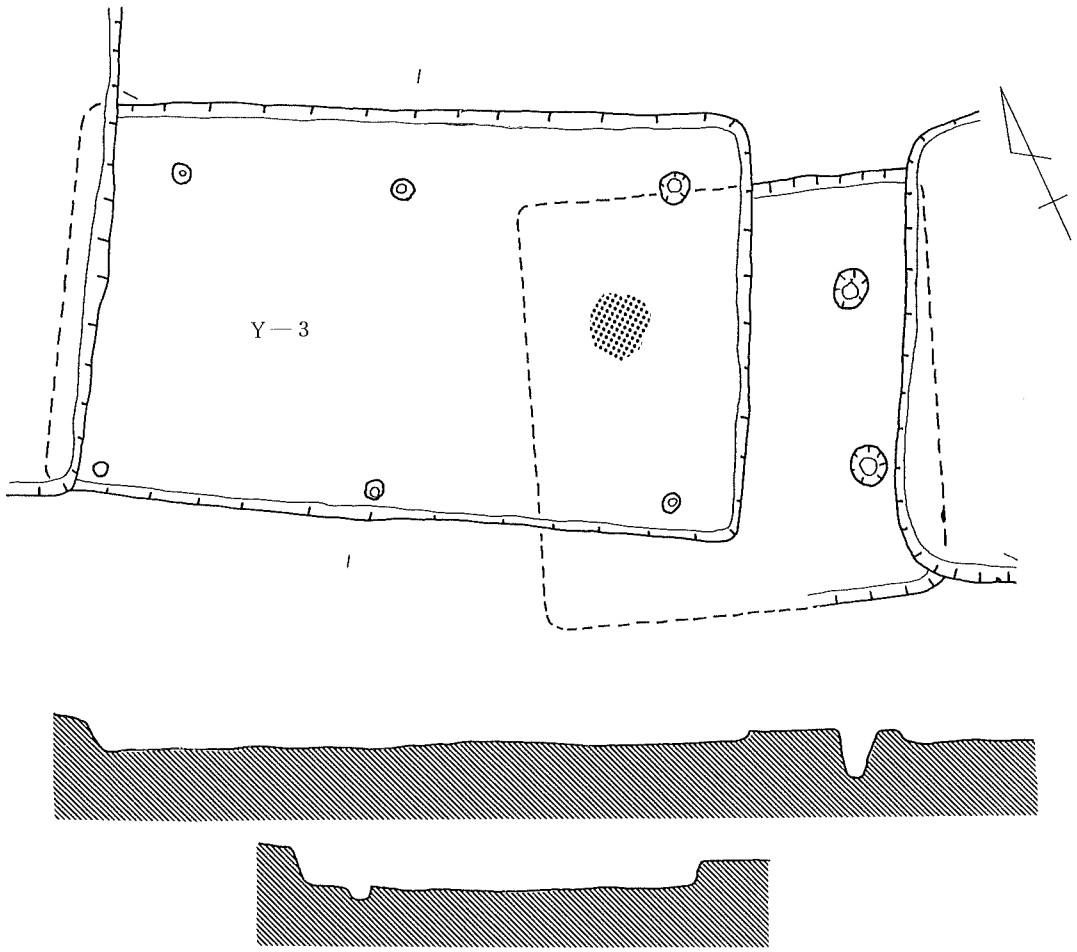
尾見　智志

1

城の前遺跡は小県郡東部町大字田中字城の前に所在する。千曲川の北岸段丘の第２段面に位置し、小河川による複雑な扇状地面により形成された地形上に立地している。当該遺跡の発掘調査は昭和50年の２月から３月にかけて行われた。同年10月に報告書[1]も刊行されている。今回、当該遺跡Ｉ地区のＹ－３号住居址の土器を見聞する機会に恵まれた。報告書とは若干異なる記述[2]になるとは思うが、この場をお借りして再整理を試みたい。尚、当該遺跡の概要については前記した報告書に譲ることとする。

2

城の前遺跡Ｉ地区Ｙ－３号住居址について報告書を要約して述べてみる。Ｙ－３号住居址は西壁際をＹ－14号住居址によって切られ、東側ではＹ－20号住居址を切っている。平面プランは、長径5.2m・短径3.08mの長方形である。床面はほぼ水平で、南・北の壁に沿ってそれぞれ３基、計６基の柱穴が対称につくられている。炉址と推定される焼土が住居址の東半分のほぼ中央にあり、周囲から多量の甕形土器・壺形土器・高坏などの破片が検出されている。壁高は、およそ23cmと計測されるが、上面は地表よりわずかに20cm前後の



第Ｉ図　城の前遺跡Ｙ－３号住居址実測図（１：60）

位置にあたるため耕作等による削平が考えられる。

3

さて、Y－3号住居址からは、甕・台付甕・壺・高坏・鉢・蓋・ミニチュア土器が出土している。第2・3・4図が図示し得たものである。煮沸形態・貯蔵形態・供献形態・汁器形態のそろったセットとしてとらえることができる。以下、それぞれについて説明を加えることとする。

甕形土器（第2・3図）　赤色塗彩されているものとされていないものに分けられる。また、台付甕もここに含めて取り扱う。

赤色塗彩されていない所謂煮沸形態の甕形土器には第2図と第3図1・5・6・7がある。そのうち、体部に施される櫛描文様が斜状文系のものとして第2図1・4・5がある。1は口縁部が少なく外反しながら、口唇部付近でやや内湾する。丸味のある胴部を持ち口縁部と胴部の最大径が同じくらいである。頸部には櫛描簾状文がめぐらされており、これを取り巻くように櫛描波状文が施されている。口縁部と胴部は斜状文が施されている。4は口縁部のみであるが「く」の字状に外反し口唇部付近で内湾する傾向が読み取れる。5は頸部から胴部にかけての破片である。第2図2・3・6～11と第3図1・5・6は波状文系の土器である。第2図2・3は、口縁部は外反しながら、口唇部付近でやや内湾している。頸部には櫛描簾状文がめぐらされており、銅部中位までは櫛描波状文が施されている。胴下半部は欠損しているため不明である。2は丸味のある胴部をもち、最大径を口縁部にもつ。3は丸味が弱く、最大径が胴部にある。第3図6も口唇部はやや内湾するが口縁部はかるく外反している。口唇部外面の丁度、外に出っぱっている部分には櫛描波状文が施されていない。最大径は口縁部にくると思われる。第2図7～10と第3図1は口縁部がゆるく外反している。しかし、口縁部のみのため明確な器形はわからない。また、第2図11も口縁部の破片であるため明確なことはわからないが、外反する器形になるものと思われる。

赤色塗彩されている甕形土器には第3図2～4がある。2は、口縁部がゆるく外反している。口唇部は面取りされており、その部分が刺突が施されている。内面は、口縁部まで赤色塗彩されているものと思われる。3は、口縁部がゆるく外反しながら、口唇部付近でやや内湾している。胴部は、ふっくらと丸味のあるものとなりそうである。最大径は口縁部にくる。頸部には連続した櫛描簾状文が施されている。内面は赤色塗彩されている。4は、頸部から胴部にかけての破片のみであるため全体の器形は不明である。おそらく、口縁部は「く」の字状に外反し胴部は丸味の強い偏平な器形となるものと思われる。赤色塗彩は外面と内面の頸部付近まで施されている。ただし、外面には赤色塗彩と櫛描簾状文のみで櫛描波状文が施されていない。同様のものとして、第3図7がある。頸部の破片のみである。口縁部はゆるく外反し、胴部は丸味の強いものになると思われる。赤色塗彩はされていない。第3図8は台付甕である。口縁部はほとんど垂直に立ち上がる。胴部は丸味が強い。櫛描波状文のみが胴部中位まで施されている。

壺形土器（第4図1・2・7・10）　全体の器形を知り得るものはなかった。

1は口縁部から頸部までの破片である。口縁部は弓状に外反する。口縁部は、26.5cmを計る。頸部にはヘラ描斜状文が施されている。赤色塗彩は、内外面ともに施されている。頸部のヘラ描斜状文上にも一部分ではあるが赤色塗彩が認められる。2は頸部の破片である。櫛描T字文が施されている。内面の頸上位まで赤色塗彩が施されている。7は口縁部と胴部下位を欠くが、器高30cmほどのものと思われる。器形は最大径を胴部上位にもち、丸味のある胴となる。頸部から胴部上位まで櫛描横線文が施されている。ただし、頸部文様は櫛描T字文か簾状文になる可能性がある。赤色塗彩は外面のみに施されている。10は壺形土器の底部と思われる。内外面ともに赤色塗彩は施されていないが、外面は赤色塗彩をした可能性がある。

高坏形土器（第4図3・6）　3は坏部と脚部の接合部であり、6は脚部である。6は脚部下位がゆるやかに外反する。両者ともに外面に赤色塗彩が施されている。

坏形土器（第4図5・8）　5は坏形土器の底部である。内外面ともに赤色塗彩が施されている。8は底部を欠いている。口縁部は内湾している。赤色塗彩は施されていない。

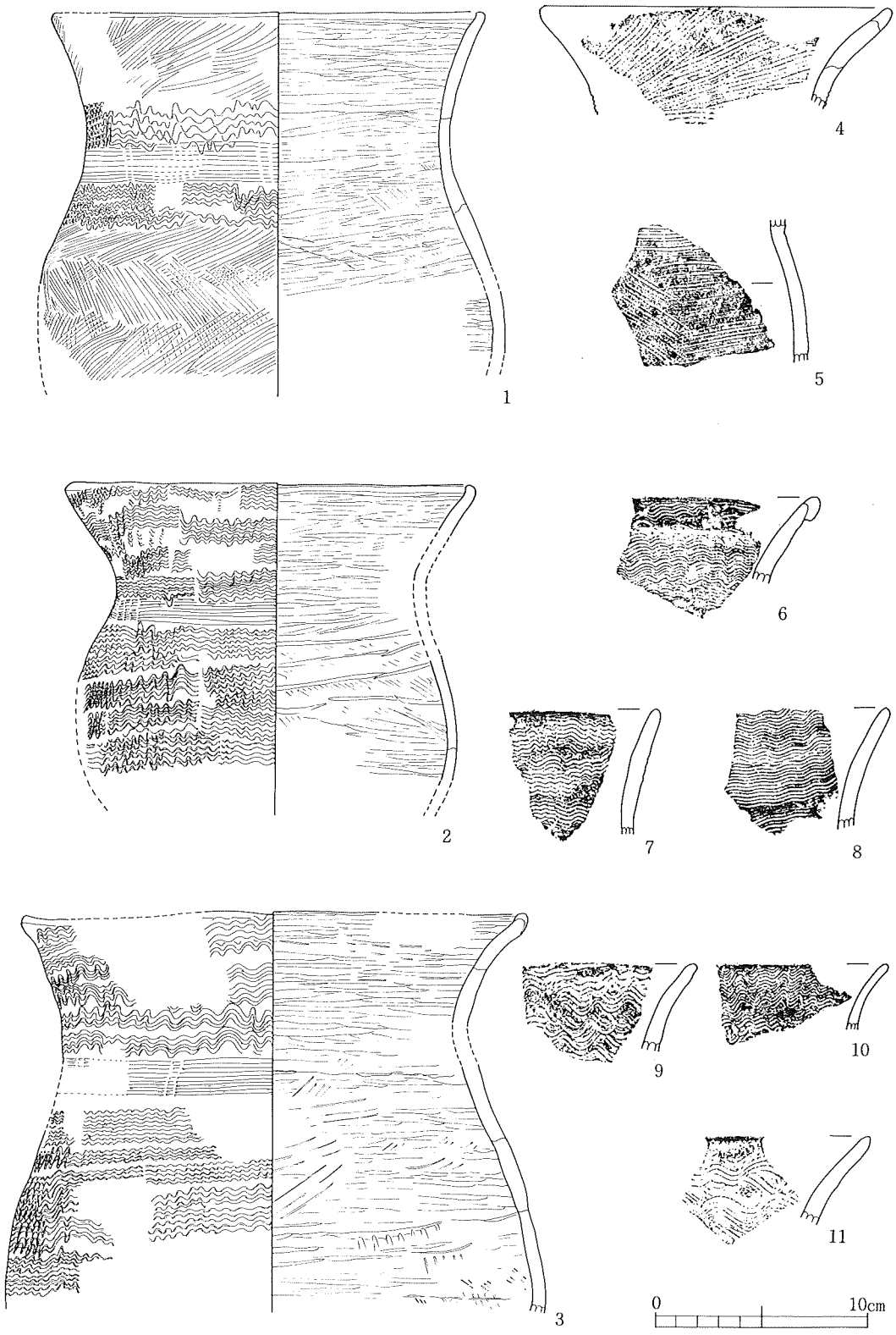
蓋形土器（第4図9）　大きくラッパ状に開くもので、ツマミ部中央には小穴が一孔穿たれている。赤色塗彩は施されていない。甕形土器に伴うものとされている。

ミニチュア土器（第4図4）　上部を欠くため明確な器形はわからない。おそらく高坏を模倣したものであろう。坏部と思われる部分の内側のみに赤色塗彩が施されている。

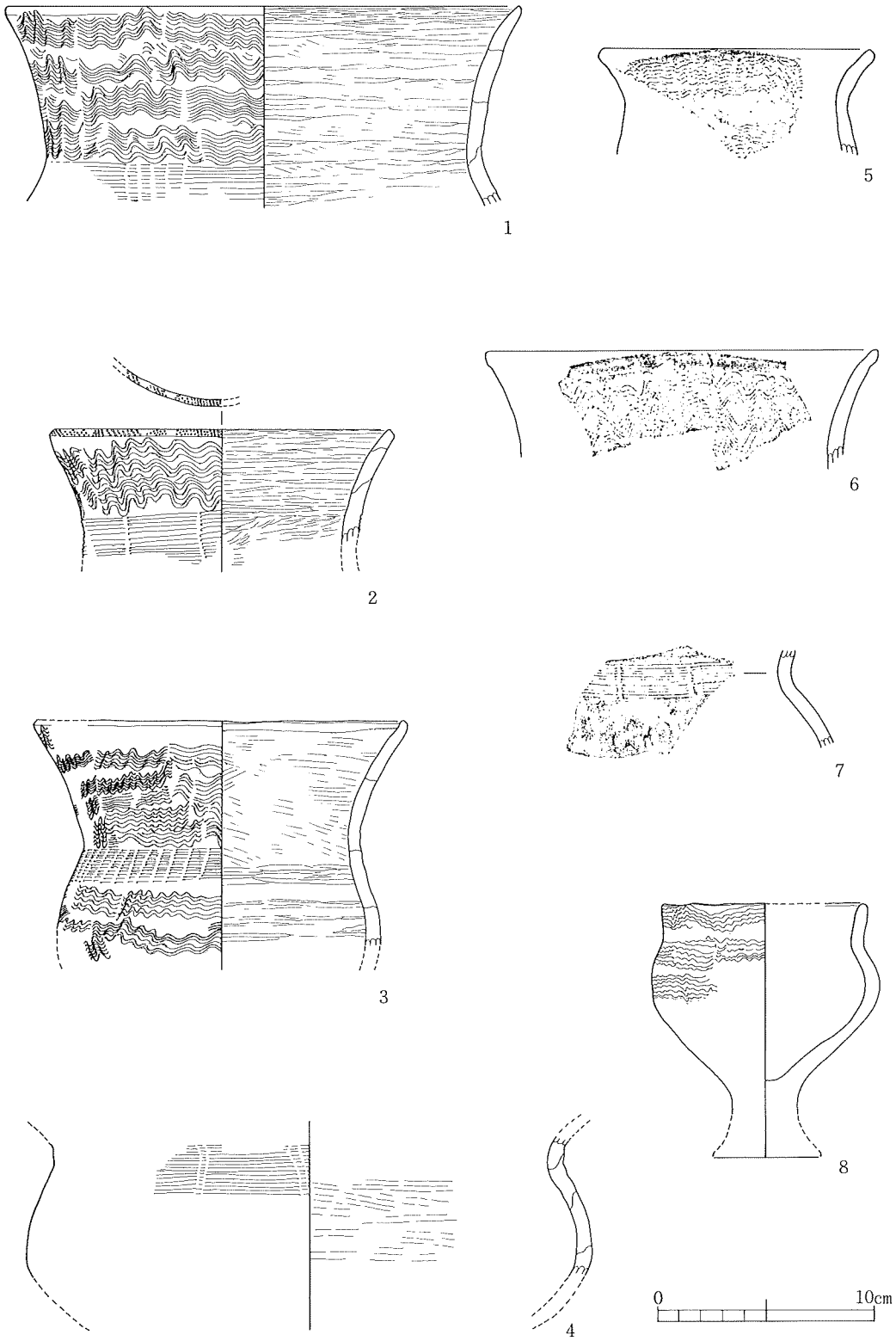
4

Y－3号住居址出土の土器は、その器形・施文などから弥生時代後期箱清水式期前半のものと思われる。

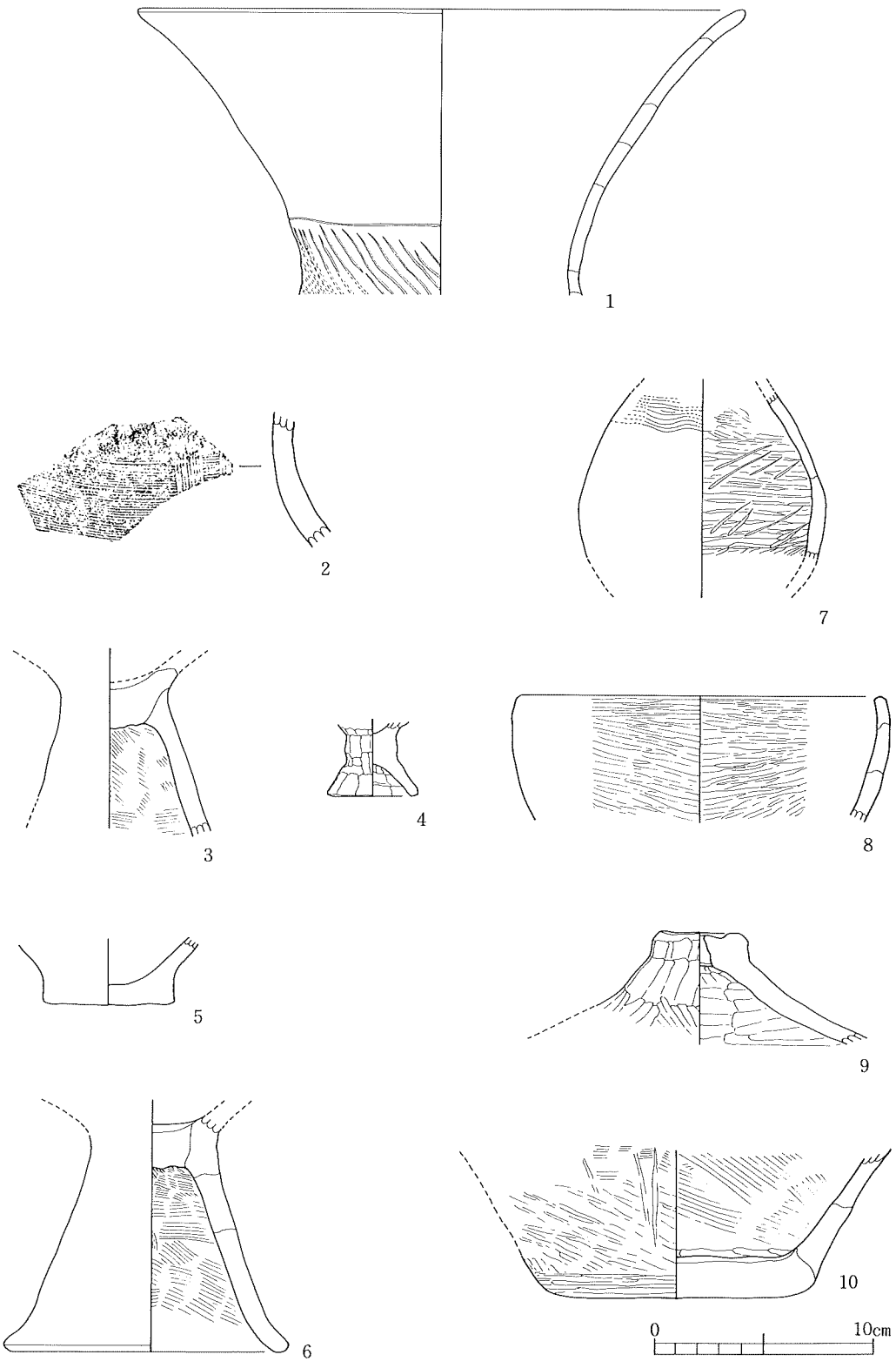
この住居址出土土器群の特徴は、斜状文系の甕形土器（第2図1・4・5）と頸部にヘラ描斜状文が施される壺形土器（第4図1）に求めることができる。斜状文系の甕形土器は上小地方では類例が少なく、住居址内の土器セットとして把握できるものとして貴重で



第２図　東部町城の前遺跡Ｙ－３号住居址の土器（１：３）



第３図　東部町城の前遺跡Ｙ－３号住居址の土器（１：３）



第４図　東部町城の前遺跡Ｙ－３号住居址の土器（１：３）

ある。頸部にヘラ描斜状文をもつ壺形土器は、斜状文系の甕形土器と同様に弥生時代後期前半の影響を受けている。これらの土器は今までの上小地域の調査では見られなかった様相を示している。(ただし、最近の東部町「たたら堂遺跡」・上田市「琵琶塚遺跡」の調査によって新しい展開をみせはじめている) それが、東部町の地理的環境によるものなのか、上小地域の箱清水式期前半の特徴[(3)]によるのかは今後の調査・研究に期待したい。

末筆ながら、本稿を書くにあたり東部町発掘調査団には大変お世話になった。深く感謝申し上げたい。

註

(1) 昭和50年 「城の前遺跡緊急発掘調査報告書」東部町教育委員会

(2) 本稿に使用した図は、遺構図を除き全て東部町史作成のために、再実測されたものを使用させていただいた。

(3) 近年、上小地域の該期土器に地域色があるか、否か問題になっているが、現時点では資料不足のため不明である。

(上田市役所)

昭和63年度 佐久考古学会 会員名簿

(50音順)

No.	氏名	電話	住所	
1	青森 孝雄	0267(67)2129	〒385	佐久市平塚169	
2	浅沼 馨	0267(62)6788	〒384-01	佐久市桜井	
3	阿部栄四郎	0267(67)5465	〒385	佐久市岩村田	
4	池田勝吉郎	0267(62)4390	〒384-01	佐久市中込359-4	
5	井出 智秀	0267(92)3138	〒384-11	小海町川久保	
6	井出 正義	0267(92)3171	〒384-11	小海町東馬流5047	幹事長
7	井上 行雄	0267(67)3296	〒385	佐久市岩村田1476-1	地区委員
8	上原 芳男	0267(67)1410	〒385	佐久市岩村田	賛助会員
9	臼田 武正	0267(62)8133	〒384-01	佐久市桜井879	幹事
10	内山 俊雄	0267(32)3180	〒389-01	御代田町草越	
11	大井今朝太	0267(67)4091	〒385	佐久市根々井	地区委員
12	大沢 俊雄	0267(32)2613	〒389-01	御代田町御代田1841	
13	荻原 範仁	0267(32)3892	〒389-01	御代田町草越372	地区委員
14	尾台 卓一	0267(32)3196	〒389-01	御代田町御代田	
15	角張 淳一	0267(32)3996	〒389-02	御代田町御代田雇用促進住宅1-402	
16	掛川喜四郎	0267(53)4542	〒384-22	望月町春日2883-3	地区委員
17	掛川 祐次	0267(22)3418	〒384	小諸市赤坂2-5-20	
18	金成 弘臣	0267(62)3845	〒384-01	佐久市中込653	
19	木内 和枝	0267(62)3070	〒384-01	佐久市伴野1502-2	
20	木内 捷	0267(68)0617	〒385	佐久市岩村田1040-7	幹事
21	木島 美子	0267(67)3408	〒385	佐久市岩村田稲荷町615	
22	倉見 渡	0267(53)3485	〒384-22	望月町茂田井2188-2	地区委員
23	黒岩 忠男	0267(82)2487	〒384-03	臼田町臼田1736	副会長
24	高地 正雄	0267(22)5364	〒384	小諸市御影新田谷地原2458-5	
25	小平 惠一	0267(68)3818	〒385	佐久市香坂2602	幹事
26	小林 真寿	0267(68)6309	〒384-01	佐久市中込3249-1 信濃ハイツ5号	幹事
27	小林 春子	0267(82)2141	〒384-03	臼田町勝間202-4	
28	小山 岳夫	0267(67)1202	〒385	佐久市新子田1910-16	幹事
29	佐々木春蔵	0267(88)2315	〒384-07	八千穂村上畑中央	地区委員
30	佐々木宗昭	0267(88)2325	〒384-07	八千穂村上畑866	幹事
31	佐藤 敏	0267(68)2325	〒385	佐久市岩村田2120	地区委員

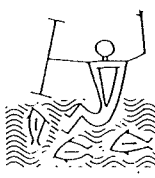
32	篠原　貞雄	0267(92)2562	〒384-11	小海町東馬流3004-5	
33	篠原　浩江	0267(53)2433	〒384-22	立科町茂田井1611-4	幹　事
34	島田　恵子	0267(86)3143	〒384-06	佐久町羽黒下110	幹　事
35	白倉　盛男	0267(67)5032	〒385	佐久市岩村田2244	副会長
36	助川　朋弘		〒385	佐久市猿久保912-1 第２関口荘６号	幹　事
37	須藤　隆司	0267(68)0766	〒385	佐久市猿久保244-1 寿荘３号	幹　事
38	高村　博文	0267(63)2406	〒384-01	佐久市中込3734-27 あっぷるハイツ103号	幹　事
39	竹原　　学	0267(68)6090	〒384-01	佐久市中込3249-1 信濃ハイツ１号	幹　事
40	田中正治郎	0267(23)7786	〒384	小諸市加増1292 大日荘	地区委員
41	田村　祐子	0267(32)2612	〒389-02	御代田町御代田1806	
42	土屋　忠芳	0267(98)2142	〒384-13	南牧村野辺山274	地区委員
43	土屋　長久	0267(46)0898	〒389-01	軽井沢町長倉2948-1	
44	堤　　隆	0267(68)3696	〒385	佐久市岩村田1317-1	幹　事
45	新津　開三	0267(82)5001	〒384-03	臼田町稲荷143	
46	羽毛田卓也	0267(67)4687	〒385	佐久市根々井554-1	幹　事
47	羽毛田伸博	0267(67)5491	〒385	佐久市岩村田729	幹　事
48	畠山　俊彦	0267(62)6670	〒384-01	佐久市三塚287	賛助会員
49	花岡　　弘	0267(23)5797	〒384	小諸市御影新田1965-2	幹　事
50	林　　幸彦	0267(67)0969	〒385	佐久市下平尾2236	幹　事
51	福島　邦男	0267(53)4150	〒384-22	望月町協和1374	幹　事
52	藤沢　平治	0267(62)6677	〒384-01	佐久市跡部385-1	
53	三石　宗一	0267(63)0673	〒384-01	佐久市高柳９	幹　事
54	三石　延雄	0267(82)4101	〒384-03	臼田町入沢2988	
55	翠川　泰弘		〒384-01	佐久市瀬戸377-68 まきば荘５号	幹　事
56	峯村今左夫	0267(58)2559	〒384-21	浅科村甲1359-8	
57	宮下　健司	0262(93)3391	〒388	長野市篠ノ井布施五明340-7	
58	森泉かよ子	0262(93)1346	〒388	長野市みこと川86	幹　事
59	森泉　好治	0267(67)2828	〒385	佐久市岩村田541	
60	森川　宗治	0267(32)2927	〒389-02	御代田町西軽井沢4108-1173	
61	由井　　明	0267(97)2046	〒384-14	川上村御所平815	地区委員
62	由井　茂也	0267(97)2401	〒384-14	川上村御所平389	会　長
63	由井裕太郎	0267(97)2629	〒384-14	川上村御所平1372	
64	吉沢　　靖	0267(97)2677	〒384-14	川上村樋沢	
65	吉沢袈裟衛	0267(97)2741	〒384-12	川上村樋沢1294	
66	渡辺　重義	0267(42)4014	〒389-01	軽井沢町1148	
67	和久井義雄	0267(67)0163	〒385	佐久市新子田1788-3	
68	岩村田高校社会班		〒385	佐久市岩村田	

懐かしいアルバムより

右は、昭和49年５月の御代田町馬瀬口の下原古墳の調査の折りのスナップである。

今はすでに故人となられた与良清先生、武藤金さん、大井豊さんなどの他、井上行雄さん、三石延雄さん、佐藤敏さん、土屋長久さん、青木幸男さん、高村博文さん、木内捷さんなどの顔がみえる。どうやら木内さんの体型は今とあまり変わりないようだ（失礼？）。

御代田町馬瀬口　下原古墳の調査



——身近な話題——

200字短信

森川宗治

今年の10月入会させていただいた森川宗治（ムネハル）と申します。

現役時代から一度発掘をやって見たいと思っておりましたが、５月から金井城・中金井遺跡の発掘に参加させていただき長い間の念願がかない喜んでおります。

今後は諸先生方にご指導をいただき、発掘の理論や技術を身につけ、さらに考古学も学び第二の人生の生がいとしたいと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

助川朋広

昨年６月に機会がありまして、佐久市に来ました。出身地は長野市なのですが、佐久市はとても寒いので、毎日ぶるぶる震えています。これ以上体調をくずさないように気をつけていきたいと思っています。

まだまだ未熟者なので、より一層研究に励みたいと思っていますので、よろしくお願いします。

木島美子

学生時代を含めて５年間も離れていた佐久に戻ってきて、約９ケ月が過ぎようとしています。学生の頃、アルバイトで始めた考古学が続いているなんて信じられないのですが…やっぱり事実です。どこかで、普通のＯＬになりなさいと囁いているのですが…。

ＯＬになれない私は、この佐久で関東で視てきた考古学とは違った一面を、色々な思いで視ています。こんな私ですが、この先、どうぞよろしくお願いします。

事務局より

● 会員の高村博文さんが、小須田みよ江さんと、本学会副会長でもある黒岩忠男ご夫妻のご媒酌により、昭和63年10月９日㈰望月町福祉センターにてご結婚されました。おめでとうございます。

● 会員の角張淳一さんに、男の子が誕生しました。昭和63年８月26日生まれ、2,980ｇで、名前は裕佑（ゆうすけ）くんです。おめでとうございます。

● 会員の三石宗一さんに、女の子が誕生しました。昭和63年９月27日生まれ、3,080ｇで、名前は朝美（あさみ）ちゃんです。おめでとうございます。

● 新入会員紹介（新しい仲間です。みなさんよろしくお願いします。）

木島美子	〒385	佐久市岩村田稲荷町615	☎ 0267（67）3408
森川宗治	〒389-02	北佐久郡御代田町西軽井沢4108-1173	☎ 0267（32）2927
上原芳男	〒385	佐久市岩村田	☎ 0267（67）1410（賛助会員）

▶編集後記◀

本年も残すところ僅かになりました。毎年そうなのですが、新年の決意とは裏腹に、悔いの残る一年となってしまいました。皆さんは充実した一年を過ごされたでしょうか。

さて、近ごろは東山道問題もクローズアップされておりますが、そのルートや駅の存在場所などの解明についても、単なる地元博愛的な見方を排し、真に実証的な、また、生産的な論議を尽くしたいものです。

なお、最後になりましたが、本号に原稿をお寄せいただいた井出先生、詳細な論考をいただいた上田の尾見智志さんには感謝いたします。また、竹原くん、臼田さん、旅行幹事ほんとうにご苦労さまでした。（堤　隆）

佐久考古通信　No.46号

発行所　佐久考古学会
〒384-11南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
☎（0267）92－3171

発行者　由井　茂也

編集者　井出・福島・堤・須藤
小林・小山

印刷所　ほおずき書籍（株）

佐久考古通信

佐久考古通信　No47・48号
1989．3．25
佐久考古学会

目　　次

佐久市下平尾採集の柳葉形尖頭器……堤　　隆……1
長門町六反田遺跡出土の表採資料……翠川　泰弘……2
縄文土器の補修孔について……助川　朋広……14
佐久地方の古代土器様相について　――坏・埦の変化を中心として――……高村　博文……15
なつかしいアルバムより……事　務　局……24
200字短信　――身近な話題――……各　会　員……25

佐久市下平尾採集の柳葉形尖頭器

堤　　隆

1　はじめに

ここに紹介する資料は、佐久市下平尾菖蒲平採集とされる柳葉形尖頭器で、佐久市教育委員会に寄託された資料である。しかし、佐久市下平尾には『菖蒲平』という地名は現存しておらず、また、そのように通称される地名もない。ただし字『菖蒲沢』地籍は存在しており、その『菖蒲沢』地籍が誤って記載されたと考えられるものである。なお、本石器は、すでに昭和29年の信濃史料編纂に伴う調査において、永峯光一・樋口昇一氏の目に触れ、注意されていたものでもある。

2　資　　料

石器は、半透明で良質な黒曜石を素材としており、下半部を古く欠損する。現存長5.44㎜・幅2.12㎜・厚8.6㎜・重量9.5ｇを測る。

細身のいわゆる柳葉形を呈する尖頭器で、断面はレンズ状を呈する。両面とも丁寧な調整に覆われており、調整の基本順序は、ｄ→ｃ→ｂ→ａとなっている。また折れ面の縁片には、微細な剝離痕が観察される（矢印）。

3　資料の性格

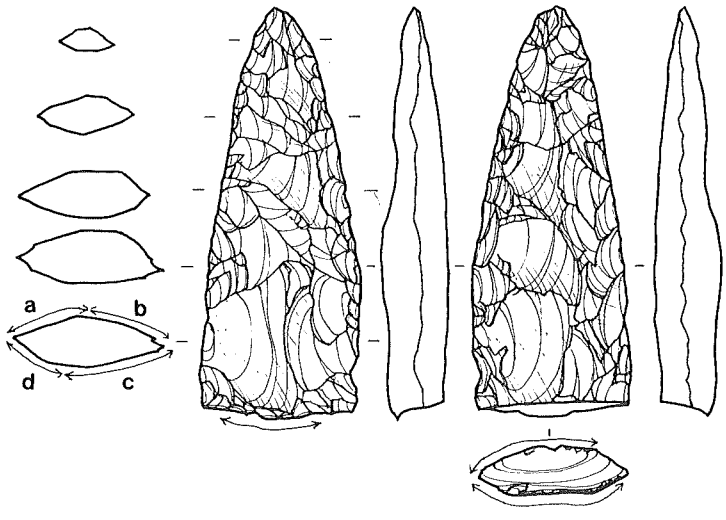
このような細身の、いわゆる柳葉形を呈する尖頭器は、旧石器時代の細石刃文化以前にはほとんど認められていない。それ以前の尖頭器をいえば、木葉形尖頭器や有樋尖頭器などである。

柳葉形尖頭器は、細石刃文化以降、おしなべて縄文時代草創期に位置付けられる石器であると考えられよう。

近年、平尾～八風山の南麓においては、関越自動車道の整備などに伴って、数多くの発掘調査がなされているが、縄文時代草創期に位置付けられる資料も認められてきた。佐久市香坂の鶉尾根遺跡では黒曜石の有舌尖頭器が出土している。

特筆すべきは、玄武岩の原産地でもある佐久市香坂下茂内遺跡における、200点をこえる木葉形尖頭器の出土で、しかもそれは浅間起源と思われるパミス（ＹＰ？）を挟んで２～３枚の文化層に分離できそうなものなのだそうである。

このような資料の増加によって、佐久における縄文時代の黎明期の様相が、しだいに解明されてゆくことが大いに望まれよう。　　（御代田町教育委員会）



第１図　菖蒲平の柳葉形尖頭器（１：１）

長門町六反田遺跡出土の表採資料

翠川　泰弘

1　はじめに

六反田遺跡は小県郡長門町大字古町字六反田に所在する。遺跡は長門町の北西端、依田川と武石川の合流点より武石川を800m遡上した武石川右岸の台地上に立置する。この辺りは、依田川谷底平野と武石川谷底平野が融合し、依田窪南部地区最大の平坦地が形成される地域であり、本遺跡は南北150m、東西100m程の規模を有し、標高は約600m～608mを測る。

発掘調査は、昭和56年―圃場整備事業[1]・昭和62年―町道中道線拡幅工事[2]に伴ない２回実施されており、縄文時代早期・前期・中期・後期、弥生時代後期、奈良・平安時代、中世の遺構及び該期の遺物が多量に検出されている。この調査によって、本遺跡は依田窪南部地区における拠点的な性格を有する遺跡であることが判明し、とりわけ長門町・武石村の歴史を究明する上では必要不可欠な情報を内包している遺跡であることが確認された。

一方、本遺跡は昭和30年代の開田事業の際に多量の遺物が出土したことより、地元研究者の関心が寄せられ、営々と表面採集が続けられてきた。そのため、個人所有の表採品が多量に存在する。この表採品のなかには、発掘調査では検出されなかった新知見の資料や、大形破片も見受けられる。そこで、今回機会に恵まれたので、その紹介をしたいと思う。紹介する資料は、翠川公之、児玉卓文の両氏及び筆者が、昭和30年～55年までの間に採集したものであり、このなかから、縄文時代早期・前期の土器をとりあげた。また、これ等の大半は、遺跡の北斜面にあたる二本木地籍206－４・208－１番[3]より採集されている。

2　資　　料

まず、時期別に早期と前期の大別を行い、時間軸に沿って群別し、型式を考慮しながら類別を行った。さらに、類のなかにおけるまとまりを種別し、また、前期初頭の土器群については種より下位の細分も行っている。

①　早期の土器

第Ⅰ群…早期前半のもの（第１図１・２）

押型文土器２点が観られる。１・２は共に、楕円文が密接施文されたものである。１は粒の細かい楕円文であり、器面からの凸出度合が低いことから、彫りの浅い施文具が用いられたことを窺わせる。内面は研磨され、胎土には細石英粒が少量含まれる。焼成は良好であり、色調は茶褐色を呈する。２は口縁部の破片である。楕円文は横位回転により密接施文され、１に比べて粒が大きく、器面からの凸出度合も高い。胎土に含まれる繊維の量は多量であり、本格的な繊維の混入が行われる第Ⅱ群土器とそれほど変化がない。この他胎土には、茶褐色土粒・細砂粒が多量に含まれている。色調は暗褐色を呈する。孔は土器の内外両方面より、焼成後に穿たれたものである。穿孔の位置及び状況から、補修孔と理解した。

施文状況及び胎土から、１は細久保式、２は押型文末期に比定される。

第Ⅱ群…早期後半のもの。

第１類　（第１図３～５）

貝殻条痕文を有するもの、又は、条痕の断面形態及び条痕内部の擦痕状況より貝殻条痕文と類推されるもの。３は幅広の放射肋を持つ貝殻により、外面は縦位に、内面は横位に条痕文が施文されている。繊維を多含するものの焼成は堅緻であり、器壁は薄い。繊維の他、細石英粒の混入量も多量である。色調は外面が暗褐色、内面は茶褐色を呈する。４・５の外面に施文された条痕文は、内面に比べて貧弱であり、擦痕風を呈する。４は化粧粘土が貼付され、サンドイッチ状の繊維処理が施されている。色調は４が黄褐色・５が茶褐色を呈する。

第２類　（第１図６～16）

絡条体圧痕文及び絡条体条痕文を有するもの。６・７[4]は白色系の化粧粘土が貼付され、サンドイッチ状の繊維処理が行われている。また、橙褐色～赤褐色の塗彩が施されており、本類のなかでは顔つきを異にする。６は横位・斜位に絡条体圧痕文が施文され、内面には絡条体を引上めた明瞭な痕跡が看取される。撚紐はRである。７は凸帯上に太い絡条体圧痕文が施文され、裏面には明瞭な条痕文が横走する。撚紐はLと思われるが、判然としない。６・７共に焼成は良好であり、微砂粒を少量含有する。

８～16は概ね暗褐色～黒褐色の色調を呈し、白色粒子・茶褐色土粒を多含、また、焼成は脆弱な傾向を示しており、前述した６・７とは様相を異にする。８は口縁部破片であり、平坦な口唇部を有する。絡条体圧痕文は口縁部直下、凸帯上・凸帯直下に配されており、何れも斜めに施文されている。また、施文は内面にま

で及んでいる。撚紐は太く、すべてRである。9は、内面には絡条体圧痕文が看取されるが、外面には明瞭な痕跡が認められない。内面に施文が及ぶことより、口縁部付近の破片であることが推察される。撚紐はRである。10は外面に絡条体圧痕文、裏面に浅い条痕文を有し、撚紐はRである。11は厚手の作りを呈し、器厚は約1.4cmを計測する。内外面は共に浅い条痕文が施され、裏面には絡条体を引上めた痕跡が窺える。撚紐はRである。12・13は条痕文のみが看取されるものである。条痕文は浅く、ことに外面の施文は貧弱であり、12は擦痕風を呈し、13では殆んど看取されない。

14・15は繊細な絡条体圧痕文が施文されるものであり、撚紐の圧痕径（1段撚紐の圧痕直径）は約1㎜を計測するに過ぎない。8～13に比べ精緻な感を呈し、胎土に含まれる白色粒子は細かく少量であり、また、茶褐色土粒は殆んど混入されていない。14の外面には斜位圧痕による絡条体圧痕文、内面には同一施文具による擦痕風の条痕文が観られる。施文原体の撚紐はLである。15は低い隆帯上に、絡条体圧痕文が斜位に施文されている。内外面には条痕文が観られず、胎土には金雲母片が混入されている。

第3類　（第1図16）

隆帯文系のものを本類とする。16は波頂部破片である。隆帯は「∧」状を呈し、波頂部の両端においては口唇部より突出して貼付されている。黒褐色を呈し、胎土には多量の繊維及び細白色粒子を多含する。焼成は脆弱であり、風化が激しい。

第1類は施文状況及び胎土から、茅山下層式に比定されると思われる。第2類は6・7、8～13、14・15の3種（あるいは3種以上）に類別される可能性がある。しかしながら、全容の窺い知れない細片資料であるために、文様・文様構成等の把握が困難である。したがって、ここでは敢えて細分を行わず、胎土・施文具に主眼をおいた比較観察に留めておいた。近年、条痕文・絡条体圧痕文土器は研究が進展し、編年も確率されつつあるが[5]、第2類は漠然と、早期末葉に位置付けておきたい。第3類は神之木台式に比定される。

②　前期の土器

早期の土器に比べ多量であり、大形破片も少なくない。初頭より後葉に至るまで際立った断絶がなく、連線とした土器群が存在する。

第Ⅰ群…前期初頭のもの

本群は概ね暗褐色～黒褐色の色調を呈し、胎土には繊維・白色粒子・茶褐色土粒を多含するものが多半を占める。また、焼成は脆弱な傾向を示す。

第1類　（第2図17・18）

無地文の文様帯が形成されるものを本類とした。17・18は凸帯を有し、それを文様帯区画線として、地文縄文の文様帯と無地文の文様帯が分割される。17は屈曲部位の破片であり、無地文の文様帯には乱れた撚糸側面圧痕文（L原体による）が施文されている。花積下層式系の土器に施文される撚糸側面圧痕文とは様相が異なり、緩い結節原体の末端が回転施文された際に生じる軌跡の様に乱れている。凸帯上には縄文原体による圧痕？を有し、その下方はRL縄文が斜走する。18は口縁部破片であり、口唇部は平坦面を形成している。口縁部の文様帯には0段原体の乱れた圧痕が看取され、凸帯上部より下方はLR縄文が施文されている。

第2類　（第2図19）

刻目を有する隆帯が貼付されるもの。19は羽状縄文が施文され、隆帯上には斜位の刻目が施されている。本群のなかでは薄手の作りであり、内面には顕著な指頭痕が看取される。

第3類　（第2図20～22）

口縁部直下に凸帯を巡らし、羽状縄文が施文されるもの。20はやや乱れた縦位羽状構成が採られている。21は小波状を呈する。太い原体が用いられ、凸帯の上端では、凸帯の剝落を防止するかの如く力強い施文が行われているため、部分的に側面圧痕となっている。また、口唇部は内側に削がれている。22も小破状を呈する。凸帯は低く、その断面形はカマボコ状を呈する。凸帯上位と口縁部の間にはナデが施され、破片下端には結節文が加飾されている。

第4類　（第2図23～30）

肥厚口縁を有し、縄文を地文とするもの。

a種　（23～25）

口縁部下辺のみが肥厚するもの。23は小波状を呈する。24は肥厚部下方にナデが施され、サンドイッチ状の繊維処理が顕著であること等、本類のなかでは様相を異にするが、便宜的に本類に含めた。25は波状を呈する。

b種　（26～30）

口縁部全体が一定幅を有して肥厚するものを本類とするが、さらに肥厚形態によりさらに細分される。

イ　（26）

肥厚部が稜を形成して膨らむもの。26は小波状を呈し、波頂部は周辺よりさらに突出する。縄文は、波頂部を境界垂線として羽状構成が採られ、LR撚紐の末端にはRの結節が加えられていると思われる。波頂部を除き、口唇部は内側に削がれている。

ロ　（27～30）

背の丸い肥厚が形成されるものである。27以外は結節文が加飾されている。28～30は口唇部に面取りが施され、30は肥厚帯の中央部を明瞭な沈線文が横走する。

第5類　（第2図31）

口縁部が肥厚しないもの。31は第4類a種と酷似しているが、粘土帯の貼付による口縁部の作出を行っていないので別類と扱った。粘土があまり硬化しないうちに縄文が施文されたこと、また、口唇部の押圧が行われたことにより、下辺が膨ら味を帯びている。RL・LR原体により羽状構成が採られるが、やや乱れた施文である。

第6類　(第3図32～34)

羽状縄文が施文される胴部及び底部を一括して本類とした。32は胴部で一旦膨む器形を有し、文様はLR・RL原体による羽状縄文が施文される。花積下層式に特徴的な器形であるが、文様・胎土等の上では第1～5類と分割し得ない。33は結節文が加えられ、胎土には石英粒？を多含する。35は厚手の尖底部破片である。

第7類　(第3図35～49)

撚糸文が施文されるものを本類とする。

a種　(35～37)

撚紐1本巻き原体によるもの。35は口縁下辺が膨らみ、太い沈線文が横走する。撚糸文は口唇及び内面約1cmの付近まで施文され、内面は施文後に研かれている。撚紐はRである。36は胴部・37は胴下半部の破片と思われる。36はγ、37はRの撚紐が用いられた原体による施文である。

b種　(38～49)

撚紐2本揃え巻きのもの。30は0段撚紐が使用されているが、撚りの方向は判断できない。39はR・R、L・Lをそれぞれ軸巻きにした2種類の原体により、口縁部は横位、胴部は縦位に回転施文されているものと思われる。38・39の肥厚口縁は背が丸く、第4類a種と共通した形態を有する。

40は波頂部が垂下肥厚し、口縁部肥厚帯は一定の幅を有して膨む。肥厚口縁下と横走隆帯の間には山形状に隆帯が貼付され、文様帯が構成されている。胴部は縦羽状構成の撚糸文が施文される。施文原体はL・L、R・Rをそれぞれ軸巻きにした2種類の原体が用いられている。41は焼成・胎土等から、40の同一個体片と判断した。

42～49は胴部破片である。42～45は縦位に羽状構成を採る。42は肥厚口縁が形成されるものと同様に、上方は横走する撚糸文が施文されている。46～49は文様構成が不明瞭であるが、基本的には縦位、または横位の構成が採られているものと推察される。46は撚りの異なるL・Rを二本揃え巻きにした原体が用いられている。46・47は非常に細かい撚糸文が施文される。48は胴下半部の破片と思われ、内面には条痕文風の明瞭な調整痕が看取される。49は尖底部の破片である。夥しい量の繊維の混入が観られ、焼成は脆弱である。

本群は第1・2類及び第6類－32を除き、仮称「中道式[6]」に比定されるものである。第7類b種－40は、肥厚口縁下に山形状の隆帯文が貼付されることから、木島III式・下吉井式A[7]の影響が窺える。一方、隆帯上及び地文は貝殻文が施文されず、存地系土器の伝統的な施文具による撚糸文が施文されている。さらに、この様な文様構成を施すものが他に存在せず、数量的に限られていることも考慮すれば、40は、東海・関東地方と中部地方との両要素が融合した折衷土器として捉えることができる。また、木島III式・下吉井式Aの影響を受けていることから、それ等と併行関係にあるか、または、若干後出するものとしての時間的位置付けが可能である。

第II群…前期前葉のもの

第1類　(第4図50～61)

半截竹管を主体的な文様描出具として用い、サンドイッチ状に繊維処理が行われたものを本類とする。内面は丁寧に研磨され、精緻な作りを呈するものが大半を占める。50は梯子状沈線文と瘤状貼付文により口縁部文様帯が構成され、胴部には多条縄によるループ文が施文されている。51は平行沈線文間に爪形文が施文される。52は縄文地文の上に、管内皮痕を有する平行沈線文が半円状に描かれている。53は、真正のコンパス文が描かれており、コンパス文の上部は足の長いループ文、下方は$L\left\{\begin{matrix}L\\R\end{matrix}\right.$にLを左、Rを右巻きにしながら交点で上下を交互に逆転させた付加状の縄文が施文されている。54はループ文、56は付加状文、55は両方の縄文が器面を覆っている。また、55のループ文は非常に短かい。57～60は組紐文を地文とするものであり、57は半截竹管文、59・60はコンパス文が描かれる。60のコンパス文は波状を呈し、真正のコンパス文ではなくなっている。61は揚底風を呈する底部破片である。底裏面には、放射状に縄文が施文されている。

本類は関山式で、50・53はI式、52・55～60はII式に比定される。

第2類　(第5図62～70)

指頭圧痕を有する薄手のものを本類とする。胎土に含まれる繊維の有無により、2種に細分される。

a種　(62～68)

無繊維であるか、積極的な繊維混入の観られないもの。62は内屈する口頸部の破片であり、指頭によるつまみ出しが行われた隆帯が貼付される。また、器面は竹管状工具による細線文が描かれている。63は細い管状工具により、細線文と刺突文が施文され、中央部は縦位に化粧粘土が剥落している。64は鋭い爪形文が3列配されている。65・66は無文であり、65はやや外反する口縁部の破片である。67は非常に細い細線文が格子目状に描かれる。68は無文の波頂部破片で、前述のものに比べて石英粒の含有率が低く、白色粒子の混入

が目立つ。

b種　(69・70)

繊維を含有するもの。69は波頂部破片であり、口唇部には、ヘラ状工具による刻目が施されている。内面には若干擦痕が看取される。70は外面縦位、内面は横位の擦痕文を有する。

a種は所謂オセンベ土器であり、62は木島Ⅶ式[8]に、63は清水の上Ⅰ式、64は同Ⅱ式[9]に比定されると思われる。65～69は東海地方の影響を受けた在地産のものである。b種は、東西の折衷的な要素を持つものである。

第Ⅲ群…前期中葉のもの。

第1類　(第5図71～76)

貝殻腹縁文・櫛歯状工具による連続刺突文を有するものを本類とする。本類は焼成が良好であり、白色微砂粒を少量含有する。71・72は有段口縁部上に貝殻腹縁文が施文されている。71は放射肋をもつ貝殻が施文具として用いられている。両者は前型式の成形手法を踏襲しており、裏面には指頭痕が著しい。73～76は櫛歯状工具による連続刺突文が施文されるものである。73は双頭の小突起を有し、胴部は前々段反撚りの原体$L\begin{cases}R\begin{cases}R\\R\end{cases}\\R\begin{cases}R\\R\end{cases}\end{cases}$による縄文が斜走する。74は無節Ｌ縄文が4段施文される。75は胴部に条線文が描かれるが、連続刺突文及び条線文は同一施文具による描出と推察される。76は波頂部破片である。双頭の波頂部より隆帯が垂下し、その上部には刺突文が施文されている。また、隆帯の脇には櫛歯状工具を斜位方向に引きずった短い条線文が看取される。

本類は神之木式に比定される。貝殻腹縁文の施文されたものは、前型式からの伝統的な成形手法であることから、神之木式のなかでも古相を呈するものとして理解したい。

第2類　(第5図77～82)

櫛歯状工具による連点状刺突文を有するものを本類とする。77～80は無繊維のものである。77は縦位に刺突文が施文される。78は条線文と縦位の刺突文により、文様が構成されている。79・80は半截竹管による平行沈線文と連続刺突文が交互に施文される。無繊維のものは白色粒子を多含し、脆弱な傾向を示す。なお、80の胎土には極微量の繊維が看取される。

81・82は多量の繊維を混入し、繊維はサンドイッチ状に処理されている。81は頸部で一旦括れ、口縁が開く器形を呈し、文様は連点状刺突により菱形の構成が採られる。82は縦位・横位の刺突文により、文様が構成される。繊維を含有する81・82は口唇部の内削ぎ、成形手法の点では関山式の特徴を具備する。

本類は有尾式に比定されるが、81・82は成形手法上、積極的な比定はし難い。

第3類　(第6図83～87)

爪形文により主体文様が構成されるもの。83はキャリパー状器形を呈し、口縁は波状を呈する。爪形文による菱形・渦巻き状のモチーフが描かれるものと推察される。基本的な爪形文の施文手法は押引きであり、器面に対し浅い角度で刺突されている。サンドイッチ状の繊維処理が施されて、内面は非常に平滑に仕上げられており、胎土には石英粒・黒雲母細片が多量に含まれている。84～86は同一個体片と思われる。84は口縁部の文様帯に菱形構成を採る爪形文が施文されるが、明確な押引き手法によるものではない。半截竹管による平行沈線文を描いた後、器面に対し垂直に近い角度で刺突を行っており、爪形文は不揃いで間隔が一定せず、83に比べ深い施文となっている。胎土には白色粒子・茶褐色土粒を多含し、繊維は器壁内に均一に混入されず斑がある。83に比べ焼成は不良である。

87は口縁部に沿って隆帯を2帯貼付し、その上には爪形文が刺突される。また、隆帯下にも平行沈線文を伴なう爪形文が配列されている。爪形文は粗雑であり、判然としないが、工具の先端は裂けている様な状況が窺える。サンドイッチ状の繊維処理が施され、内面は非常に平滑である。施文具及び成形手法からすれば、第1類あるいは第Ⅱ類との併行関係を想定し得るが、不明瞭であるため、便宜的に本類に含めた。

本類は有尾式の範疇で捉えられるが、83と84に観られる施文方法と成形手法の相違については、今後、検討が必要である。

第4類　(第6図88～93)

沈線文により主体文様が構成されるものを本類とした。文様・施文具により3種に細分される。

a種　(88～91)

半截竹管による平行沈線文のみにより、口縁部の文様が構成されるもの。88は横位・斜位に沈線文が描かれる。繊維多含し、サンドイッチ状の繊維処理が施される。89・90は粗雑な沈線文が描かれている。白色粒子・繊維を少量含み、脆弱な傾向を示す。91は胴部屈曲部の大形破片である。乱雑な平行沈線文が羽状構成？を採る。胴部下方はＬＲ縄文が施文される。白色粒子を多含し、繊維は均一に混入されず偏在する。焼成良好であり、器面は比較的丁寧に仕上げられている。

b種　(92)

平行沈線文と爪形文が併用されるもの。92は3条の爪形文により、文様帯が区画されている。爪形文・平行沈線文は深く施文され、爪形文は84と同一手法による施文である。細白色粒子を多量、繊維を少量含有し、内面には指頭痕が顕著である。

c種　(93)

櫛歯状工具による条線文のみが描かれるもの。波

状・逆コの字状・直線的に条線文が描かれている。サンドイッチ状の繊維処理が施された精緻な土器である。87と同様に第1類・第2類との併行関係を指摘し得るものであるが、判然としないため、本類に加えた。

本類は有尾・黒浜式の両型式が存在すると思われるが、明確な分割は不可能である。全体的に有尾式の色彩を強く感じるが、これから検討を必要とする土器群である。

第5類　(第6図94～第7図102)

縄文のみが施文されるものを一括して本類とした。積極的な繊維の混入が観られるものは無く、細白色粒子を含有する。94～98は単節縄文が施文されたものである。94・95は条間のあいた斜行縄文が施文され、口唇部は平坦である。96は羽状縄文が施文される。97は縦位回転施文による乱れた縄文が施文されている。98は揚底の底部であり、LR・RLによる羽状縄文が施文される。99は底部直上部の破片であり、結節付付加条のR$\left\{\begin{matrix}\mathrm{L}\\ \mathrm{l}\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}\mathrm{R}\\ \mathrm{R}\end{matrix}\right.$原体による縄文が斜走する。100は付加条文であり、軸縄にRを左・Rを右巻きにした原体が用いられている。101も付加条文が施文されるものであり、施文原体はR$\left\{\begin{matrix}\mathrm{L}\\ \mathrm{L}\end{matrix}\right.$+R・Rの左巻きである。102は無節縄文により、羽状構成が採られ、口唇部は平坦面を形成している。

第Ⅳ群土器…前期後葉のもの。

第1類　(第7図103)

爪形文のみが施文されるもの。103は1条の爪形文が横走する口縁部破片である。爪形文は細く繊細である。

第2類　(第7図104～109)

浮線文土器を本類とした。104～106は太い浮線文と爪形文により文様が構成される。107～109は細い浮線文が貼付されるものである。107はキャリパー状器形を呈する口縁部の破片であり、口唇部には魚状を呈する意匠文が貼付されている。109は底部破片である。

第3類　(第7図110)

沈線文系のものを本種とした。110はキャリパー状(屈折器形か？)器形を呈する口縁部やや下方の破片である。縄文地文上に渦巻き状の沈線文が描かれる。

第4類　(第7図111)

浅鉢器形を呈するもの。木葉文が描かれており、沈線文間には不明瞭な爪形状刻みが施されている。

第5類　(第7図112・113)

集合沈線文により文様が構成されるもの。112は底部直上部の破片であり、矢羽根状に集合沈線文が描かれている。113は斜位・縦位に施文され、112に比べ沈線は明瞭である。

第6類　(第7図114)

所謂結節文が施文されるもの。114は細い集合沈線上に結節浮線文が貼付された底部破片である。

第7類　(第7図115)

整然とした羽状縄文が施文される薄手の土器を本類とした。115は白色系の粘土が用いられたものであり、縄文は0段多条の原体によるものと推察される。

本群は第1類が諸磯a式・第2～4類が同b式、そして第5～7類が同じくc式に比定されると思われる。また、第7類は搬入品であり、北白川下層式に比定される。

3　おわりに

以上、六反遺跡出土の表採資料を紹介してきたが、本遺跡出土の縄文土器にはいつも驚かされるばかりであり、原稿を書き終えた現在、自分の勉強不足を痛切に感じている。

末筆ながら、本稿を草すにあたり大変お世話になった児玉卓文氏、ならびに、資料を貸与して下さった翠川公之氏に記して感謝の意を表します。

(佐久埋蔵文化財調査センター)

註

(1)　児玉卓文他　「長門町六反田」　長門町教育委員会　1982

(2)　児玉卓文他　「長門町六反田Ⅱ」　長門町教育委員会　1987

(3)　注2に同じ

(4)　6・7の資料は、昭和47年、当時大学生であった児玉卓文氏が、故山内清男先生に御教示を戴いた資料である。児玉氏によれば、この資料を観た山内先生は「児玉君、これは子母口じゃないかね」と語ったそうである。当時の研究段階では、絡条体圧痕文が施文される土器はイコール子母口式と見做されていた。しかし、現在では子母口式はその存否及び系統性に問題を生じ、一方、子母口式以降にも絡条体圧痕文を持つ土器が存在することが明確になっている。

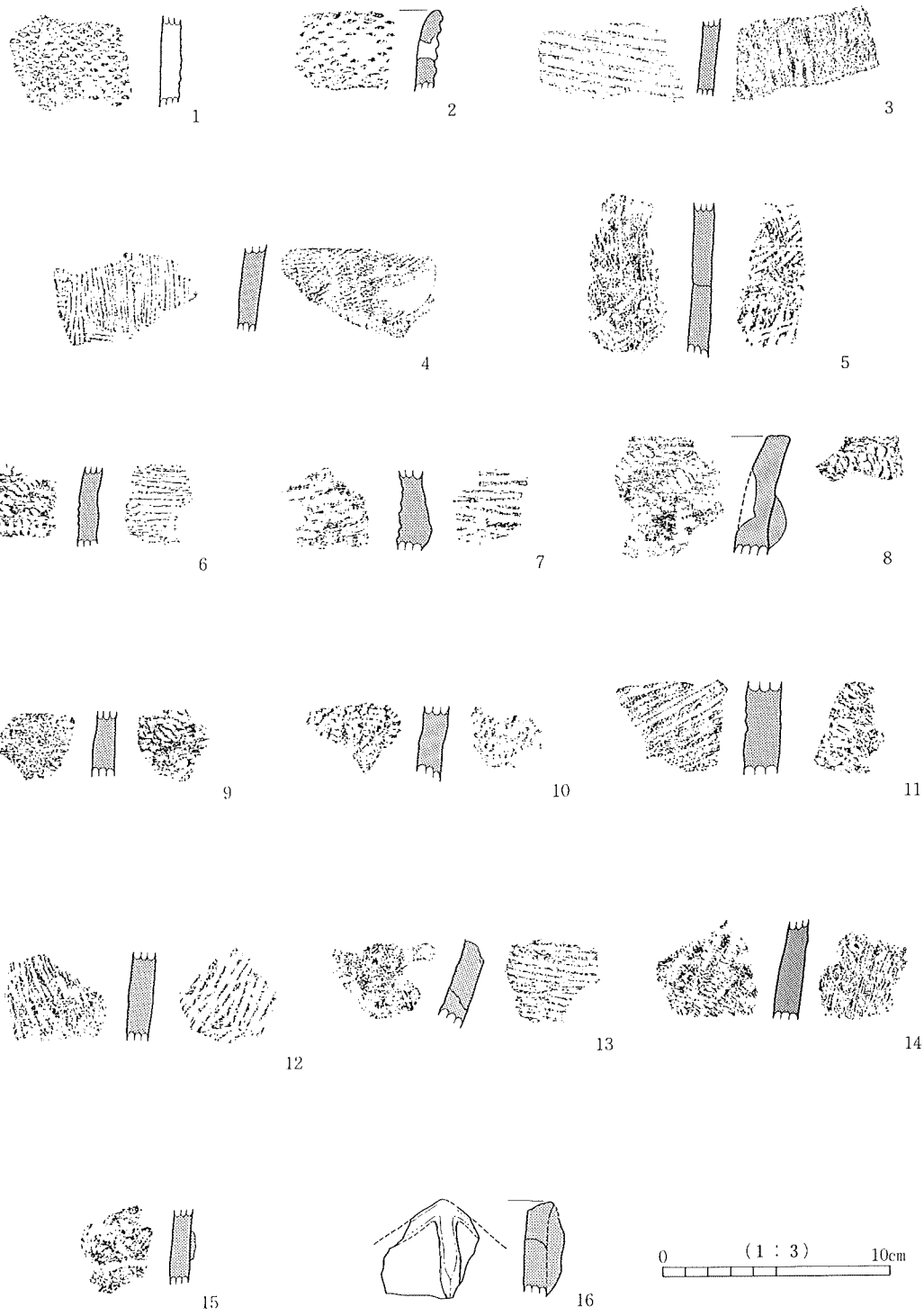
(5)　高風呂遺跡(守屋昌文1986)、梨久保遺跡(小沢由香利1986)、善棚B・下り林・中島A・八窪遺跡(百瀬忠幸1987・1988)がある。

(6)　仮称「中道式」については現在検討中であり、類型化及び整理の必要性を感じている。

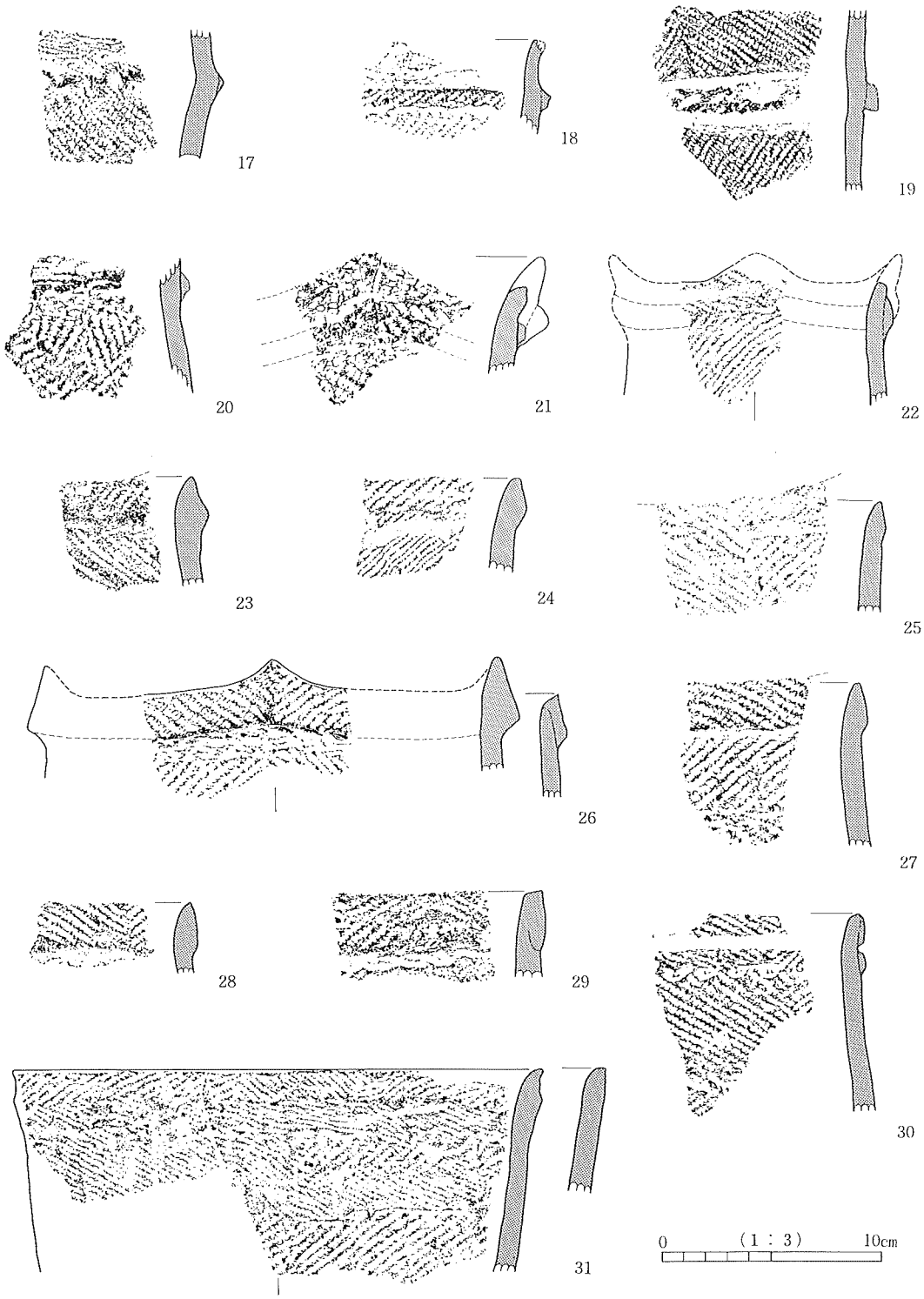
(7)　渋谷昌彦　「木島式土器の研究」　静岡県考古学研究11　1982

(8)　注8に同じ

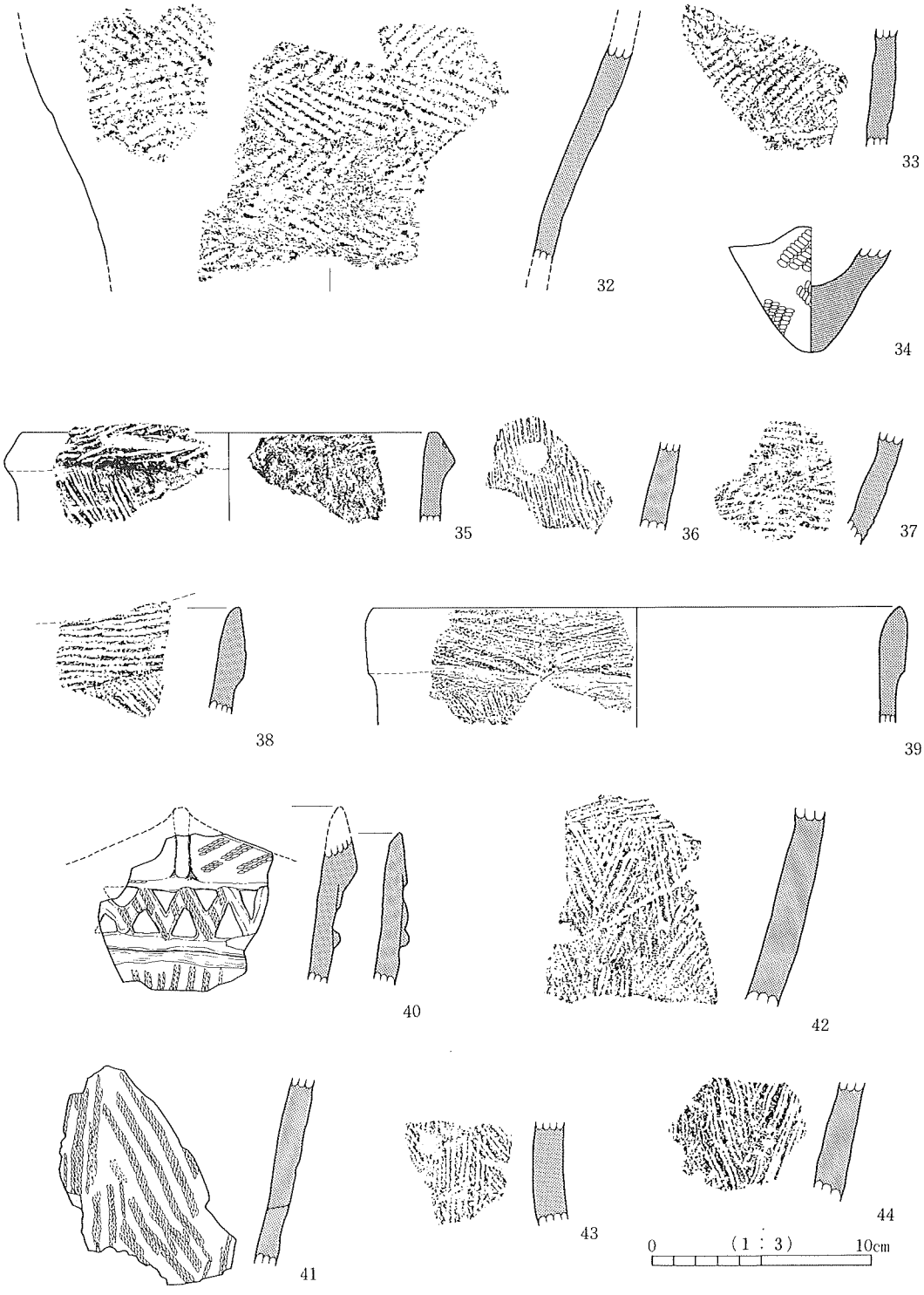
(9)　山下勝年　「清水ノ上貝塚」　南知田町教育委員会　1976



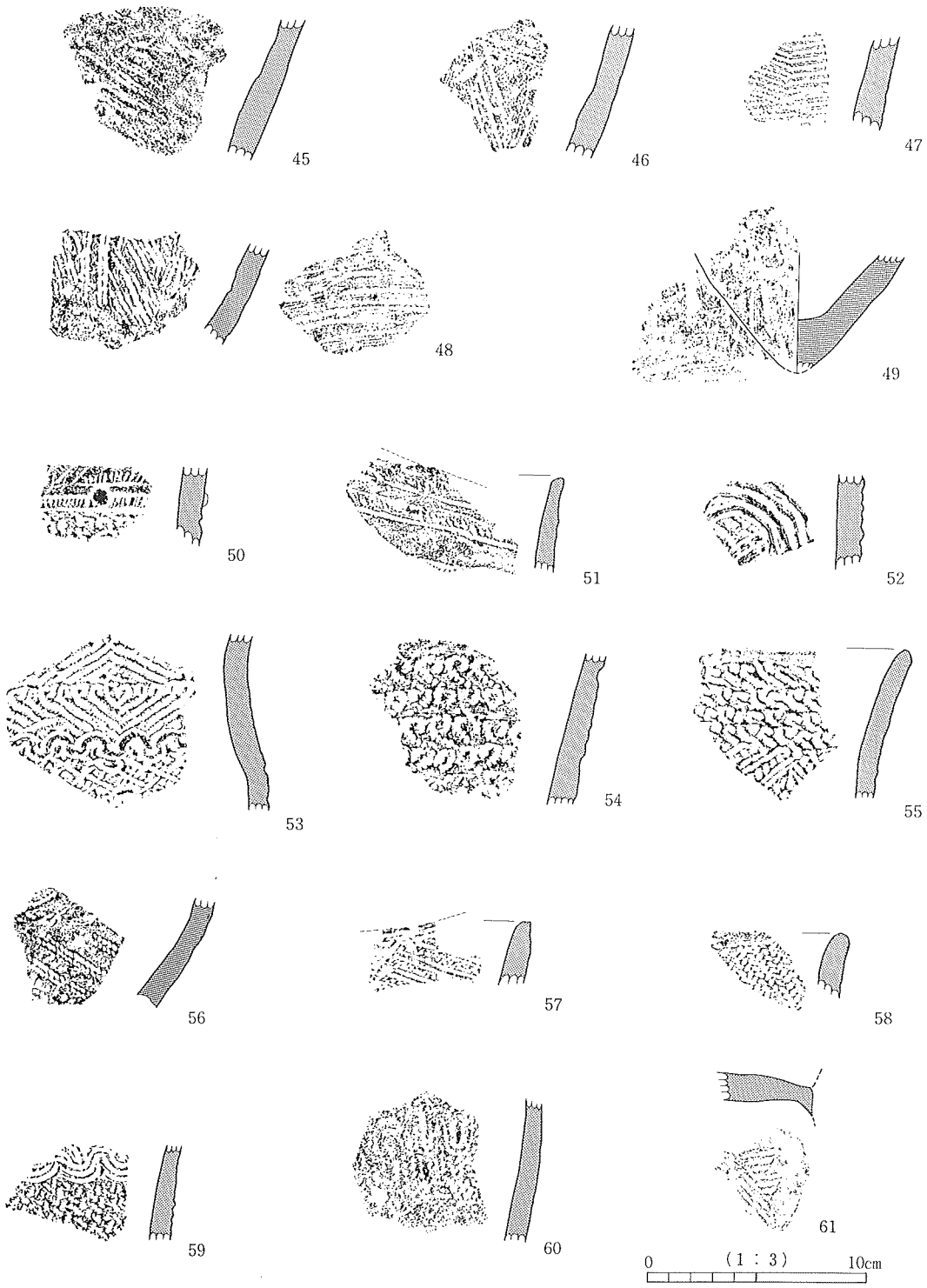
第Ⅰ図　縄文時代早期の土器(1 : 3)



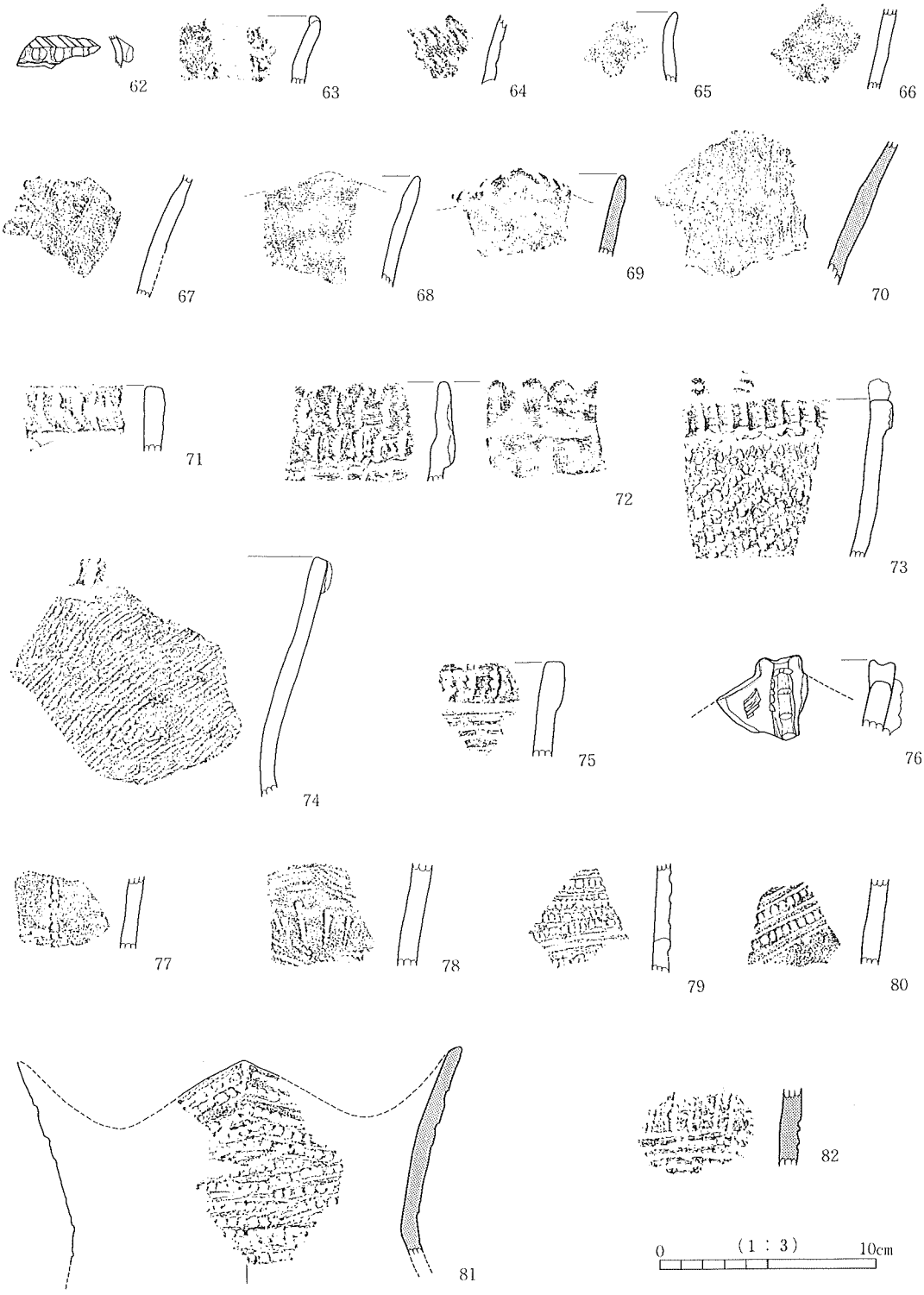
第２図　縄文時代前期の土器(1)



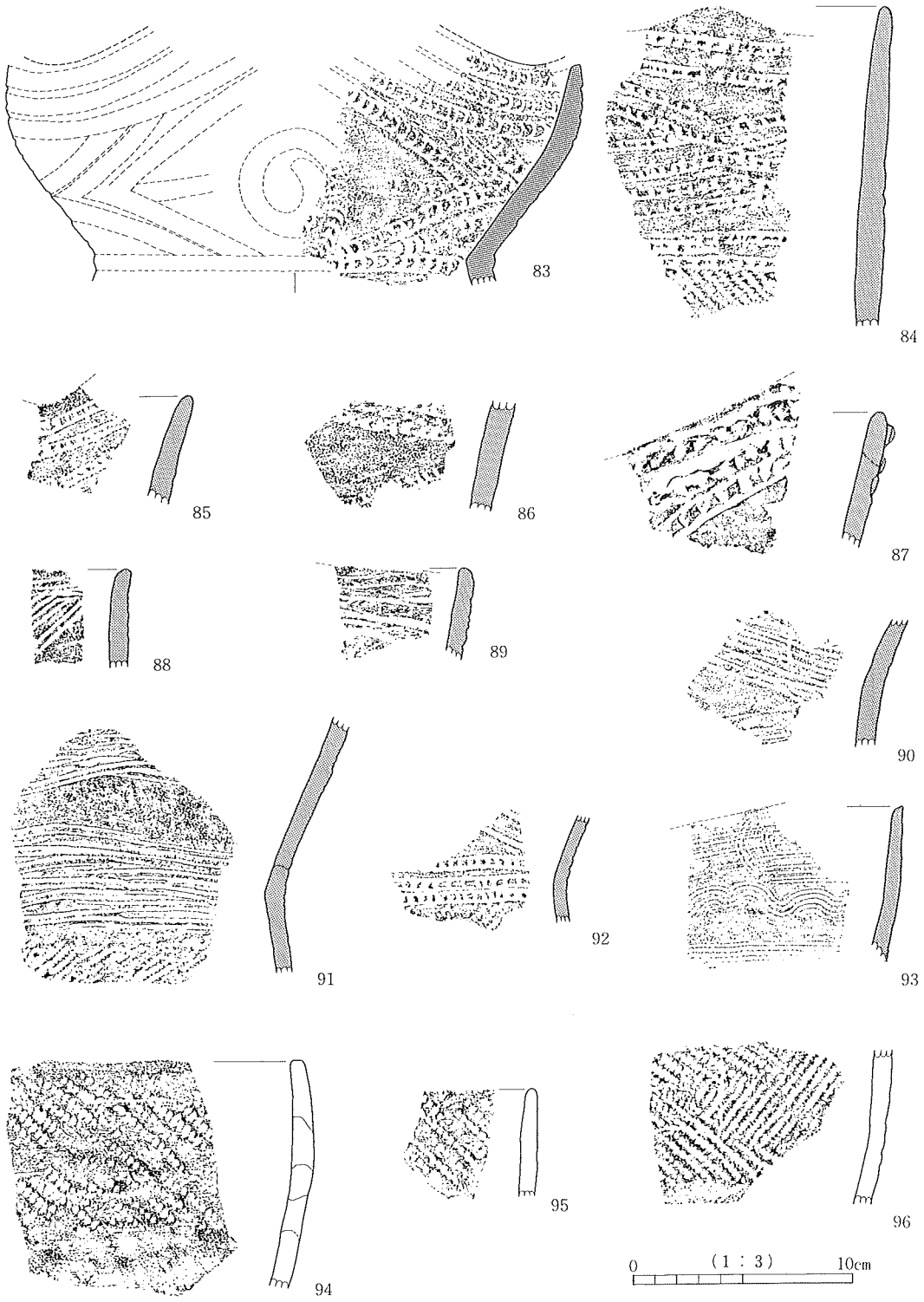
第３図　縄文時代前期の土器(2)



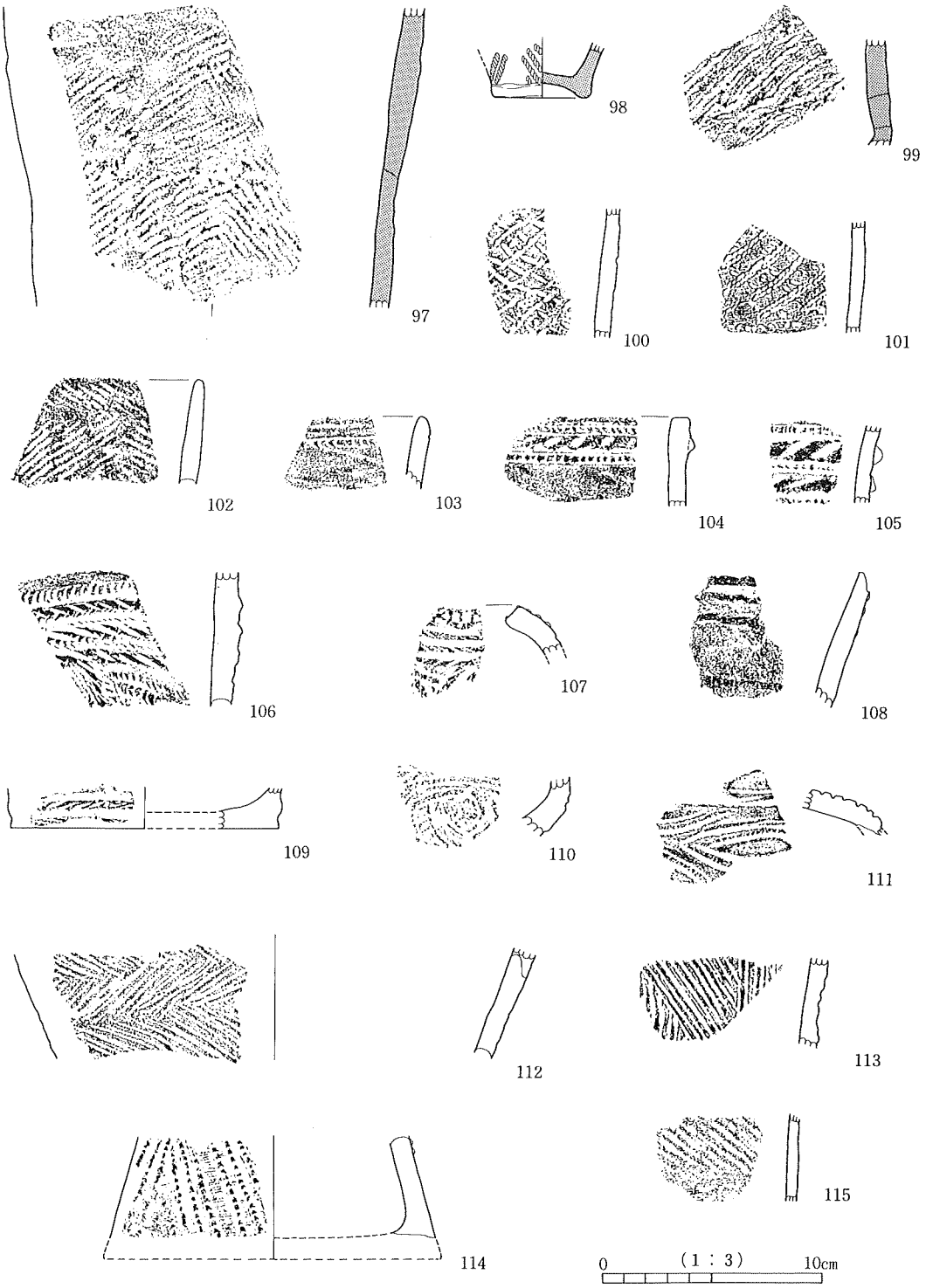
第 4 図　縄文時代前期の土器(3)



第5図　縄文時代前期の土器(4)



第 6 図　縄文時代前期の土器(5)



第７図　縄文時代前期の土器(6)

縄文土器の補修孔について

助川　朋広

1　はじめに

縄文時代における土器の研究は、「製作」・「使用」・「廃棄・遺棄」という方面から解明されなくてはならない。「使用」という方面からの研究はあまり多くなされてはいないが、今後もっと研究されなくてはいけないと考えている。

土器の補修孔は、縄文時代に一般的に用いられた補修方法で、石錐等で穴を穿け紐等でとじあわせることにより、それ以上毀れないように修理・補修のために穿けられた孔のことをいう。この補修孔は、土器の持つ機能を維持するためのものである。

研究史

土器の補修孔についての初見は、大森貝塚の調査を行なったE・S・モースからはじまる。補修孔に注目し、穿孔し直した土器片を見つけたり、穿孔具の推測等は評価すべきものである（E・S・モース　佐原訳1983)。また、一遺跡内の研究もある。神奈川県夏島貝塚出土の撚糸文土器の口縁部破片数と補修孔のある破片数の割合をだし、型式が下るとともに割合が低下していくということを明らかにし、土器の強度が増したためか、土器の製作量が増大したために補修する必要がなくなったとするもの（杉原・芹沢　1957）や青森県宇鉄遺跡出土の晩期の土器を器形ごとに、口縁部破片数と補修孔を有する破片の割合をだし、鉢系の土器に多いことを明らかにし、補修孔は土器の端境期の応急手当としたもの（藤村　1984）がある。これらの研究は一遺跡内の一時期という研究であるため、縄文時代において補修孔がどうなったかを知ることはできない。縄文時代を通じて補修孔を研究することにより、縄文時代を知る手掛かりとなると考えている。

2　時期ごとの量的変化

土器に補修孔が出現するのは、最古型式の豆粒文土器からであり、遺物数が少ないにもかかわらず、若干見られる。早期の土器に圧倒的に補修孔を有する土器が多いことが明らかとなった。中でも撚糸文系土器や条痕文系土器に多いといえる。早期に多かった補修孔を有する土器が中期になると激減する。後期になると増加するが、あまり多くはならない。晩期になるとまた減少するという傾向が明らかとなった。時期別の補修孔を有する土器数量は、草創期７点、早期208点、前期126点、中期46点、後期91点、晩期41点である。

3　口縁部からの距離

補修孔のもっとも多い部位は口縁部であり、口縁部に対象を絞り分析を行なった。口縁部からの距離は、草創期15～22ミリ、早期14～25ミリ、前期12～25ミリ、中期17～24ミリ、後期14～27ミリ、晩期15～25ミリに多いといえる。データ不足という点で、問題点が多いが口縁部から15～25ミリのところに多く集中しているといえる。

4　土器補修孔の意義

先述したように補修孔という補修方法は、縄文時代全般に用いられた補修方法であり、他の補修方法が全くなかったというわけではない。早期の撚糸文系土器の最終末に見られる無文土器（平坂式など）には、口縁部に篦状工具によるV字型の孔があり、ヒモ等によって縛る場合において、はずれやすいという欠点があったのであろうか、一型式間にしか利用されない。またアスファルトや漆等を使用する例もあるが、多用されない。使用方法の難しさや入手方法が限定されるということからであろう。これ故補修孔が多用されたのであろう。

草創期に補修孔の穿けられている例があることは、既製のイメージのもとに製作された土器、すなわち煮沸中心の土器が補修孔を有するということである。このことは早期にもあてはまる。前期になると貯蔵や供献用の土器が出現したため補修孔を有する土器が減少したのだろう。逆に早期は煮沸中心であったため、煮沸機能の維持、他の用途への転用という目的で穿けられたため多くあるのだといえる。前期は他の用途へ転用する必要性がなくなったため減少したのである。中期は土器量の増加、祭祀用の土器は転用しなかったために数量が激減する。後期・晩期は器型にバラエティを持ち、後期は禁忌の社会性より転用せず補修したため中期より増加するが、晩期は木器が多用されたため減少すると考えている。

補修孔を穿けることにより、煮沸が不可能となり、他の用途に転用されたと考えられている（藤村　前出など）が、容量を減量することによって、煮沸にも使用できたと考えられるし、福井県鳥浜貝塚の補修孔に炭化物付着のヒモが残存していたことからも考えられる。この土器補修孔は、年一回の土器製作のため供給が間に合わない場合において使用された間つなぎ的な応急処置だったのである。

（佐久埋蔵文化財調査センター）

佐久地方の古代土器様相について

——坏・埦の変化を中心として——

高村　博文

1　はじめに

本稿を記述するに当り、その動機について述べておこう。今、私は佐久市志刊行会の歴史編部執筆員を委嘱されている。その中で私の分担は古代編奈良・平安時代における「生産と流通」「墳墓」についてである。そこで、いきなり佐久市志を書くには非力の私には荷が重すぎるため、この佐久考古通信を利用させてもらい、「須恵器の生産・普及・衰退について」を整理し、まとめてみようと思い準備を進めていたところ、初期須恵器の出現期から須恵器消滅期までの編年がどうしても必要であることがわかった。

奈良時代から平安時代前葉については『前田』(堤1987)、『十二』(堤　1988)で詳細な編年が提示されており、また、平安時代については、私の試論であるが『薊沢・蔦石』(高村　1988)で提示してある。しかし、古墳時代については『周防畑遺跡』(花岡　1980)で提示してあるのみで、他に見あたらない。そこで、古墳時代の土器の編年を実施しなければならないと思い作業を進めていたところ、古墳時代中期つまり南関東編年でいう和泉式土器が非常に大きな問題となり編年基準である土師器の型式そのものに疑問をもつようになってきた。

そこで土師器が一般に使用される古代全般にまで時代を広げ、特に和泉式土器の「坏」に重点を当て、古墳時代土器編年の細分化をするまえに原明芳氏(1987)が実施した方法[1]に沿って「坏」・「埦」の変化を主に一般民衆の日常用具である食器の大きなまとまりを捉え、古代土器の様相変化を追求していきたい。

2　土師器の研究史

土師器の研究で、今日の土師器編年の基礎を築いたのは、杉原荘介氏の一連の研究の成果におうところが大きいであろう。そして、東日本での土師器研究を概観した場合、岩崎卓也氏の土師器とは何か、また、その研究はいかにあるべきかを追求した一連の研究も見逃すことができない。

ここでは、岩崎氏の研究の成果を基軸として土師器研究の動向を大雑把に概観してみたい。明治から昭和30年までの土師器研究の動向は「土師器研究上の諸問題」[2]で岩崎氏が詳しく分析している。それを私なりに要約すると。

明治30年前後、三宅米吉氏が土師器という名称を提唱され、古墳時代に始まることを示された。

昭和10年小林行雄氏が弥生時代後期に小型丸底土器に様式の斉一化が見られ古墳が発生するという見解が出される。

昭和13年杉原荘介氏が千葉県鬼高遺跡調査報告書の中で、1、前野町式土器　2、鬼高式土器　3、須和田式土器の三型式を提示し、鬼高式土器が古墳時代のものであることを認定しており、土師器の全国的な斉一化という概念を打ち出している。

岩崎氏によれば、昭和13年頃までの土師器研究は「土師器の編年操作は、このような弥生式土器との分離に関する理論的根拠が固まらない中で始められた」としている。このころ、和泉式土器の発見により杉原氏は時代を画する一線を引く根拠として「地域性の消滅」という規定を援用するに至った。

昭和18年杉原氏は『原始学序論』で土師器時代を和泉期・鬼高期・真間期・国分期の4期区分を提唱している[3]。

岩崎氏によれば、昭和10年代の後半は土師器に対する本格的研究が開始された時期で「土師器とは全国的斉一性を有する土器であり、大和文化の地方浸透に伴って形成されたものである。そして、この時期は古墳時代に該当する」という規定がなされ、明治時代三宅氏の「土師器とは古墳時代の土器である。」という見解が、この時期に理論づけられ、ほぼ定説化されたとしている。太平洋戦争後の昭和30年に五領式土器が世に紹介される。この頃、小出義治氏は「小型丸底坩の出現は、畿内勢力の中心的機構が地方進出の政治的裏付けとして中央祭祀の宗教的儀礼を当然被服属者等の上にも採用せしめた」のであろうとし、小型丸底坩を中心とするセットの完成する時期こそ土師器の生成期であり、土師器の画一化は専業者集団＝土部（土師部）の組織化という事実に注目したとしている。

以上、明治から昭和30年までの土師器研究の動向を岩崎氏の目を通して概観したわけであるが、この時点での土師器研究の到達点は、

(1)　土師器は全国的斉一性を有する土器であり、大和文化の地方浸透に伴って形成されたものである。

(2)　祭祀遺物とする小型丸底坩を中心とするセットの完了する時期を土師器の生成期とする。

(3)　土師器の画一化から専業集団（土師部）の組織化が存在するという事実に注目する。

の3点にあるものと考えられる。

昭和38年岩崎氏は「古式土師器考」[4]で小型丸底土器・高坏・坩形土器など一部の限られた土器には、明白な「斉一性」があるが、一方、甕形土器には斉一性はなく、地方色が強いとし、土師器の全国的斉一性に対し疑問を投げかけており、斉一性を示す土器群の母胎となるセットは、いずれも祭祀それも死によって神の地位にまで昇華したであろう古墳の被葬者の祭祀に深い関係があるらしいとしている。

昭和39年「土師器の編年」[5]で岩崎氏は土師器を「土師器とは弥生式土器から転化してきた素焼の土器で、その盛行期は古代に求められ、一般に無文であることを外観上の特色とする土器」と定義している。この時点の南関東での土師器編年は、五領Ⅰ期（弥生式）—五領Ⅱ期—和泉Ⅰ期—和泉Ⅱ期（矢倉台期）—鬼高Ⅰ期—鬼高Ⅱ期—真間期（落合期）—国分Ⅰ期—国分Ⅱ期が最も多くもちいられるとしている。

ここで、岩崎氏はこの時代の土器編年の細分化傾向に対し、「土師器よりする時代区分は、それが大和政権の生成・発展期のものであるだけに単なる編年論をそのまま時期区分論に直結させることはできず、文献史学上の時代区分、古墳による時代区分など歴史的意義のある区別がおこないうる時代であるからであり、先史時代と異なり土器の有する意義がいちじるしく変ってきているからである。」とし、土師器の編年は編年のための編年であってはならないとしている。このことは、現在でも、その傾向がみられ、たいへん参考となる批判だと考えられる。

昭和40年倉田芳郎氏は「南関東における住居址出土の土師器」[6]において、当時の南関東の土師器編年を批判し、編年の基準がどこにあるのか等4点の問題を提起し「土器の編年が物指そのものでも使い得ることは確かであるが、そこに古代にあっての生活の様相を象徴せしめる意味が含まれておれば、さらに編年は使いやすく、研究者によって、より正しく修正もされやすいのであって、他の要素との関連をもちながら編成されていくことが望ましい」とし、初めて須恵器に着目して、その技法・形態が土師器に影響を与えた過程として、土師器を編年しており、前期を須恵器を知らない段階。中期を須恵器を知り器形を土師器に採り入れた段階。後期を須恵器の製作技術が土師器に導入された段階として、杉原編年とは方法論的に異なった編年案を提示した。この方法は、後述する私の様相区分に際し、示唆的な影響を与えた。

昭和43年服部敬史氏は「土師器の編年に関する試論」[7]の中で須恵器模倣坏に着目して、その発生から形が崩れ去るまでの期間の土器を一括して鬼高式土器と型式設定を明確にした。

昭和47～49年には、これまでの土師器研究の集大成ともいえる『土師器土器集成1～4』が杉原荘介・大塚初重氏によって出版された。ここで今日、佐久地方でも使用している時期区分が提示され、大きな影響を与えた。そこでは前期（五領式土器といわれるような土器を用いた時期）、中期(和泉式土器といわれるような土器を用いた時期)、後期(鬼高式土器といわれるような土器などの用いられた時期)、晩期Ⅰ(真間式土器といわれるような土器などを用いられた時期)、晩期Ⅱ（国分式土器といわれるような土器などの用いられた時期）とし、それぞれの年代も前期＝4世紀、中期＝5世紀、後期＝6・7世紀、晩期Ⅰ＝8世紀、晩期Ⅱ＝9世紀と与えることができるとしている。しかし、この編年は、編年基準が明確でなく、全国的斉一性の強いものが土師器という概念に固執し、それをもとに分類しており、非常にわかりずらい面をもっていよう。

しかし、昭和49年、岩崎氏は「東日本における土師器の研究」[8]の中で、もし、日常の土器にみる相違点を摘出することによって型式論を展開すれば、和泉式という型式の分布範囲はごく狭くなるものになってしまうであろう。同じことは鬼高式土器についてもいえるとし、土師器の型式概念も再吟味する必要性が感じられるとしている。また、このようなことから土師器生産集団についてもふれ「大和朝廷にとってさして重要とは認められなかった土師器の生産が、少なくとも部が形成されるようになった5・6世紀代においては朝廷による支配機構のひとこまとして強い規制のもとにおこなわれたとは考えられず、したがって土師氏を伴造とする土師部が集中的に土師器生産をおこなったとすることは困難なのである」としている。

ここで、岩崎氏は杉原氏の土師器が全国斉一的な土器であることを否定したものであり、そこから「すでに政治的社会が形成され、大和政権の支配力がいろいろな形に及んできている段階における土器把握のための新しい方法論が切望される」と告白している。このことは従来の土師器の型式概念が大きな壁にぶつかったことをものがたっており、杉原氏の土師器編年に問題があるということである。

ここで新たに西弘海氏の土師器研究が登場してくる。昭和54年「西日本の土師器」[9]と昭和57年「土器様式の成立とその背景」[10]は画期的論文であろう。それらの中で、西氏は朝鮮三国系（大陸系）などの日本国外の影響を大きくクローズアップし、土師器特に坏・埦との様式変化をこれらの諸文化（大陸系文化）の流入と関連づけて、ダイナミックに様式区分している。この方法は岩崎氏が切望していた、土師器研究の新しい方法論だと考える。

3　長野県の研究史

県内での土師器研究は、昭和24年から28年にかけて行なわれた平出遺跡の調査で、土師器を第一～七型式に区分し、昭和36年、木代修一・岩崎卓也氏が更埴市城の内遺跡で和泉式以前から奈良・平安時代にいたる編年的考察を行なっている。

昭和38年には西野元氏（1963）「善光寺平の土師器」、昭和40年代には桐原健氏（1967）「信濃における古式土師器の位置」、笹沢浩氏（1968）「信濃における鬼高式土器の開始」などがある。

近年では笹沢氏（1988）が県史において古墳時代から平安時代土器の細分した土器編年と原明芳氏(1987)が「信濃における食器の系譜―古代から中世へ―」で食器の大きく変化する画期を取り上げて、その内容と背景について論考している。

県内の土師器編年には、細分化方向の笹沢編年と西弘海の影響を受けたと考えられる原氏の食器を大きなまとまりとしてとらえ、特に食膳具の変化によって画期を見いだし、古代を４段階に大分類した二つの方法が存在している。

笹沢氏の編年方法は、菊池徹夫が分類した一つである「単により目盛りの細かな“時のものさし”をつくり上げるための〈形態〉に層位法、その他様々な手段を用いてする区分と編年[11]」で細分化すること自体は誤っていないと考えられるが、考古学本来の目的である歴史を解明する文化事象の究明の編年としては不満である。これに対し、原氏の方法は食器の大きなまとまりの変遷の中でダイナミックに時期様相を捉え、西氏のいう様式変化の画期を設定しており、この方法が良く歴史的意義のある区分ではないかと考え、まず、この画期を設定する必要がある。そののち形態及び各器種の組み合わせ等の変化を捉えて細分化する方法が最も有効な編年方法であろう。

4　須恵器模倣坏について

鬼高期のメルクマールである須恵器模倣の坏について触れておきたい。

いったいいつ誰が須恵器模倣坏に関して定義したのか不明な点が多いが、岩崎氏のお話しをうかがうと、大正末期頃から昭和初期に関東、九州地方の研究者間で議論されていたらしいとのことである。また、後藤守一氏の講義でも、須恵器模倣の坏について聞かれたおぼえがあるとのことである。

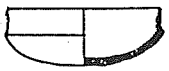
文献で確かめられるのは、昭和30年杉原荘介・中山淳子氏の「土師器[12]」の中で「一つは口縁部が立ち、口縁部と底部との境に段のあるもので(第１図)、これは須恵器坏の形と類似している」としている。

昭和39年岩崎氏が「土師器の編年」でもとりあげており、昭和40年、倉田氏の卓見である「南関東における住居址出土の土師器」でも論及している。昭和43年の服部敬史氏の『八王子中田遺跡』で鬼高期のメルクマールとして定着したものといえる。

ここで、私は和泉期後半に出土する内稜のある坏に焦点を当て、これが初源の須恵器指向の坏であることを提起したい。その根拠を以下に列挙してみた。

(1)　初期須恵器が共伴し、一般民衆が須恵器坏を知った事実があること。

(2)　食膳具坏が前代に比らべ、量的に増加したことにより、三国系食事習慣がとりいれられ、佐原真氏のいう銘々器と考えられる坏・塊の器種がこの時期に急激な変化で成立すること。



第１図　杉原氏が示した須恵器模倣坏

(3)　この内稜のある土師器坏は精選された緻密な胎土が採用されていることやヘラミガキの盛行、内面黒色処理技法の登場など須恵器の耐水性を指向していること。

(4)　須恵器坏身の蓋受部立ち上がりをとれば、この土師器坏という形態が類似すること。

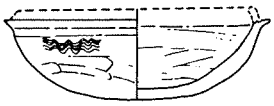
(1)はこの坏が出土する時期に佐久地方で初期須恵器が共伴する例が知られており、須恵器坏を一般民衆は確実に知っている。

(2)については、西氏（1978）がいうように各人がおのおのの食器をもって食事をとる朝鮮三国系の食事習慣が浸透したことをものがたり、このことは原始的食事習慣が古代的食事習慣に転換したことを意味するものであろう。

(3)の精選された緻密な胎土は他の土師器と比較すると独特な色調・つやを呈しており、胎土をみただけでこの時期のものとわかるほどである。また、ヘラミガキの盛行や内面黒色処理技法の登場は須恵器の耐水性のすぐれた器を指向して導入されたものと判断できる。

(4)については、実は私がこの坏が須恵器指向坏と考える契機になったもので、これは舞台場Ｈ25住のＴＫ73型式の坏身（第２図）を見たからである。当時、蓋の必要がなかったと考えられる土師器坏に突起した外稜から上の蓋受部立ち上がりは必要なく、これを取り除いてしまえば、ＴＫ73型式の須恵器坏とほぼ同じ器形のものとなる。

以上のことから和泉期後半の内稜を有した土師器坏



舞台場H25住出土ＴＫ73
型式須恵器坏身

前田61住出土須恵器坏身
模倣坏

第２図　ＴＫ73型式須恵器坏身と
その模倣土師器坏

は須恵器指向の坏といえるものである。

尚、従来からいわれている鬼高期のメルクマールの須恵器模倣坏は、その器形から須恵器坏身模倣でなく、坏蓋の模倣と考えられ、和泉期後半は坏身に、鬼高期は坏蓋を指向したものと考えられ、須恵器の模倣で器形の逆転が考えられる。

このことから、当地方の須恵器指向坏は、須恵器、カマドの出現期、つまり三国系の文化が中央でとりいれられ、中央を指向した地方が、中央からの影響を受けて成立したものと考える。

5　銘々器と考えられる「坏」・「埦」器種の発生

佐久地方の土師器坏が多量に住居址から伴出している時期、西氏は「須恵器坏の普及とともに各人がおのおの食器をもって食事をとる三国系の習慣が、わが国の生活文化の中に浸透してきたことを示すものであろう」としている。私は基本的に、このことから和泉期後半の土師器坏を須恵器坏身を指向したものであることを前述した。そして、この坏が多量に住居址から伴出することから原始的食事習慣と古代的食事習慣を分ける指標としたことも明らかである。

そこで、この土師器坏は各人がおのおの食器をもって食事をした器、つまり現代の食事習慣の祖型がここに見いだせるわけである。このことは、佐原真が共用器と銘々器に分類した[13]銘々器の発生を意味し、原始的食卓用土器には共用器は存在するが銘々器としての「坏」・「埦」の器種はなかったとものと考え、古代はこの銘々器「坏」・「埦」の発生と変化によって様相が捉えられるという特質をもっている。

6　様相設定の基準

ここで私は、岩崎氏がいう「編年のための編年」にならないためにも、また、倉田氏のいう「生活の様相を象徴せしめる意味が含まれれば、さらに編年は使いやすく、研究者によって、より正しい修正をされやすいのであって、他の要素との関連をもちながら編成されていくことが望ましい。」という方向を保つために、様相設定の基準を明確にしておきたい。

様相設定の基準の記述の前に西氏がいう「土器が、或いは一般に遺物が文化のメルクマールとなるのは、土器は文化の変転と相照応して、その様相を変じているからである。その変貌によって推移する文化の一時一時の姿を造形せられた物として可視の形に捉えているからであり、この様式の変化の背景の追求ほどに重要なものはないであろうとしている」ところの様式を正直いって十分理解していないので、一般的用語としての「様相」という言葉を使用して時期区分していきたい。

また、様相設定の大前提として、私の資料対象の条件を述べておく。

様相変化を追う資料として、私は一般民衆の日常用器である佐久地方の住居址出土土器に対象をおいた。日常土器とした住居址出土土器にも日常性とは別の祭祀的儀式に使用された土器及びそれら兼用の土器もあると考えられるが、それらの選別は困難であるため、住居址出土土器は日常的食器として使用されたものとする仮定がある。

そして、今回の分析から除外した、古墳・祭祀遺構出土の祭祀土器の分析は、それによって、その時代の様相をより的確に示す場合が多いのであるが量的比較、断続的に追える住居址出土土器の分析に重点をおいた。

この住居址出土土器の分析の大前提のもとに様相設定の基準を次の３段階に分けておこなうこととする。

(1)　西・原氏が様式変化の基準とした「坏」・「埦」の形態変化に着目し、これを様相の基軸とする。このことには、原氏がいう食膳具様式の成立は社会の変動と無関係でなく、社会の変動期において新たな秩序が必要で、その一つの現れが食膳具であったということを肯首して、社会の動きと食膳具の様式変化は同時的であるという仮定を設定していることと同じである。

(2)　土師器形態の変遷を各器種で行なった場合、長胴甕が一番、方向性をもった規則的形態変遷が認められたため型式の細分化に役立つ。

(3)　最後に住居址出土土器の出土個体数及び出土頻度が多い器種の組み合わせのあり方によって各期の様相を考える。

以上、3段階について分析を行なう予定であったが時間的制約の関係から(1)・(2)についての分析で大雑把な様相把握をせざるを得なくなった。

7　佐久地方における坏・埦の変化による様相区分

杉原氏が「土師式土器の行なわれた土師時代は、大体において日本の古代の全時代に相当することとなる」[14]としたことは、ほぼ的確なことと考える。古代は幾度も述べたように、銘々器である「坏」・「埦」の器種成立によって位置づけられ、「坏」・「埦」の器種が出現する以前の土師器は原始から古代の過渡期として、プレ古代と考えたい。

佐久地方の古代の土器様相を最も特徴的なことで抽出し、定義づければ「銘々器である坏・埦と土師器長胴甕が、一般民衆の日常生活の基本的な食器組成である」ということができる。さらに、古代は埦の製作技術・形態・焼き物の種類によって、前期と後期に分類できる。

古代前期は、坏・埦の出現、そして、須恵器の存在は知っているものの、それがまだ一般民衆の日常用器として用いられていなく、中央の高級文化に対してあこがれる地方の成立（結果として、須恵器・金属器模倣土師器の存在から類推すると）、つまり中央指向が強い時代といえよう。坏・埦はほとんどが土師器で、その調整技法に、いまだロクロ使用がみとめられず、土師器製作技術からみれば原始的段階から脱却していない時期ともいえよう。この古代前期は従来の時代区分では、古墳時代中期後半から後期に相当するものと考えられる。また、古代前期は、須恵器・金属器などの影響により土師器坏・埦に形態変化がみられ、さらに3段階に分類できる。

古代後期は、ロクロ調整技法による坏・埦の普及と高台の付く坏・埦の出現に特徴づけられる。また、前期で切望した須恵器が一般民衆に普及し、灰釉陶器など土師器以外の焼き物が日常用器として使用されることも特徴の一つである。さらに、古代後期も須恵器坏・埦主体の時期と内面黒色ロクロ土師器坏・埦主体で灰釉陶器が日常用器として使用される時期に区分できる。以下に各時期の土器様相を坏・埦の変化を中心にそして、長胴甕の変遷を補佐的に述べてみたい。

(1)　プレ古代（古墳時代的様相Ⅰ期）[15]

佐久地方における、土師器の成立はいつかという問題を、この時期を設定する場合考えなければならない。一つの方法として最近、発見された瀧の峯古墳群の位置づけから迫る方法がある。

岩崎氏によれば、弥生時代の方形周溝墓は、生者の世界からの隔絶性に乏しく、集落に隣接する場に営まれることと、溝の一部を掘り残し墓域と外界を結ぶ通路を思わせるあり方があり、しかも、群在化して存在していることが特徴だとしている。瀧の峯古墳群の場合、山丘頂に立地する点に関しては、弥生時代の方形周溝墓の立地と異なるが、墳丘をめぐる周溝は前弓部にある突出部前面だけ切れており、また、付近に一世代一遺構という時間差をもって築かれたとは思われない、墳丘をもつ埋葬遺構が4基群在しており、古墳の重要な属性である隔絶性に乏しいと考えている。結局結論的には、古墳とははっきり明言しておらず、大方の判断に委ねたいと結んでいる。[16]

私は瀧の峯古墳群が全国的視野での「古墳」という概念ではどうかわからないが、少なくとも佐久地方においての方形周溝墓の立地のあり方とは決定的に異なる山丘頂に築かれる点を重視し、この立地条件が、佐久地方の方形周溝墓の内的発展により山丘頂に移ったとするよりも、外的要因の影響を受けて変化したと考える方がより自然と考え、また、群在する点については佐久地方と中央との関係、地元有力者のあり方等、佐久地方独自の特質と考えられこのようなことから瀧の峯は当地方の初源的古墳と位置づけられる。そして、このことから佐久地方の古墳時代の開始は瀧の峯古墳群が築かれた段階を画期として捉えることができ、では日常土器の様相はどうかということになる。

佐久地方の弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられる住居址は報文で知るかぎり、下小平遺跡Ｙ1～5住、池畑遺跡Ｈ1・2住、久保田遺跡Ｙ2・3住、宿上屋敷Ｈ1・6住の11棟だけである。これらの資料から土師器の成立を論ずることは危険があるが、あえて予察的にふれてみたい。

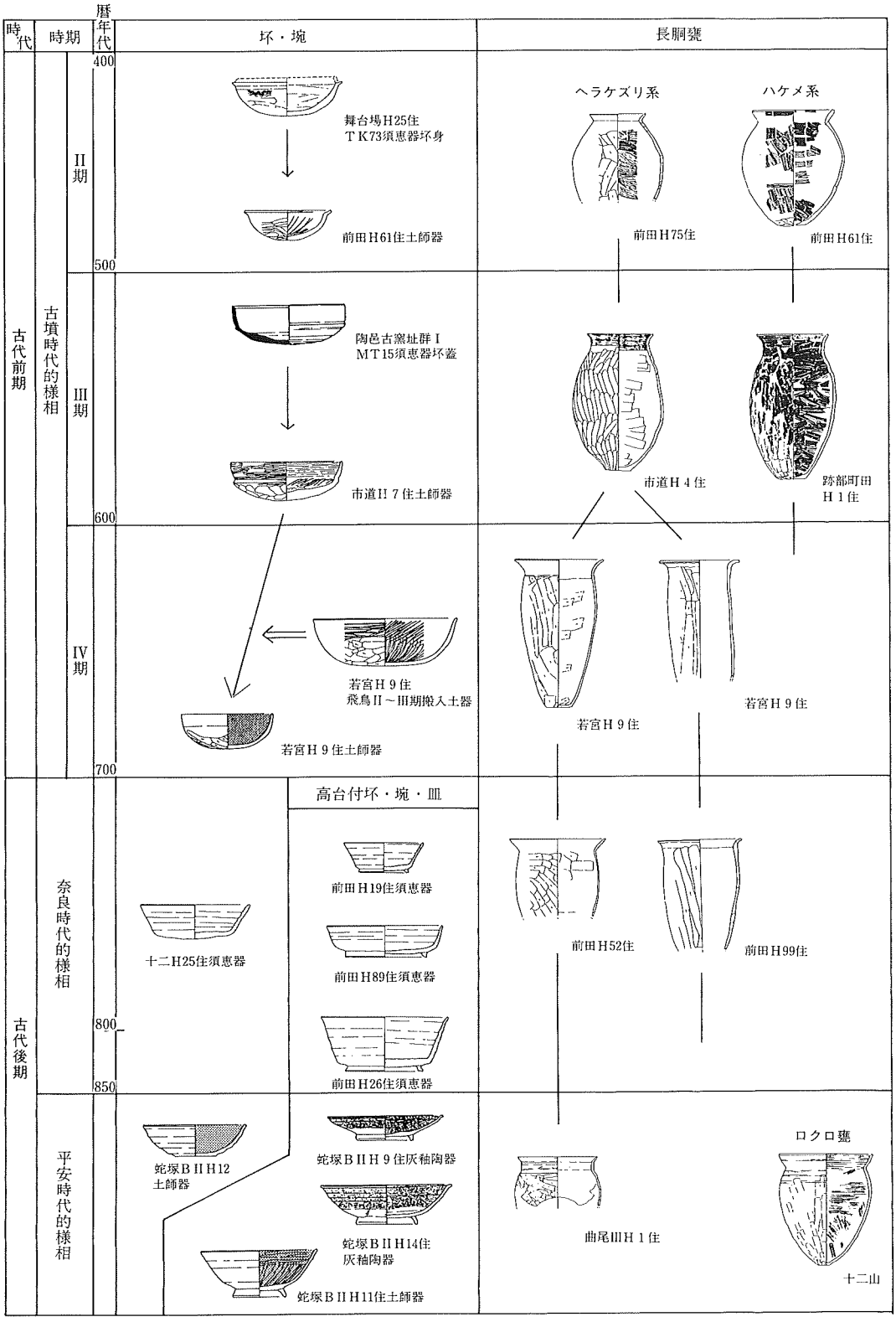
上述の住居址のうち甕形土器の形態等から久保田Ｙ2・3住と瀧の峯2号墳出土土器は近接した時期にあたるものと思われる。久保田Ｙ2・3住の次の段階と考えられる宿上屋敷Ｈ1・2住は弥生土器の特徴である文様が消失している。そこで現段階では佐久地方の古墳時代土器、つまり、土師器の発生は久保田Ｙ2・3住か宿上屋敷Ｈ1・6住の段階からと想定しておきたい。

以上のように、この時期の資料はたいへん少ないが、「坏」・「埦」の器種発生はみられず、弥生時代の基本的日常用器の組み合わせである、壺・球胴甕・鉢・高坏で構成されており、原始的食事習慣を継承しているものと考えられる。この時期の特徴的なものは祭祀遺物と考えられる外来系の小型土器群の存在であり、その意味を含めてプレ古代と位置づけておきたい。

(2)　古代前期

1）古墳時代的様相Ⅱ期

銘々器である「坏」・「埦」の発生期である。この時



第3図　古代坏・埦・長胴甕形態変遷図

期にＴＫ73～ＴＫ47型式の初期須恵器が伴出する。

坏は須恵器坏身模倣のものが特徴である。甕はカマドの出現と関連して、球胴から長胴化傾向がみられ、最大径が胴部上位にあることを特徴とし、各期でも述べるが、胴部ヘラケズリ調整の長胴甕が佐久地方の古代を通して系統的に継承するもので、その変遷を概略すると、

厚手・最大径胴部上位（II期）→厚手・最大径胴部中位（III期）→厚手から薄手への変化がみられ、最大径口縁部（IV期）→薄手・最大径口縁部（奈良時代的）→薄手・「コ」の字状口縁（平安時代的）という方向性をもった変化がみられる。その他の器種として、大型の甑の登場が画期的である。

2）古墳時代的様相III期

坏はII期の須恵器坏身模倣から逆転した須恵器坏蓋模倣坏が特徴である。長胴甕は厚手で最大径を胴部中位にもつもので、この時期までは確実にハケメ調整系譜のものとヘラケズリ調整のものが存在する。大型の甑は最も盛行した時期で体部外面ハケメ調整のもの、ヘラケズリ調整のもの、ヘラミガキ調整のもの、把手をもつものなどバラエティーにもとんでいる。該期の始まる土師器とＭＴ15～ＴＫ10型式の須恵器が伴出している。

3）古墳時代的様相IV期

坏の器形に金属器の影響を受けて発生したと思われる坏が登場する時期である。しかし、この坏が直接金属器からの影響を受けて発生したと考えるより、中央で発生した金属器模倣椀からの間接的影響により発生したと考えたほうが良いかもしれない。尚、該期にはIII期の須恵器坏蓋模倣坏も存在する。長胴甕は最大径を口縁部に移し、薄手化傾向を示すものと、厚手で胴部にふくらみをもたないものの2種類存在するが、いずれも胴部外面はヘラケズリ調整のものである。また、長胴甕・小形甕の胴部外面調整がハケメのものは、この時期には存在せず、ヘラケズリ調整のみとなる。

大型の甑はほとんどみられなくなり、弥生時代からの系譜を引く小型のものは、一孔から多孔になる変化をみせる。この時期の伴出土器として飛鳥II～III期の畿内型土器（金属器模倣椀）が搬入されている。

(3) 古代後期

1）奈良時代的様相

坏は須恵器が主体となり、古墳時代より民衆が切望していた須恵器が日常用器として使用されたことに大きな画期がある。また、高台の付く須恵器坏も登場する。長胴甕はいわゆる「武蔵型甕」が主体となり、おそらくこの時期に土師器壷の器種がなくなるものと考えられる。この時期の代表例は、堤編年前田IV期からが上げられようが、あるいは、石付窯址が創業を始める7世紀末頃に画期があってもおかしくない。

2）平安時代的様相

坏の主体が須恵器から再び内面黒色ロクロ土師器に変化したことをもって平安時代的様相とした。この画期には、また、光ケ丘1号窯式の灰釉陶器が民衆の日常用器として使用され始めることも大きな特徴である。長胴甕は、いわゆる「武蔵型甕」の口縁部が「コ」の字状になるとともに、北陸で成立したと考えられるロクロ甕が多く伴出する。他の器種では弥生時代から存続した土師器小型甑が該期にはみられない。

このように坏・椀の変化により、古代を6期（プレ古代も含めて）に分類したわけであるが、この後、佐久地方の土器様相については（資料が少ないため早急なことはいえないが）、薊沢編年第4段階に至り、土師器長胴甕の消滅、土師質土器小皿が主体になること、灰釉陶器がなくなることなどから中世的様相を呈するものと思われる。

8　各様相の暦年代

ここで、古代各様相の暦年代を推定したいわけであるが、その一つの方法として須恵器・搬入土器・灰釉陶器から推測したい。

この方法は、初期須恵器の出現期が学会の中で定説化されていないこと、灰釉陶器についても研究者によって50年前後のズレが生じている状況、また、須恵器・搬入土器・灰釉陶器がはたして、その製作・使用年代と伴出土師器との同時性があるかという問題がある。

このような問題はあるが、各様相の暦年代を大雑把に把握したいため、これらの問題に深く立ちいらず、須恵器・搬入土器・灰釉陶器と伴出土師器は同時性があるものと仮定して論を進めていきたい。

古墳時代的様相I期は、瀧の峯2号墳出土土器が目安となろう。報文の中で岩崎氏は、これらの土器の暦年代を4世紀後半としている。

古墳時代的様相II期は、ＴＫ73型式の須恵器の初源が5世紀中葉頃の説と4世紀末から5世紀初頭の説があり、ＴＫ47型式についてはほぼ5世紀末で一致している。一応、私はＴＫ73型式からＴＫ47型式の初期須恵器が伴出しているII期は5世紀代のものと捉えておく。

古墳時代的様相III期は、ＭＴ15型式～ＴＫ10型式が画期に伴出していることと、IV期の画期に伴出する飛鳥II～III期の畿内型土器が7世紀第2四半世紀～第3四半世紀であることから、III期を6世紀代、古墳時代的様相IV期を7世紀代としておく。

平安時代様相は光ケ丘1号窯式～虎渓山1号窯式の灰釉陶器が伴出しているため、薊沢編年から9世紀後半から11世紀前半と考えられる。間にはさまった、奈

良時代的様相は8世紀～9世紀前半という大雑把な把握にとどめておきたい。

9 小　結

いままで、銘々器である「坏」・「埦」の発生から、その変化をもとに古代の様相区分を行なってきた。そこから導きだされたのは、佐久地方では、和泉期・鬼高期、つまり、杉原編年の古墳時代前期・中期・後期という従来の型式編年ではよく時期の変遷を表わせないことも明らかとなった。そこで、ここでは原氏と西氏が実施した様式変化の分析と比較し、信濃と畿内での変化とどう対応しているか検討し、小結としたい。

(1)　信濃の様相

原氏の行なった「信濃における食器の系譜―古代から中世へ―」によれば、画期は、①5世紀後半から6世紀初頭、②8世紀前半、③9世紀、④11世紀にあるものとしている。

①の5世紀後半から6世紀初頭の画期は佐久地方の古墳時代的様相II期に、②は奈良時代的様相に、③は平安時代的様相に、④は中世的様相に対応し、暦年代も①を除けば、ほぼ一致する。①については前述したように初頭須恵器の出現期の問題で、これもほぼ同時性はまちがいないものと考える。このように信濃の古代土器の変遷は、「坏」・「埦」つまり原氏のいう食膳具に焦点を当てると、信濃全体に同時性をもって推移していることがわかる。

(2)　畿内の様相

西氏による「土器様式の成立とその背景」によれば、

①古墳時代前半

畿内第Ⅴ様式から庄内式をへて布留式に至る間においては、基本的な様式の転換や様式構造の変化は認めがたく、畿内第Ⅴ様式の自然な発展として理解できるとしている。つまり、畿内第Ⅴ様式あるいは庄内式までを弥生時代としたとき、古墳時代前半は、弥生時代との様式変化はなかったとしている。

②古墳時代後半

須恵器の導入により、須恵器「坏」の量が増加し、各人おのおのが食器をもって食事をとる三国系の食事習慣が、わが国の生活文化の中に浸透したことをものがたっているとしている。

③7世紀初頭

わが国に導入された三国の仏教文化を基調とした「金属器指向型」というべき方向・性格をもつものであるとし、III期後半に、規格性のある法量をもった多用な器種分化した坏・埦から「律令的土器様式」が成立したとしている。

④9世紀初頭

晩唐越州系磁器の影響による「磁器形」甕器―緑釉・灰釉陶器の出現と、これに代表されるゆるやかな「磁

第1表　各様相の歴年代

プレ古代	古代時代的様相	I期	瀧の峯2号墳出土土器	4世紀後半
古代前期		II期	TK73型式～TK47型式	5世紀代
		III期	MT15型式～TK10型式	6世紀代
		IV期	飛鳥II～III期	7世紀代
古代後期	奈良時代的様相			8世紀～9世紀前半
	平安時代的様相		光ケ丘1号窯式～虎渓山1号窯式	9世紀後半～11世紀前半

第2表　畿内と信濃の時期対比表

年	時代	畿内（中央）	信濃（地方）		時代
	原始	弥生時代	弥生時代		弥生
300	プレ古代	古墳時代前半	I期	古墳時代的様相	古墳時代
400	古代	古墳時代後半	II期		
500			III期		
600		金属器指向型	IV期		
700			奈良時代的様相		奈良時代
800		磁器指向型			平安時代
900			平安時代的様相		
1000					
1100	中世	瓦器の成立	中世的様相		

器指向型」への土器様式の変化。
⑤11世紀中頃？
単一の法量と規格性を特徴とする瓦器埦の成立。

以上のように畿内の様式変化は捉えられるが、佐久地方と比較すると、

①の古墳時代前半は、古墳時代的様相Ⅰ期と対応する。②は須恵器導入時に畿内では、すでに民衆の食器の中に須恵器が使用されており、これは、信濃では3世紀後の8世紀（奈良時代的様相）までまたなければ実現しないのであり、畿内の先進性がうかがえる。③の金属器指向型の変化は、古墳時代的様相Ⅳ期に当り、その影響が佐久地方にもたらされたことは確実である。④の9世紀初頭の変化については、平安時代的様相に対応し、約半世紀遅れて佐久地方も変化する。⑤の中世的様相の成立は、ほぼ同時的といえよう。

この変遷を畿内（中央）と信濃（地方）に分けて第2表に示してある。

これらのことから、古代は、須恵器の導入時に三国系の文化をとりいれることにより始まったということができよう。そして、この古代は、全国一斉に開始された観が強く、また、畿内・西日本は須恵器坏を日常食器として使用し、東日本ではまだその普及をみないという差が存在する。

この全国一斉に、食生活習慣が転換したことは何をものがたっているのであろうか。ここに畿内を中心とする中央が成立したと考えることは早急であろうか。

古墳時代的様相Ⅱ期～Ⅳ期までは、その中央に対する指向が佐久地方の土器を見るかぎり強いように思われる。そして、古墳時代的様相Ⅰ期は、このような中央の成立に対する成生期で、岩崎氏がいうように「農業生活の中で形づくられた地域社会、そしてわずかにせよ生れてきた余剰物資、新たな生産活動のための必需品としての鉄製品などへの需要の高まり、このような諸要素が一定点に達した時、これらの行為をより組織化する方向が生じ、西方諸地域との政治的連携の必要を促したのだろう[17]」としており、須恵器導入時にその頂点に達したのだろうと考える。

このようなことから、古墳時代は「中央と地方」の分化を発生させた時代として捉えることができる。

以上、雑駁なまとめになってしまったが、時間的制約の中、進めてきた「佐久地方の古代土器様相について」により、今後、佐久市志原稿執筆のための時期変遷がある程度把握できたと考えられ、これから「須恵器の生産・普及・衰退について」を整理していきたい。

最後になってしまったが、研究史を書くに際しては岩崎卓也教授にたいへんお世話になり、また、日頃、種々の示唆に富む雑談に応じてくださる小山岳夫、小林真寿、竹原学氏に心から感謝申し上げたい。この他本稿を草するまでに多数の方々にご指導・助言をいただいた。お名前を記してお礼としたい。

西野元、笹沢浩、原明芳、林幸彦、臼田武正、福島邦男、佐藤信之、小林直江、花岡弘、三石宗一、須藤隆司、堤隆、羽毛田卓也、翠川泰弘、須賀武司。（敬称略）

（佐久埋蔵文化財調査センター）

註

(1) 原明芳　1987　「信濃における食器の系譜―古代から中世へ―」『文化財信濃14－3』
(2) 岩崎卓也　1961～1964　「土師器研究上の諸問題(1)～(3)」『大塚考古3～5』
(3) 岩崎卓也氏の「土師器研究上の諸問題」ではふれていない。
(4) 岩崎卓也　1963　「古式土師器考」『考古学雑誌48－3』
(5) 岩崎卓也　1964　「土師器の編年」『歴史教育12－3』
(6) 倉田芳郎　1965　「南関東における住居址出土の土師器」『考古学雑誌48－3』
(7) 服部敬史　1968　「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡』
(8) 岩崎卓也　1974　「東日本における土師器の研究」『史学研究』
(9) 西弘海　1978　「西日本の土師器」『世界陶磁全集2』
(10) 西弘海　1982　「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
(11) 菊池徹夫　「考古学における時期区分について」『史観48』
(12) 杉原荘介・中山淳子　1955　「土師器」『日本考古学講座5』　河出書房
(13) 佐原真　1979　「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ2』　有斐閣
(14) 杉原荘介・大塚初重　1972　『土師式土器集成1』
(15) 古墳時代的様相・奈良時代的様相・平安時代的様相と使ったのは時代区分である古墳時代・奈良時代・平安時代と暦年代が正確に対応しないため、「的様相」という言葉を使用した。
(16) 佐久埋蔵文化財調査センター・佐久市教育委員会　1989　『瀧の峯古墳群』
(17) 岩崎卓也　1978　「東日本の土師器」『世界陶磁全集2』

なつかしいアルバムより

▲　昭和42年　佐久市東一本柳遺跡の調査にて

左より、㈱竹内恒会長・㈱八幡一郎先生・㈱細萱勇美会員（元佐久市教育長）。

偉大なる諸先輩方の残された遺産は大いなるもの。

▲　昭和46年　佐久市東一本柳古墳の調査

桐原健先生を迎えて、㈱竹内会長を中心に。

花形満のような？臼田武正さん。当時は信州大学生……今は２人の子供をもつオジサン。

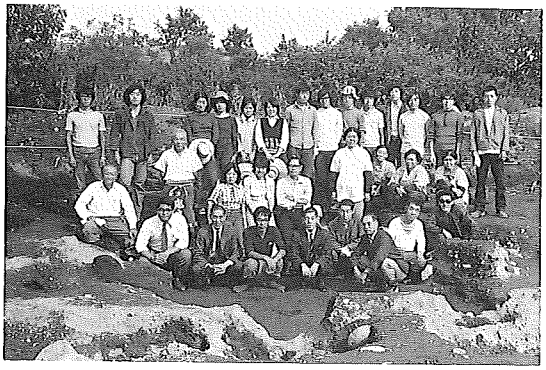
▲　昭和47年　佐久市中佐都餅田遺跡の調査にて

㈱興水利雄さんを中心に。㈱武藤金さん・三石延雄・渡辺重義・井上行雄・黒岩忠男・臼井武正さん等。

そしてヤセて長髪の高村博文さん（今は寅さん）。

藤沢平治団長を中心に！㈱細萱勇美・㈱武藤金・高畑課長・木内捷・佐藤敏・三石延男・青木幸男・小林幹男さん。……そして長髪の『かまやつひろし＝ムッシュ』こと福島邦男さん（シビレますなあ……）。

▼　佐久市岩村田上ノ城遺跡の調査団（昭和48年）

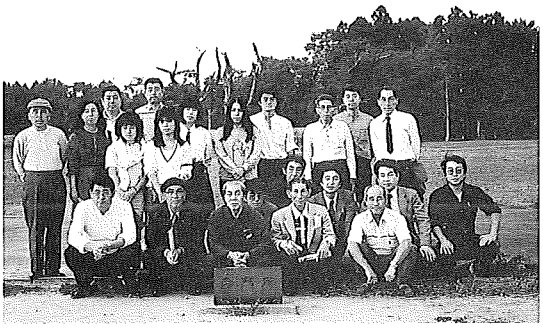


高村・花岡・堤少年・小坂井・八町・佐藤敏・小林カモメちゃん・ビックマグナム黒岩・井出・井上・木内さん。この中でかつての恋人どうしは誰でしょう？

▼　佐久市後沢遺跡の調査探検隊（昭和51年）

由井会長・ベレー白倉・大井今朝太さんほか、佐久市埋文資料室のみなさん。今とあまり変りないけど、何ともう５年前なのでありますよ。

▼昭和59年　秋の研修旅行（宮城県　多賀城）



——身近な話題——

200字短信

青木　一男

学生の頃だったでしょうか、ある先生が「僕は耳学問で勉強してきた。」と語っていました。今日とは情報量が異なるとはいえ、20代の私にとって耳を傾けるものがあります。報告書では見えないものが、その地に立ち、地域の方々と会う中から見えて来る。そんな勉強の仕方もいいなあと考えております。今回、千曲川中流域の善光寺平から入会させて頂きました。今後ともどうかよろしくお願い致します。

木内　晶義

皆様、はじめまして、今回佐久考古学会に入会させて頂く木内晶義（あきよし）と申します。簡単では御座いますが私の自己紹介をさせていただきます。昨年4月開発公社の人事異動により、佐久平ゴルフ場より現在勤務致します佐久埋蔵文化財調査センターに配属になりました。遺跡発掘などという仕事は、全くの素人では御座いますが、昨年一年間発掘調査の仕事に従事して見まして、発掘調査の奥の広さに驚きを感じております。最近、仕事にも慣れてきましたせいか発掘調査がどのようなものかがほんの少し解ってきたような気がします。又、ゴルフについては、少々自信がありますので私に連絡くだされば、お役に立てると思います。以上簡単ではありますが私の自己紹介を終らせて頂きますが、まだまだ学ぶことが多い仕事ですので、皆様、未熟な私に御指導、御鞭撻の程を宜しくお願いいたします。

堀籠みさと

二年前栗毛坂遺跡で発掘に初めて参加させていただきました。

浅間山や八ケ岳を眺めながら身体を動かす喜こびもさることながら、少しずつ土をはがし、一千年前の住居跡が次々と現われ、踏み固められた床面やカマドそして土器の数々が出て祖先の生活の匂いを感じ言い知れぬ感動を覚えました。

今、復元作業をしておりますが、地球汚染の激しい昨今、掛け替のない大切な品を手にすることが出来ますことをうれしく思っております。

色々と教えていただきたくて入会させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。

成沢　冨子

昨年の夏、息子がアルバイトで、栗毛坂遺跡の発掘作業に参加したのが縁で、私もこの仕事をするようになりました。

発掘作業の後は、土器流い、注記、復元と作業が進むにつれ、学問的な知識も得られ、関心も深まりました。

全国都々浦々で、大規模な発掘調査が行われており、最近では「吉野ケ里遺跡」などが、新聞で報道されており、自ずと目に止まります。

この度、入会させて頂くようになりましたが、よろしくおねがいします。

小山　岳夫

最近、聖原Ⅰ遺跡の調査に入りました。15,000㎡程確認した段階ですが、既に170軒の竪穴式住居址が検出されています。おおよそ、古墳時代後期（7C代）から平安時代（11Cか12C代）の集落と考えられます。本当にとんでもない規模の調査を行うようになったもので、調査の最中にじっくりと考えている余裕も最近ではありません。ふと、10年前に発掘を始めた頃ののどかな情景が思い浮かび、郷愁覚えずにはいられない今日この頃です。

第二回佐久地方遺跡発掘調査報告会が4月23日に行われ、盛会のうちに幕を閉じました。参加して下さった、丸山・宮下両先生、発表者の皆さん、会員の皆さん、そして一般参加の皆さん、ご協力本当にありがとうございました。

羽毛田卓也

佐久平も開発のピークを迎えました。年々倍増する緊急発掘調査もそれに正比例するがごとくピークを迎えつつあります。こうした状況の中で、埋蔵文化財は保存される事もなく、記録保存という名をかりた破壊行為により次々と姿を消して行きます。自然環境破壊も似た様な運命を持っています。今、私達にできることは、こうした文化財（埋蔵・有形・自然）の破壊に対し、ストップをかける事であると思います。

一度破壊されてしまったら二度と元には戻らないという事を再認識するとともに、会員の文化財パトロール強化をお願いしたいと思います。

事務局より

● この度、次の11人の方たちが私達の新しい仲間として加わりました。最近、社会現象化している熟女パワーが、いよいよ本学会にも浸透して来たことを感じさせる今日このごろです。

青木　一男	〒381-12	長野市松代町清野1941	☎0262（78）6177
児玉　卓文	〒388	長野市篠ノ井二ツ柳2015-1	☎0262（93）8113
木内　晶義	〒384-02	佐久市伴野1750	☎0267（62）3877
亀山　　敏	〒384-01	佐久市中込2962-17	☎0267（62）1171
成沢　冨子	〒384-21	浅科村桑山862	☎0267（58）3802
堀籠みさと	〒385	佐久市安原1124	☎0267（67）1028
浦山　　徹	〒385	佐久市長土呂998-11	☎0267（67）5611
丸山敞一郎	〒396	伊那市荒井区川北町8026-4	☎0265（76）1991
寺島　俊郎	〒385	佐久市長土呂481-5パインプラザ105号	☎0267（67）0605
竹之内敏幸	〒384-01	佐久市中込3252-2	☎0267（67）4669
近藤　尚義	〒384-01	佐久市瀬戸1571-1セブンハイツE	☎0267（63）2166

● 2年程前に、学会、マスコミを賑わせた「瀧の峯2号墳」の発掘調査報告書が刊行されました。既に皆さんご存じのことと思いますが、当地方は言うに及ばず、全国的に問題となっている弥生から古墳時代の境界線上に位置付けられる女性が葬られた興味深い墳墓です。考察編では、列島内で発見された類例との墳形・規模の比較、出土土器の検討などが行われており、これらの総括として筑波大学教授岩崎卓也氏の玉稿によって締めくくられています。購読を希望される方は佐久埋蔵文化財調査センター・佐久市教育委員会にお問い合わせ下さい。

● 早いものでついこの間30号記念合冊製本事業を行った佐久考古通信も来年度の2回目の刊行時に、50号を迎えます。事務局では何らかの形で記念特集号を企画したいと考えておりますので、会員諸氏もどしどしご意見・ご要望をお寄せ下さい。

● 今年こそはと思いながら、当学会の長年の懸案である会誌「赤い土器を追って」を発刊することができませんでした。もはや来年は、崖っぷちにたったつもりで何としても大願を成就させるつもりですので、皆様にもご協力のほどよろしくお願い致します。

● 本年の日本考古学協会第55回総会が、下記の通り行われます。27日には1時から藤の木古墳の講演会も行われますので振るってご参加下さい。

期　日　1989年5月27日（土）・28日（日）

会　場　パルテノン多摩・サンピア多摩(京王相模原線・小田急多摩線　多摩センター駅 徒歩5分)

▶編集後記◀

通信47・48号をお送りします。今回は一層の力作揃いで、もはや、通信と言うよりも会誌の域に達しつつあります。そろそろ『佐久考古』の復活・定期刊行を真剣に考えなければならない時期にきているように思います。

いよいよ年度も変わり目にきて、あちらこちらで転任の噂が聞かれる季節となりましたが、今までのところ考古学に携わるものに対して不愉快な人事の情報しか耳に入ってきません。県・市町村の行政官庁というのは考古学を法に定められた仕事として真剣に取り組む気があるのでしょうか。当学会も行政側に対する馴れ合いの姿勢を捨て、闘いを挑む時期に来ているように思います。　（小山・堤）

佐久考古通信　No.47・48

発行所　佐久考古学会
〒384-11　南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義方
☎0267（92）3171

発行者　由井茂也

編集者　井出・福島・須藤・小林・堤・小山

印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古通信

佐久考古通信　No.49
1989．7．1
佐久考古学会

目　　次

埋蔵文化財の保護に向けて……高村　博文……1
1989年度佐久考古学会総会報告……小山　岳夫……2
武蔵野台地の横剝ぎ技法　――研究ノート――……角張　淳一……3
第二回　佐久地方遺跡報告会開催さる……堤　　隆……10
所謂「北信型の甕」を考える……小林　真寿……11
バッパ（馬場平）の思い出……由井　　明……19
事務局より……事　務　局……20

埋蔵文化財の保護に向けて

事務局埋文保護担当　高村　博文

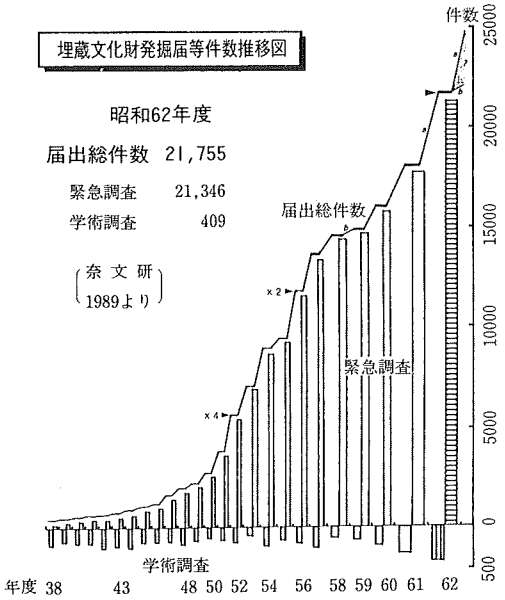
現在の社会は、開発することが最優先とされる社会と考えられる。しかも、その開発は、機械力によるもので、過去の社会では考えもおよばない場所でも開発することができ、我達が幼い頃、はぐくみ育ててくれた山河が、消滅することも十分に考えられるのである。佐久地方でも例外でなく、関越自動車道、大型リゾート開発等その波は、現実の問題として押しよせてきている。いったい開発により地域住民はどれほどの利益を得ているのだろうか。また、その開発によって失われる自然環境、社会・文化的環境は二度と復元できないことをほんとうに考慮して実施しているものであろうか。私達の意識の中に人類は絶えまなく進歩するものという歴史観が浸みわたっていないだろうか。また、人間はそんなにバカでなく、環境破壊にしたって自分達に危害が実際に起こったら、知恵を出して、それを乗り越えるだろうという楽観的見方が支配していないだろうか。

ダーウィンの進化論の中にも、進化の過程の中で特別な機能が発達しすぎ、環境の変化に対応できないで絶滅していった種があることが知られている。進化＝未来＝進歩ではない。

近藤義郎氏は『進歩とは何か』(1988) の中で「進歩とは人の生活を、また、諸民族、諸種族集団の生活をより豊かにし、より多様化させるもの」としており、また、樹木伐採具と武器の型式変遷を現在の社会まで分析し、「樹木伐採用具と武器の行くつく先が、一時的な型式の増加ののち、まさに型式の画一化、諸民族、諸種族集団の特性の喪失の方向にむかっていることが明らかとなった。」とし、その原因として「資本という、民族籍も国籍もない一種の人工エネルギーが、世界の諸民族、諸集団に対し、多様性を棄て去るよう、画一化をたえず押しつける役割をしていることである」としており、現在の社会が決して進歩しているものといえないことを明言している。

私達のまわりにある自然（長野県、佐久地方の特質である）は、一度破壊したら人間の力ではどうすることもできないものである。そのこととともに、開発は地下に眠る私達の祖先がこの地に生活し、残した文化遺産である遺跡をも一緒に破壊してしまう。私達の生活は真空の中から突然現出したものでなく、過去の人々の努力によって一つ一つ積み重ねられた結果、様々な生活習慣、生活様式ができあがっているのであって、過去のそのような蓄積を現在の私達の頭の中から忘れられていないだろうか。

日本国憲法では、第１条で主権が国民に存する、主権在民を規定している。この主権が私達に存する歴史は、たかだか40数年しかなく、ほんとうの意味で私達の権利として認識されていないといっても過言ではないだろう。主権在民とは、国民１人１人が考える自由を保障され、そして、未来に向けてどのような社会が最も国民１人１人にとって良い社会となるか、国民１人１人が創造・選択する自由を有していることである。そのためには、過去を分析し、現在を理解し、そして未来を展望する方法以外に、国民あるいは住民１人１人が考え、社会を創造・選択する方法はあり得ない。ここに、研究者が行うべき使命として、過去の調査データを国民に公表する義務が存在する。そして、埋蔵文化財は、過去の社会が残した、過去の社会を考察するための貴重な遺産であり、これらの遺産が消滅する



ことは、前述したように、現在の社会を理解し、未来を展望するための基礎的資料を消滅することと同じで、主権在民の権利そのものが侵害されるといってもいいだろう。

さらに近藤氏は『進歩とは何か』の最後で「諸民族、諸種族集団、地域集団がおのれをとりもどすことであろう。いまなお多くの分野で辛うじて保持されている諸型式の多様性と独自性、一定の自然環境の下での歴史的な歩みの中で培われた民族や国民の独自性、地域あるいは種族集団としての独自性を失うことは、人間と人間社会を失うことであると思う。」と結論し、現在の社会に警鐘をならしている。

私達は今、日本国中、画一化された開発という波に押し流されそうな勢いの中にある。

佐久地方でも同様で、私達は、研究者としての役割、学会としての役割、行政としての役割、そして住民としての姿勢を正しく自覚し、佐久地方独自の文化・社会を創造していくために、今、開発することは何を私達にもたらし、文化財を保護することはどうして必要なことか真剣に考える必要があろう。

1989年度佐久考古学会総会報告

事務局総務幹事　小山　岳夫

1989年度佐久考古学会総会が、6月10日午後1時より信州短期大学第五講義室において開催された。

黒岩副会長の開会宣言に続き、由井会長による埋蔵文化財をめぐる保存活動の強化を求める旨の挨拶がなされた。小山による日程説明のあと、議長に助川朋広会員が選出され、議事に入った。

第1号議案、昭和63年度佐久考古学会会務・決算・会計監査報告及び承認の件は、井出幹事長、篠原、井上会員報告の後、会員諸氏の承認を受け通過。

第2号議案、1989年度佐久考古学会事業計画・会計予算承認の件は本年度より新たに企画された「佐久考古学会公開講座」(仮称)、会誌「佐久考古」の刊行などの趣旨説明も含め、小山が報告し、会員諸氏の承認をうけて通過した。

その後、1989年度事務局幹事の役割分担の発表がなされ、新たに保護活動部門が新設される旨が告げられた(下記参照)。

二つの議案がスムーズに承認されたのち、議長が退任、白倉副会長による閉会の言葉で総会が締めくくられた。

引き続き、佐久考古学会主催の講演会が行われた。講師には京都から国内須恵器研究の第一人者田辺昭三先生が迎えられ、佐久市石附窯跡の調査でご指導を仰いでいる竹原学会員による紹介の後、「初期須恵器について」の演題でご講演頂いた。

先生のお話しは、大阪府陶邑古窯跡を中心とした国内における須恵器生産の開始から発展を中国大陸、朝鮮半島からの系譜上に位置付けたうえで、初期須恵器の見方について初心者でもごく分かり易く明解に解説されたものであった。通常講演会に有りがちな居眠りも殆ど無く、最後まで聴取者のほぼ全員がその内容に引き付けられてお話に聴き入った。

講演終了後、白倉副会長によって謝辞が述べられ、盛会のうちに会が閉じられ、近隣のレストラン「菊屋」において田辺先生を囲んで懇親会がもたれた。

最後に本年は、50名という例年にない大勢の参加者があったことを喜ぶと共に、会場借用に当たって絶大なご支援ご協力を頂いた信州短期大学、講演会開催にあたりご理解頂いた佐久市教育委員会に対し、心から感謝申し上げる次第である。また、本年は新企画もあり、会員諸氏の活発な活動への参加も喚起したい。

——研究ノート——

武蔵野台地の横剝ぎ技法

角張　淳一

1　はじめに

本論は鈴木遺跡D地点出土の資料をもとに武蔵野台地の横剝技法についてその編年的位置付けについて論ずるものである。ここで取り扱う資料は筆者が学生時代に鈴木遺跡にいたころ当時東北大学院生であった会田容広氏に注意を促された遺物であった。卒業後、この遺物が気にかかっていたが、昨年小平市教育委員会の林氏の快い了解と協力をえて再び実見させていただき、実測図もとらせていただいたものである。この資料は一点のナイフ形石器を除いて未発表資料である。

2　資料の紹介

この資料の石質はすべてホルンフェルスである。

a　剝片資料

資料NO１、２、３、４、５は接合しない資料である。NO１の背面にのこる下からの面はポジ面である。打面は剝離面打面である。NO２は自然画を底面にもつ剝片である。背面は一枚の大きな剝離面があり、その右上の剝離面は打面の残りであろう。打面は背面側からの剝離により除去されているが、背面に残る打面から剝離面打面であることがうかがえる。NO３も背面には大きな剝離面を残している。裏面には右半分に底面を残している。NO４は背面のポジ面の状態から石核の末端に近い剝片であろうとおもわれる。背面には７枚程の既に剝離された剝片の剝離面をのこしている。これらの剝片はすべて底面を持ち、打面と作業面とを固定させながら剝片の生産がおこなわれていることがわかる。そしてさらにそれを証明する資料がNO６、７、８の接合資料（NO９）であり、NO14の接合資料である。

NO20の接合資料は背面構成からみると90打面転位の好資料である。はじめに縦に石核を用いて剝片をとっているが打面と作業面の剝離角の限界から打面を90振って剝片をとっている。この資料に角錐状石器が接合する。

b　ナイフ形石器

NO５、６、７がナイフ形石器である。NO５は打点部分がかなり厚い剝片であり、そこを集中的にブランティングで潰している。二側縁加工のナイフ形石器である。NO６、７は一側縁加工であるが、打面を除去しようとして剝離を大きく進行させたこと、それが素材自体の反りに反射して２つに折れてしまっている原因となっている。３つのナイフ形石器は基本的に同じ素材を用いて同じ方法でナイフ形石器を作ろうと試み、NO６、７が打点の除去に失敗したといえよう。除去に失敗した直接の原因はこの２つのナイフ形石器の素材にはかなり大きく打面調整痕が施されていたと推測でき、その整形に失敗したと考えられる。

C　スクレイパー

NO10、12はスクレイパーである。NO11は一側縁に鋸歯縁状の刃部を作出している。NO13は剝片の先端に細かい剝離がはいっている。

D　角錐状石器

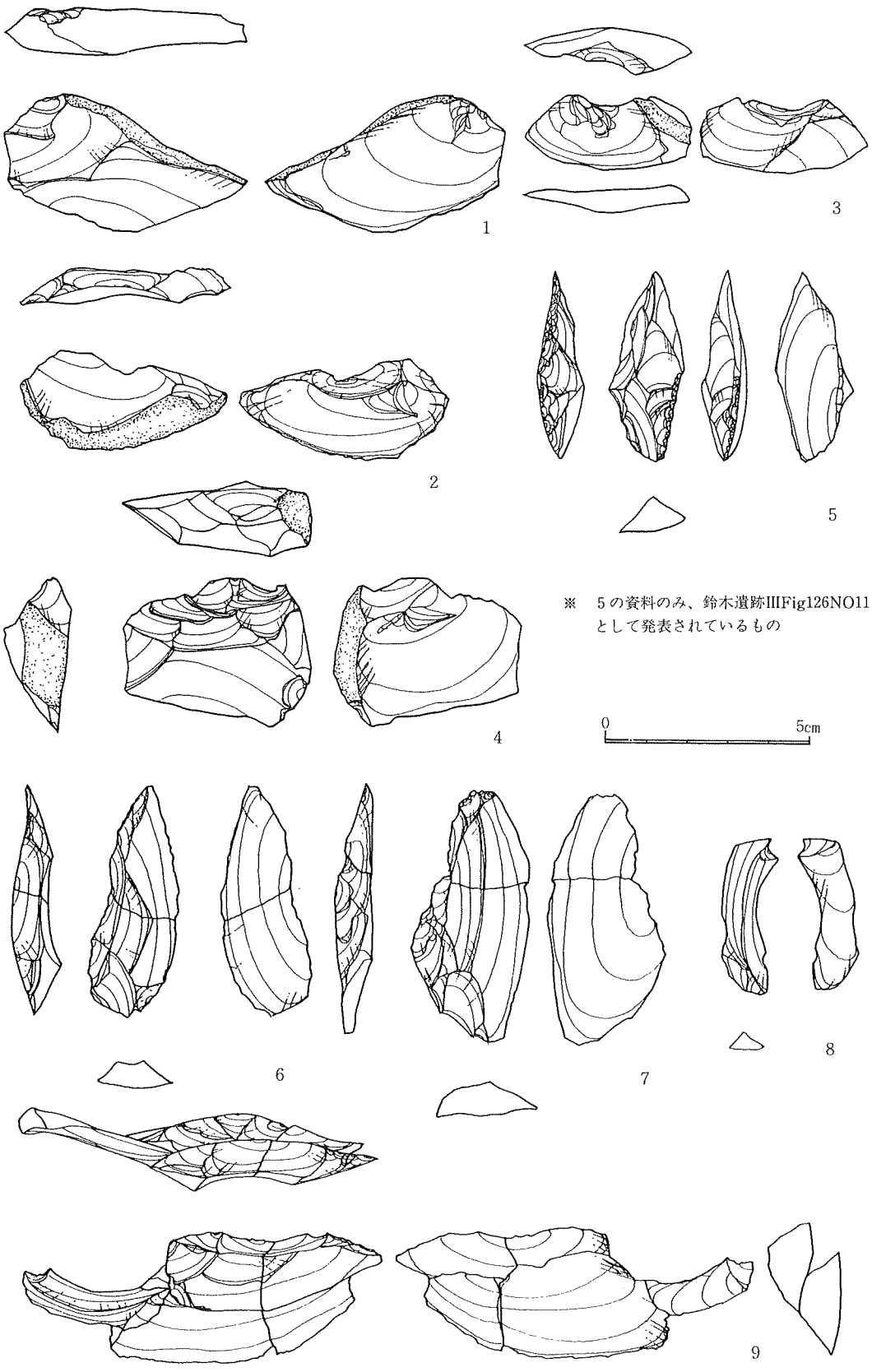
NO22は角錐状石器である。この石器は幅広の厚い剝片の末端部が素材となっている注意すべきことは３枚のチップが接合する（NO21）ことであろう。このような例はここの例のみだけでなく神奈川県大和市上草柳第一地点第２文化層[(1)]の例にもみられる。これを製作過程のものとみるか刃部再生とみるかで角錐状石器の評価はおおきくわかれるであろう。ここでは刃部再生として評価したい。

3　剝片生産技術の検討

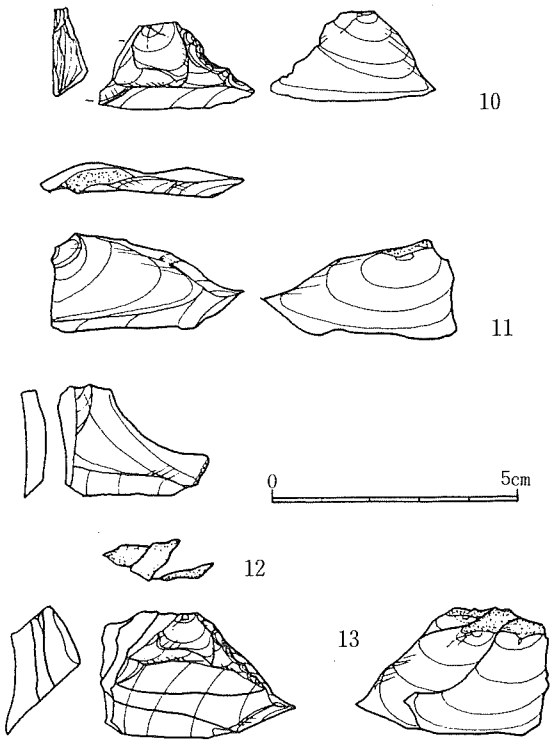
この資料の剝片生産技術は現象として３種類に分類できる。さらに目的剝片と器種が対応関係をしめしていることが特徴であろう。これらの現象の意味することについては考察に譲るとしまずは現象の把握から考古学的事実をみつめよう。

●剝片生産技術１類

接合資料NO９、14及び資料NO１、２、３、４、５、６、７、８、17、18、19の剝片生産技術。板状の剝片を石核にしていると推測できる。この板状の剝片の一面を作業面、一面を打面とし打面と作業面を固定している。打点の進行は打面上を大きく左右に振れながら打面の奥へと進行する。打面調整はかならず行なうものはなく、必要に応じて打点を作り出すように粗いえぐりとるような剝離が打面上になされる。この打点を作り出す場合は、打点の位置が打面の中央付近に位置したときである。実際の剝片生産作業工程のなかで打点が石核の端にきたときは角打ちになるので剝離角に支障はないが、打点が打面中央にきた場合は作業面のネガティヴ剝離面と打面とのなす角度は剝離角としてはかなりマイナスの要素である。それを解消するために石核の作業面のネガティヴな部分を打面とし本来の打面にむかって粗いチッピングを行なうのである。



第Ⅰ図　鈴木遺跡Ｄ地点出土資料　(約2/3)



第２図　鈴木遺跡Ｄ地点出土資料　(約2/3)

そしてチッピングを行なうだけでは剥片の剥離には不充分なので打点部分も若干高めにして打面の調整を行なうものとおもわれる。

この打面調整の特徴的なことは、作業面と打面の角度の調整に必要におうじてなされた剥片生産技術のための技術である。したがって連続剥離のためにかならずなされるものでも、剥離の作用とし剥片の形状を規定することでもないことに注意したい。そして打点が打面上を左右に振れて進行し、そのために石核の角打ちを含む加撃でできる剥片は裏面に底面をとりこんだり（NO３）、必要な形状がえれないで細長くなってしまったり（NO８）するものもでてくる。

図NO９はナイフ形石器と剥片の接合例である。２つのナイフ形石器の素材となった剥片の打点はほぼ直線状に並ぶが打点の高さが異なる。これはおそらく打面調整による結果であろう。さらに剥片NO８の打点は石核の端までいっているがこれには打面調整はない。したがって打点は中央、左、中央と動いており中央の剥片のみに打面調整が施されていることがわかる。

接合NO14は４つの剥片の接合例である。やはり打点が右、左、中央へと振れているのが観察できる。そして中央の剥片には明瞭な打面調整痕がみられる。中央の剥片（NO18）の打面は剥離の際に剥落しており打面は線上になっている。

●剥片生産技術２類

これは接合資料NO13の剥片生産技術である。小型の剥片３つが接合している例である。打面はすべて自然面打面であるがこれは打面が平坦でさえあればよいことを示しているとおもわれる。NO13の正面左は折れ面の集合である。これは剥片の折れでなく石核の折れ面である。また底面はポジ面であることから石核素材は剥片であり、その剥片の両端を折りとって石核の作業面の幅を規定していることがわかる。

この２類は打面調整のないこと、さらに打点の移動が打面上を直線に後退していくことが１類とのおおきな差がある。また石核にそれほど大きな剥片をつかっていないこと、それが故に石核の幅を規定するのに剥離ではなく折り取りで対応していることも１類とは異なる。結果として生産される剥片は小型でその形状も１類よりさらに不安定である。

●剥片生産技術３類

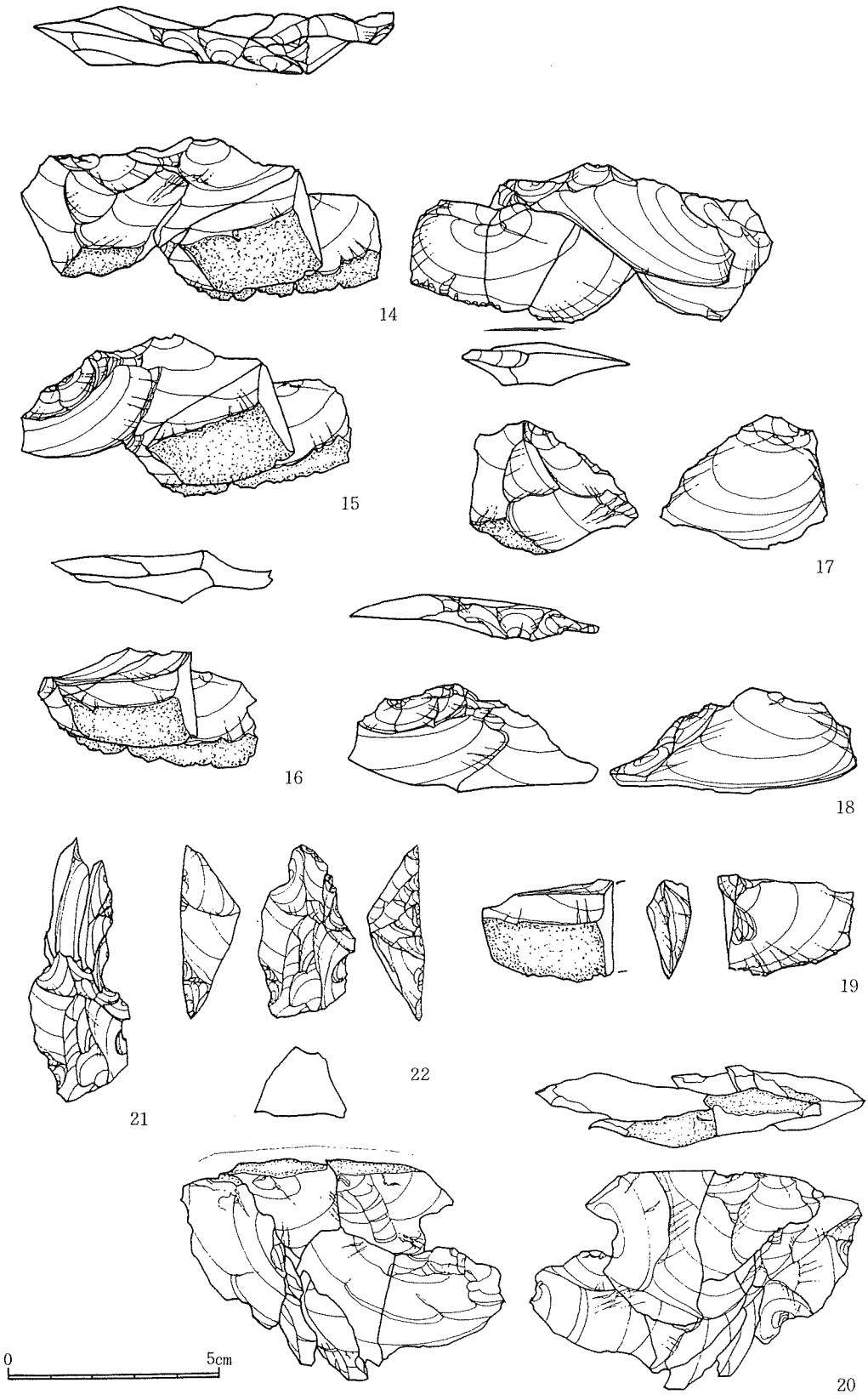
接合資料NO20の例である。この接合例からは作業面が一定で打面のみが90°の転位している典型的な90°打面転位の剥片生産技術である。打点の移動は打面の奥に進行するものとおもわれる。剥片はやや縦長の幅広で厚いものが剥離されている。打面調整や頭部調整等調整技術のないのはとくに剥片の形状にはこだわってはいないことで理解できよう。ここには角錐状石器が接合していることも興味深い。

４　剥片生産技術の構造

以上みてきたように剥片生産技術は現象的には３つに分類される。ただしこの分類基準は剥離工程と剥離に必要な調整技術の有無によるものである。はたしてこの資料の剥片生産技術は本当に３種類にわけられるものなのだろうか。

３つの剥片生産技術について共通していることがある。それは生産される剥片にたいしての形状について質、量ともにあまり厳しくないことである。厳しくないという意味は、質的には剥片形状についてはアバウトでよいという意味であり、量的には不良品のでる確率の、それを減らすための努力としての石核の調整加工を設けていないという事実でもある。それは１類の打面調整の意味を求めればわかる。１類の打面調整の意味は作業面のネガティヴな反りとでっぱった打面との角度の補正を目的としたもので、あらかじめ打面と作業面の角度補正の必要ない部分には施されない。(この事実は瀬戸内技法とはおおきく異なるものである。瀬戸内技法の打面調整は打面を調整することで生産される剥片形状まで規定する２重の意味をもつ[(2)])。

つまりこの打面調整は剥片を石核から剥離するためだけの措置である。したがって、１、２、３、類とも



第３図　鈴木遺跡Ｄ地点出土資料　(約2/3)

に共通する事実は剥片生産について、調整技術が希薄で剥片の形状の質とハネもの確率についてはあまり注意をはらっていないことがわかる。では剥片の形状はまったく無視されているのかというとそうではない。剥片の形状は用いる石核形状におおきな制約をうけているのである。ということは剥片生産の際に石核の選択獲得が重要な位置を占めるといえよう。ただし剥片形状にアバウトな最大の原因は石核整形等の調整技法を駆使しないことにある。

以上のことから1、2、3類は技術の持つ基本構造は同じであるとかんがえられる。同じ技術構造が目的剥片の獲得にあわせて異なるかたちで発現したとかんがえられるのである。

さらに3種類の剥片生産技術はそれぞれに異なる器種に対応している。それぞれにナイフと角錐の素材はあきらかに選択されている。これは石器群の構造を考察するうえで重要である。

筆者等はかつて石器群の構造類型として剛構造と柔構造という2つの構造を仮説とし提出した[3][4]。そして今回の資料はこの剛、柔両方の中間的様相をもつ構造であることに注意をしたい。即ち、器種対応の剥片の形状はあらかじめ決められてはいるが、剥片生産の段階ではその形状を精密にコントロールしないという構造がうかびあがる。そしてこれは剛構造と柔構造の中間的様相をしめしており、このことがこの石器群の編年的位置を示しているとおもわれる。

5　武蔵野台地の石器群の変化のプロセス仮説

a　基幹石器群としてのVI層石器群

武蔵野台地の後期旧石器後半の基幹石器群としてVI層石器群が考えられる。この問題は後期旧石器のはじまりとその変化のプロセスがときあかされなければ解決のつかない問題である。しかしここ数年の研究動向によってそのメカニズムとプロセスがじょじょに明らかにされつつある[5][6][7][8][9][10][11]。それらの成果をくみあわせるとVI層の石刃技法の完成をもって中期旧石器的伝統から完全に脱却した後期旧石器社会が成立する[9][10]といわれている。筆者も基本的にはこの見解に賛成の立場をとる。しかしながらVII層とVI層のギャップはあまりにも大きく[3][4][12]、どのようなプロセスで後期旧石器的社会が成立したのか、そのプロセスを解き明かすことが今後の大きな課題であろう。しかしながら、VI層以降の石器群の変遷についてはナイフ形石器の型式学的探求によっても剥片生産技術の変遷からみてもすべてこのVI層を基準として出発していることは事実である。

VI層石器群のおおきな特徴は高度に完成された石刃技法にある。この石刃技法の意味をどのように解釈するかでV層、IV層の石器群の解釈がおおきく異なったものとなってしまう。というのはIV層下部石器群とVI層石器群はナイフ形石器の形態は似たものがあるが、こと剥片生産技術にいたってはまったく様変わりしてしまうからである。さらにIV層中部の所謂砂川期石器群はふたたびVI層とうりふたつともいうべき様相で突如として武蔵野台地とその周辺台地に出現している。これらの現象をひとつの解釈の糸でつなぐものはVI層の石刃技法の意味の解釈なのである。

b　VI層石器群と砂川期石器群の石刃技法の意味

VI層の石刃技法と砂川期の石刃技法は実によく似ている。用いられる石材は明確に異なるがおそらく技術としては同じものであろう。そこに差異をみいだしても本来的、本質的差異ではない。この時期を違えた石刃技法に大きく共通する事象がある。それは、この2つの時期がヴュルム氷期の中でもっとも寒かった時期という事実である[13][14][15]。どちらが寒いかという問題ではなく、氷期のなかで寒冷化にむかったときのピークがこの2つの時期であるという事実が非常に大切である。それと石刃技法の意味は完全に繋がるものとして石刃技法を解釈しよう。

まず石刃技法の特徴として石刃生産のときのハネ物確率が非常に少ないことがあげられる。これはひとつの石核からの生産効率を最大にもってゆく様々な調整技術があるからである。では何故そのような調整技術を駆使しひとつの石核からの生産効率が高めねばならなかったのか。それは石刃の量産のためだったのだろうか。それならばVII、IX層の石刃技法でも十分に対応できたはずである[16][17]。それよりもさらに石刃生産のマス効率をたかめる目的の調整技術の発達であったのだろうか。

筆者はこれに対して次のような意見をもっている。VI層の石刃技法の基本的意味は石刃生産のエコノミー化である。決して石刃のマス生産化の目的ではない。ひとつの石核から大事に大事にひとつずつ石刃をつくる。そしてひとつの石核をムリなくムラなくムダなくつかいきることがVI層石刃技法の意味であると解釈するのである。そしてこのことは寒冷気候とおおきく関連をもち、それは寒冷気候の時期の生活形態、社会と経済の状況に深い関連性をもつものであろう。数個の石核を管理しながら移動する小バンドの狩猟回遊生活という想像もうかぶのである[18]。このように解釈するとVI層と砂川期に石刃技法の出現した理由がわかるのではないだろうか。どちらも生活形態から必要にせまられて石刃技法を剥片生産技術として選択しているのだ[9]。そして、時期をたがえて同じ技術の出現することを進化論の立場から反復適応という[9]。

c　VI層からIV層下部への変化のプロセス

石刃技法が寒冷型の生活形態にともなうものならば

その逆もあるはずである。IV層下部という時期は最初の寒冷ピークがすぎて今度は小温暖期のピークである。温暖期は生活形態が変化し寒冷期とは対照的になると予想できる。まず剥片生産は打面転位をくりかえす石核が多量に出土する。そしてどの遺跡でもレキ群と多量の剥片類、そしてナイフのほかに様々なスクレイパーの出土をみる。ナイフは総じて小型になり様々な形態をうみだす。この事実は剥片生産がエコノミーからマスへと変化したこと、そしてその原因はナイフの小型化と多種類化に示されるように狩猟形態の変化、またレキ群、スクレイパーの増加から生活形態の変化がよみとれるであろう。

ではその大きな変化が一度にやってきたのであろうか。そのプロセスを解明するものがV層石器群の解釈なのである。V層石器群は数すくない検出例であるが様相は一見多様である。しかしこの石器群をVI層とIV層をつなぐ移行期とみるとスムーズに解釈できるはずである。まずV層でもVI層に近いほうは石刃技法がのこっていると解釈できる。[19][20] またIV層下部に近いほうはIV層下部に近い様相[21][22][23][24]であるとかんがえられる。つまりV層は石刃技法から打面転位の剥片生産に移行する石器群と解釈できるのである。筆者の言葉でいうならば、剛構造から柔構造へと変化する移行期の石器群である。

そしてこの移行期の問題と平行して考えねばならないのが、瀬戸内技法と角錐状石器の問題なのである。

d　瀬戸内技法の成立と関東への波及

瀬戸内技法の成立についてはここで軽々しく論ずることはできないが、筆者のおもう仮説を述べておこう。まず、瀬戸内技法の技術的特徴はそれがナイフ形石器のみを製作する技術であるということである。[2] これはVI層の石刃技法とまったく同じ特徴である。そして剥片の規格を支える技術として打面に調整剥離を行なうことも同じである。この打面調整については柳田、藤原論文[25]に詳しい。そして、両技法の打面調整によって引き起こされる物理的効果に違いはあれども（前掲論文）、剥片の規格を支える技術として打面に操作を加える技術が確立している技術系ということでは同じ技術系として評価ができないだろうか。関東の立川ローム VII層以下の後期旧石器の剥片生産技術には打面の操作という工程のプログムはないと思われる。また、西日本の各地でAT付近でVI層とおなじ石刃技法がじょじょにみつかりつつある。[26] そこには瀬戸内技法はないといわれている。

また坂井遺跡ではAT以下に瀬戸内技法がみられるというがこれは今後の検討をまったほうがよいだろう。したがって瀬戸内技法は少なくともATより上であるという見解に賛成の立場をとる。[27]

近畿地方の瀬戸内技法には角錐状石器はほとんど供判しないという。しかし、関東や九州では供判するという。これらの事実をどう解釈するかで編年的位置が定まろう。

筆者の考える結論から書こう。瀬戸内技法については石刃技法の特殊進化の結果であり、その盛行した時期は非常に短期間であったとおもうのである。それは、瀬戸内技法が石刃技法から発達したナイフ形石器製作のための技術革命であったと同じに進化論的にいうならば、寒冷期に発達した石刃技法の技術的過適応形態であったとおもうのである。ということは、瀬戸内技法は寒冷化のピークがすぎたのちの成立であり、温暖化がすすむなかで後期旧石器時代のネットワーク社会（IV層下部石器群の時期）ができつつある段階までのきわめて短い期間の技術であったとかんがえられる。そして、ネットワーク社会は石器も技術も各地域に運んだ。そのネットワークのはじまるときには既に角錐状石器が存在しており関東や九州に角錐状石器とともに国府型ナイフ形石器もはこばれたものと推測できる。関東で発見されつつある国府型ナイフ形石器は瀬戸内技法の存在した時期の終末に近い頃であろう。そして近畿地方にある角錐状石器をともなわない瀬戸内技法の石器群はおそらく盛行期の石器群であり、その時期はAT直上とおもわれる。そして寒冷化の石器群の特徴として石器群自体が非常に自己完結的技術系をもち、その分布範囲も特定石材を中心とした特定地域に限定される様相をもつ。もちろん関東のVI層石刃技法も黒耀石を中心に特定地域に遺跡が分布していると解釈できる。この事実も瀬戸内技法成立の時期を暗示しているとおもうのである。

e　瀬戸内技法の変容と関東への波及

瀬戸内技法は寒冷期に発達した石刃技法の特殊形態だと推定した。そして関東では石刃技法は、温暖期にむかって打面転位を頻繁にする剥片剥離に変化していった。では瀬戸内技法はどのように変化したのだろうか。それを述べるまえに関東の石刃技法の変化のメカニズムを剥片剥離のレベルでおってみよう。まずIV層下の石器群に特徴的な剥片生産技術は90°の打面転位といわれる。これは実際に残核をみると打面と作業面がまったく理解できないものが多い。そして言葉の用いかたであるが、打面転移とは「打面の位置を変えて剥片剥離をすること」であり、90の打面転位とは実に「作業面を固定しておいて打面のみ90に振る」という剥片剥離作業でなければならない。このような剥片剥離作業は実際には非常にむずかしい。なぜならば、打面を振る目的とは作業面に対してなんらかの不都合もしくは意図があるから打面を振るのである。石刃技法を例にとれば180の打面転位は存在する。そしてその目的は上下の打面を交互に使うことによって一つの作業

面を完全なかたちで維持しようとしているのである。片面打面では必ず有る一定の場所でウトラパッセの剥片が剥離される。それは、おおむねその作業面の剥片を剥離できる長さの限界を小さくする。もっといえば、作業面の破壊、もしくは石核自体の破壊につながる危険性をもつのである。また作業面と打面のなす角度が剥離に不都合になる場合もあるだろう。その場合は当然打面は90に振られる可能性はある。

だがIV層下の残核の多くは打面と作業面の区別がつかないのである。これはやはり打面と作業面のなす角度の不都合さを石核の面を変えることで解消しようとした意図であろう。そしてこの場合の面を変えるとは作業面を変えることが主体をしめていたとおもわれる。では打面は変えないのか。いや打面もかえるのである。そしてあくまで主体は作業面であり、打面は作業面にみあうかどうかで設定される。ということはIV層下の石器群の剥片剥離作業の本質は「打面転位」ではなく「作業面転移」にあるといえる。

したがって石刃技法から作業面転移に移行するメカニズムは一つの石核のなかでひとつの作業面を維持することから複数の作業面を用いることへの変化ととらえられるのである。さてここで瀬戸内技法にもどろう。瀬戸内技法が石刃技法の特殊進化の結果ならば、その変化のしかたも石刃技法に準じるとかんがえられる。そしてその変化の特徴は石核素材に変化はないが、打面調整の喪失と複数作業面の設定であると考えられる。とするならば横剥ぎ技法のなかでもそのような剥片生産技術の存在が予想できる。そして、瀬戸内技法が変化する過程で完全に作業面転移を獲得するまでにその中間形態の剥片剥離技術の存在も予想されよう[28][29][30]。そしてその中間形態の剥片剥離技術のもつ様相はこの資料紹介の鈴木遺跡の資料に該当するのではないだろうか。つまり、打点が打面にむかって左右に振れるという現象は、瀬戸内技法がひとつの作業面をひとつの剥片にあてていた状態から、ひとつの作業面を複数の剥片の剥離にあてる変化の現われであると解釈できる。つまり、瀬戸内技法の作業面転移のもっとも初期の状態はひとつの作業面を複数の剥片の作業面に変えるという変化であると解釈できるのである。そして、打面中央には打面調整を残すのである。もっとも、この打面調整はひとつの作業面からひとつの規格剥片という目的から開放された瞬間から純粋に打面と作業面の角度の補正という目的になるのだが。

そこで鈴木遺跡の資料をこのように解釈すると、瀬戸内技法の関東への波及が純粋の瀬戸内技法の最終末からの段階から変容してこの鈴木遺跡の資料のような状態にいたるまで角錐状石器をともないながら関東に波及していることが推測される。そしてこの石器の一部（NO５）がIV層の下部に属し、かつこの資料以外に異なる横剥ぎ技術の実体が他遺跡にあるならば、それはIV層下部という時間差のなかで解釈されるであろう。そうなれば実はIV層下部石器群も成立から終末まで、ある一定の時間のなかですこしずつ変化を引き起こしており、それはけっしてIV層下部石器群というひとくくりの枠のなかでの理解は不可能であることがいえるのである。

ここで付け加えるならば殿山遺跡は瀬戸内技法の最終末と関東地域が剛構造石器群から柔構造石器群へと変化する初期の時期のものと考えられる。そしてその層位的位置はおそらくＶ層の下部から中部とおもわれる。殿山遺跡出土の黒耀石製石刃素材のナイフ形石器と石刃、小型の作業面転移の石核、それと国府型ナイフ形石器の組み合わせは鈴木遺跡の資料とともに非常に意味あるものと考えられるのである。

6　おわりに

一つの資料でさまざまなことを述べてきた。諸先輩方の厳しい御批判をいただければ幸いです。最後に本文を草するにあたり、安斎正人、佐藤宏之、松藤和人、織笠昭、織笠明子、須藤隆司、堤　隆各氏には格別のご教示をえた。また小平市教育委員会には資料の実見と実測の機会をあたえていただいた。藤波啓容氏には、実測図と意見交換の協力を得た。末筆であるが御礼申し上げる次第です。

（本学会会員　御代田町在住）

註および参考文献

(1) 服部隆博・中村喜代重「上草柳第２地点遺跡」『一般国道二四六号（大和・厚木バイパス）地域内発掘調査報告書II』大和市文化財調査報告書第15集　昭和56年

(2) 柳田俊雄　1982「瀬戸内技法の打面調整の意味」『群山女子大学紀要』十八

(3) 角張淳一、藤波啓容　1986「武蔵野台地におけるVI－IX層石器群の一考察」『東京考古』４

(4) 角張淳一、藤波啓容　1987「石刃技法に関する覚書き」『東京考古』５

(5) 安斎正人　1986「先史学の方法と理論－渡辺仁著『ヒトはなぜたちあがったか』を読む(1)－」『旧石器考古学』32

(6) 安斎正人　1986「先史学の方法と理論－渡辺仁著『ヒトはなぜたちあがっか』を読む(2)－」『旧石器考古学』33

(7) 安斎正人　1987「先史学の方法と理論－渡辺仁著『ヒトはなぜたちあがったか』を読む(3)－」『旧石器考古学』33

(8) 安斎正人　1987　「先史学の方法と理論－渡辺仁著『ヒトはなぜたちあがったか』を読む(4)－」『旧石器考古学』35
(9) 安斎正人　1988「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行－前・中期／後期旧石器時代過渡期の研究－」『先史考古学研究』1
(10) 佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73号　第3号
(11) 田村隆　1989　「二項的モードの推移と巡回－東北におけるナイフ形石器群成立期の様相」『先史考古学研究』2
(12) 須藤隆司　1986　「群馬県藪塚遺跡の石器文化－ナイフ形石器の型式学的考察」『明治大学考古学博物館館報』2
(13) 安田喜憲　1985　『多聞寺前II』
(14) 相田薫　1986　「第7章　自然科学による分析からのアプローチ」『月見野遺跡群上野第一地点』
(15) 千葉寛　「野川中洲北遺跡」小金井市遺跡調査会
(16) 織笠昭　1988　「東林跡遺跡」
(17) 田村隆　1986　「中山新田Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV』
(18) 栗島義明　1987　「先土器時代遺跡の研究」『考古学研究』三十四－三
(19) 実川順一　1985　「第Ⅴ文化層」『花沢東遺跡』
(20) 麻生順司　1985　「第Ⅴ文化層」『東京天文台遺跡』
(21) 小田静夫他　1980　『西之台遺跡B地点』東京都埋蔵文化財報告7
(22) 鈴木遺跡調査団　1978　『鈴木遺跡Ⅰ』鈴木遺跡調査会
(23) 鈴木遺跡調査団　1980　『鈴木遺跡II』鈴木遺跡調査会
(24) 鈴木遺跡調査団　1980　『鈴木遺跡IV』鈴木遺跡調査会
(25) 柳田俊雄、藤原妃敏　1982　「瀬戸内技法と石刃技法－調整技術のもつ意味－」『旧石器考古学』23
(26) 松藤和人　1985　「西日本のおけるナイフ形石器文化の諸様相－とくに姶良Tn火山灰前後の石器群を中心に」『信濃』第37巻第4号
(27) 平口哲夫　1989　「横剝ぎ技法の諸類型(その三)」『太平台史窓』第8号　史窓会28平口哲夫他
(28) 1984　「福井県三国町西下向遺跡の横剝ぎ技法－主要石器類の定性分析を中心に－」『旧石器考古学』28
(29) 佐藤良二　1983　「冠遺跡出土の石器群について」『旧石器考古学』27
(30) 柳田俊雄　1983　「大分県岩戸遺跡第Ⅰ文化層出土の石器群の分析とその位置づけ」『考古学論叢Ⅰ』
(31) 鈴木遺跡調査団　1980　『鈴木遺跡III』鈴木遺跡調査会
(32) 山口卓也　1983　「所謂瀬戸内系の旧石器と横長剝片剝離伝統について」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』
(33) 織笠昭他　1982　『殿山遺跡』上尾市教育委員会
(34) 織笠昭　1987　「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72－4
(35) 織笠昭　1987　「翼状剝片の構造的矛盾」『考古学研究』133
(36) 小野昭　1969　「ナイフ形石器の地域性とその評価」『考古学研究』62
(37) 砂田佳弘　1986　「盤状剝片石核の系譜」『神奈川考古』22
(38) 柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団　1984　「神奈川県海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告所」
(39) 中村喜代重　1989　「相模野台地における盤状剝片石核」『旧石器考古学』38

第二回　佐久地方遺跡発掘調査報告会開催さる

報告会担当幹事　堤　　隆

第二回佐久地方遺跡発掘報告会が、4月23日佐久市勤労者福祉センターにおいて開催された。

当日の報告は、以下のとおりである。

1	佐久市下茂内遺跡（縄文草創期）	近藤尚義
2	望月町上吹上遺跡（縄文中期）	福島邦男
3	小諸市和田原遺跡（弥生終末期）	花岡　弘
4	佐久市上聖端遺跡（古墳～平安）	須藤隆司
	佐久市下聖端遺跡（古墳～平安）	羽毛田卓也
5	臼田町原遺跡　（古墳～奈良）	島田恵子
6	佐久市金井城跡　（中世）	小山岳夫

各報告の後、その講評を、本学会会員でもある、丸山敞一郎氏(前県埋文佐久調査事務所調査部長)、宮下健司氏（県埋文長野調査事務所）にお願いした。

当日は、当地方の古代史や遺跡調査に関心をよせる市民80余名が会場を満杯にし、各遺跡についての質問も相次ぎ、場内には熱気がこもった。

報告会終了後は、中込洞庭春において成功を祝し、和やかなうちに反省会がもたれた。

なお、当日の会場提供についてご配意をいただいた佐久市教育委員会に御礼を申し上げる次第である。

所謂「北信型の甕」を考える

小林　真寿

1　はじめに

奈良・平安時代の東信濃における在地の土師器長甕は言うまでもなく所謂「武蔵型の甕」である。ところが、平安時代にはこれとは異なる土師器長甕が存在する。所謂「北信型の甕」と呼ばれる長甕である。所謂「武蔵型の甕」はまぎれもなく在地でその変化・成立が追える土器であり、非常に完成された煮沸具である。にもかかわらず、言わば外来系とも言える所謂「北信型の甕」が9世紀にはいると出現する。その背景にはどのような要因が存在するのであろうか？本稿はその覚書であり、所謂「北信型の甕」の大まかなアウトラインを浮き彫りにすることを目的とする。

2　研究史

「北信型の甕」と言う呼称がいつ頃から使われ始めたかは定かではないが、当該地地域の一部の研究者間では使用されていたらしい。公の場・あるいは文章のなかで使われたのは、1987年－「長野県考古学会シンポジューム」における佐藤氏の報告[1]。1988年－「長野県史　考古資料編　遺構・遺物　古代の土器」での笹沢氏[2]。また、呼称は異なるものの1987年－「三輪遺跡（2）」における青木・中殿氏[3]。1988年－「薊沢」での高村氏[4]。1988年－「宮の上」での小山氏[5]等が触れているが、比較的簡略なものが多く、その具体的内容に触れているのは前記した笹沢氏、青木・中殿氏の二編である。

笹沢氏の前掲した文献から「北信型の甕」の定義にかかわる部分を抽出してみるとつぎのような要素が導き出せる。

1　越後からの影響を受けて成立した丸底で砲弾形の土師器大形甕の呼称。
2　同様な整形・調整が施される口縁端部の内屈するものは、「まさに越後型の甕そのものであり」越後型と北信型は区別される。
3　その出現時期は平安時代Ⅰ期[6]である。

次に青木・中殿氏の前掲文献で「ロクロ甕」と呼称（笹沢氏の越後型・北信型を総称）される土師器大型甕の定義にかかわる部分を抽出してみたい。

1　北陸から北信に通用。
2　その初現をなすものは須恵器的な口縁を呈し、外面下半をヘラケズリ・内面をハケメ・カキメにより再調整する。
3　須恵器的な形態の模倣は次第に退化し、受口状の口縁形態を呈する典型的なロクロ甕が成立する。
4　その初現は奈良時代後半にさかのぼる可能性があるものの9世紀前半。典型的なロクロ甕は9世紀後半に成立する。

以上のように、同一の土師器大型甕を笹沢氏は地域差に主眼をおき、青木・中殿氏は時間差に主眼をおき定義を試みている。

3　系譜

ここでは、所謂「北信型の甕」の系譜・分布域が笹沢氏や青木・中殿氏の言うように北陸・新潟方面に求められるか否かについて考えてみたい。

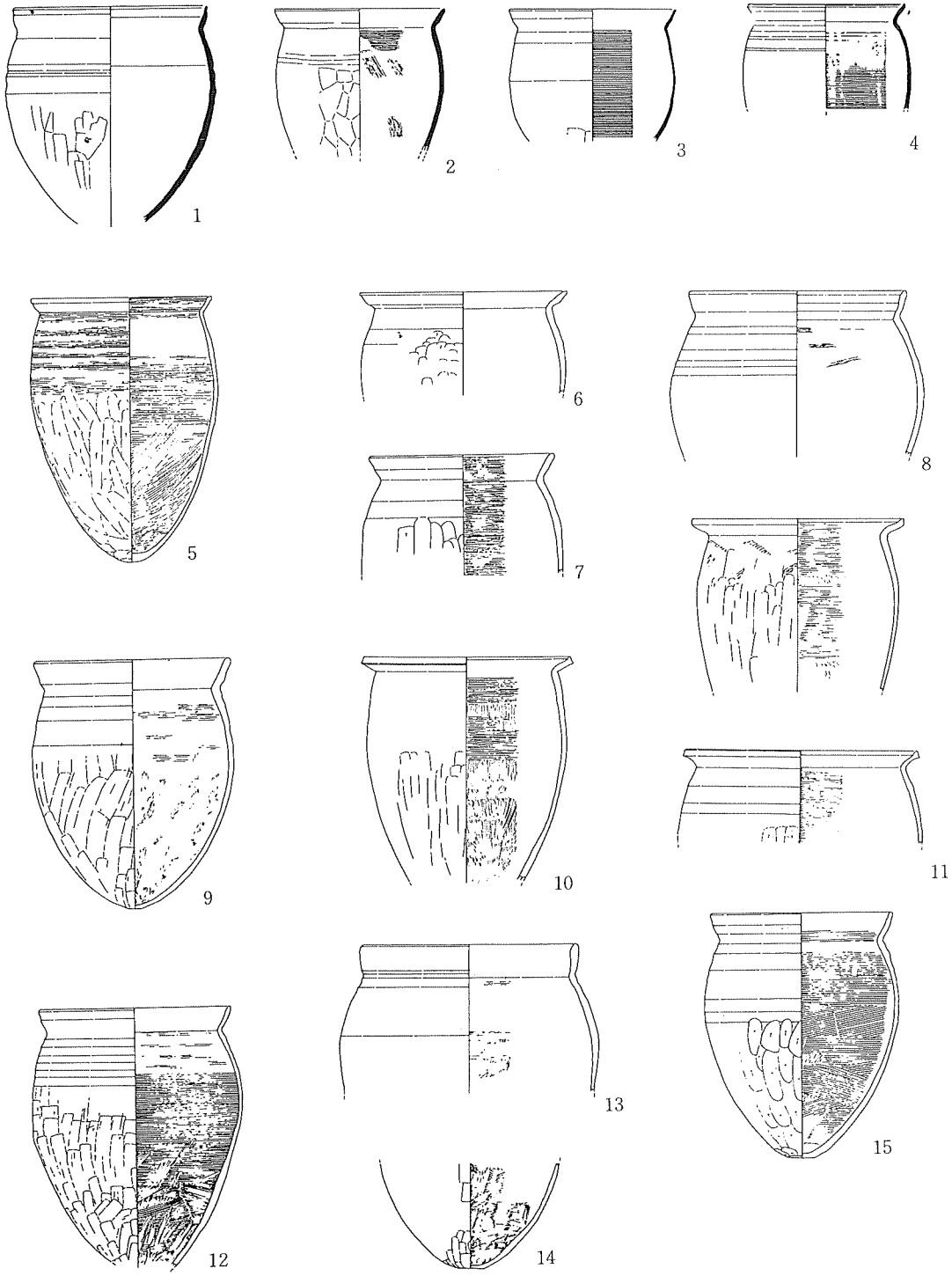
結論を先に述べれば、ロクロの使用・器形・調整などの近似性から考えて、所謂「北信型の甕」は「北陸型土師器長甕」の影響を受け成立した煮沸具である。そして、そのプロポーション等から推測すれば、その原型には畿内系の土師器甕の存在が見えて来る。このことは、長甕・小甕・鍋・甑で構成される「北陸型煮沸セット」が、畿内地方の煮沸具の影響なしには成立しえないことからも裏付けられよう。また、その流入経路については、今のところ長野県内でこのての土師器長甕の出土例が確認されているのは千曲川・信濃川流域に当たる北・東信に限られてることから、中・南信地方を介在して石川・富山・新潟県西部（頸城・西頸城）から流入したとは考えがたく、信濃川沿いに新潟県から流入したものと考えられる。

4　北陸型と北信型の比較

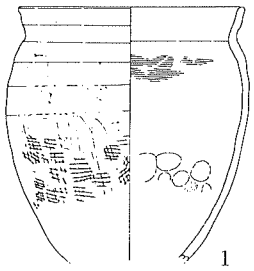
所謂「北信型の甕」が北陸・新潟地方に分布する、「北陸型土師器長甕」の影響の下に成立したことは不十分ながら前項で述べた。ここでは、「北陸型」と「北信型」の比較により、その相違点を模索してみたい。

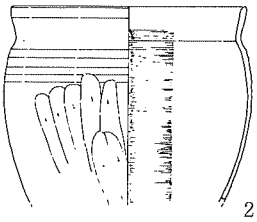
a）成形

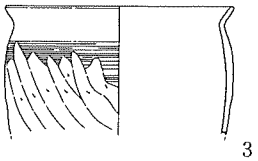
「北陸型」は基本的に須恵器の製作技術を導入しているため、巻き上げ・タタキ・ロクロの統合である。それに対して「北信型」の場合、タタキを使用するものはごく稀である。大半のものは、巻き上げ→ロクロ→調整により製作されている。ロクロの使用と言う点では一致するものの、タタキ技法の使用頻度と言う点では異なる訳である。それはつまり吉岡康暢氏が述べるような北陸における土師器生産[7]のありかたと同様な展開は、少なくとも煮沸具に関しては信濃ではおこり

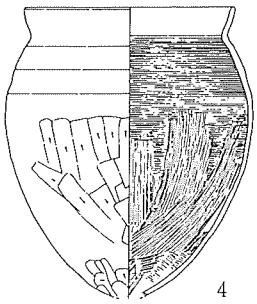


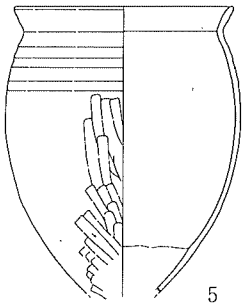
第１図

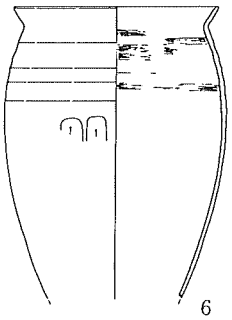

1

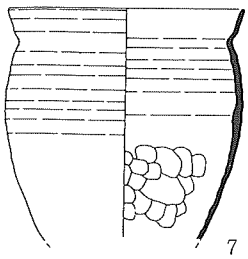

2

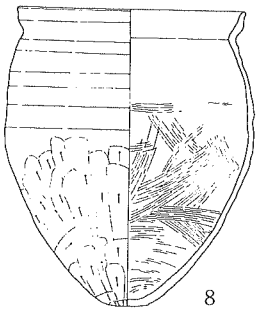

3

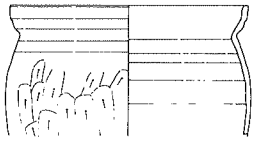

4

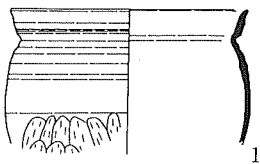

5

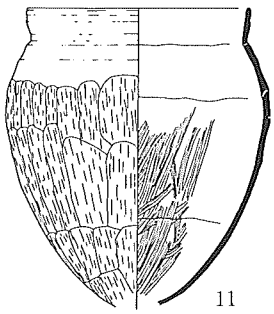

6

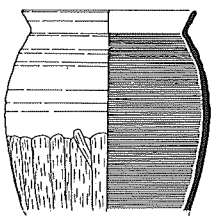

7

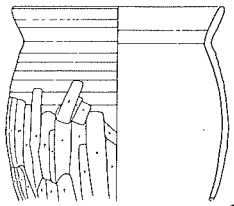

8

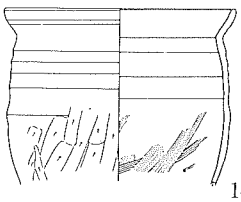

9

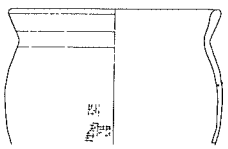

10

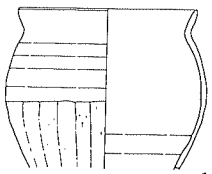

11


12

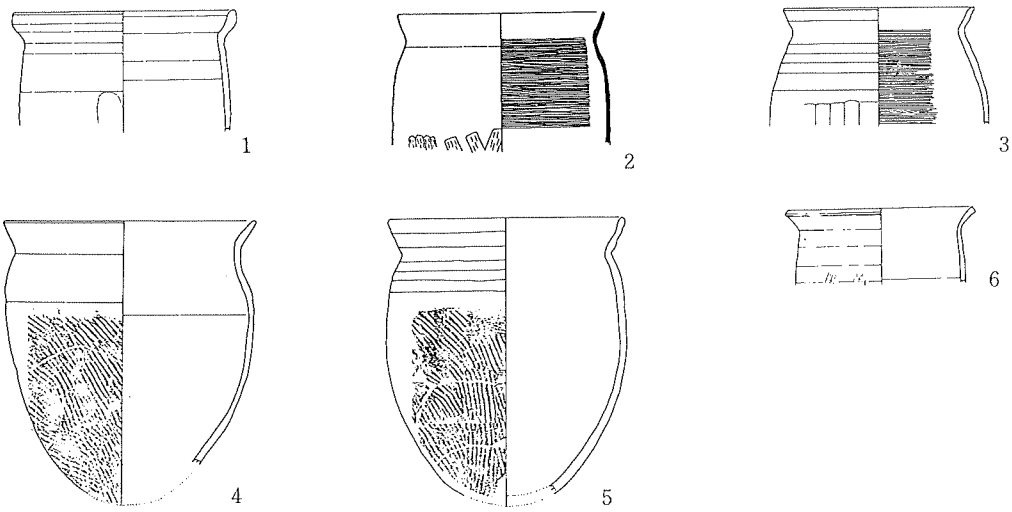

13


14


15


16

第2図



第３図

第１～３図使用土器出土遺跡一覧表

1-1	更埴市	馬口II	2-4	長野市	浅川・牟礼バイパスB・C・D
2	〃	社宮司	5	〃	〃
3	〃	馬口II	6	〃	〃
4	〃	五輪堂IV	7	〃	三輪
5	長野市	浅川・牟礼バイパスB・C・D	8	〃	三輪（２）
6	〃	〃	9	〃	〃
7	〃	〃	10	〃	四ツ屋・徳間・塩崎
8	〃	〃	11	〃	〃
9	〃	〃	12	〃	塩崎遺跡群第２次
10	〃	〃	13	〃	塩崎V
11	〃	〃	14	〃	〃
12	〃	〃	15	〃	南川向
13	〃	〃	16	〃	〃
14	〃	〃	3-1	〃	〃
15	〃	〃	2	〃	篠ノ井遺跡群
16	〃	〃	3	〃	富士宮
2-1	〃	〃	4	中野市	安源寺III
2	〃	〃	5	〃	〃
3	〃	〃	6	飯山市	旭町遺跡群北原遺跡

えなかった可能性が強いことを示唆するものとは言えないだろうか。

b）調整

巻き上げの後、ロクロを利用してのロクロナデ・カキ目を施すことは一致する。しかし、丸底を作り出すために「北陸型」はタタキによる叩出しを使用するが、「北信型」はヘラケズリ・ハケメにより行うため、ハケ目・ヘラケズリの使用頻度・範囲が「北信型」の方がより高く広いと言う相異点が認められる。

c）器形

笹沢氏が「越後型」と「北信型」を区別するひとつの指標とした口縁形状の差は、地域的な差も含むものの、むしろ時間差としての変化として捉えられるものである。それよりも、b）でもふれた丸底の造りだし方の相異からくる丸底の形状の違いこそが両者の器形の違いをより際出させている。つまり、「北陸型」が本来の丸底であるのに対して「北信型」の丸底は、僅かではあるがフラットな面を残しており完全な丸底にはならないものが大半である。

d）煮沸具構成

先に述べたように北陸地方では「北陸型煮沸セット」と呼ばれる、独自な煮沸具の組み合わせが認められる。それは長甕・小甕・鍋・甑により構成され、総てロクロを使用して作られている。ところが、北信地方では長甕・小甕は普遍的に認められるものの、鍋・甑は極めて稀に認められるだけで定着はしない。

以上4項目において明らかとなった「北陸型」と「北信型」の相異点の大半は製作時における叩き技法の有無により生じている。そして煮沸具構成の違いは食糧、ないしはその調理の違いを示唆しているのではないだろうか。

5　「北信型の甕」の定義（第1図～第3図）

本項では、前項までで不十分ながら明らかとして来た事柄をもとに所謂「北信型の甕」の定義を試みたい。

所謂「北信型の甕」の最大の特徴は言うまでもなくその製作に関してロクロが使用されることである。しかし、ロクロの使用と言う点のみでは「北信型」を定義することは不可能であろう。吉岡康暢氏の言うように製作時にロクロを使用する土師器長甕（ロクロ長甕）は、北陸、新潟、北東信濃にのみ分布する訳ではなく、山梨・群馬・茨城などの関東地方西北部、福島・宮城・岩手・秋田などの東北地方にも分布する。これらのロクロ長甕には吉岡氏によれば地域型[9]が存在するのであるが、現状では、各地域毎に資料差（量的に）がかなり見受けられるため他地域についてはその詳細に触れることは差し控えたいが、大まかに平底と丸底の地域・叩き技法の使用、未使用の地域による区分けは可能であろう。

さて、吉岡氏により北・中信のロクロ長甕の地域型として図示された土器が第4図に掲載してある。受口状の口縁、丸底・砲弾型のプロポーション、外面胴部上半にロクロ痕・下半にはタタキ痕が認められ、非常に薄い器壁を呈している。しかし、北信地方で普遍的に見受けられるロクロ長甕でタタキを用いるものは現時点ではあまり多くの例はない。（筆者の知る限りでは、中野市安源寺・長野市浅川牟礼バイパスD・南川向の3例のみである。）また、これほど器壁の薄い資料もあまり見受けない。

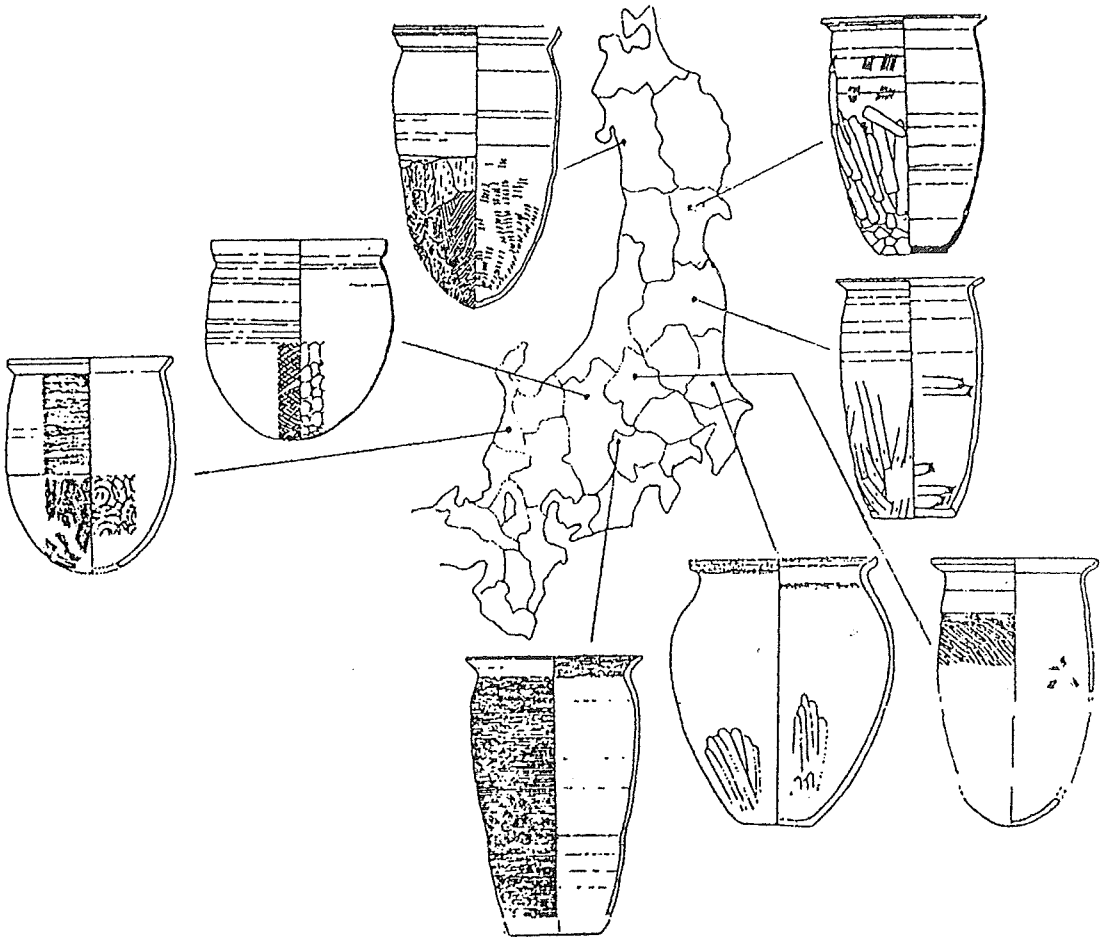
では、北信地方に普遍的に見受けられるロクロ長甕とはどのようなものなのかを再整理してみよう。

当然のことながらその最大の特徴はロクロの使用にある。そして丸底・砲弾型のプロポーションを呈し、当初は端部をつまみあげた須恵器的な口縁形態を呈するものの、後には受け口状を呈するようになる。また、外面胴部下半にはヘラケズリ、内面にはハケメ・カキメ調整が施される。そして、その出現時期は笹沢氏によれば平安時代Ⅰ期、青木・中殿氏によれば奈良時代後半にさかのぼる可能性があるものの9世紀前半[10]、佐藤氏によれば8世紀後半[11]に位置付けられている。

以上が北信地方に普遍的に見受けられるロクロ長甕の特徴と言えようが、端部をつまみあげる須恵器的な口縁形態を呈し、叩き技法を使用しない類のものは新潟県にも多く分布しており、その分布の中心はやはり新潟県と考えた方がよいであろう。そのように考えるならば、北信地方に特有なロクロ長甕は、受け口状の口縁形態を呈する段階のものに限定され、その出現時期はやや幅をもたせて8世紀末～9世紀前半と考えたい。

6　位置付け

北信地方における、ロクロ長甕出現以前の土師器長甕は平底で口縁部に最大径を有するハケナデの施されるものであり、外来系の所謂「武蔵型の甕」が若干認められる様相を呈する。しかし、ロクロ長甕の出現と共に他のロクロ土師器（坏・小型甕）も一般化し、主体となる。つまり、土師器の生産体制が大きく変化するわけであり、その背景には吉岡氏の論じるような工人組織の再編成・相互交渉[12]などをはじめとして難解な問題が山積しており、それを論じられるほどの力量は筆者にはない。ただ、北陸地方に端を発した煮沸具のロクロ土師器化が、東日本各地に拡散して多くの場合、在地の甕をベースにしたロクロ長甕を成立させる。しかし、北信地方の場合地理的な理由もあるのであろうが、全く異なる形態の煮沸具を比較的すんなりと受け入れるところに大きな意義が見いだせる。そしてもう



第4図　ロクロ長甕の地域型　「古代土器生産の地域的展開」　(1988、吉岡康暢) より

1点、叩き技法が普遍化しないことが北陸地方と大きくことなる。つまり、それは北陸と異なる土師器生産体制を示唆しているように思えることを再度記しておきたい。

以上のように問題は山積みしているものの、所謂「北信型の甕」という呼称が、ロクロ長甕のひとつの地域型として5で述べたような定義のものを指して使用されるのであれば問題はないものと現時点で捉えておきたい。

7　東信濃のロクロ甕

東信地方の奈良・平安時代における、在地の土師器長甕は冒頭で述べたように所謂「武蔵型の甕」である。「北信型の甕」がそれ以前の北信地方の在地土師器甕を払拭するのとは対照的に、東信では所謂「武蔵型の甕」そのもの、ないしはその残影が完全には払拭されないまま次ぎのナデ系の甕[13]へと変化するようである。そこには、「北信型の甕」出現以前の北信地方の在地の甕が、基本的には古墳時代のそれと大きな変化が認められないものであるのに対して、東信地方の所謂「武蔵型の甕」は7世紀後半から順次変化を遂げるものの、古墳時代のそれとは明確に区分される極めて完成された煮沸具であると言う違いがある。

所謂「武蔵型の甕」の異常とも思える器壁の薄さは、その必要があるからこそ生まれるものであり、古墳時代の煮沸具では可能ではない性能を求めた結果の産物であろう。そこには、食生活の変化と言う極めて重大な問題が存在するのであろうが、現時点では具体的に述べる根拠のかけらさえ持ち合わせていない。

煮沸具の大きな変化の裏には、極めて政治的な背景（言うならば上からの変化）と極めて生活臭い、食糧・調理の変化（言うならば下からの変化）があるのでは

ないのだろうか。そう考えるならば「北信型」の成立は多分に政治的な背景をもつものと解釈され、それ以前の北信地方は基本的には古墳時代と大差ない煮沸具を使用していることから考えて、極めて安定した社会であったと考えられる。善光寺平という豊饒な水田地帯がもたらす安定と言えよう。対して、東信地方では7世紀後半頃から次第に土師器長甕の器壁の薄壁化が進行して、ついには厚さ5～2mmの薄壁を誇る所謂「武蔵型の甕」が完成する。その背景に食糧・調理方法の変化を考えなくしては理解し難い煮沸具を生み出しているのである。それはつまり不安定な社会の投影と考えられないだろうか。

第5図～第6図に東信地方出土のロクロ甕を掲載してある。「北信型の甕」そのものも完全なる丸底は呈さないものが多いが、それらよりもさらに広いフラットな面を持つ底部。胴部下半の斜めのヘラケズり。「く」の字に外反する口縁部等そこには所謂「武蔵型の甕」が色濃く投影されている。更に、遺構・遺跡単位でのロクロ長甕の存否、量の寡多、出現時期の相異が認められるのである。それは換言すれば、ロクロ長甕の生産体制・組織が北陸地方のように再編等の変化をせずに、旧来の生産体制・組織の中における新たな産品の増加という形で消化された結果とも考えられる。そしてその背景には、所謂「武蔵型の甕」が生活の必要から生じた完成された煮沸具であり、それを変化させるには食生活という最も生活に密着した部分を変化させねばならず、それがスムーズにはなし得なかった結果と言えよう。

8　おわりに

本稿は所謂「北信型の甕」と呼ばれる土師器長甕のおおまかなアウトラインを浮き彫りにすることを目的として書き始めた。とりあえずは所謂「北信型の甕」の所謂を取り外し、「北信型の甕」と呼称してもさしつかえないのではないかと考えるに至った。しかし、それはあくまでも東日本各地に分布するロクロ長甕の地域型のひとつとしてである。また、東信地方に分布するロクロ長甕については、「北信型」の影響の下に出現することはたしかであり、大局的には同一視されようが、しかしそこに無視しえない差異が存在することも確かである。その差異の背景と「北陸型」と「北信型」の差異を生じさせる背景を明らかにする事こそが最も重要な問題であり、今後の課題と言えよう。

註

(1) 1987・11・8　長野県考古学会秋季大会　シンポジューム「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」
(2) 1988　笹沢浩　長野県史考古資料編　遺構・遺物　古代の土器
(3) 1987　青木和明・中殿章子　三輪遺跡（2）　IV－調査のまとめ
(4) 1988　高村博文　薊沢・蔦石　佐久地方の平安時代土器編年試論
(5) 1988　小山岳夫　宮の上
(6) 実年代は明記されていない。
(7) 氏の一連の仕事
(8) 土師器小甕のすべて煮沸具ではないため、他の長甕・鍋・甑で呼称される場合もある。
(9) 1988・9・25　吉岡康暢　古代土器生産の地域的展開
(10) 註(3)文献による。
(11) 1987　佐藤信之　北信地方における様相　長野県考古学会誌55・56
(12) 註(7)と同様
(13) 1989　小林真寿　宮の上II　第IV章　第2節参照

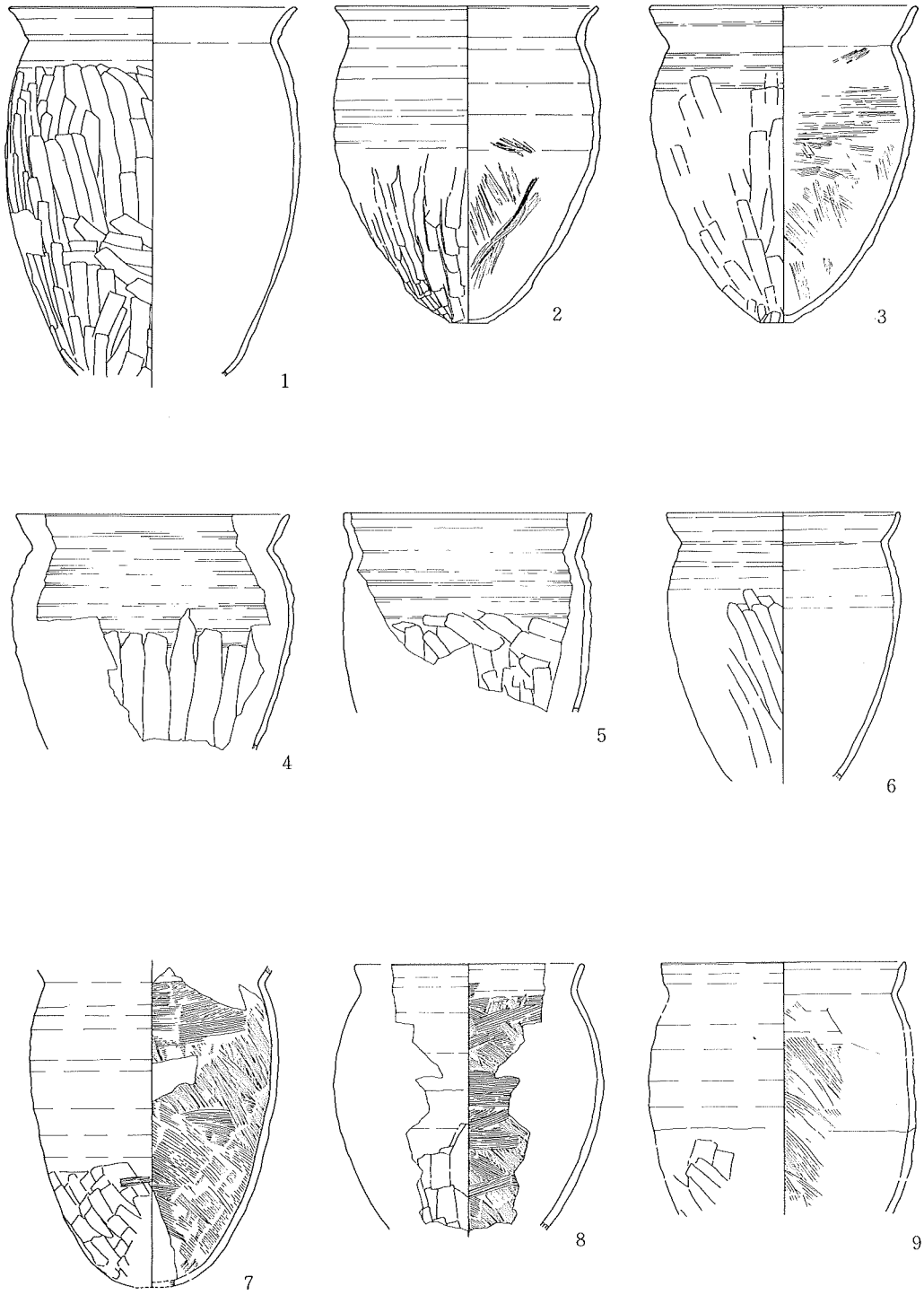
追記

現時点において筆者の知る限りにおいて、東信地方において土師器長甕に須恵器の製作技術（具体的にはロクロ・叩き）が認められる初例は8世紀前半に遡る。それは、佐久市前田遺跡・上田市和手遺跡に認められるのであるが、双方ともに平底を呈する資料であり「北信型」とは系譜を異にするものと考えられる。あくまでも想像であるが、土師器長甕のロクロ土師器化の波は東信地方では二波にわたるのではないかと思われる。第一波は浸透せずに消滅し、第二波が「北信型」としてかぶさり定着するのではないだろうか。

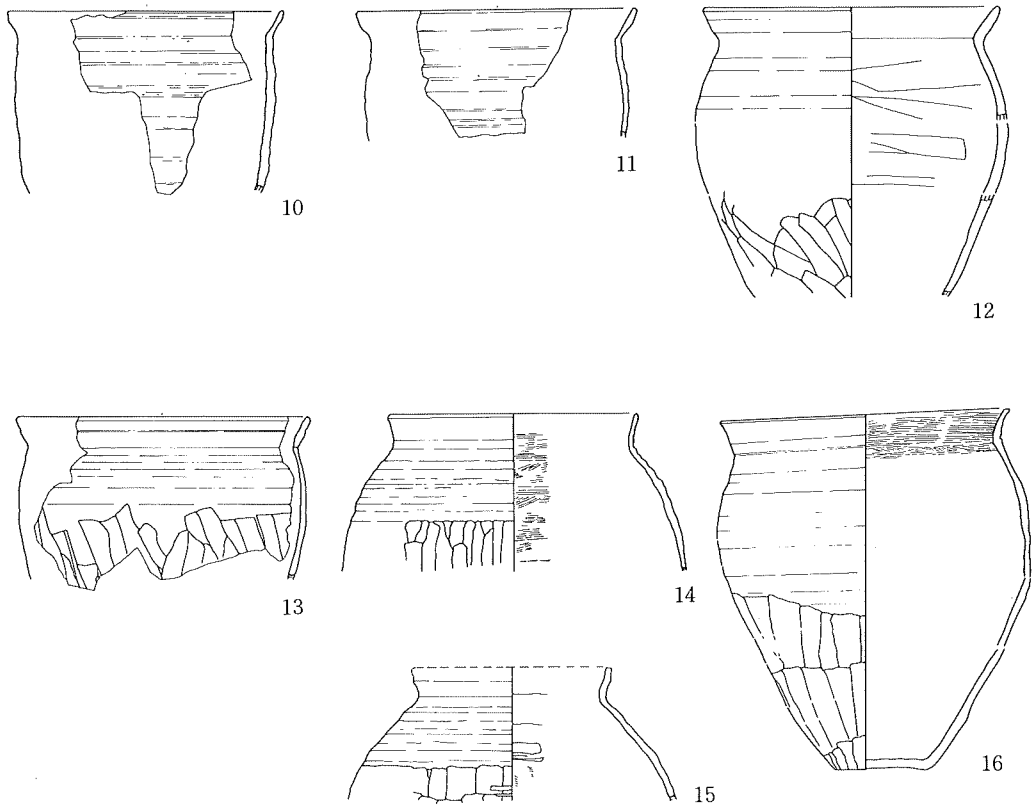
（本学会会員　佐久埋蔵文化財調査センター）

佐久考古通信原稿募集！

- 佐久考古通信では、会員の皆様からの原稿を募集しております。
- 原稿執筆の際は、あらかじめ編集委員にご相談下さい。限られた紙面のため、原稿の分量をご相談させていただきます。
- 編集の関係上、通信専用の原稿用紙でご執筆ください。専用原稿用紙は、編集委員が差し上げます。



第5図　1―佐久市宿上屋敷　2～5―佐久市十二山　6―佐久市蛇塚B　7～9―佐久市宮の上



第６図　10・11―佐久市三塚鶴田　12―小諸市曽根城　13―小諸市五ケ城
14・15―東部町塚穴２次　16―東部町上屋久保

バッパ（馬場平）の思い出

由井　明

陽差しの強い秋のことだった。小学校の帰り道、同級生の一人から、バッパに変った格好をした石がある、細長い石で木を柮人が削った様な形をした石で、先が尖っている石があるから見に行かないか、と言われて６、７人で西原の桑畑を通り抜けて、坂を登ってバッパ地籍についた。

そして、そこらを一寸探しただけですぐに柮石が見付かった。短いので約７cm、長いので20cm位いの槍の先に似た石器を拾い、皆んなで比べあったりしたことが楽しい思い出になって今もよみがえってくる。

此の頃は、１時間も探すと、20点位は拾え、入れるものがないので、肩に掛けたカバンの中に入れて帰り、翌日学校へ持ち寄り、理科室の空いた石油箱に入れておいた。

その後、誰れ言うとなく、１週間に２～３回はバッパに登って行き、柮石を拾って学校へ持って行った。

小学校を卒業して、高等科に入ってからもバッパへは登って行き、石器類を拾っては学校へ持って行き、高等科を卒業する頃には石油箱に半分以上詰ったものが７箱位有った様に記憶している。

この遺物の数量は、凡らく何万点もあったと思うが、現在小学校には残念ながら１欠けらも残っておらず、此れらの行方は杳として分っていない。

なお、青年時代１年の内、数回位は登って行き、その都度10数点位は拾って帰った。

戦後になって馬場平へ行って見ると、一番多く表面採集出来た畑が、複土をしてしまい地形が変り残念ながら今在は拾うことが出来ない。

由井茂也さんとも、年に数回採集に行ったとき、隣接の菅の平や詰堀、菅敷等を回って採集しては帰った。又由井裕太郎君達とも採集して歩いたことは、今後懐かしい思い出となっていつ迄も心の奥に残る事と思う。

（本学会会員　川上村在住）

1989年度事務局幹事名簿

幹事長	井出正義
総　務	◎木内　捷　小山岳夫
企　画（研修旅行）	◎佐々木宗昭　竹原　学
（懇親会）	◎羽毛田伸博
（例会・公開講座）	◎堤　隆　小林真寿
（遺跡報告会）	堤　隆　須藤隆司　小林真寿　翠川泰弘　竹原　学
書　記	◎三石宗一　翠川泰弘　島田恵子
会　計	篠原浩江
通　信	◎福島邦男　堤　隆　須藤隆司　助川朋広　花岡　弘
会　誌	◎林　幸彦　高村博文　翠川泰弘　竹原学
保護活動	◎高村博文　羽毛田卓也

第一回佐久古代史公開セミナー開催のお知らせ

一般市民を対象に、佐久地方のわかりやすい古代史を説くセミナーが下記により開催されます。学会員もふるってご参加下さい。

記

1　日　時　本年８月５日（土）
　　午後　２時～
2　場　所　佐久創造館２Ｆ
3　内　容　「佐久地方最古のハンター」
　　―旧石器時代の１万数千年前のくらし―
4　講　師　堤　　隆

事務局より

● この度、次の４人の方たちが私達の新しい仲間として加わりました。６月10日現在で会員数は過去最高の87名となりました。会員100名まであと一息です。

依田酒造雄	〒384-21	浅科村大字幸山473	☎0267（58）2643
工藤　文夫	〒384-21	浅科村大字蓬田3151	☎0267（58）3881
畠山　次郎	〒385	佐久市岩村田1903-1いずみハイツ201号	☎0267（68）2845
大井　源寿	〒389-02	御代田町大字豊昇梨沢344	☎0267（32）4793

● 次号の通信でいよいよ50号となります。最近では地道な積み重ねの成果によって「佐久考古通信」は考古学ジャーナル、日本考古学年報などの著名な冊子にも紹介されるほど大きく発展して来ました。伝統を築かれた先輩諸氏の努力の賜物と言えましょう。このような意味から６月10日の総会時にも申し上げましたとおり50号は拡大記念号を企画したいと思います。近く、役員会において内容等の検討を行う予定ですが、刊行に当たっては学会を築かれた先輩諸氏の方々にも特別編集委員として加わって頂きたいと考えています。自薦・他薦は問いませんのでお気付きの方がありましたら事務局　小山（0267－67－1202）か堤（68－3696）までご一報下さい。

● 会費未納の会員は、大至急同封の振り込み用紙にて会費を納入して下さい。

▶編集後記◀

昨今の吉野ケ里報道にもみるように、考古学に関するマスコミ報道は異常なまでです。最大・最古・初、このような見出しがまず市民の目に耳に飛込んできます。しかし例えば、邪馬台国＝吉野ケ里であるかのような性急な報道が、純粋な市民に正直に信じてしまわれかねないという危惧を抱くのは私だけでしょうか。

しかし慎重な研究者の言葉も、マスコミに曲解され、事実不明なうちに伝えられてしまうとすれば、我々は唯々、口を閉ざす以外にはないのでしょうか。

確かに、マスコミは、一般市民の古代史への関心や価値観を育ませてくれてはいます。しかしここでもう一度、マスコミ報道と考古学について考えてみるべきではないのでしょうか。　　（堤　　隆）

佐久考古通信　Ｎｏ49

発行所　佐　久　考　古　学　会
〒384-11　南佐久郡小海町東馬流5047
井　出　正　義　方
☎0267（92）3171
郵便振替　長野 7-2842

発行者　由　井　茂　也

編集者　井出・福島・須藤・小林・堤・小山

印刷所　ほおずき書籍㈱

SAKU 佐久考古通信
佐久考古学会
ARCHAEOLOGICAL
1990.2.1 No50 記念号
JOURNAL

目　次

佐久考古通信50号の発刊にあたり……由井茂也……1
佐久考古学会のあゆみ……2
佐久考古学会設立前夜……井出正義……2
佐久考古学会の設立と初期の活動……臼田武正……5
成長期の佐久考古学会……高村博文……6
佐久考古学会の担う役割……林　幸彦……7
手づくりの佐久考古通信……島田恵子……10
200字短信　—50号記念拡大編—　……会　員……11
佐久考古学会研修旅行記……小山岳夫……17
三沢遺跡の黒曜石の分析について……三沢遺跡発掘調査団……18
三沢遺跡の黒曜石の分析……立教大学　鈴木正男……18
土器型式と縄文土器の移動……水沢教子……20
臼田町井上遺跡の「神子柴型石斧」……堤　隆……22
学史の1ページより……24
事務局より……24

佐久考古学通信50号の発刊にあたり

佐久考古学会会長　由井茂也

佐久は考古学に非常に恵まれた環境にある。

古くは江戸時代、瀬下敬忠や吉沢好謙のような有能な歴史家がで、また井出道貞は古器物研究の記録を残した。

明治時代には、早くも佐久市和田上に坪井正五郎により「石器使用人民棲息之趾」の碑が建てられた。大正時代には大澤村（現佐久市大沢）の石槍が大野雲外により広く紹介されるなどし、また、無名の研究者たちではあるが、北陸人類学会や信濃教育界などでの佐久の人々の活動がすでにみられている。

昭和初年には八幡一郎の指導で南北佐久郡の考古学的調査が行われた。また、志賀村（現佐久市志賀）の神津猛により信濃考古学会が設立されたのもこの頃である。時は過ぎ太平洋戦争は終結へと向かい、戦後の不安と混乱のなかにあっても、日本歴史は確実に皇国史観より脱却しつつあった。そのなかで、「原始世界の拡張」とも称された日本最古の文化＝先土器文化の存在が証明された。その先土器文化調査も、県下、いや全国的に見ても、この佐久地方が先駆けとなったことは周知の事実である。いうまでもなく矢出川遺跡、馬場平遺跡、中ッ原遺跡の調査がそれである。

昭和45年、こうした環境と伝統のなかで佐久考古学会が産声をあげ、はや創立20年を迎えようとしている。

昭和33年　雨の三国峠にて
（故）直良信夫博士（手前）と筆者由井茂也

先年の創立15周年記念事業のひつとして『佐久考古通信』の30号までの合冊製本がなされた。以来『佐久考古通信』は号を追い、ここに50号の発行を迎えることになった。今回はそれをひとつの節目とするため、記念号とすることになった。

今では県内各地域のなかでも最も多彩な会員を有し有力な組織となった佐久考古学会では、会員の理解と協力のもとで発展を期するための幾つかの有意義な企画がたてられた。これにより、より一層の地域研究が推し進められたことに対し、担当者の努力や会員の皆さんのおしみない協力に感謝したい。

さて、今更述べるまでもあるまいが、佐久地方においても例外なく、全国的現象と同一に開発の波が押し寄せている。圃場整備のおこなわれない地域はなくなり、住宅団地や企業団地造成は頻発しているし、上信越道の延長・信越線の高速化計画・道路網の整備・各町村ごとの「地域の活性化」などと大義名分がうたれたスキー場・ゴルフ場などの大リゾート計画など、枚挙に暇がないほどである。まさに故郷喪失につながりかねない勢いといえよう。

しかし皮肉にも、これらの事業に付随する考古学的調査はそれまでベールに包まれていた歴史を明らかにしてきた。そして佐久地方の原始・古代から中世・近世の様相がおぼろげながらうかんできた。とはいえ、その一面には膨大な文化財の破壊行為があることには違いなく、このことを断じて忘れてはなるまい。

われわれは、今後より一層の研究の深化をはかり、一方で祖先の残してくれた貴重な文化遺産を後世に伝え、歴史の真実を大膳に追求してゆかねばならない。そのことこそが、佐久考古学会と、会員ひとりひとりに課せられた使命であろう。

佐久考古学会のあゆみ

井出正義　臼田武正
高村博文　林　幸彦　島田恵子

ここでは佐久考古学会のあゆみを『佐久考古通信』No.50号記念号に際し、振り返えってみたいが、その歩みは、決して平坦な道ばかりではなく、幾多の障害をのりこえて、多くの先人が苦労して築いてきた結果、現在の佐久考古学会があることに思いをはせ、今後の発展を含めて「佐久考古学会の歩み」をまとめたものである。

佐久考古学会の歩みの原稿は、五人の会員が、それぞれ分担して執筆した。まず、佐久地方の文化的風土も含めて「佐久考古学会成立前夜」を井出正義幹事長が、学会設立から昭和48年頃までの「佐久考古学会の設立と初期の活動」を臼田武正会員が、昭和49年から昭和60年の木内捷会員が事務局長を担当していた時期の「成長期の佐久考古学会」を高村博文会員が、そして昭和61年から現在までと今後の展望を含めて「佐久考古学会の担う役割」を林幸彦会員が、また、「佐久考古通信」創刊号より30号までの編集時のエピソードを島田恵子会員がそれぞれ担当して執筆している。

佐久考古学会設立前夜

吉沢好謙、瀬下敬忠、井出道貞は江戸時代佐久の三大郷土史家といわれ、その著書「四隣譚叢」「千曲之真砂」「信濃奇勝録」等は佐久郷土史界の指標とされているが、そのうち考古学に最も深いかかわりをもっているのは井出道貞の信濃奇勝録である。道貞は臼田下諏訪社の神官で社寺、旧記の調査に興味をもって文政年間（1818～29）から10数年にわたって信濃各地の寄勝、旧跡を中心に調査の旅をつづけて「信濃奇区一覧」と「信濃国全絵図」を作成し、孫の通がこれを校訂して「信濃奇勝録」として出版した。その内容は動植物、岩石、鉱物等の自然物にまで及んでいるが、石造物、金属器、陶器、土器、石器等の出土遺物が豊富な写生図を付して記録されていて考古、民俗、生物学等の面に於いて今なお貴重な資料である。その考古遺物の紹介は信州に於ける江戸時代の文献としては最も多数を占めていて、その中には現在は失われているものや、他の文献等に記載のないものもあって貴重な資料となっている。たとえば川柳将軍塚出土の鏡の数や銘文、銅鏃、ガラス小玉、車輪石破片、筒形銅器、金銀環等についての記載は、まだ今後の研究課題として残されている。また下諏訪社に伝来する「売神祝印」（重要文化財）を奇勝録に図示した道貞は、明和３年（1766）に清川村（臼田町）上原家屋敷出土の「物部猪丸」の銅印をみてその重要性に気づいて詞書を記している。そのためこの平安初期の銅印はその価値の高さが認識され、「昔から、いつでも米１駄に代えられると言い伝う」（旧「南佐久郡誌」）と伝承され、今日まで大切に

保存され、信濃古代史の重要資料として注目されている。(上原政彦氏所蔵)

明治になって日本の考古学は新しい展開をみる。その指導的役割を担ったのは坪井正五郎を中心とする人類学会であった。東京人類学会は神田一ツ橋理科大学(東大理学部)生物学科の学生坪井正五郎ら10名の学生の発起によって明治17年(1854)10月に誕生した。まさに秩父事件蜂起の前夜であった。この年同大学生の有坂鉊蔵が本郷区向ケ岡(現弥生町)の貝塚で壺形土器を発見したのが弥生式土器と命名された。有坂は人類学会の有力メンバーの一人であった。25年にイギリス留学から帰朝した坪井は理科大学人類学教室の教授となり、東京人類学会と「東京人類学会雑誌」を主宰して、研究、啓蒙活動を行い、各地に人類学会を誕生させた。坪井が最も力を注いだのは、人類学の中でも由来論にあたる考古学の分野であった。明治29年坪井は先史時代古物遺跡調査のため南佐久、更級、埴科三郡を歴訪し、その結果を10月4日、東京人類学会第19回例会で「信濃の石器時代遺跡」と題して発表した。この調査で坪井が南佐久郡中瀬村大字瀬戸和田上遺跡(現佐久市)を調査したのは8月20日であった。同村の神官青木造は、多年古物遺跡の出土に心を用いていたので案内役となって、石鏃、石匙、打製石斧、凹石、土器等を採取したので調査の目的を達することができた。29年11月、帝国大学理科大学教授坪井正五郎の撰文によって「石器使用人民棲息之跡」の碑が和田上の古墳上に建てられた。書は野沢町大伴神社の神職堀篭好雄で当時の郷土史家研究家である。当時東京人類学会の会員に阿部恵吉(佐久の人)がいた。阿部と共に坪井の人類学会に属していた山崎重四郎は24年に北佐久郡小諸町唐沢古墳出土品と上伊那郡手良村出土の子持勾玉を人類学教室に寄贈し、23年に、信濃の石包丁」、31年に「信濃国八幡村の異形石棒」を東京人類学雑誌に発表した。26年に小平小平治は南北佐久郡の遺跡遺物を巡見して、三河田大塚、春日村付近の古墳、加増の古墳及びその出土品について東京人類学雑誌に略報した。小林貞次郎にも「信濃北佐久郡春日村の石器時代発見品」を同誌に発表した。38年東京帝国大学の大野延太郎は三井村香坂字口明の遺跡を踏査し、当時遺物蒐集につとめていた神津猛を訪い、その所蔵品を研究している。その頃郡内各地には遺物蒐集に熱心な人たちが多かった。(「北佐久郡の考古学的調査」序説)

神津猛は多才な人で考古学に造詣が深かった。猛は志賀村(佐久市)の豪農「赤壁」の11代の当主である。32年慶応義塾普通課を卒業して帰郷、38年島崎藤村の「破戒」の自費出版費を提供し、引続きその生活費を援助している。村長、郡会議員、志賀銀行、中信銀行の頭取、佐久鉄道の重役を勤める等、地方政財界の有力者であったが、昭和4年八幡一郎(前年「南佐久郡の考古学的調査」を著す)の指導をうけて信濃考古学会を設立し、私財を投じて「信濃考古学会誌」を発行し、その第1号に自ら「北佐久郡八重原の製陶所址」を発表した。同会には大場磐雄、山内清男、宝月圭吾、小林行雄、森本六爾、藤森栄一、伊藤富雄、金井喜久一郎、藤沢直江、宮坂英弌等が名を列ね八幡一郎は毎号執筆している。同会の加入者は学校の教師が多い、佐久関係の氏名は次のようである。

岩崎長思(須坂中)神津真助(中佐都小)牧野武生(小諸)堀篭秀春(小諸小)青木元良(小諸女)小林好郎(協和小)岩井伝重(山浦小)大沢達雄(茂田井)神津鑒(大里小)小林尚二(北牧小)鈴木覚治郎(平賀小)黒沢寿一(穂積)山崎織治郎(野沢中)佐々木修三(中込小)浅沼利忠(中込小)佐々木鉄之助(田口)大沢洋三(東京)瀬下千秋(軽井沢小)加藤光男(岩村田小)須田直一郎(芦田小)小栗擦治(小諸小)中条正詩(小諸小)小山重右衛門(小諸)竹内恒(臼田小)土屋利信(南大井)原田諭(小沼小)

昭和7年1月信濃郷土研究会が雑誌「信濃」を発刊するに当たり信濃考古学会との合併談がおこり、信濃考古学会誌は7年度第1輯をもって打ちきり、8月発行の信濃に、両会の連名で郷土研究会と考古学会の「合併の御知らせ」を掲載して、信濃考古学会はその使命を「信濃」に託して現在に至ったのである。神津猛は合併広告の出された信濃1巻8号に「左願寺(須坂市小河原)の古瓦」を掲載し、2巻5号に「八重原第八号製陶址発掘報告」、3巻7号に「八重原第八号窯址の発掘遺物」を発表した。

八幡一郎は諏訪郡平野村(岡谷市)の出身で東京帝国大学理学部人類学選科に在学中から鳥居龍蔵の諏訪市　下伊那史　上伊那史の考古学的調査を手伝い、修了して東京帝国大学理学部副手となって千葉県加曽利貝塚などを発掘し、大正14年(1925)から南佐久郡の考古学的調査に着手した。これは信濃教育会南佐久部会が郷土史研究の第一歩として、新進考古学者八幡一郎の指導のもとに会の総力をあげてとり組んだもので、前記信濃考古学会員に名をつらねている南佐久関係の人たちが中心になって活動した。昭和3年「南佐久郡の考古学的調査」が発刊され、同9年には「北佐久郡の考古学的調査」も発刊された。この二書は実に考古学的地域史の典型として不朽の名をとどめる名著となった。昭和9年信濃12月号に北大井小学校教諭島田和夫は「北大井村の考古学的瞥見」を書いている。しかしこの頃から大陸の戦争がはげしくなると共に、総力戦態勢に組みこまれ、皇国史観のもとに考古学研究は逼塞させられてしまった。

戦後歴史学に科学性、実証性が求められるようになり、神話から考古学へ、歴史の原点は転換した。南佐久教育会ではかつての信濃考古学会員竹内恒、小栗擦治が中心となり、小県郡の五十嵐幹雄の協力を得て盛んに調査活動をはじめた。五十嵐は24年に県教育委員会派遣の考古学研究の内地留学生として東京大学考古学教室に学んで直接八幡一郎の指導を受けていた。27年南佐久教育会は南佐久郡誌編纂事業を開始し、各町村内の遺物、遺跡の調査を実施することになった。畑八村では青年団が村内調査に協力し、団員佐々木広雄は中松井の笹崎氏の開墾予定地で縄文前期の繊維土器の遺跡を発見して、郡誌編纂会と共に地主、村当局、公民館、小中学校長等の賛成を得て、八幡一郎に発掘担当者を依頼して発掘調査を行い、縄文早期末から前期初頭の茅山式土器、花積下層式土器にあたる遺跡であることを確認した。佐久に於ける戦後初の発掘調査であった。29年には穂積村（現八千穂村）の崎田原遺跡の発掘調査を行った。崎田原遺跡は八幡一郎が「南佐久郡の考古学的調査の中で「崎田相」として特記した遺跡である。調査報告はいずれも五十嵐が信濃に掲載している。川上村大深山遺跡の調査は28年秋川上村から八幡一郎に依嘱され、東大考古学研究室の佐藤達夫が同大学院生貞末堯司を伴って現場視察をしたが、八幡の都合で発掘調査は35年３月に第一回が行われた。それに先だち28年11月由井茂也、竹内恒は地元有志と相談して、東京から佐藤達夫、貞末堯司を迎えて最初の大深山遺跡の発掘をした。

戦後もっとも活発な活動の展開をみるのは旧石器の調査研究である。昭和24年当時無名の一青年相沢忠洋による岩宿遺跡の発見が日本の考古学界に衝撃を与えた。相沢の知らせをうけて岩宿遺跡のローム層の中から発掘調査によって石器の出土を確認した芹沢長介は、28年８月、八幡一郎の「南佐久郡の考古学的調査」を読んで、川上村御所平字馬場から両面加工尖頭器の一括出土していることを知って、無土器時代石器の疑いをもって川上村に急行した。芹沢は村人の話しによって石器をたくさん集めているという由井茂也を訪ねて、尖頭器、ナイフ、スクレーパー等をみることができた。由井からこの石器を採集した馬場平からは縄文土器の破片はまだみつかっていないときいて、無土器時代石器の確信を深め、同年11月発掘調査を行い、ローム層中に当時の生活面を示す遺構と尖頭器を主体とするたくさんの石器を検出して、尖頭器が縄文時代に先行する石器であることを実証した。由井茂也は少年時代から注意深く土器、石器の採集をつづけ、戦争中でも中断することはなく、川上村から野辺山原に及んで出土状況を知悉していた。馬場平の発掘調査には学生の戸沢充則、岩崎卓也、地元の由井茂也、由井明、由井祐太郎、由井光文等が参加し、竹内恒と輿水利雄が見学している。

昭和29年秋 矢出川遺跡の調査参加者のスナップ

28年12月末、芹沢長介は岡本勇と川上村の由井茂也宅に泊まって、由井の採集した資料の中からエンドスクレイパーを見つけ、年末厳寒をおして由井の案内で野辺山原矢出川地籍に至り、吹雪の中でついに細石核と細石刃を発見した。翌29年９月矢出川遺跡の第１回発掘調査を行い、日本で初めて細石器文化の存在を実証した。この発掘の参加者は芹沢長介、由井茂也と吉崎昌一、麻生優、高橋護、松沢亜生、岩崎卓也、相沢忠洋、戸谷洋の９名他であった。

穂積村樋口（現八千穂村）に生まれた輿水利雄は八幡一郎が「南佐久郡の考古学的調査」で、崎田相と記した土器群で知られる崎田原遺跡をホームグラウンドとして、少年時代に考古学に興味をもち、戦時中満洲に渡って軍属として勤務中に青銅器研究に熱中した。戦後引揚後は職業のかたわら遺跡調査に情熱を燃やしていたが、28年の馬場平の発掘調査を数回にわたって見学して尖頭器が無土器時代の石器であることを知ると、自宅に近い畑八村（現八千穂村）池の平牧場に芹沢、麻生、戸沢、由井らを案内して番小屋裏の斜面で片面ポイントと有柄石鏃を同時に採集した。これが池の平の先土器時代遺跡発見の最初となった。輿水は31年には池の平牧場塩くれ場付近で黒曜石片を発見して後年佐久考古学会による池の平遺跡発掘調査の端緒をつくった。40年には輿水は職業の途次に北相木村東栃原で縄文早期押型文土器を発見し、これを追究していたが新村薫をさそって栃原岩陰遺跡で表面採取をして、ついに人骨を確認して11月23日信州大学医学部第２解剖学教室の鈴木誠教授に連絡した。これが栃原洞窟遺跡の縄文早期北相木人の発見となった。

このような活発な活動を中心として、佐久の同好者の間に地域共同研究の気運がもり上がって、佐久考古学会の結成をみるようになった。

（井出正義）

佐久考古学会の設立と初期の活動

佐久考古学会が設立されるまでの地域的な動向として特筆すべき点は、昭和39年に、長野県考古学会の佐久部会としての活動が開始されていることである。

この佐久部会は、佐久考古学会の前身ともいうべきもので、会員は40年以降、英田地畑古墳（臼田町）の発掘調査や新産都市地域（佐久市）、平賀地区古墳（同）、入山峠（軽井沢）などの分布調査に積極的に参加した。

このようにいくつかの組織的な調査に佐久部会がかかわる中で、「佐久考古学会」という呼び名が44年の川越窯址（佐久市）の調査の折にすでに使われていたことが確認されている。このことは、佐久考古学会が正式に組織される前に、その母体が佐久在住の県考古学員によって形づくられ、佐久を単位とした実質的な調査研究活動が展開していたことを物語っている。

関係者の中からは、当然のことながら、研究を志す人をひとりでも多く結集し、組織的な研究団体を発足すべきであるとの声が高まり、45年に設立準備会と設立総会が開かれ、竹内　恒氏を会長に選任し、佐久考古学会は名実共に発足したわけである。

活動の内容は、設立当初から月例の研究会を設けて会員が研究発表をするなど、会員相互の交流による継続的な研究活動を重視したものとなっている。ただし、会員は佐久在住の長野県考古学員とし、県考古学会の東信支部と一体となって活動することを基本方針としたため、前身の佐久部会の在り方をそのまま受け継ぐものとなった。

設立時のメンバーの中に、ひとり例外として戸倉町の森嶋　稔氏（現長野県考古学会長）がいるのは、氏が当時、小諸市立坂の上小学校に在職していて、考古学研究の指導的立場から、佐久考古学会の設立に深く関与していたからである。

この年、佐久考古学会としては初めて、ほ場整備事業に伴う儘田遺跡（佐久市）の発掘調査に組織的に参加した。

翌46年の総会においては、会の目的と会員資格が見直され、佐久考古学会は、会員の佐久地方における考古学的な調査研究を相互に援助協力進展しあい、さらにその親睦を目的とし、会員はこの目的に賛同する考古学研究者によって組織することが、学会規約として正式に決定した。これにより、佐久考古学会は、県考古学学会の支部組織的な殻から脱皮し、地域に根ざした独自の学会活動を推し進めることとなる。

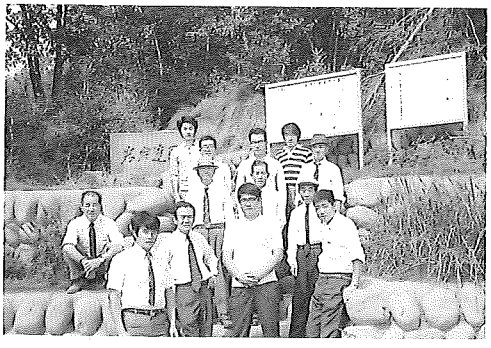
この年から、佐久市を中心とした戸坂、東一本柳古墳、西近津、北近津などの発掘調査や、池の平（八千穂村）の学術発掘などに会員の多くが精力的に参加し、その成果は月例会でスライドを用いて発表するなど、会員相互の研究を深めていった。

しかし、発掘調査に参加することを軸とする活動状況は、諸開発に伴う緊急発掘が増加してきた当時の高度成長経済の波を、学会がまともに受けることとなり、本来の学会活動や運営の在り方をめぐって問題点が指摘されるようになった。ここで、佐久考古学会は一転機を迎えることとなる。

私ごとになるが、当時筆者は高村会員と共に密かに佐久考古学会解体論を唱え、会長の竹内先生や指導的立場の森嶋先生にふたりで談判したことがある。両先生とも激怒されたが、今思えば、学生の分在でありながら思い上がりもはなはだしく、身勝手な行動をしたことに心が痛む。当時、佐久考古学会の将来を真剣に考え、展望を見出すべく取り組んでいた役員や会員が多数おられたことを、もっと考慮すべきであった。

さて、48年には臨時総会が開かれ、役員改選が行われて、新しく会長に由井茂也氏が選出された。事務局も態勢を充実させ、この年、企画を担当していた土屋長久幹事の編集努力により、機関誌『佐久考古』の創刊号が誕生したのである。

（臼田武正）



昭和48年　岩宿遺跡を訪ねて

昭和49年頃　調査の一時（故 武藤・森泉会員等）

成長期の佐久考古学会

佐久考古学会の転機は、「佐久考古学会の設立と初期の活動」で述べたように、昭和48年の臨時総会にある。この時の役員改選により、前会のワンマンな会運営により硬直化しつつあった佐久考古学会が由井茂也氏が会長に就任したことにより脱皮したことである。学会は由井会長を中心に、この時点から大きく前進していくことになる。

その2年後、木内捷氏が事務局長に就任した昭和50年、学会にとって大きな二つのできごとがある。その一つは、会則の全面改正である。いままでの会則は長野県考古学会則を手本に改正したわけであるが、前会則では、会の目的が「考古学的な調査研究を相互に援助、協力、進展し合い更にその親睦を目的とする」だけであったが、全面改正では「文化財の保護を推進すること」を新たに加え、文化財の研究活動と保護活動が学会にとって、二つの大目的とした点に特徴がある。また、佐久地方を5ブロックにし、各地区から委員を選出することによって、地域のネットワークの大切さを打ち出したことも特質である。

二つめは、佐久考古学通信の発刊である。学会の機関誌の『佐久考古』は土屋長久会員により発刊されていたわけであるが、佐久地方の情報をより早く会員に知らせる連絡紙として、また、会員がらくがきのつもりで気軽に投稿できる場としての佐久考古通信の発刊に至った。以降、島田恵子会員等の努力により、ここに一度の断絶もなく、50号をむかえることができた。このことは県内でも有数な連絡紙となり、佐久考古学会の誇りに思っていい快挙ではないかと考える。

また、木内事務局長が在任中は、総会・講演会・研修旅行が定着した活動になったことも特徴としてあげることができよう。

総会と講演会は、総会の後に講演会を行うというように、一つの組み合わせで実施し、毎年一度開催してきた。講演会の講師には、県内の考古学著名人ばかりでなく、全国的にも著名な戸沢充則・大塚初重・岩崎卓也・坪井清足各氏を招き、実施してきたことは、一地方の枠を越えた、全国的視野の中で学会を位置づけることに大きな意義があったものと思われる。

研修旅行は、昭和53年から毎年かかすことなく、近隣の重要な遺跡等をからめて実施しており、年に一度の旅行は、会員の親睦を深めることもでき、今後も長く続く行事であってほしい。

学会の目的である研究活動と保護活動に視点を当てると、まず、研究活動については、例会がその役割りを果たしてきたといえるだろう。この例会も参加者が同じメンバーにかたまってしまったことは、今後の課題であるが、継続した活動として実施してきたことは大きな評価が与えられると思う。ただ、機関誌としての『佐久考古』が定期的に刊行できなかったことと昭和53年に決定した『赤い土器を追う』が、いまだに刊行されていないのが残念なことといえよう。

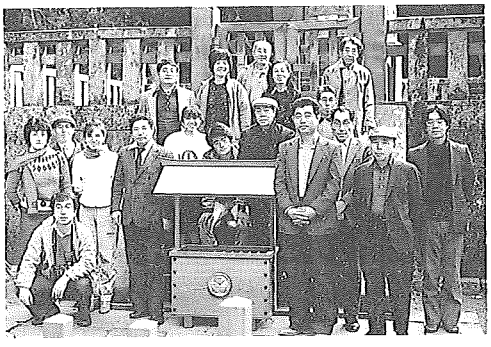
保護活動では、矢出川遺跡群の保存運動を積極的に実施したのみで、学会として十分な活動を展開してきたとは必ずしもいえず、今後の課題となろう。

悲しいできごととしては、学会の基礎を築いてきた輿水利雄・竹内恒・与良清・武藤金・畠山忠雄・森泉定勝各氏が故人となってしまったことである。これらの大先人達の苦労があって今の佐久考古学会があることを思うと、この記念号をぜひ墓前にそなえたい気持ちでいっぱいである。

喜ばしいできごととしては、昭和55年に由井会長の長年にわたる活動の功績に対し、藤森栄一賞が贈られたことである。このことは、佐久考古学会員全員が大きな誇りを与えられたようで、たいへんうれしいことであった。

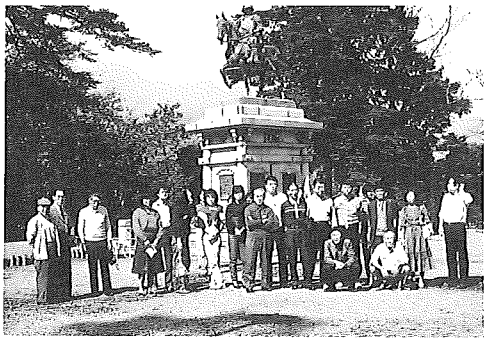
このように、昭和48年から昭和60年は佐久考古学会が大きく前進した時代で、その中心的役割りを担った

昭和53年　甲州への研修旅行



昭和57年　登呂遺跡への研修旅行

昭和59年　矢出川保存運動の会議を終えて



昭和59年　みちのく多賀城を訪ねて

由井茂也会長と木内捷事務局長に負うところが大きいであろう。

木内事務局長は一貫して、埋蔵文化財保護に対する行政の役割を明確にし、そして、それを実行してきた。その意義は、今では、考古学研究者が誰でも考えていることであるが、在野の研究者が緊急発掘調査をして記録保存することが主流の時代から、行政内に専門職員を置いて埋蔵文化財の保護・保存を実施することが当然と考え、しかも、忠実に実行したことにある。現在、佐久市には10人の専門職員がおり、県内でも最も充実した体制で埋蔵文化財の保護にあたっている。

このことは、記録保存としての緊急発掘調査が点から面への転換を可能にしたことであり、調査することだけが埋蔵文化財の保護方法ではないが、少なくとも必然的に破壊される遺跡は、必ず記録保存しなければならないことが大原則であるかぎり、飛躍的前進を佐久地方にもたらしたことは、確実である。今後も、佐久地方の専門職員のいない、または少ない市町村への埋蔵文化財の専門職員配置の運動を展開する必要があろう。

今日の佐久考古学会の発展で、もう一人忘れてはならない人がいる。それは、前章で述べられているように佐久考古学会が設立された当初から指導的立場でリードしてきた森嶋稔氏である。森嶋氏の考古学、または、考古学を研究する人々に対する考えかたは、その後の佐久考古学会を支えた人々に大きな影響を与えた。そこからいまは故人となった武藤金・森泉定勝氏、そして、現在でも学会において中心的な役割を担っている多くの佐久考古学会員が育ったことも事実である。

昭和60年佐久市役所において開催された佐久考古学会15周年記念祝典は、多勢の参加者、多くの催しもの（この時、学会のシンボルマークが決定した）が実施され、盛大のうちに行われた。翌年、木内事務局長から井出正義幹事長へ事務局も移転となり、学会にとって大きな節目となった。

（高村博文）

佐久考古学会の担う役割り

1990年を迎え、佐久考古学会の旗が揚げられてから20年の歳月が流れた。この間実に早い速度で社会が動き変貌した。学会設立当初の1970年代は、まさに、高度に成長した日本経済の大きなうねりが県内に押し寄せた時である。それは中央道西宮線建設工事や水田再編事業と銘うった圃場整備事業という大規模開発の波である。さらに、交通手段の車への移行により、国・県道バイパス工事が各地で盛んとなった。そして、その周辺には工業団地が住宅団地が次々と造成されていく。文字通り山を削り谷や沼を埋めて大地が一変する開発行為である。そこに存在している遺跡も緊急発掘調査という行為を受けた後、完全に消滅していく。

この記録保存と名づけられた緊急発掘調査の担い手は、個人研究者や県や市町村教育委員会の組織の一員である行政内研究者である。行政内研究者は1980年代になって目立って増えてくる。それは、一段と大規模な開発が県内で増加するのと同じくする。中央自動車道の延びる先々で本線工事はもとより、その関連工事として工事用道路や地元要望による県道から市町村道果ては林道に至るまでの改良や新設工事、さらに、工場や会社の誘致が地方繁栄の至上の策とする政治的事由から、広大な面積に工場団地や流通団地が建設されはじめたのである。

このような社会の情勢から、おおかたの考古学研究に身を置く人々は緊急発掘調査に日常的に参加し、日々の調査に追われる状況となった。担当者となった研究者は、開発計画の工事日程から算出された期間に制限される中で、調査を遂行しているのである。時には予算も制約をうけながら。また、膨大な調査範囲を

まのあたりにした遺跡では、大型重機を導入するという苦肉の策さえも取り入れられている。このような状況下では、調査後の成果と問題点等十分に研究・論議される時間もなく、次の調査へとかり立てられるのである。

ここ佐久の地においても、圃場整備事業が延々と続けられており、毎年必ずどこかの市町村でその工事をみる。それに先立って行われている緊急発掘調査は、60件を越えている。特に近年は、10000㎡を越える面積の調査が大半を占めるようになった。加えて、1984年よりついに上信越道建設工事が佐久地方において開始され、それに関連した開発が怒濤の如く生じてきた。前述した中央自動車道建設と、同様な現象が佐久に波及したのである。これは、佐久市を皮切り小諸市、東部町さらに上田市へと北上するのである。

こんな佐久地方の状況下で、わが佐久考古学会は、会設立当初より一貫して、会員相互の親睦と研究の向上を深めるため例会や通信の発行を開催してきた。また、遺跡の保護、保存運動の立場では、矢出川遺跡保存運動、住民への啓蒙活動の一環として調査結果の報告会や展示会を積極的に行ってきたところである。また、行政内研究者となった会員は、各部門でその責をまっとうすべく努めてきている。

しかしながら、1989年新たに佐久地方がリゾート法の適用により広大な山林・原野においてペンション・スキー場・ゴルフ場などの大規模な開発が計画されるに至っては、すでに造成・営業されている施設と相まってもはや遺跡はもとより大自然の景観、そこからもたらされる命の根源である貴重な水資源に危機がせまり、しいては、佐久地方住民の生活環境破壊という重大な事態が発生したといえよう。

確かに日本経済の高度成長・安定に支えられて、この佐久地方においても人々の衣食住は満たされ快適な日々を送っている。が、はたして本当にこの快適さは将来にも続くものであろうか。現在の社会が進行する中で、無数の遺跡が犠牲となり消滅していった。しかも追いうちをかけるように自然環境の破壊が進んでいる。

いま、この時点で人間社会の膨大な歴史資料をかえる考古学研究者は過去からの提言を現代社会に伝える重大な役割をになっている。

そんな任務の一端を受けもたなくてはならないのが本学会であり、会員であるのではないだろうか。

（林　幸彦）

佐久考古学会略年表

1964（S39）	
	佐久市野沢南高校同窓会館に竹内恒・与良清・輿水利雄・黒岩忠男・渡辺重義・藤沢平治氏等数人が集まり、長野県考古学会佐久部会として活動を開始しはじめ、佐久考古学会の前身となる。
1970（S45）	
7.10	佐久市岩村田浅間会館において竹内恒・輿水利雄・黒岩忠男・渡辺重義・藤沢平治・井出正義・森嶋稔氏等多数集まり、竹内恒氏を会長として『佐久考古学会』を設立する。
9.5～9.15	佐久考古学会として初めて佐久市野沢儀田遺跡の発掘調査を行う。
12. 1	最初の佐久考古学会員名簿を作成する。
12.13	臼田町三反田咲電機KK会議室において総会を開く竹内会長による「佐久市野沢儀田遺跡調査中間報告」と輿水会員による「八千穂村池の平、旧石器遺跡の調査研究」の報告のあと、森嶋会員による入門講座「旧石器文化八ケ岳東北山麓を中心に」を行う。
	（森嶋会員が小諸市坂の上小学校在職中は、輿水会員の工場である咲電機KKの会議室を利用して、毎月農閑期に森嶋会員を講師として学習会を開催する。）
1971（S46）	
3. 1	『長野県佐久市野沢平儀田遺跡緊急発掘調査報告』を発行する。
5.24～5.30	佐久市岩村田東一本柳古墳を長野県考古学会の講習会をかねて発掘調査
5.29	最初の佐久考古学会規約を発行する。
6. 1～6. 6	八千穂村池の平遺跡の発掘調査を行う。
1972（S47）	
2.19	小諸市坂の上小学校にて東信地区の研修会として川上元氏による「男女倉旧石器遺跡について」森嶋会員による「縄文早期について」渡辺重義会員による「軽井沢町入山峠遺跡について」を行う。
3. 1	『佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』を発行する。
1973（S48）	
5.20～5.22	川上村柏垂遺跡の緊急分布調査を行う。
6.30	中込会館にて川上村柏垂遺跡の報告及び由井茂也会員による石器実測講習会を行う。
11.23	佐久市岩村田相生町公会場にて臨時総会を開き、竹内会長、役員の辞任に伴い、由井新会長、新役員を選出する。
11.30	『佐久考古№1』を発行する。
12. 8～12.17	臼田町三分井上遺跡の発掘調査を行う。
1974（S49）	
7.10～8.10	川上村御所平横尾遺跡の発掘調査を行う。
8. 9	佐久考古学会副会長輿水利雄氏逝去
	『佐久考古№2』を発行する。
10.10～10.13	重要文化財旧中込学校（佐久市）において「郷土遺跡出土品展」を開催する。
1975（S50）	
1.25	佐久考古学会顧問竹内恒氏逝去
9.26	『佐久考古通信№1』を発行する。
10. 5	浅間会館にて昭和50年度総会を行い、佐久考古学会規約を全面改正する。総会の後、県教委文化課指導主事丸山敵一郎氏による「佐久地域の分布調査の成果について」の講演を行う。

1976(S51)	
3.13	浅間会館において林幸彦会員による「佐久の旧石器時代について」と土屋長久会員による「佐久の古墳と家地頭第1号古墳出土の埴輪について」を行う。
6.13	旧佐久広域事務所にて昭和51年度総会を行った後、県考古学会事務局長森嶋稔氏による「長野県における旧石器時代」の講演を行う。 『佐久考古通信№2～4』を発行する。
1977(S52)	
2.20	浅間会館にて高村博文会員による「遺物実測方法」と藤沢会員による「縄文時代入門教室」を行う。
7. 1	『佐久考古№3』を発行する。
9.10	野沢会館にて昭和52年度総会を行い、花岡弘会員による「長野県における古式土師器の成立」の講演を行う。 『佐久考古通信№5～8』を発行する。
1978(S53)	
1.15	佐久考古学会顧問与良清氏逝去
2. 3	佐久市岩村田稲荷町にて、初午に来た人々を対象に野沢南高校郷土史班の会員により、阿久遺跡保存運動の署名集めを行う。
5. 5	『佐久考古№4』を発行する。
6.10	野沢会館にて昭和53年度総会を行い、高村会員による「佐久平の遺跡分布について」の講演を行う。
11. 3～11. 5	重要文化財旧中込学校（佐久市）にて「佐久の古代を知ろう」展を行う。
11. 4～11.26	佐久町宮の本遺跡の発掘調査を行う。 （山梨県の八幡不動と恵林寺、石沢温泉の研修旅行を行う。） 『佐久考古通信№9～12』を発行する。
1979(S54)	
3. 1	『宮の本』遺跡発掘調査報告書を発行する。
5.13	浅間会館にて昭和54年度総会を行い、臼田武正会員による「佐久平の弥生土器について」の講演を行う。
10.20～10.21	高崎市・藤岡市の文化財（伊勢塚古墳・観音山古墳・新保遺跡等）及び群馬県立博物館を視察旅行する。
11. 3～11.30	佐久市長土呂周防畑A遺跡の発掘調査を行う。 『佐久考古通信№13～17』を発行する。
1980(S55)	
3.20～3.24	重要文化財旧中込学校にて「佐久平の弥生文化展」を行う。
4. 6	佐久考古学会員武藤金氏逝去
5.11	浅間会館にて昭和55年度総会を行い、明治大学教授戸沢充則氏による「信州の考古学と地域研究」の講演を行う。
6. 1	『周防畑』発掘調査報告書を発行する。
7.30	佐久考古学会副会長畠山忠雄氏逝去
10.13～10.23	矢出川遺跡群総合調査への参加
10.24～10.25	愛岳ヒュッテにて、第2回野辺山シンポジウムが開催される。
10.26	由井会長、第5回藤森栄一賞受賞！ （埼玉古墳群を視察研修する） 『佐久考古通信№18～20』を発行する。
1981(S56)	
4.11	浅間会館にて長野県史刊行会桐原健氏による「佐久の古墳とその氏族」の講演を行う。
5.27	『佐久に生きる』－竹内恒・輿水利雄・与良清・武藤金・畠山忠男追悼号－『佐久考古№5』を発行する。
5.31	浅間会館において昭和56年度総会を行い、明治大学教授大塚初重氏による「日本の古墳文化と佐久の古墳」の講演を行う。
1981(S56)	
10.15～10.16	陶磁器のルーツを訪ねて愛知県陶磁器資料館及び貝殻山貝塚博物館等を視察研修する。
11. 4	由井会長が長野県教育功労者の文化部門で表彰される。
11. 4～11.15	矢出川遺跡群総合調査への参加 『佐久考古通信№21　23』を発行する。
1982(S57)	
6. 6	浅間会館にて昭和57年度総会を行い、福島邦男・渡辺重義両会員による「望月町における考古学的調査」の講演を行う。
7.10	旧広域事務所にて「赤い土器を追おう！」の編集を決める。
12.11～12.12	浜松市立博物館登呂遺跡を視察研修する。 『佐久考古通信№24～26』を発行する。
1983(S58)	
6.18	浅間会館にて昭和58年度総会を行い、飯山北高校教諭笹沢浩氏による「箱清水式土器について」の講演を行う。
7.10	浅間会館にて第1回矢出川遺跡保存対策特別委員会を行う。
11. 1	『横尾』発掘調査報告書を発行する。
11. 7～11. 8	鳥浜貝塚・小浜市方面に研修旅行を行う。 『佐久考古通信№27～28』を発刊する。
1984(S59)	
6. 9	浅間会館にて昭和59年度総会を行い、岡谷市教育委員会高林重水氏による「橋原遺跡の調査報告－弥生式土器を中心として－」の講演を行う。
7.14	埋文資料室にて花岡会員による弥生基礎講座第1回「弥生前期の土器について」を行う。
8.11	埋文資料室にて小山岳夫会員による弥生基礎講座第2回「弥生中期の土器について」を行う。
9. 8	埋文資料室にて林会員による弥生基礎講座第3回「弥生後期の土器にいて」を行う。
10. 2～10. 3	「みちのく多賀城を訪ねて」の研修旅行を行う。
10.13	埋文資料室にて高村会員による弥生基礎講座第4回「赤色塗彩土器をめぐり」を行う。
10.28	矢出川遺跡群の保存運動の一環として「野辺山高原の自然と遺跡を知ろう」展を行う。 『佐久考古通信№29～32』を発行する。
1985(S60)	
2. 8	佐久市議会議長あてに佐久考古学会長名で埋蔵文化財保護行政の強化に関する請願を行う。
3. 9	埋文資料室にて臼田会員による弥生基礎講座第5回「赤い土器を追おうの総括」を行う。
4.13	埋文資料室にて小山会員による「縄文の施文方法について」を行う。
5.26	佐久市役所にて昭和59年度総会を行い、堤隆会員による「野火付遺跡の歴史時代の様相」の講演を行う。
7.22	佐久考古学会員森泉定勝氏逝去
8.24	矢出川湿原における動物園建設問題について話し合い、南牧村に対して抗議文、動物園へ要望書を送付することを決定する。
9.22～9.23	「上総国の埴輪を求めて」の研修旅行を行う。
10.12	佐久市役所にて15周年記念祝典を盛大に行う。記念ハガキの発行。シンボルマークは浅沼馨氏のものが選ばれ、祝典後に筑波大学教授岩崎卓也氏、千曲川古代文化研究所主幹森嶋稔氏らによる講演が行われた。 『佐久考古通信№33～35』を発行する。

1986(S61)	
5.25	佐久市役所にて昭和61年度総会を行う。長野県史刊行会専門主事宮下健司氏による「縄文草創期をめぐって」の講演を行う。
9.15～9.16	福井県一乗谷朝倉氏遺跡への研修旅行を行う。
11. 4	埋文センターにて、井出幹事長の「甲斐型坏について」、小山会員の「佐久地方おける弥生時代中期後半の土器について」の研究発表を行う。
12.13	埋文センターにて、花岡・三石会員の「瀧峯1・2号墳について」・「瀧峯1・2号墳の土器について」の研究発表を行う。 『佐久考古通信No.36～39』を発行する。
1987(S62)	
1.24	中込「一力」において、高村会員の「弥生時代の墓制について」の研究発表を行う。
2.14	埋文センターにて、臼田会員の「弥生時代の金属器について」の研究発表を行う。
3.14	埋文センターにて、小山会員の「箱清水式土器編年編成のあゆみ」の研究発表を行う。
5.30	佐久市役所にて昭和62年度総会を行う。 奈良文化財研究所前所長坪井清足氏による「佐久の古代牧について」の講演を行う。
6.13	埋文センターにて、小山会員の「西一里塚遺跡採集の棒状浮文をもつ土器について」の研究発表を行う。
7.14	埋文センターにて、羽毛田伸博会員の「弥生時代の石器について」の研究発表を行う。
8. 8	埋文センターにて、羽毛田卓也会員の「遺物の保存処理について」の研究発表を行う。
9.12	埋文センターにて、篠原浩会員の「弥生時代のベッド状遺構について」の研究発表を行う。
10.12～10.14	奈良県飛鳥地方、平城宮跡等の研修旅行を行う。
12.13	ホテル・ナカジマにて花岡会員による「佐久地方の五世紀～11世紀の須恵器について」の研究発表を行う。 『佐久考古通信No.40～43』を発行する。
1988(S63)	
1.23	埋文センターにおいて、堤会員による「佐久地方における八世紀の土器様相について」の研究発表を行う。

1988(S63)	
2.13	埋文センターにおいて、高村会員による「平安時代の土器編年について」の研究発表を行う。
3.12	埋文センターにおいて、小山会員による「大井城の発掘調査から」の研究発表を行う。
4.23	浅間会館において第1回佐久地方遺跡発掘調査報告会を行う。
5.14	小諸市文化センターにおいて昭和63年度総会を行い、明治大学文学部講師石川日出志氏による「千曲川流域における縄文から弥生へ」の講演を行う。
6.11	埋文センターにおいて、須藤隆司会員よる「構想・先土器時代における地域文化研究の一視点」の研究発表を行う。
7. 9	埋文センターにおいて、小林真寿会員による「斜行沈線文系土器の展開と所謂「焼町土器」の成立に関する一考察」の研究発表を行う。
8. 6	埋文センターにおいて、犀川泰弘会員による「東信濃における縄文時代前期初頭～前葉土器群の様相」の研究発表を行う。
9.10	臼田町文化センターにおいて竹原学会員による「縄文時代の炉」の研究発表を行う。
12.10	小諸市「一松」において助川朋広会員による「縄文土器の補修孔の研究」の研究発表を行う。 『佐久考古通信No.44～46』を発行する。
1989(H 1)	
1.21	埋文センターにおいて、小平恵一会員による「太平天国の乱について」の研究発表を行う。
2.18	埋文センターにおいて、臼田会員による「遺跡の探査法について」と佐々木宗昭会員による「石附窯の探査結果について」の研究発表を行う。
3.12	望月町埋分資料室において福島会員による「望月町の諸遺跡について」の研究発表を行う。
4. 8	埋文センターにて三石会員による「瀧の峯2号墳について」の研究発表を行う。
4.23	佐久勤労者福祉センターにおいて第2回佐久地方遺跡発掘調査報告会を行う。
6.10	信州短期大学において平成元年度総会を行い、田辺昭三氏による「初期須恵器について」の講演を行う。
8. 5	佐久創造館において、佐久古代公開セミナー第1回「佐久地方最古のハンター」を堤会員により行う。 『佐久考古通信No.47～49』を発行する。

（高村博文　作成）

手づくりの「佐久考古通信」

No.1～30号までを合冊した「佐久考古通信」をめくっていると9年間の歴史がそこにつまっている様に思える。今回は発刊から30号までの歩みを私の印象からたどってみた。

残念なことは、もうこの世にいない武藤金、森泉定勝さんの人なつこそうなやさしい笑顔を心の中で想い浮かべなければならないことである。兄弟のように親しく、家族のようなおつき合いをしていた会員相互の交流も、今ではなつかいしい想い出となってしまった。

発刊のことばで由井会長は、佐久平に分散している会員の緊密な連絡と連帯を主にした「佐久考古通信」を、会員の協力と創造力で造りたいと呼びかけ、事務局だよりで木内捷事務局長は、会員共同のらくがき板とし、会員総参加の活動をおこしていきたい。として手づくりの「佐久考古通信」が発刊されたのであった。当初の印象深い原稿は、佐久平の発掘調査を指導して下さっていた、土屋長久さんの「座蒲団」と題した詩に対して、通信No.1とNo.3で高村さんと青木さんが感想を寄せている。その文面からも先輩を尊敬している様子が伺えて実に清々しい。また、「遺跡破壊の眼」と題して武藤金さんは、国、県、市町村の文化財保護行政のあいまいさに対して鋭い批判の眼を向けている姿勢はなかなかのものである。さらに、No.6号においても「たわごと」と題して同様な批判を市に向けてやんわりとおこなっている。

あの頃は皆さん若くて現在のような年齢の差は感じられなかった。老若が入り混じってしっくりとまとま

っていた。若い者がまごまごしているとハッパをかけられるという調子であった。高村、臼田、青木、林、花岡さんが学生であったり卒業したてであったり、木内捷・藤沢平治先生が30代に入ったばかり、佐藤敏さんが40代、井出、黒岩先生が50代の現役、武藤金、森泉定勝、井上行雄、三石延雄、由井明氏が60代の初めで、土方作業も若い人たちと張り合ってスコップを振りまわす元気であった。ついでに島田は20代後半でやせているため体力がなく、一輪車やスコップを生まれて初めて使い、逆に振りまわされているという情けない状態であった。発掘作業も2日行っては、3日休まなければ体がしんどくてついて行けなかった。重機を使わずに全て手作業だったので土方作業が多かったからである。また、入会した当初の堤さんはかわいい中学生であった。

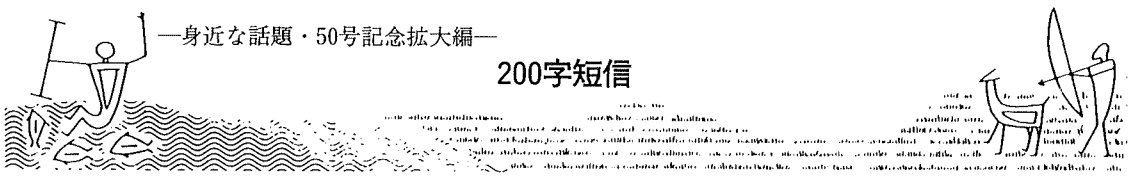
例会は月1回行われていたが、顔を合わせることがなによりの楽しみで皆さんよく集まってきた。例会後は懇親会を必ず行い、踊ったり、歌ったりとにぎやかであった。「若いもんはだからダメだ！」と口ぐせだった武藤金、森泉定勝さんに叱られたり、落ち込んでいるとなぐさめられたり、励まされたりと常に助けられていた。こんな調子であったから1970年代は、通信の原稿も自主的に書いて提出してくれた。

1980年代に入ると佐久平の各市町村の発掘調査が次第に増加し、各人が忙しくなりはじめた。No.24号は4ページという少なさであった。編集者が積極的に原稿依頼を行なわなかったからであろう。また、私が伊那へ発掘調査に遠出していた時は年1回だけの発行になっている。申し訳ない事をしてしまったと思う。しかしその後は皆さんにハッパをかけられながら順調に発行されている。No.27号では由井会長さんの「細石器」白倉先生の「チャートについて」等は自主的に寄せて下さった貴重な原稿である。

また、昭和56年に藤森栄一賞を受賞された由井会長さんの考古学における長い歩みを「矢出川から馬場平まで」と題して、宮下健司氏が受賞に対するささやかなお祝いとして寄稿して下さった。題字は由井会長さんが書かれた。感動的な内容で外部からNo.22・23合併号を欲しいという依頼が多かった。

手づくりの「佐久考古通信」から現在は業者印刷の立派な機関紙に変わった。学問の進歩と世代交代、会員の増加によって一歩前進した会の運営が要求されてきているからであろう。しかし、ザラ紙に印刷されたあたたかな感触はいつまでも残してほしいと願っている。

（島田恵子）



このたびの「200字短信」は、50号を記念し、より多くの会員の声を寄せて頂くことにした。結果三十余名の「身近な話題」の掲載が可能となった。なお、以下の掲載順序は不同であることをお断りしておく。

佐々木春蔵

みなさんのお仲間にしていただいて発掘を手伝わせていただいた2年間がなつかしく偲ばれます。

そしてその後、旧石器時代、縄文時代に思いをはせる詩や短歌をかいたりしました。今萬葉集の大津皇子や有間皇子の歌をもとにした詩を書きつづけています。

人生の中で2度と経験できないようなことがらを学んだような気がします。

佐久考古学会のお仲間にもしていただきときどき皆さんにお逢いし、お話をきくことが出来るのは何よりのたのしみです。今後ともよろしくお願いいたします。

篠原貞雄

日本の歴史といえば、はなやかな、奈良や京のことばかり、吾が郷土には川中島の合戦ぐらいで、縁はうすいと思っていましたが、どうして、天下を左右するような事件にかかわりを持ったり、直接間接日本の文化や歴史を作って来たことを知りました。

まして考古学的には信州こそ日本の大和であったことも知って興味津々です。

長い間地味な研究をされて来た先輩、そして新進気鋭の皆様、御じゃまでもよろしく御願いします。

竹之内敏幸

昨年入会させていただき半年位たったでしょうか、例会での研究発表、発掘調査の報告など、自分でも刺激されて最近市内の表面採集を始めるようになり、香坂の奥、雨原遺跡の近くで押型文土器を見つけることができました。詳しくは後日にでも通信の方で発表できればと思います。

私事ですが本年4月2日に新潟県考古学会が設立され、私も会員になることができました。まだ設立されたばかりですが、佐久考古学会とともに将来に期待し

たいと思います。

木内和枝

近況についてお伝えします。

以前は勤めが市内でしたが、今年四月より上田の予備校で教鞭をとっています。なかなか発掘にも定例会にも参加できず、通年幽霊会員の私です。でも、少しは文化財にふれようと美術館、博物館、寺社めぐりをしております。

8／11～8／13まで灼熱の京都へ旅行しました。石山寺(これは滋賀県ですが)、大原、比叡山、東寺、祇園といった、なんら関連性のないコースですが充実した旅ができました。帰宅して肩についた“京都焼け”をみるにつけ、また発掘をしてみたいと思う今日この頃です。

黒岩忠男

佐久の考古学の曙

佐久平に考古学が始まったのは明治29年頃、平賀村の神官青木造氏が同村和田上遺跡で表採を行い同年8月に坪井正五郎博士が当地に来られた。現在記念碑が建っている。博士は明治33年花岡分校や館遺跡を調査し住居址を発見した。この事に啓発され青木造氏等6人の諸氏が調査を始めた北佐久では神津猛氏等4氏が、軽井沢ではN・G・マンロー氏市村桂一氏が同行した。八幡一郎先生が大正末期～昭和初期に活動を開始した。神津猛氏立役者に信濃考古が昭和2年頃始まる。長野県考古会昭和37年に佐久地方から7氏が参加入会。昭和45年佐久考古学会が発足し、現在に至る。

青木一男

小学校で社会科の授業をしていますと、「地域素材の教材化」ということがよく言われます。

長野県の場合、地理的な地域教材はしっかりしているように思うのですが、歴史教材はいまひとつのように思えます。

学説、論説を頭におきつつも、過去の人々の営みを信州の地理的風土の中で子どもたちの学びの場にもっていきたい。

そう夢見つつ、日々の発掘におわれております。

森泉かよ子

発掘調査から少々遠ざかっていたのですが期せずして、去年から上山田町という埋蔵文化財の調査がまだ数例という小さな町の発掘に携わる事になりました。一千万を越える調査に調査員は担当者たる私のみであります。この状況は遺構にとって危険といえ、充分な調査をする自信はありません。財政的に埋文の専門職を抱える余裕がない事はわかりますが、県立の埋文センターの構想がもう少し早く具体化し実現していたらと考えると残念です。

でもこの一歩が未来への大切な一歩であることを信じて努力したいと思います。

浅沼　馨

時は平成、顧みて陛下の股肱として入隊した私は教育隊で教官より軍隊の所感を聞かれた。真先に挙手し「国家の平城となり一年中で土用の丑の日以外に口にしたことのない肉を毎日頂き勿体ない限りであります」と。教官は正直でよいと褒めた。

さて考古ブームで長屋王邸木簡三万点。甲子園の四倍の邸に住み、アワビ、牛乳を食し飲み氷をとり寄せてオンザロックを飲み、ペットの犬やツルに米まで食べさせていた。貴族豪族とは何か。二十七代から遡及すればみな同じとか。出土の木簡によって考古学とはいみじくも尊い学問であることを痛感した。

田中正治郎

新しい（？）仕事に就いてはや4年。それまでは寝ても覚めても発掘、整理、報告書と考古学にどっぷり浸かっていたクセにこのごろは仕事に追われ、近くの遺跡の現説に出かける気力もなくなってしまいました。

たまに本棚に並ぶ報告書をながめていると昔のことが思い出され現在の自分が情なく、気が滅入ってしまいます。

そんな状態でも考古学会から講演会や現説のお知らせが届いたり、事務局の方から電話を戴いたりするとやたら嬉しくなります。

これからも宜しくお願い致します。

木内　捷

開発と埋文保護について手書きから始まった通信も50号を迎え感慨無量です。

当学会も仲間が増えて、ますます前進をみており同慶の至りであります。

最近の開発に伴う緊急調査は、この数年間では考えられぬような大規模な調査になった反面、調査体制は無理を強いられていることは否めません。(参画されている会員のご苦労とご努力には敬意を表します)

「埋文保護」については口煩く言われていますが学会としての「あるべき姿」を皆で検討、研究し後世に悔いの残らぬよう考えたいものです。

木島美子

発掘が終わった現場に立つと、どこかの砂漠にいるような気持ちになることがあります。調査をしている

時は、色々と発見があったり喜びがあっても、たくさんの情報と引き換えに草も木も残らないむきだしの地面を見るのは、なにやら淋しいものがあるのです。

開発のための緊急で得られる古代日本の情報は大きいと思います。

でも、その後に残る地面はとても悲しく、淋しいものです。

開発で得る便利さを味わいつつ、少し考えたほうがいいんじゃないかと思う今日この頃です。

白倉盛男

佐久の稲作作況指数

昨年（昭和63年）は低温や日照不作で全国平均は97で長野県は98と発表された稲作作況指数が、今年は全国的に好天に恵まれ成育順調で全国大部分で100を越し、平均が101で長野県は99でやっと平年作だが昨年よりはよく全国的には豊作と報じている。

今後の見通しについても残暑の日照りからこの指数は上昇見込みとも発表している。

「稲作は飛び穂一日盆揃い、ぶっこみ十日（二百十日）平年の作」。米を作る農家が豊作を喜ばぬこの頃であるが、弥生時代以来佐久の米作りの標準目安はこれでつくされている。

土屋忠芳

開拓地の今昔

昭和９年に私は野辺山に来た。当時は１坪が１銭という不毛の地とされていた。山野は鹿やきじが群生していた。戦後緊急開拓により引揚者が入植して野辺山駅を中心に開拓地800町歩が出来たが手開墾の時代で、由井さんの矢出川発見の頃は未だ周囲は原生林や牧場などであった。30年以後機械化によって、開拓は進み所有地全体が畑になるに及んで遺跡は続々発見され今日に到った。先年杉原先生が訪中の折矢出川の遺物を中国に贈ったのが機縁で先年小生が中国へ行った折賈蘭坡博士北京原人発見者と御合い出来たのは大変幸であった。

高地正雄

地球上に生活する生物は穴に依存して生活が営まれて来たのでありますが、古代の有らゆる穴の発掘を行って居りますが一ツとして同じ穴はなく其所に何にかを探し求めるので有ります。四季の風水害自然の脅威に従いながら掘った一ツの穴から古代人の血と汗の臭いが伝わって来ます。竪穴住居夏は冷を取り冬は暖を取り古代人には快適な営だったと思います。現代の人類は未知の世界に文化の泉である穴無限埋蔵されて居る宝が有ります。其の宝を探し求め明日の発掘に精をだします。

土竜さんに負けないように

工藤文夫

友人に紹介いただき此の度入会させていただいた私ですが宜しくお願い致します。私とて元来考古学には勉強不足な故多分に皆様の御指導を戴く事と思いますがよろしく御願致します。数年前望月町の縄文時代の遺跡を見学させていただき先輩の福島先生より資料を頂き、川上の遺跡や松本方面塩尻の遺跡等に足を進めた事も有ましたが先般信州短期大学校内での田辺先生の講義を聞き一層の注意力と縄文時代の深みを感じました。乱開発の現在の世相にいま一度振り返って古代人の生き方又其の知恵を研究するひつようがあるでしょう。

篠原浩江

人間は環境である！

発掘現場に足を踏み入れて11年。考古学に触れた場が、佐久考古学会の根拠地である佐久だったからこそ、現在の私が居るのです。佐久考古学会の存在は私の運命を左右したと言っても決して過言ではありません。

今後も佐久考古学会は、研究者の集合体として、また、環境の一部として地域に関与し、文化財や考古学の理解を促し乍ら、佐久地方に於ける考古学研究レベル向上の先導的存在として永く続いて欲しいと思っています。

池田勝吉郎

考古学会に入会させていただいて、早数年がたちました。なかなか勉強は深まりませんが、新聞テレビなどの考古学報道は興味津々として見、また耳を傾けております。仕事の途中でも時間があれば発掘現場などへよって見るのも大変おもしろく思っている今日このごろです。これからも少しずつ知識をふやして皆様と話しが出来ることを願いたいと思います。宜しく指導お願い申し上げます。

荻原範仁

私の住んでおります御代田町草越地区では、毎年１月20日の大寒の夕に行われる勇壮なまつり「草越の寒の水」があります。

この「寒の水」は、身もこごえるような寒さの中、ふんどし一丁の丸裸の行者たちが通りに出て寒水を浴び、神社に御参し、その年の無病息災などを祈るというものです。

平成元年には、この「寒の水」が県無形民俗文化財の指定を受け、誠に喜ばしいかぎりです。考古資料の

みならずこういった民俗文化財も大切に伝えてゆかなければならないと考えるこの頃です。

角張淳一

長野県に帰郷して三年経ちますが、佐久考古学会に入会をさせて頂いて感謝しております。学生の頃は、武蔵野台地をフィールドに旧石器考古学を勉強しておりましたが、就職すると時間がなく、次第に研究から遠くなる自分を寂しく思ってしまいます。佐久考古通信に二回ほど投稿させて頂きましたが、自分にとって良い刺激だと思い関係者の方々に感謝しております。

定例会も仕事の都合上出席しておりませんが、今後もよろしくお願い致します。

三石宗一

皆さんこんにちは、三石です。大学を卒業するまで考古学とは全く無縁だった私が、佐久考古学会に入会させていただいてからすでに５年余りが過ぎ、私ももう32才になってしまいました。現在は、佐久埋蔵文化財調査センターに勤務しています。昨年は聖原遺跡という大遺跡の調査を行い、現在は整理作業に追われている毎日です。まだまだ未熟な私ですので、今後とも厳しいご指導をよろしくお願いいたします。

小林真寿

私は高速道路も新幹線もいりません。自然破壊を強行して実施されるオリンピックなど見たくもありません。スキーもゴルフもしませんから、スキー場もゴルフ場も必要としません。安月給である事を自覚していますから中流意識なんかありません。

全ての人々が、豊かであるという幻想をすて、あるがままの自分の生活を見つめたなら、本当に必要なものが見えてくるでしょう。見得と世間体に塗りこめられた厚化粧の生活は、その内側の自分自身を喪失させてしまいます。私は気高く生きたいと願います。

翠川泰弘

佐久平はでかい。しかし、列島規模的な文化の核を担うほどの広さはなく、小国を形成するのにほど良いくらいの広さである。

こんな佐久平の太古には、きっと小国があったにちがいない。そこでまずは小国の蛙になり、そして大海を知り、戻って来た時には自国の個性を認識していたい。

佐久平一番の知覚者から、より普遍性を求め、最後には佐久平の独自性を発見しよう。そんな学会でありたい。

助川朋広

佐久に来てからもう１年が経過してしまいました。まだまだ何もわからないというのに、歳月ばかり過ぎていってしまいます。何事に対しても不安と焦りを感じて、萎縮してしまう自分が情なくて、情けなくてたまりません。これからまた、寒い嫌な冬がやって来ます。季節の繰り返しをただ、『ボー』と過ごすのではなく、自分自身をもっと、もっと向上させていたいと思う今日この頃です。

竹原　学

小生、佐久に来て早２年が経とうとしています。この間中世城郭、窯跡（須恵器、製炭）等これまで接することのなかった遺跡の調査に臨み、また多くの研究者と出会い充実した日々を送ることができました。

今年は石附製陶・製炭窯跡の報告作成も控えており、カマ屋になろうと思っています。この種の調査をどこかで耳にされた方、御一報下さい。

とは言え、昨年以上に過激な現場が目白押しです。仕事に振り回されなければ良いのですが……。

水沢教子

佐久の皆様、お元気ですか。前田遺跡調査の折には、大変お世話になりました。当会に入会させていただくに際し、バックナッバーの中に懐かしいお名前を見るに付け、今迄幾つか経験した中で最も学ぶことの多かった。あの初めての現場を思い出しています。

さて、私は本夏、灼熱の新潟は荒屋遺跡の調査に出ていました。そこでは、旧石器時代の土壙が複雑に切り合い、その中のいくつかには、炭化物や焼けたフレイクの詰まった焼け面が認められます。土壙の性格を推定する手がかりとなる、脂肪酸分析の結果が待ち遠しいものです。

堀籠みさと

自然と一体となって

四月から聖原遺跡の発掘に参加して六ケ月が過ぎた。何故聖原と言う地名なのか知らないが、浅間山、八ケ岳連峰の景観はすばらしく北川の崖（がけ）下を濁川が、神聖とも思える白濁色で細く静かに流れている。

発掘をしていると周囲の山々から足元の草花まで季節の変化を、色、匂い、風、音色（ね）、等で心身共に同化してしまう程に感じることが出来る。暑さ寒さにも慣れて壮快な毎日である。

少しずつ祖先の生活の跡を剝して行く。その土を、私達作業員が一輪車で運びポコンポコンと土の山が出来る。その土の色は、黄色、茶、白、黒、赤色等種々様々でその美しさは絵の具では表わせないすばらしい

色だ。土の種類の多い事も始めて知ることが出来た。

大自然の環境の下で生き続けている人間を思う時、近代社会の進歩＝地球破滅への一途とならないため、人間らしさの本質を真剣に考えさせられる此頃である。

畠山次郎

神津猛と佐久考古学会

経営史の問題として長野電鉄初代社長神津藤平を調べているうちに、神津猛について多少知りえた。猛は藤平の本家・志賀の赤壁の当主である。猛は弱冠二四歳の明治三八年、島崎藤村に『破戒』完成までの生活費と出版費を貸してやったことがある。

そのほかに猛には、ユニークな経歴がある。彼は明治三〇年代、藤村に出会う前後から考古学に関心を持ち、研究を続け、昭和四年、信濃考古学会を創立し、『信濃考古学会誌』を発刊している。

この学会と会誌が、その後どうなったかよくわからない。多分、当時は考古学の研究者が少なく、雑誌の維持もむずかしかった。その上、考古学は当時の皇国史観と衝突せざるをえない。双方とも、存続できなかったであろう。

神津猛の郷里において、佐久考古学会が発展することを希望する。学問とは所詮、志(こころざし)である。

井上行雄

思いのまま

佐久考古通信の50号が発刊されるので何か一言書くようにといわれたが、私も筆に疎いものである。しかし微力ながら私も佐久考古学会創立以来のひとりとして今日に至っていることを考え、「思いのまま」を記すことにした。

さて私の考古学会入会の動機は、昭和41年の北西久保石造塔婆群の発掘にはじまる。しかしこの発掘は、実は無届けのもので、てっきりその折りに関係したＩ先生を佐久市の文化財委員と信じてしまったことに始まるのである。そのとき「Ｉ先生と発掘を始めたことを新聞・テレビ等で知った」と上田小県郡誌編纂副委員長の宮下真澄先生が訪ねられ、しかも先生は数日間通いつめられて記録をとり、後日信濃へ「中世墓制の一例について」を発表された。そんなこともあって、後日市の教育委員会が文化庁の技官をつれだって遺跡に来、無届け発掘について文化庁に始末書を提出するようにと忠告した。私はてっきり、発掘手続きはＩ先生がおこなったものとばかりおもっていたので、これには閉口した苦い思い出がある。そんなこともあって私の考古学への関心が高まり考古学会への入会のきっかけとなったのであった。

昭和44年には、こんどは市の教育委員会が主体で北西久保石造塔婆群の再調査がなされ、このときは駒沢大学の倉田先生も男女数人の学生をつれだってみえられた。調査は岩村田の人々も頼み、五輪塔前方から西方にかけて行われたのであるが、予算・日程の都合で十分なことができず、またその報告も一部のまま終わった。この後、昭和49年に西久保石造塔婆群は市の指定文化財となった。

次に「赤い土器」のことについて話してみよう。近く考古学会では「赤い土器を追う」が刊行されると聞くが、この「赤い土器」については、大正四年佐久鉄道（現小海線）建設の際岩村田駅付近より多数出土したものが、八幡一郎先生により「岩村田式土器」として命名されていた。現在はこれらを「箱清水式」と一括して呼ぶようであるが、「岩村田式土器」の名称が消えたことに少し淋しい思いも残る。

さて、考古学会発足当時は、現在の例会のようなかたちで学習会を行っていたことを思い出す。臼田駅の東、咲電気の一室で、森嶋先生の考古学入門講座をお聞きするなどした。また各地の公民館で会合もしたし、たいていのところへは発掘にもいった。こうした活動により、幾人かの先生方ともお近付きになることができ、また多くの先輩や仲間を得ることができたことは幸せだとおもっている。

最後になるが、ここ十数年のあいだに実に夥しい数の考古資料が蓄積され続けている。しかし果たしてこれらは発掘されただけでほんとうによいものなのであろうか。当初より佐久の発掘にかかわってきたものの一人として、これらをよりよく後世に残し、また一般の人達が容易に見学のできる博物館等の、一刻も早い設置を望む次第である。

森川宗治

「いろり」と「かまど」

縄文時代の住居の復元を見ると、そのほとんどにいろり（炉）があります。

私の生まれた家にも16畳の間にいろりと、かまどがあって、いろりを囲んでの、楽しい「生活の場」がありました。

おそらく、その場へ縄文人がまぎれ込んで来てもさほど違和感を覚えなかったのではないでしょうか。

そして、私は、この年になるまで、いろりは、古代からずっと住居内に存続してきたものと思っていました。

ところが、聖原遺跡Ｉの住居址にはこのいろりが見あたらず、ただ、かまどがあるだけでした。(発掘作業員として参加)

この遺跡は、古墳時代後期と、奈良・平安時代のものとのことですが、いろりについても、前述のような、

幼い考古知識の私にとって全く不思議な思いでした。

そこで先生方にお聞きしたり、参考書などで調べたところ、おおむねつぎのようなことでした。(主として東日本)

1　縄文時代のいろりは、弥生時代を経て古墳時代の初期まで造られていたが、同時代の中後期(5～6C)に至ってかまどが出現し、これに代わってしまった。

2　しかし、このかまども、平安時代をややすぎた頃からぼつぼついろりが復活しはじめ、中世に至って、竪穴住居にはほとんど見られなくなってしまった。

このように家の中の「火」の設備はその煮炊する道具などと密接に関連して消滅と復活を繰り返してきたということです。

したがって私の生まれた家のかまどといろりも戦後間もなくその姿を消してしまい、いつも煮炊きしながらいろりの灰に字を書いていた祖母や母の姿も遠い遠い思いでとなってしまいました。

そして、今、家内と二人で、「いろりの生活」を懐かしんでいる今日、このごろです。

和久井義雄

昭和60年6月考古学と言われる学問的知識は勿論発掘の技術もない無知な私が北西の久保遺跡の発掘に参加させていただいてから4年の歳月が過ぎました。

考古学とか遺跡の発掘などの言葉も耳に致したこともなかったわたくしです。人生の半分を海上勤めで終わった男だけに陸上社会のことはマイナスに等しい私でしたが発掘に参加させていただいたお陰で第二の人生に夢と希望が湧いてきました。始めの頃は遺跡の発掘とはなかなかロマンのある仕事ではないかと良く聞かされるたびに、なにがロマンだ、唯苦労あるのみではないかと思っていたわたくしが今では休むことも知らない程、発掘作業に愛着が出て毎日楽しい日々を送っております。

考古学又発掘に無知なわたくしが今日迄続けられてこれたのも調査主任の方々や先輩方の暖いご指導があったからこそです。

レベルの見方移植の使い方など手とり足とりご指導して下され感謝いたしております。

サブトレンチに腰をおろし注意されたり、住居やピットの壁を掘り過ぎて注意を受けたり、色々な面でお世話になって参った訳です。これから先、発掘を続けて行く為にも私くしには誠に身の為となりました。発掘により掘り出された土器などから我々の遠い祖先の住みついた時期や、年代生活などが究明されると聞かされております。従って古い遺跡から掘り出された土師などみると長い年月の人達の生活など、又言葉の使い方はどんなものであっただろうかなどと空想にふけりながら小さな土師のカケラも見逃すまいと移植を進めております。わたくしもぼつぼつ発掘要領も解り始めてきたところですが、まだまだ未熟者ですので今後友に諸先生方や先輩方のご指導を仰ぎ、発掘についての学問知識技術などを学びながら陸での第二の人生を有意義な仕事として生きたいと願っております。これからも尚一層のご指導をお願いいたします。

最後に佐久考古学会の発展と会員ご一同様のご健闘を祈ります。

大井源寿

ドクターマンローさんを思う

遙か悠久の彼方の出来ごとが情報として、近年私達の身近に耳にすることが多くなったように思われる。昭和40年代のほとんどの考古的遺物は開墾等により偶然に発見されたものが照会されていたようであるが、昭和50年代に入ると大規模な開発による調査のための発掘がさかんになり、新しい発見が次々と何千年もの眠りから醒めたように続々脚光をあび、すばらしいものが見られるようになった。特に最近の様相は一種のブーム的な感があるが、これも戦後の日本の目覚ましい発展による国民生活の安定感のようなものによる副産物的現象かとも思われる。

さて、当時軽井沢にいたドクターマンローさんがわが家を訪ねた際の思い出であるが、私の幼き頃(昭和初年であろうか)の出来ごとなもので、その場で交わされたであろう会話等も理解出来ることではなかった。しかし、とにかくわが家の中の間に外国の人々が何人か足を不器用に組んで座って、ミルクをのんだか、お茶をのんだか食事をして珍しいパンを食べていたことが思い出される。その時に当時といえばわが家では見たこともないパンをもらって食べたかすかなる思い出がある。のちに亡父より聞いた話しの中で、マンローさんが宮平遺跡の土製滑車形耳飾りを大変気に入り是非譲ってくれないかと懇願されたという逸話がある。父は困ったが、この遺物はわが家にあっても、わが家のものでないことを理解してもらい断ったときいている。博士は大変残念がったそうだともきいている。この博士が考古学に大変詳しい方とわかるのは私が青年時代になってのちのことである。

一つの発見が今迄の学説をも覆すような、又大きく今迄罷り通っていた史実を変えるようなものが日本のほうぼうで発掘される今日、博士がわが家で見た土器石器は、土中で今でもその全容をかくしている。それは宮平地籍より過ぐる昭和六年頃に若き頃の八幡一郎先生と信濃教育会合同による発掘になる遺物の一端で

ある。土の中からの語りかけとあわせ、おぼろげなる思い出の一コマを話してみた。

由井　明

後柏垂（うらかしわだれ）の山道

後柏垂から道を分れて、右甲州路、左山道、後柏垂地籍は、干草刈場であった。

年寄りの人達が、後柏垂には『星くそ石』が有るとよく話しているのを聞いたことがある。馬を引いて、この付近の山道を歩いていると、黒色をした『星くそ石』が、甲州に通づる馬道や、山道脇の草むらの中に多く見られた。それが黒曜石の剝片であるという事を後になって知ったのである。

草刈りをしている時等、刈跡を探すと、太陽に輝いてチャカチャカと光って見える小さな剝片ばかりです。

国鉄小海線の建設工事が『後柏垂』、『西の腰』地籍で進められていた昭和八年の秋、干草刈り場を見に行った帰り道に、工事場の脇を歩いていると、草刈場より少し大きな黒曜石の剝片を見つけて拾って帰り、土を落として見ると、馬場平の槍先に似ているのものが一個有ったので、その年には何回も採集に出かけた。又戦後になっても何度も出かけて見たが、石器になるようなものは見当たらなかった。

昭和三十五、三十六年度になって、埋原農道改良工事が始まり、干草を馬につけて帰る時、道端に光っている黒曜石の石器（ポイント・ナイフ）等約五十点の剝片を採集したことを、由井茂也さんに話し、其の後も茂也さんと『後柏垂』地籍に、石器採集に何回も行った記憶があります。

——平成元年度——

佐久考古学会研修旅行紀

小山岳夫

平成元年11月４・５日の２日間にわたり、佐久考古学会恒例の研修旅行が行われた。本年の旅先は「県内の良い処を見直そう」とのスローガンのもとに、諏訪地方が選択された。諏訪地方は原始・古代から佐久地方の隣接地にあたるため、人あるいは物の交流が盛んに行われてきたが、現在は近いようで遠く、案外かの地を見ていない人も多い。そんないきさつもあった。また、諏訪には二年前、藤森栄一先生の諏訪考古学研究所を発展させた諏訪考古学研究会が発足されている。専門家から一般の考古学ファンまで会員層は広く、深く人材が揃っており、会員数は現在100余名を誇る。活動も文化財保護活動・研究活動が活発に行われている。これら状況を見ると当佐久考古学会と良く似た側面をもっており、県内の小地域で頑張っているもの同志、親交を温めておきたい…そんな思いもこの旅行の目的の一つであった。

旅程第一日目、往路の車中では、由井会長はじめ、井出幹事長など、佐久考古学会の知恵袋達による名解説が途切れることなく行われ、順調に最初の目的地『尖石考古館』に到着した。ところが何としたことか。考古館は休館日だったのである。まだ一度も見学したことのない人には本当に申し訳ないことをしてしまった。そんなハプニングもあって、急拠富士見町の『井戸尻考古館』『民俗資料館』を見学することになった。突然であったにもかかわらず、館長の武藤雄六先生直々に展示の解説をしていただいた。常に使用目的を土台にして考えた展示法はいつも見る者を楽しませてくれる。武藤先生のおかでげ一同の心も和み、バスは宿泊地『湖泉荘』へと向かった。到着すると宮坂光昭先生、高見俊樹さんはじめ、諏訪考古学研究会の皆さんが出迎えて下さり、早速、交流会が始まった。第一部は『弥生から古墳』を主テーマにお互いの地域の発掘調査の成果をスライド上映を通じて発表した。不勉強で恥しいことであるが『一時坂古墳』などは、私自身注目していたにもかかわらず、いま一つ実像がわかっていなかったので、スライド、高見さんの解説で胸のつかえが降りたような気がした。第一部は結局、時間を延長して終始真剣に充実した内容で行われ、参加者一同満足した様子であったが、幹事の佐々木宗昭さんは懇親会が遅れることを心配して青くなっていた。第二部の懇親会は参加者一人一人の自己紹介なども交えて和やかに行われた。宴も盛り上がり始めた頃、佐久から須藤・堤の二人が乱入してきた。この二人の闖入者によって、なぜか宴は最高潮に達し、夜が更けるまで大騒ぎが続いた。翌朝、宿を発つ際には、高見さんが見送りに来て下さった。今までこんな親切な人はいなかったのでたいへん感動した。

二日目の行先は『松本市歴史民俗資料館』、『松本市立博物館』、『弘法山古墳』であった。『歴民』では久しぶりに松本城の雄姿を拝むことができた。やはり城は美しい。私が歴史に引き込まれたのは、城の雄壮さに感動を覚えてからだ。『松本市博』は二度目である。地元の竹原君が解説してくれたおかげで、松本の遺跡分布がようやく頭の中にイメージできるようになった。最後の見学地県内最古の前方後方墳『弘法山古墳』は、

初登頂であった（弥生研究者としては恥しい話だが…）。長さ60mの墳頂上に立って眼下の水田面を見おろすと、当時の民衆の歓声が聞こえてくるようで、権力者になったような不思議な気分に陥った。そんな思いを他の参加者もしていたのか、しばし、墳丘上で古墳時代談義に花が咲いた。

帰路、車中では例年になく旅程に余裕があったせいか、参加者の皆さんが元気だった。「来年はどこへ行こうか？」これが皆んなの共通した話題だった。

最後になるが旅行計画から始まり、二日間の行程中、何かとご苦労下さった佐々木さん、竹原君、本当にご苦労様。また、諏訪考古学研究会との交流会にあたっては何かとご配慮いただいた、心優しい高見さんに心から感謝申し上げる次第である。

三沢遺跡の黒曜石の分析について

三沢遺跡発掘調査団

I

三沢遺跡は、南佐久郡川上村大字御所平字三沢に所在しており、1985年ゴルフ場開発に伴う緊急発掘調査が佐久考古学会を主体とする三沢遺跡調査団によってなされ、すでにその発掘調査報告書も刊行にいたっている（川上村教育委員会　1987）。

その後、立教大学の鈴木正男先生に黒曜石分析（原産地同定および水和層年代）をお願いする機会に恵まれ、その分析結果のご報告をいただくことができた。その重要性に鑑み、『佐久考古通信』誌上においてその報告を掲載させていただくことにした。

II

分析の対象となったのは、旧石器時代のＩ文化層中のもので、ＡＢ２個所のブロック中より出土した黒曜石である。分析資料は黒曜石出土総点数225点のうち20点、さきの報文における肉眼による個体別分類では６個体で、個体別資料—No.１（４点）・No.２（４点）・No.３（５点）・No.４（２点）・No.５（４点）・No.12（１点）である。

また、分析した黒曜石を含む石器群はナイフ形石器を主体とするもので、層順的にはＡＴ降灰以降のものとしてとらえられ（町田・河西　1987）、また考古学的な所見では南関東PhaseⅡｂ期前半、いわゆる「砂川期」（田中　1984）相当の石器群として位置付けられる（堤　1985）。詳しい石器群の内容については報告書をご覧願いたい。

なお、資料のサンプリングおよび分析の実現にあたっては野田市郷土博物館の金山喜昭氏の深いご配慮を得た。立教大学鈴木正男先生そして金山喜昭氏に厚く御礼を申し上げる次第である。

（堤　隆）

引用文献

川上村教育委員会　1987　『三沢遺跡』
町田洋・河西学　1987　「三沢遺跡の石器を包含する地層」　（『三沢遺跡』）
田中英司　1984　「砂川型式期石器群の研究」　（『考古学雑誌』69—４）
堤　　隆　1987　「本石器群の性格とその位置付け」　（『三沢遺跡』）

三沢遺跡の黒曜石の分析

立教大学一般教育部　鈴木正男

はじめに

三沢遺跡から出土した総計20点の黒曜石について、その産地を熱中性子放射化分析と判別分析によって推定し、その年代を黒曜石水和層年代測定法によって測定した。

黒曜石分析

先史時代に石器製作のため石材として運搬・交易された黒曜石は、溶岩が急冷して生じたSio_2に富む天然ガラスであり、その産地は限られている。

黒曜石分析は、黒曜石の産地同定と水和層年代測定からなり、運搬・交易による黒曜石の空間的移動とそれが行われた時代の、時空にわたる分析を行う。

遺跡出土黒曜石の産地同定は熱中性子放射化分析法による微量元素の測定と、その結果に基づいた判別分析によって行われる。

熱中性子放射化分析

種々の核種に熱中性子を照射するとそれぞれの核種は放射化され固有のエネルギーのγ線を放出する。放射化された核種はそれぞれ固有の半減期で壊変するから、冷却期間を調節することによって期待される核種のγ線を検出することができる。

ここでは約10日間冷却した後、γ線スペクトルを3,000秒計数し、標準試料（NBS278）と比較して、サ

マリウム（Sm）、ウラン（U）、トリウム（Th）、ハフニウム（Hf）、スカンジウム（Sc）、鉄（Fe）、ランタン（La）の七元素の定量を行った。その結果を第1表に示した。

判別関数

関東・中部地方遺跡出土の黒曜石の産地同定のための判別関数については、すでにSuzuki & Tomura（1983）に報告した。この判別関数を日本全国34ケ所の産地の黒曜石について適用できるようにするため、のべ512点の原産地黒曜石の熱中性子による放射化分析のデータを追加し、新たな判別関数の設定を行った。この判別関数は近い将来公表される。

ここではその判別関数による産地同定を行い、その結果を第1表に示した。その結果によれば、ここで扱った三沢遺跡の20点の黒曜石は、八ケ岳産18点、星ケ塔産2点、であった。

黒曜石水和層による年代測定

黒曜石の水和層の暑さ（THL：μm）と、経過した年代（A：a）との間には、次の関係がある。

$$A = 1000 \cdot (THL^2/k)$$

ここに、kは効果水和温度（EHT）が一様であると見做される地域で設定され、かつ適用される水和温度（μm^2/1000a）である。

この値についてはすでに野川遺跡などを基準にして、次のように設定されている(Suzuki, 1973)。すなわち和田峠産7.89、星ケ塔・八ケ岳・男女倉産5.13、神津島産2.69、上多賀・鍛冶屋産0.98、畑宿産0.28である。

そして効果水和温度が異なる地域に適用する場合には、その地域の年平均気温などから推定される補正値（Suzuki, 1973）を用いて補正する。この方法の成功した事例として八丈島湯浜遺跡の例がある（Suzuki et al., 1984）。kの補正値はkrは三沢遺跡—0.55である（Suzuki, 1973）。

試料の調整は、黒曜石の剝離面に直交して切り出した小片、平均約10片を、エポフォーム試料枠に入れて、エポキシ系樹脂エポフイックスと硬化剤（いずれもDenmarkのStruers社製）を容積比8：1で混合する。硬化完了後、通常の手順にしたがって、30μm程度の厚さの薄片に仕上げた。これを1000倍の顕微鏡で観察し、顕微鏡テレビカメラで録画し、ビデオプリンターでプリントしたものをスケールルーペで測定した。

三沢遺跡の黒曜石水和層年代

三沢遺跡の黒曜石水和層年代は以下のとおりである。

20点　6.28±0.16μm　14,000±1000年前

ここに得られた黒曜石水和層年代は旧石器時代Phase IIbという考古学的編年と矛盾しない。

第1表　黒曜石の分析結果

三沢（旧石器時代　南関東Phase IIb相当期）

番号	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	産地	水和層厚
01	5.34	2.15	10.4	3.96	2.70	0.807	29.0	YO	8.0
02	5.01	2.38	16.2	4.16	2.57	0.827	31.9	YO	7.7
03	4.75	2.09	10.7	3.96	2.27	0.696	27.1	YO	7.9
04	5.52	2.17	10.5	2.91	2.76	0.853	32.2	YO	7.8
05	4.35	2.11	8.12	3.15	2.41	0.700	24.2	YO	8.0
06	5.27	2.41	9.83	3.49	2.66	0.813	28.5	YO	8.0
07	5.42	2.08	9.66	3.82	3.11	0.951	29.4	YO	7.5
08	5.59	2.88	9.62	3.83	2.82	0.885	28.6	YO	8.0
09	4.90	2.26	10.2	3.81	2.44	0.760	29.1	YO	8.1
10	4.49	2.35	9.25	2.83	2.12	0.644	26.8	YO	8.0
11	4.71	2.46	10.1	3.30	2.50	0.730	28.5	YO	8.2
12	3.60	2.07	7.67	3.49	1.72	0.510	20.3	YO	7.4
13	5.77	2.84	11.7	3.93	2.94	0.881	31.8	YO	8.0
14	6.07	3.02	13.0	4.37	2.92	0.890	33.7	YO	8.2
15	4.63	2.46	10.3	4.03	2.16	0.836	26.8	YO	7.9
16	4.41	2.08	9.85	3.53	2.18	0.696	26.3	YO	7.9
17	4.55	2.37	10.2	3.75	2.26	0.649	25.4	YO	7.9
18	6.31	3.45	12.3	3.38	3.24	0.507	17.3	H2	8.2
19	4.64	2.00	9.91	3.55	2.35	0.675	27.3	YO	7.9
20	6.15	3.53	12.3	3.27	3.19	0.524	19.6	H2	7.9

各元素の含有量は、鉄（Fe、%）を除いてppmである。産地記号YOは八ケ岳産、WOは和田峠産、H2は星ケ塔産、K3は神津島産を示す。水和層厚は任意単位、1任意単位は0.794μmである。

引用文献

Suzuki, M., 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto Japan —Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241—318.

Suzuki, M. and Tomura, K., 1983: Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant an alysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99—110.

Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura. K., 1984: Obsidian analysis: 1974—1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131—140.

土器型式と縄文土器の移動

水沢教子

八幡一郎先生の問題提起以来、先史時代の交易は、黒曜石をはじめとする様々な遺物を用いて論じられてきた。昨年度、縄文中期の土器編年を行う中で一遺跡の極めて一括性の高い土器群の中に、“交易”という語は用いないまでも、他から運びこまれた可能性の高い土器が認められた。今回は「土器型式に対し土器の移動や情報伝達がどのような意味を持つか」に焦点をあて、今後このような問題を考えていく上での見通しと、研究方法の概略を述べることにする。

1　縄文土器型式研究小史とその問題点

O・モンテリウスによって確立された型式学は浜田耕作によって日本考古学界にもたらされた。山内清男は、松本彦七郎の松島湾周辺における層位にもとづく分類方法を基礎に、この型式学的方法を更に駆使し全国的な縄文土器編年を行った。こうして設定された土器型式は「年代的」「地方的」に特性を持ち、他の文化遺物に客観的な依り所を与えることの可能な空間及び時間軸上の単位とされた。同時に、土器型式が何ゆえに一定の広がりを示し、その内部の土器群が同様の変遷をするのか、という問題も存在し、山内以来様々な解釈が成されてきた。例えば「ある民俗の中の一部族」「人間の集団」「社会集団」等という言葉に示されるように、何らかの集団の存在が想定されることが多かった。また最近では具体性に欠けた集団＝土器型式という図式を批判し、婚姻形態とそれに導かれる親族集団の諸形態や地域社会のあり方を背景として提唱するものも見られる（谷口1986）。

一方、型式が示す現象から客観的事実を繁栄したかのような“集団”を導き出すことの危険性も指摘された（岡本1959）。彼は型式の本質を導き出すために、製作の際に付加された「土器の諸要素の組合わせ」のみでなく、「製作―播布（需要→供給）―使用という一連の過程を統一的に理解すること」の重要性と土器を「生活の道具」という観点から研究することの必要性を述べている。この2つの提言のうち前者は、同一型式の広範な広がり及び円滑な変遷という結果を、個々の土器の一生やそこに介在する人の行為という個別レベルまで引き戻して検証を行っていく必要性を示唆している点で重要である。製作を示す項目が土器に付された文様をはじめ諸技術であり、使用、廃棄を示す可能性のある項目が土器組織や廃棄パターンとすれば、これらは長い研究の蓄積がある。ただ“播布”の問題が前2者とともに論じられることは少なかった。広域における変化の均質性が土器型式における問題点の一つである以上この“播布”の実態を解明することは重要な課題である。遺跡から出土する土器群には、そこで製作、廃棄されたものもあろうが、そうでないものもあることが十分推定される。その有無とそれぞれの製作、廃棄時に付された属性を組み合わせることによって、集団移動や搬出入等の有無を推定する手がかりが得られることになるであろう。このような遺物レベルの検証をぬきにして、民俗例をもとに製作者の移動（婚姻）や伝習の可能性を論ずるのは大変危険であると言わざるを得ない。

土器の移動を扱った論文は、直接土器型式の問題にかかわるものではないにしろ、異系土器の混在の問題や集団移動の有無の問題に関連して、幾つか挙げられる。次にその代表的なものを紹介しておきたい。

先づ、土器の胎土分析によって移動の可能性やその産地を推定する試みがある。縄文土器の場合、遺跡付近の地質を直接反映する粘土を用いることが予測されること等から岩石学的手法で行われることが多かった。清水芳裕は伊豆諸島や滋賀里遺跡の土器を分析し、同一時期の複数の土器型式が出土する遺跡での搬出入について述べた。更に一遺跡における同一土器型式の土器が、属性によって数タイプに分類される時、それが土器の搬出入と関連があるかどうか胎土分析を用いて検討していくべきことを述べている（清水1981）。ここでは周辺の数遺跡から出土した土器の胎土組成をも示し、瀬戸遺跡出土の搬入と認定された土器がどこの遺跡からもたらされたものか推定している。胎土分析には、分析できる土器の数量の問題、地質によってはその特徴を反映する鉱物を限定しにくい事などの今後に残された課題もあるが、多くの研究成果が語るように“播布”の問題にとり組む有力な手段であろう。

小杉康は一遺跡から出土する複数土器型式の土器を所属性の面から分類しその動きを推定した（小杉1985）。彼は土器を「交換財」ととらえ、遺跡間の搬出入及び模倣が実際の遺物のどのような属性を観察することによって説明されるかをパターン化した。属性は、胎土、器形、形成技法、文様帯構成、施文技法であり、特に爪形文施文技術が模倣か否かを判断する有力な手がかりとなる。このような属性分析の方法は、属性の

選択によっては一土器型式内の複数集落の排出入の推定にも応用できよう。

最後に、弥生時代の例ではあるが、一様式内の畿内地方内部における小地域差の生ずる歴史的、社会的背景を考えた研究を挙げる(都出1983)。都出は、この小地域差が「部分要素の組み合わせの差、すなわち「量的な差」として示し得る差異」にすぎないとし、それが生じた背景に土器の移動、人の移動、接触を想定している。この「部分要素の組み合わせの差」を一土器型式を構成するある型式(タイプ)の要素、すなわち属性の組み合わせの差、と読み換えると、このような性質の小地域は一土器型式の内部に実際に存在することが理解できよう。そしてその背景を同様に想定することも可能かもしれない。

2　斉一性と分布圏(大木8b式を中心に)

土器型式とは現代の研究者が便宜上設定した概念である。そのことをふまえても型式毎に斉一性の度合いの違いが目につく。

ここに挙げる大木8b式は比較的斉一性の高い土器型式である。同型式は山内の大木囲貝塚調査の折既に「所謂厚手式土器(「加曽利E」)に並行」と認識されていた。なるほど大木8b式と加曽利E2式のキャリパー形深鉢は、器形、文様帯配置、文様単位を比較すると(それぞれの個体差の範囲をどこ迄認めるかにもよるが)大変類似している。ただ両者の土器組成は深鉢に限定した場合、前者か4タイプに分けられるのに対し後者は前述のキャリパー形のものが大半を占めるという差がある(図参照)。一方、大木8b式の地域差としても組成比の違いは摘出できる。

中期初頭から終末まで東北と関東の土器型式の流れを概観すると、時期によって土器型式同志が全く異質な場合、タイプ間に要素の共有の行われている場合、そして上記のような同一のタイプを持つ場合がある。このような現象は一方から他方への影響と理解されてきたが、型式分布圏の変更とも考えられる。

土器群の斉一性の高低と分布域の広さは、それ自体属性抽出による遺跡間比較によって検証されていくべきであるが、更に土器型式毎にそれらに差があるのは、いかなる要因かをも考えていく必要がある。ここで述べた大木8b式が斉一性が強く広域な分布を示すとすれば、その前後型式と比べて土器の動きあるいは情報伝達の経路に違いがあったか否かは、1で述べた土器型式成立の背後にあると推定される搬出入の有無の追求を更に発展させた段階として考えていかなければならない問題である。

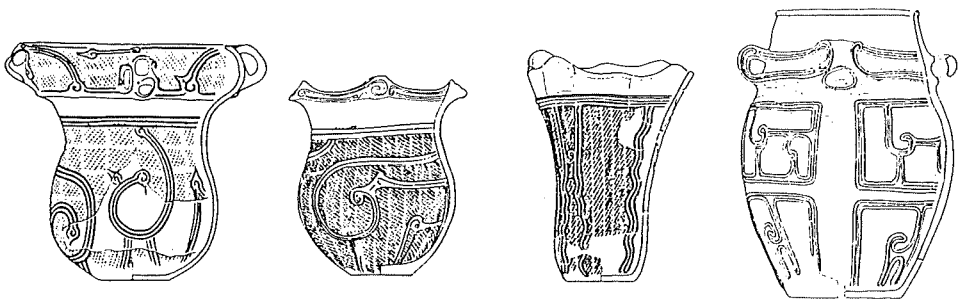
3　今後の研究に向けて

ここでは1、2をふまえた上で具体的に分析を行う上での視点を述べる。

一土器型式内の複数遺跡間の搬出入を含む土器による交流の実態を把握するために、先づ遺跡の抽出方法次に土器の比較法が吟味されなければならない。接触の可能性のある遺跡間距離がどのくらいであるかは、むしろ今後検証されるべきであるため、とりあえずは土器型式の細分の最小単位で同時期とされている複数の遺跡を特定間隔毎に抽出することが望ましい。

次に土器の個体レベルの比較は文様、製作施文技法、器形、器面調整の中の各属性毎に行うべきであるが前述の通り遺跡をこえた斉一性の強さが指摘できることを考慮すると、文様や器形には遺跡間相異の抽出が難しいことが予想される。一方で施文技法や調整は、土器造りが個々の集落単位や個人で行われたとすれば微妙な乾燥時間の差等に起因する何らかの差がでることが期待できる。卒論では工具幅や内面調整パターンの時間差を抽出できたが、これらが更に地域毎に異なるかどうかはまだ明確でない。

土器のもう一つの重要な属性はその胎土の鉱物組成である。地質構造と比較し、その産地を推定できることとともに、一遺跡における複数の土器の鉱物組成の傾向を把握しそれに外れたものを搬入品として認定できることは大変重要である。ただ、属性分析の対象とした土器全てを顕鏡することは不可能であり、従って肉眼観察との併用が必要てある。この場合分析に入る



第1図　大木8b式主要タイプ

前に一定量の土器に対し、両方法を同時に行い、肉眼観察における誤認例が何パーセントになるか確認しておく必要がある。また一土器の部位によって胎土の選択使用が為されているかどうかも検討しておかねばならない。

このようにして先づは一遺跡一土器型式内の一括土器に対し、属性分析と胎土分析を行うことで搬入、模倣品を認定し、次に複数遺跡間でそれを比較することにしたい。また実際に得られたデータと人間行動を連結させるに際し、モデルを組み立てる必要があるが、常にその信頼度が何に立脚し、どの程度のものであるかをチェックしながら議論すべきであろう。

以上、現在抱えている問題と今後分析を行う上での方法の概略を述べてきた。しかし、まだほんの試案程度であり、模索の最中である。諸先輩の皆様の御意見を賜れれば幸いである。

（東北大学文学部博士前期過程１年）

引用文献

谷口康浩　1986　「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」『考古学雑誌』第72巻第２号

清水芳裕　1981　「土器・陶器の流通―胎土分析の方法と成果―」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財センター

小杉　康　1985　「鳥浜貝塚における搬入土器、模倣土器の研究１・分析細目とカタログ作成」『鳥浜貝塚』五　福井県教育委員会

都出比呂志　1983「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻第４号

岡本　勇　1959「土器型式の現象と本質」『考古学手帖』六

臼田町井上遺跡の「神子柴型石斧」

堤　隆

1

ここに紹介する資料は、臼田町在住の小林秀人氏によって昭和48年５月11日に採集されたものである。

井上遺跡は、臼田町大字三分字井上に所在し、千曲川右岸の氾濫原上に立地、標高715m前後を測る（第１図）。本遺跡は、昭和48年12月圃場整備事業に伴い緊急発掘調査がなされており、発掘調査報告書も刊行されている（臼田町教育委員会　1980）。

現在、井上遺跡の発掘資料は臼田町文化センターにおいて展示公開されており、また小林秀人氏の採集資料も寄託公開されている。

筆者は、1989年夏、同文化センターにおいて行われた佐久考古学会の例会の際、偶然にも本資料を実見することができた。その重要性から、その紹介を臼田町教育委員会にお願いしたところ、快諾を得ることができ、今回の紹介となった訳である。

2

資料は、細粒砂岩の局部磨製石斧で、いわゆる「神子柴型石斧」として認識されるものである。

最大長104.5㎜、最大幅29.7㎜、最大厚30.8㎜、重量137ｇを測る。形態的には、ａ面が甲高、ｂ面は比較的偏平であり、その断面はＤ字形を呈する。刃部は両側からの研磨（網点部）をうけ、両刃となっている。また、基端部分は敲打痕が顕著で、角がとれアバタ状となっている。

加工工程は、ａ面の大きな調整加工→ｂ面の大きな調整加工→ｂ面縁辺の細部加工→刃部研磨の順となっている。

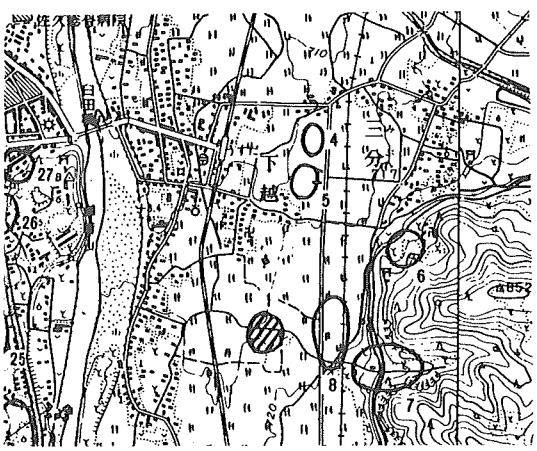
3

「神子柴型石斧」は、佐久地方では初見である。

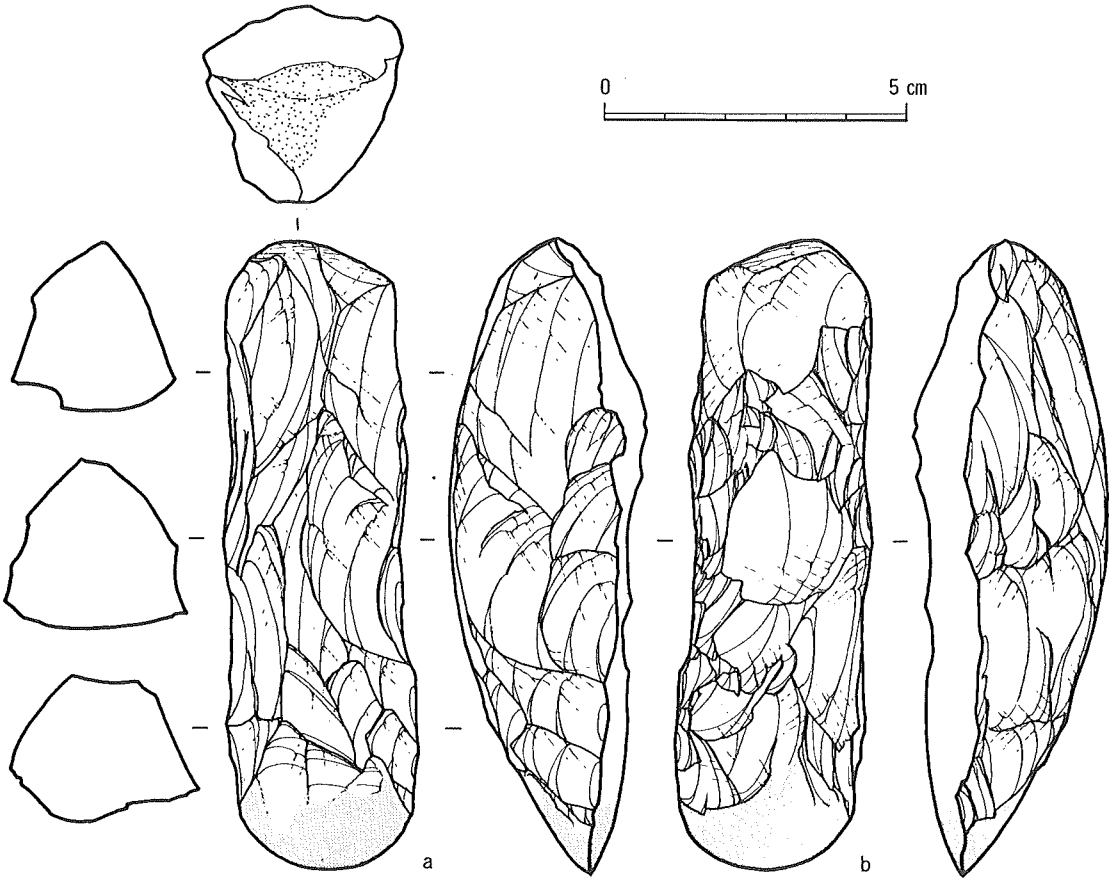
東信地方においては、小県郡真田町唐沢Ｂ遺跡（森嶋　1968）での10点という大量出土がよく知られるほか、同町小島沖、同町屋敷畑遺跡などにおいて出土がみられるようである（森嶋　1989）。

本資料は、唐沢Ｂ遺跡やその他県内の「神子柴型石斧」と比較してみても（第３図）、小形の部類に属するものといえる。

一方、同じ神子柴系の石器でも「神子柴型尖頭器」



第１図　井上遺跡（斜線）の位置（１：25,000）



第２図　井上遺跡の「神子柴型石斧」（４：５）

は、佐久地方では、佐久市榛名平（はるなひら）遺跡において14cmを測るほぼ完形品が１点出土している（甘利忠良氏所蔵）。また、川上村柏垂遺跡（由井一昭氏所蔵）、川上村立石Ａ遺跡（吉沢靖氏所蔵）において、その断片が各１点づつ採集されている。これらはいずれもこの石器に特有な珪質頁岩を素材とするものである。

こうした「神子柴系石器群」などの資料増加により、当地方における旧石器時代最終末から縄文時代にかけてのモノとヒトの動きが徐々に明らかにされてゆくことが望まれるのである。

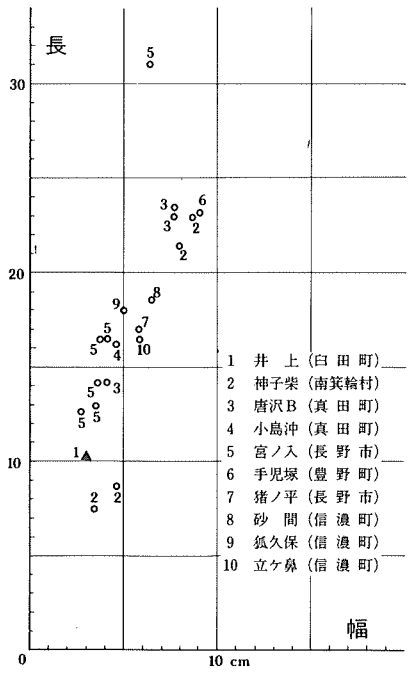
なお、本資料紹介にあたっては、臼田町教育委員会・臼田町文化センターおよび同センター北原佐久生氏にご配意を得た。末筆になったが厚く御礼を申し上げる次第である。

引用文献

臼田町教育委員会　1980　『井上遺跡』

森嶋　稔　1968　「神子柴型石斧をめぐっての試論」（『信濃』20―４）

森嶋　稔　1989　「神子柴系石器群の動き」　（『長野県史』考古資料編　１―（四））



第３図　「神子柴型石斧」の長さと幅

学史の1ページより

（写真は由井茂也氏提供）

昭和28年馬場平遺跡の調査

写真は、昭和28年（1953）馬場平遺跡の調査時の“ちょっと一休み”の風景である。

初めて馬場平を訪ねた芹沢さんは「馬場平はどこだと聞くと、農婦はそんなところはないという。だめかな、芹沢さんはあきらめかけたが、―じゃ、ここなんてところ？―ときくと、―バッパァデエラちゅうずらよ―という。」（藤森栄一『旧石器の狩人』より）

太平洋戦争から開放され、貧しくも生き生きとした時代が始まりつつあった。岩宿における旧石器文化発見に触発され、次々とこの時代の遺跡が調査されていった。現在の日本考古学をリードする、そうそうたる闘士たちの束の間の休息である。

馬場平調査の休憩時オニギリの包みをほどく。
右より、由井茂也・岩崎卓也（後立）麻生優・芹沢長介（前）・吉崎昌一（後）ひとりおいて戸沢充則（左から二人目）氏。

事務局より

- 会員の竹原学氏が、土橋久子さんとご結婚されました。1月27日には、中込において結婚披露パーティが催され、佐久考古学会員も幾人か招待をうけました。お二人の末長きお幸せをお祈り致します。
- このたび、次の七人の方が私たちの新しい仲間として加わりました。よろしくお願いします。

荻原雅隆	〒384	小諸市六供1－7－22	☎0267（22）1562
高橋ふみ	〒389－02	佐久市小田井1139－1	☎0267（68）4120
由井一昭	〒384－14	川上村御所平1261	☎0267（97）2419
鳥居　亮	〒389－02	御代田町児玉3875	☎0267（32）3969
中島芳榮	〒384－13	南牧村野辺山19－168	☎0267（98）3049
小林嘉孝	〒260	千葉市天文3－15－8　星和荘12号	☎0472（54）2812
水沢教子	〒980	仙台市青葉区川内　東北大学考古学研究室内	

現在の会員数は、94人となりました。

♪　編集後記　♪

佐久考古通信50号をお届けします。今回は記念号とさせていただきましたが、多くの会員からの便りや佐久考古学会の歩みなどが掲載でき、また鈴木正男先生や水沢さんの玉稿にもより、充実した紙面とすることができました。感謝申し上げます。

さて、時代は21世紀へと向かう90年代へと突入しました。みなさんはどのような希望をもって新しい時代を迎えられているのでしょうか。最近は本島長崎市長の狙撃事件が衝撃的でした。天皇の戦争責任の有無はともかくとしても、言論が暴力によって封じ込められる未来がくることだけは望みたくありません。

（小山・堤）

佐久考古通信　No50

発行所　佐久考古学会
〒384-11　南佐久郡小海町東馬流5047
井出正義　方
☎0267（92）3171
郵便振替　長野 7-2842

発行者　由井茂也

編集者　井出・福島・須藤・小林・堤・小山

印刷所　ほおずき書籍㈱

佐久考古学会シンボルマーク